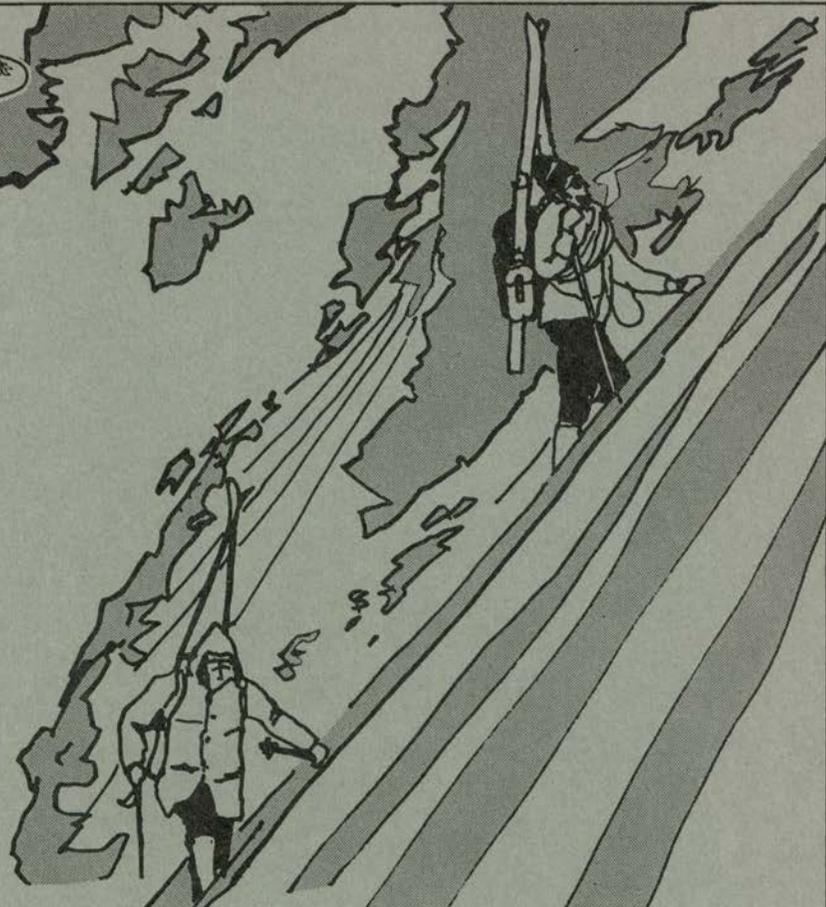


山 岳



LXXIV

好日山荘



SKI·ALPINISM
CAMPING

EDEL WEISS MARK

エーデルワイス・マークの

好日山荘®

- 東京銀座店 東京都中央区銀座3-5-7〒104 ☎03(561)3600・(567)9031 スキーショップ ☎03(561)0966
- 吉祥寺近鉄店 東京都武蔵野市吉祥寺本町1-19-1〒180 吉祥寺近鉄7F ☎0422(21)3331(代)内線3318
- 大阪店 大阪市北区曽根崎上1-2-8 〒530 ☎06(364)0933(代) 登山プロショップ 芳沢ビル2F
スキーショップ マルビル・芳沢ビル1F
- 梅田店 大阪市北区曽根崎2-7-2 〒530 ☎06(315)7985(代)
- セルシー店 豊中市千里中央“セルシー1階” 〒565 ☎06(833)0123
- 大阪三越店 大阪・北浜三越新館2F
- 福岡店 福岡市博多区須崎町1-4 〒812 ☎092(281)3440

伝統と信用の好日山荘は6店舗です——最近類似店名の店がありますが、当店とは無関係です。

山 岳

第七十四年

山 岳 第七十四年 目 次 (一九七九年度)

北極点・グリーンランド犬橇単独行における学術調査	伏見碩二・植村直己	一
ダウラギリI峰南壁——サウス・ピラーの初登攀——	樋口敬二・池上宏一	一
ダウラギリI峰南東稜	雨宮 節	三
ランタン・リルン登頂	八木原 暁明	三
積雪期黒部奥鐘山西壁——紫岳会ルート冬期初登攀——	伴 明	四
☆	鳥居 瑛	五
△支部の歴史▽		
東海支部の二十年	中世古隆司	六
静岡支部発足より初期の十年	山本朋三郎	七
東九州支部の歩み	梅木 秀徳	七
富山支部に就いて	中田清兵衛	八
☆		
バインタ・ブラック南壁	糸川 公夫	九
ハラモシユ北壁	昭和山岳会	九
ヌン 西 稜	沖 允人	九

ヌン 東 稜	伊丹紹泰	一〇五
アンナブルナ南峰	河野照行	二二三
二人のマナスル登山	清水清二	二二七
ゲントII峰登頂	小林治俊	二三三
リモへの遠い道	大沢宜彦	二二九
積雪期日高山脈全山縦走	日本大学山岳部	二二六
剣岳の第二登頂——吉田孫四郎について——	藤平正夫	二四〇
穂高のパイオニア・鶴殿正雄の生涯	上条武	二四四
マナスル登頂二十周年記念の会	成瀬岩雄	二六四
記録面から見たマナスル	松田雄一	二六六

☆

追 悼	松本善二氏(山崎金次郎)、岩永信雄氏(山崎安治)、渡辺公平氏(後藤幹次)、直木重一郎氏(津田周二)、四谷龍胤氏(津田周二)、児島勘次氏(平林克敏)、中村謙氏(望月達夫)、町田立穂氏(小野幸)、望月達夫、杉山孝氏(見学)、小春勝義氏(田中成幸)、高橋憲二氏(望月達夫)	二六九
-----	---	-----

☆

図書紹介	日本山岳会編『新選覆刻日本の山岳名著解題』(小谷隆一)、日本山岳会編『登山技術』(上・下)、『松田雄一』、ディレンフルト著『ヒマラヤ第三の極地』(葉師義美)、片山全平著『ヒマラヤ取材記』(山崎安治)、北大山の会編『北大山岳部五十周年記念誌』(竹中昇)、吉沢一郎他編『世界山岳地図集成—カラコルム・ヒンズークシユ編—』(五百沢智也)	二〇〇
------	---	-----

☆

英文梗概

卷末

写真・図版

- 北極学術調査に関するもの
ダウラギリI峰南壁に関するもの
ダウラギリI峰南東稜に関するもの
ランタン・リルンに関するもの
奥鐘山西壁に関するもの
バインタ・ブラックに関するもの
ハラモシユ北壁に関するもの
ヌン西稜に関するもの
ヌン東稜に関するもの
アンナブルナ南峰に関するもの
ガントII峰に関するもの
リモに関するもの
日高山脈に関するもの
鵜殿正雄に関するもの
追悼 写真―松本善二氏、岩永信雄氏、
四谷龍胤氏、児島勘次氏、中村
謙氏、町田立徳氏、杉山 孝
氏、小暮勝義氏、高橋憲二氏
- 図及び写真1～8、表1～2
写真P 1(a)～(f)、図C 1
写真P 2(a)～(d)、図C 2
写真P 3(a)～(d)、図C 3
写真P 4、図C 4
写真P 5、図C 5(a)～(b)
写真P 6(a)～(c)、図C 6
写真P 7(a)～(d)、図C 7
写真P 8(a)～(d)、図C 8(a)～(b)
写真P 9、図C 9
写真P 10(a)～(d)、図C 10
写真P 11(a)～(c)、図C 11(a)～(c)
写真P 12、図C 12
写真P 13(a)～(c)



北極点・グリーンランド犬橿単独行

における学術調査

	*	*	*	*
池	樋	植	伏	
上	口	村	見	
宏	敬	直	碩	
一	二	己	二	

(* 名古屋大学・水圏科学研究所)

〈1〉はじめに

植村は、一九七八年三月五日、エルズミア島オーロラ・ベース・キャンプを出発し、四月二十九日、北極点到達をはたした。そして五月十日、グリーンランド北端のモーリスジェサップ岬を出発し、八月二十二日、グリーンランド初縦断に成功した(第一図)。いずれも単独行であった。

これまでに、北極点へ到達した。パーティはあったが、ここにのべる雪や積雪、そして大気中の微少な粒子(エアロゾル)などについて観測し採集したことは、ほとんどなかった。また、グリーンランド氷床上の縦断ルートは、未知の地域であったので、そこで得られた主として雪氷・氷河現象にかかわる観察と上記の採集資料も、貴重なものといえる。

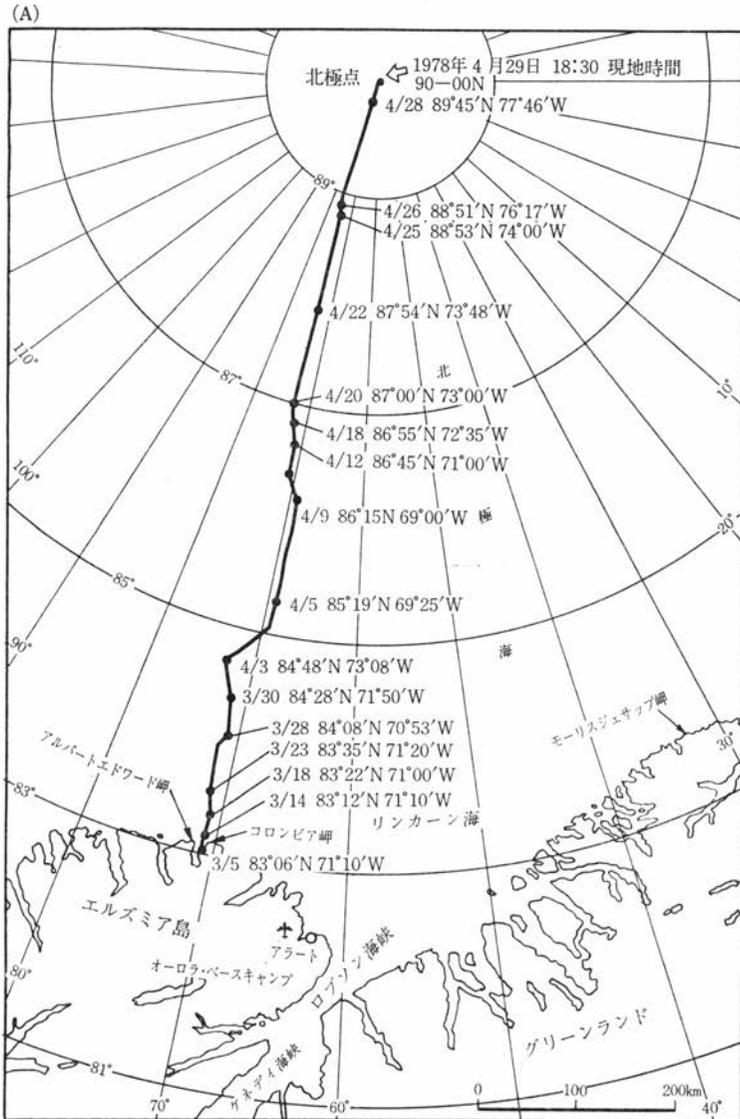
北極と南極とは、海と大陸といった対称性を示しているが、ともに雪と氷がひろく覆っている共通性をもち、地球規模の気象・気候に大きな影響を与えている。

南極圏の探検は、やっと十八世紀になってゼームズ・クックによって手をつけられたが、北極圏の探検は、はるかに早い。すでに八世紀にアイスランドに住みついていたバイキングたちは、十世紀前後にはグリーンランドに渡り、その数九〇〇〇人に達したといわれている⁽¹⁾。もともとの原住民であるエスキモー人たちは、彼らの島を何と呼んでいたのだろうか。とにかく、彼らバイキングたちはこの島をグリーンランドと呼んだという。いわゆる「緑の島」という魅力的な名前によって人を呼びこもうという理由の他に、当時の気候は現在より暖かく、フィヨルド周辺には柳や樺の林があり、緑の牧草地があったが、十五、十六世紀頃までには気候が寒冷化に向かい、バイキングの末裔たちはすべて滅びたといわれる⁽¹⁾。このことは、気候変化が人間の生活に大きな影響を与えた例といえる。この十五、十六世紀より、小氷河期と呼ばれる寒冷期となり、いくつかの山岳地帯の氷河が拡大したことが知られている。

一万年以前の氷期には、北アメリカ、ヨーロッパ、シベリアなどに氷床が発達したが、現在ではグリーンランド氷床だけがのこり、北半球で唯一の氷床となっている。この白い大陸の未知を求めて、グリーンランドの初横断に成功したのは、一八八八年のナンセンらであった。その後のグリーンランド探検・調査旅行は、北極点到達をめざしていたペアリーらによる北部グリーンランド旅行（一九〇五、〇六）、ラスムッセン（デンマーク）らによる北西グリーンランド旅行（一九一六、一九）などにつづき、ワトキンス（イギリス）らによる横断旅行（一九三〇、三一）によって、しだいに未知のヴェールがひらかれていった。

ウエーゲナーは、大陸移動説をとなえた人として有名である。彼は、一九一三年二度目のグリーンランド探検のとき、グリーンランド中央部を横断している。そして、一九二九、三〇年三度目のグリーンランド探検にでかけ、氷

北極点・グリーンランド犬橇単独行における学術調査



第1図一(A)：北極海における調査行程図

床の厚さが一八〇〇メートルにもなるという重要な結果をえたが、彼は一九三〇年十一月一日、彼の五十歳の誕生日に帰らぬ人となった。

北極海のほぼ中央部をはしるロモノソフ海嶺の大西洋側の海盆には、ナンセン海盆やアムンゼン海盆といった名前がみられる。一八九三〜九六年にかけて、フラム号漂流による探検によって、当時の最北記録と海洋学への貢献をしたナンセンと、北西航路の通航（一九〇三〜〇六）、及び航空船ノルゲ号によるスピッツベルゲン——北極点——アラスカの北極海横断飛行（一九二六）に成功したアムンゼンを記念して、これらの海盆の名前がつけられた。

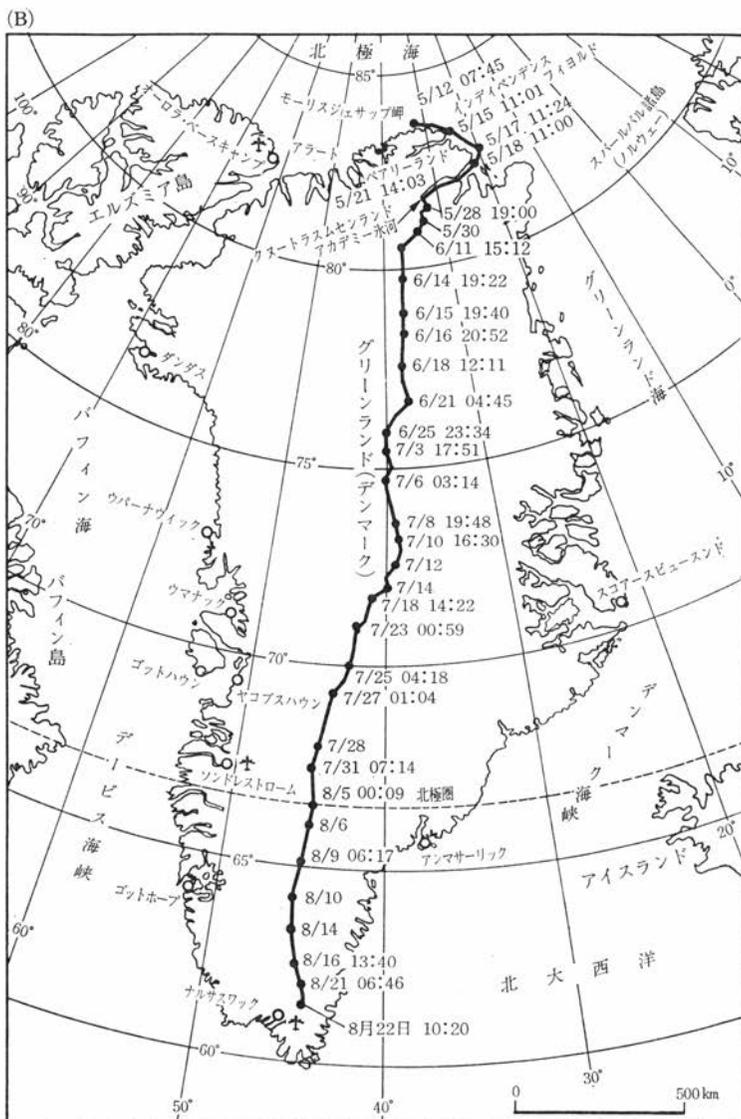
北極点への初到達は、一九〇九年、ペアリーによってなされ、これらの探検を通じて北極海の姿はしだいに明らかとなり、一九一三年のセベルナヤゼムリアの発見をもって地理的な探検の時代は終わった。

ところが、第二次大戦後まもなく、アラスカのポイント・バロー沖五〇〇キロの北極海上に、部分的に岩石でおおわれた島が発見された。追跡調査の結果、この島は陸地ではなく、漂流していることがわかり、氷島と呼ばれるようになった。

樋口は、一九六〇年氷島T-3で水文学・海洋学の調査に参加し、また伏見は、一九六三〜六五年、氷島アーリスII号で海洋観測に従事した。氷島にみられる岩石の調査によって、これらの氷島はエルズミア島などの海洋に形成された棚氷や氷河水氷が起源と考えられている。

これらの氷島の厚さは、五十メートル前後におよび、平均数メートルの北極海の海水面にうかぶ、いわば自然の砕氷船の役をはたし、科学観測の基地として利用されている。氷島は、風と海流によって漂流し、北極海での水の動きは、T-3の漂流経路にみられるように、北極点から北アメリカ側のビューフォート海では時計廻りで、またアーリスII号の経路は一九三七年のパーニンらの北極1号による漂流経路とほぼ同じルートをとる、北極点からアジア・

北極点・グリーンランド犬機単独行における学術調査



第1図-(B)：グリーンランド氷床における調査行程図

ヨーロッパ側の海域では、西から東方向であることを示している。北極点からグリーンランドやエルズミア島の間は、時計廻りと西から東への氷の動きがともに陸におしよせる海域となっており、その圧力によってとくに氷丘の発達する地域といえよう。植村は、氷丘に登って次の平らな氷を探さなくてはならない。だが平坦な氷など見当らない。やむなく、一寸きざみにルートを作る。これでは、さながら賽の河原の石積みと同じだ。際限なく同じ作業をくり返さなくてはならない。⁽²⁾

一九六〇～六六年にわたり、グリーンランド北西部のキャンプ・センチュリー (77.3°N, 61.1°W、標高一八八五メートル) で、一三八七・四メートルもの氷床の基盤に達するコアの採取に成功した、ダンスガード (デンマーク) らは、氷の中に含まれている酸素の安定同位体の量から、過去の温度を推定し、一地点のコアの分析によって、二万年ちかくまでさかのぼる気候変化の歴史を明らかにした。⁽³⁾

いっぽう、グリーンランド内陸部を広範囲にわたり調査旅行をしたベンソン (アメリカ) は、一九五二～五四年の調査から氷河水をおおう積雪層中の水の状態によって、乾燥相、失水相、湿润相、消耗相の四つの積雪層に区別し、これらの積雪層の状態の地域分布が、気象条件と関連があることを示した。⁽⁴⁾

積雪層の状態は、ソリ旅行にも大きく影響し、植村は、北極海域で、マイナス三十四度、気温が低いので櫓のランナーの滑りが悪い。雪にランナーが食いこみ、砂の上を走るように櫓が重く感じられる。とのべている。同様な低温による櫓の滑りにくさを、グリーンランド氷床北部地域でも経験している。

これまでの北極地域の探検・調査旅行とは異なり、植村は単独で北極点に到達し、そして前人未踏のグリーンランド縦断旅行を試みた。この場合、贅沢な調査はのぞめない。軽量化した器材で、しかも基本的な情報がえられる調査を行なうことになった。

ここでは、一九七九年三月十九日、日本山岳会科学研究委員会第一回講演会で、樋口と植村とがのべた内容と、そ

の後の解析結果を加えて報告する。

〈2〉 調査内容

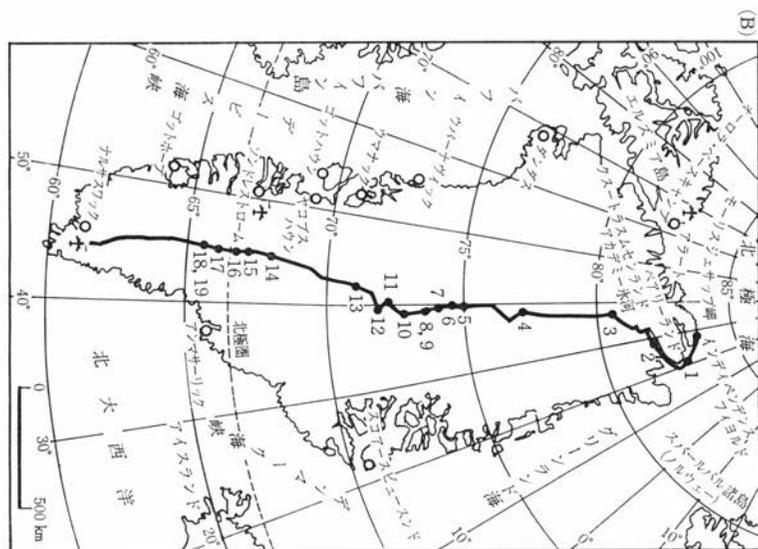
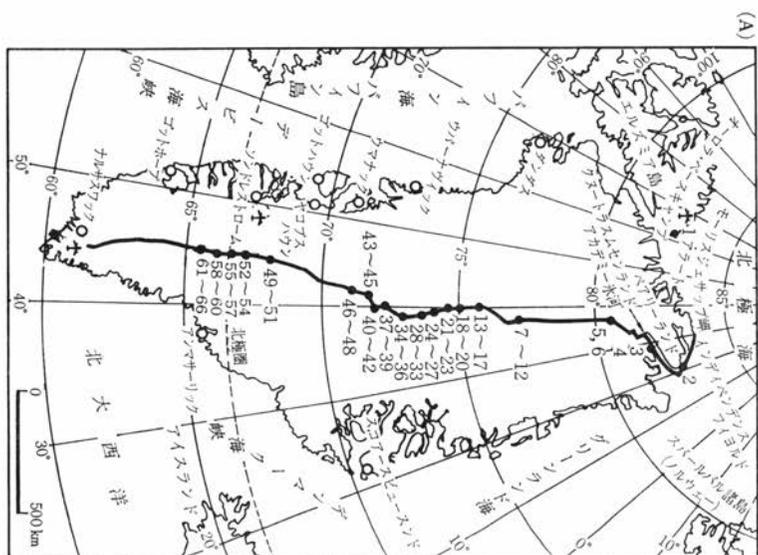
北極点からグリーンランドの南端まで、その直線距離は三〇〇〇キロにもなるが、実際に植村の踏査した距離は、これをはるかに上まわるだろう。広範囲に旅行するとき、しかもスピーディに行動することが必要な場合には、一地点での長期にわたる調査・観測はむずかしくなる。本調査では、降雪と積雪および空気中のエアロゾル（空気中に含まれる粒子）の採集を広範囲に行なうこととした。これらの採集方法は比較的簡単で、しかも気象と気候に関する基礎的な資料がえられる。

〈2-1〉 雪の調査

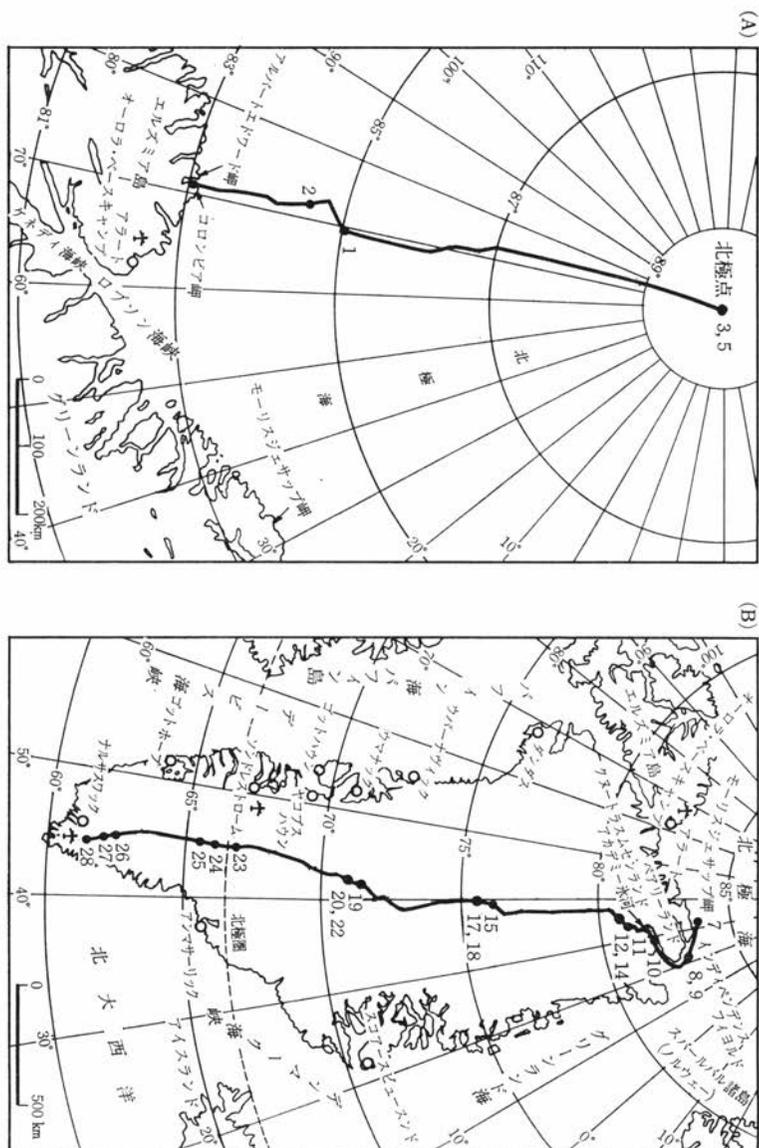
フォルムパールという合成樹脂の二塩化エチレン溶液に降雪をうけると、二塩化エチレンは蒸発し、雪の結晶の表面構造、形を記録した合成樹脂の薄い膜ができる。いわば雪のテンプラの衣である。この方法（レブリカとよばれる）で、降雪時の雪の結晶を記録し、同時に黒のラシャ地に降雪をうけ、スケール入りの写真撮影を行なった。これらの観測においては、露出時間がわかっているので、降雪強度がわかる。第二図にみられるとおり、グリーンランドとエルズミア島の二十地点で観測が広範囲におこなわれた。この調査は、雪結晶の種類、降雪強度と気象条件との関係を見るために行なわれた。

〈2-2〉 積雪の採集

距離にして緯度一度（約一〇キロメートル）ごとの表面積雪、および降雪時に、新雪を採集してゆっくりと溶かし、五〇ccを採集した。これは、積雪中に含まれる酸素の安定同位体などの化学的性質の地域的性質を調べるために行



第2図 グリーンランド氷床上におけるレプリカによる雪結晶の観測点(A)と写真による雪結晶の観測点(B)を示す。数字は観測番号を示す。



第3図 積雪の採集地点。数字は観測番号を示す。

なわれた。第三図にみるとおり、北極点よりグリーンランド南端までにわたる三十六地点から採集された。

〈2-3〉 エアロゾルの採集

ジェット・インパクトで、長さ1cm幅0・1mmの矩形の穴に空気を通す。その際、穴の下におかれた電子顕微鏡用ナツシュ（直径3mm）に、エアロゾルがたたきつけられ採集された。北極海やグリーンランドのエアロゾルについては、ほとんど報告がなく、エアロゾルの物質同定による種類と濃度を調べるために行なわれた。第四図にみられるように、北極点からグリーンランド南端部までの十八地点で、採集が行なわれた。

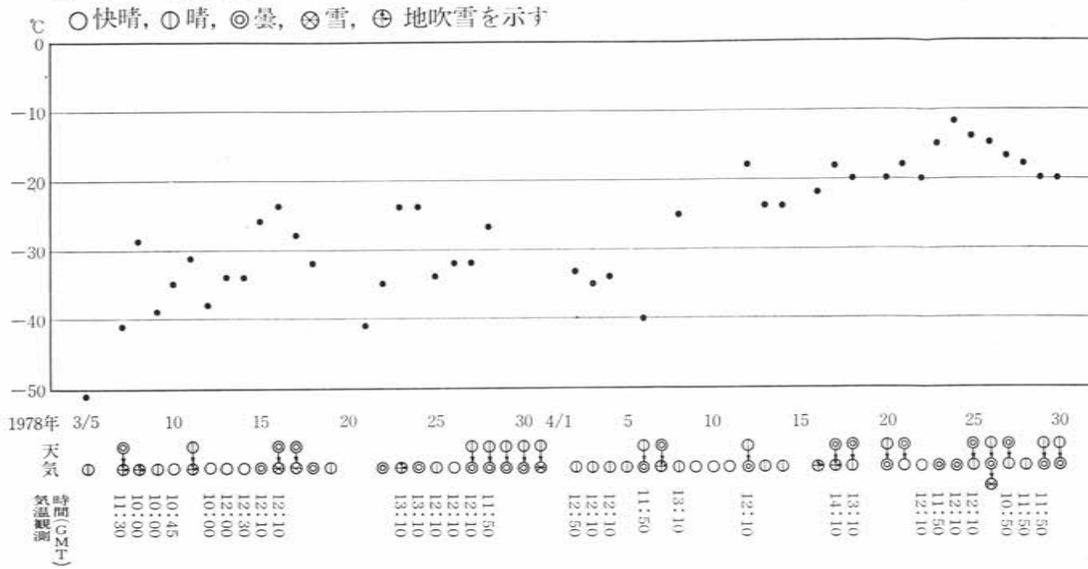
これらの雪、積雪そしてエアロゾルの性質の地域的分布と、気象・気候状態との関係を明らかにするのが、本調査の目的であった。積雪の化学的性質の分析やエアロゾルの解析には時間を要するために、ここではこれらの調査について総合的に報告することはできないので、現在までに解析のすすんでいる、一般気象、積雪の状態、雪の結晶、そしてエアロゾルについて、予備的な報告を以下におこないたいと思う。

〈3〉 調査結果

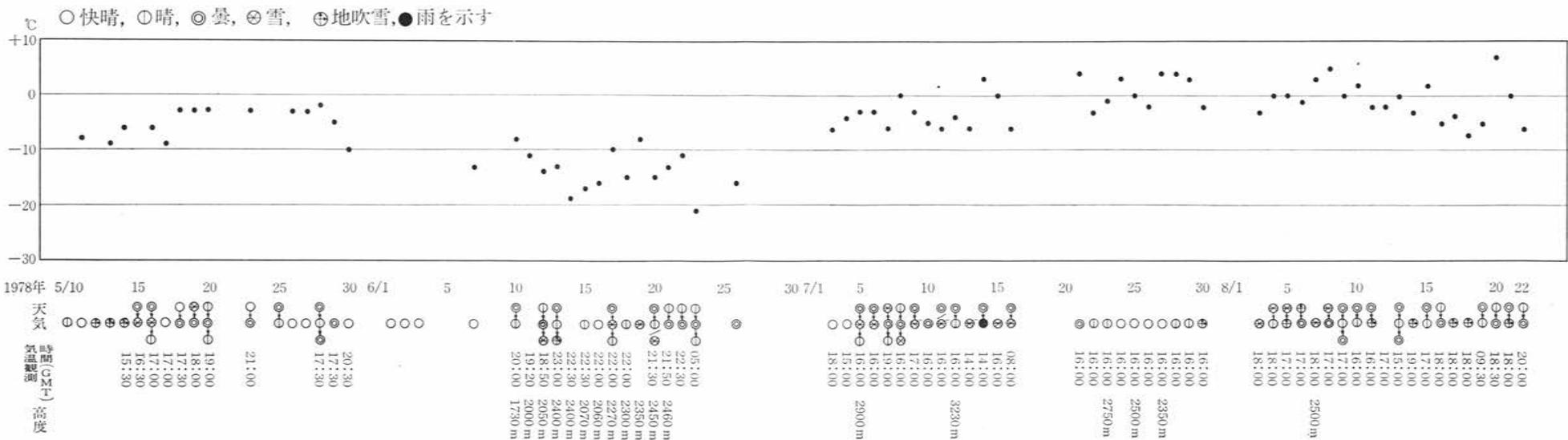
〈3-1〉 一般気象

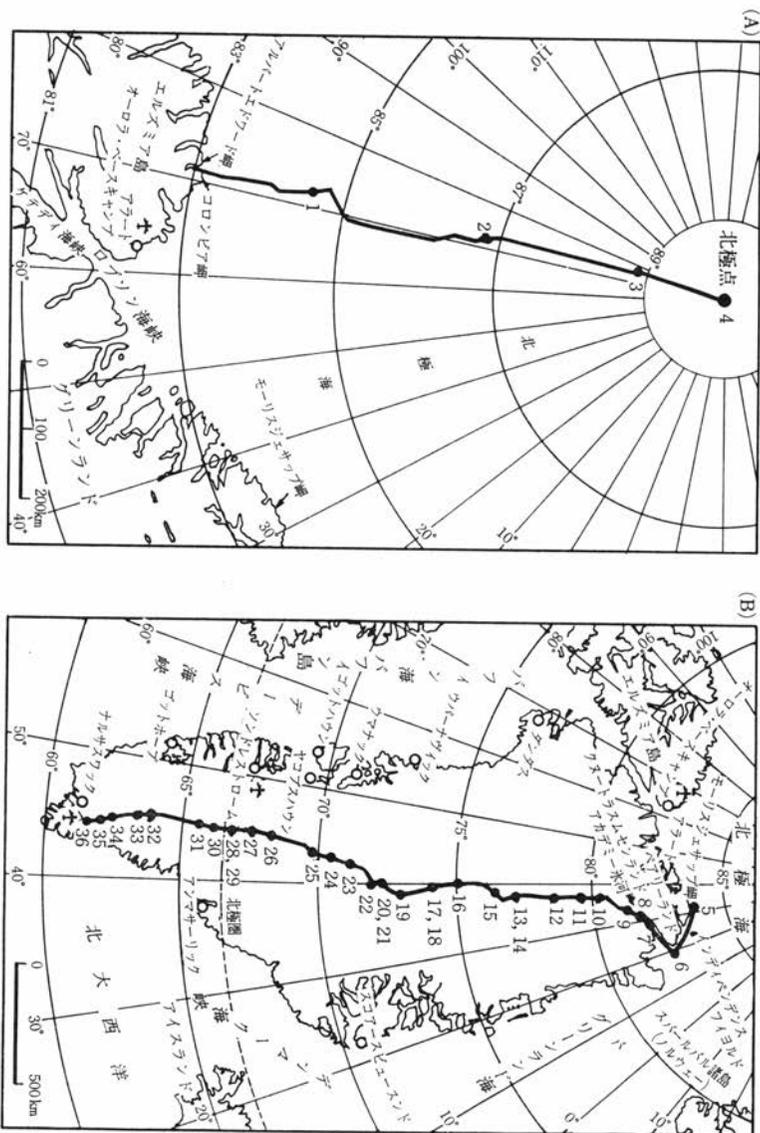
一九二一〜五〇年の北半球の平年気温分布図をみると、厳冬期（十一月〜二月）に、二地域に分かれた平均気温マイナス三十度C以下の寒極が、シベリアとカナダ北極海地域にみられ、三月になると、北極海の大部分の地域は平均気温マイナス二十八度Cとなる。四月になると、北極海中央部は平均気温マイナス二十度Cとなり、グリーンランド南端部では、零度Cに達する。その後も平均気温の上昇がつつぎ、八月の最暖月には北極海の広い範囲がプラス四度C、グリーンランド南端部でプラス八度Cの平均気温を示す。そして急速に平均気温は下がり、厳冬期に入ることが

第1表 北極海における一般気象



第2表 グリーンランドにおける一般気象





第4図 北極海(A)とグリーンランド氷床上(B)でのエアロゾル採集地点。数字は観測番号を示す。

示されている。⁽⁵⁾

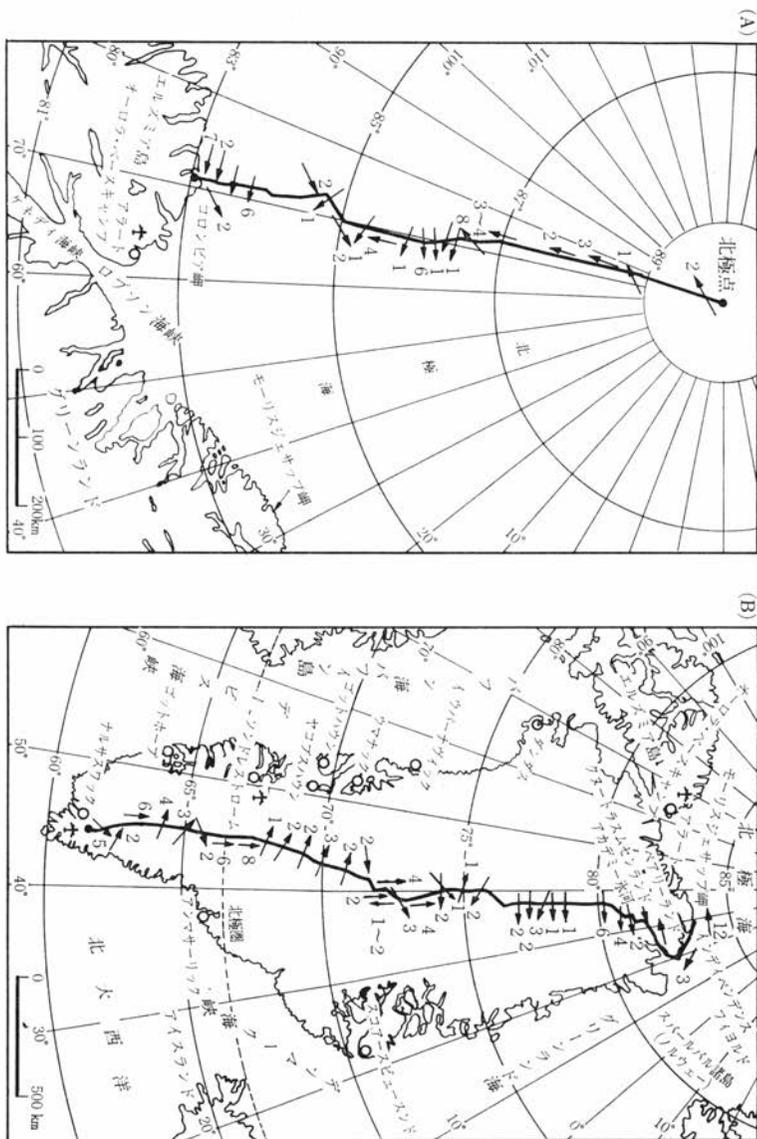
第1表にみられるとおり、北極海における気温の観測時間は、GMTの二二・〇〇前後である。これは現地時間(レンジュート時間)のほぼ早朝にあたる。三〜四月の北極海では、これまでに“North Pole 6”や“T-3”などの氷上観測基地で得られた結果によると、⁽⁶⁾ 気温の日較差は平均的には四〜五度Cである。

本調査で記録された北極海での最低気温は、エルズミア島北部の出発地点、オーロラ・ベース・キャンプで観測された、三月五日のマイナス五十一度Cであり、最高気温は、北極点近く(88°51'N, 76°17'W)、四月二十七日のマイナス十一度Cであった。また、三月には、気温の上昇が雪や地吹雪の天気とよく対応している。三月八日、十一日、十六日、二十三〜二十四日がそれにあたる。これは、低気圧の進入によって南からの暖かい空気が移流してきたものと考えられる。

北極海での風向は、第五図にみるとおり、北緯八十七度以南では西風が、そして北緯八十七度以北で、北風が多い傾向がみられた。海氷の漂流経路が、北極とグリーンランドとを結ぶ海域で、ビューフォート海を時計廻りとなるルートと、北極海から東グリーンランド海岸沿いに南下するルートの境となっており、このことは北極点からエルズミア島へ海水をはこぶ北成分の風と、北極海の海水を東グリーンランド海流にのせる西成分の風によって説明される。

グリーンランドの一般気象の図(第2表)では、五月末から六月にかけて低温期間を示しているが、これはグリーンランド縦断ルートが氷床上となり、高度が増したためとも考えられる。また、七月以後の、時には零度C以上にもなる昇温傾向は、最暖月の気温上昇の影響が氷床上の内陸部まで達したためと考えられる。七月十四日には、グリーンランド氷床内陸部、北緯七十二度付近の高度約三〇〇〇メートルで雨を記録している。

植村は、グリーンランド北端部のインディペンデンス・フィヨルドから、アカデミー氷河沿いにルートをとり、氷床上に達した。この際、アカデミー氷河のクレバス帯をさけるため、氷河上に多くみられた幅四〜十メートル、深さ



第5図 北極海(A)とグリーンランド氷床(B)における風向と風力図。矢印のちかくにかかれた数字が風力を示す。

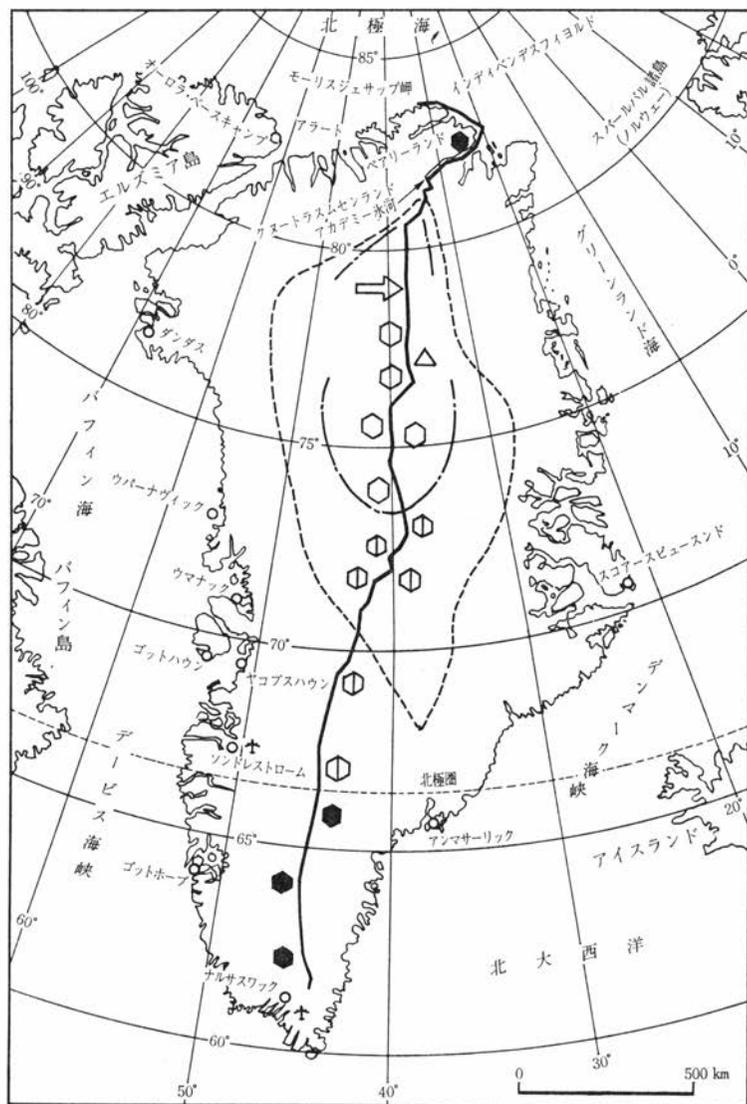
二、七メートルの涸れ谷にルートをとった。この涸れ谷は、夏の氷河表面の融解水によって侵蝕された氷河表面上の谷地形と考えられ、北緯八十二度付近のグリーンランド北端部の氷河でも、カービング（氷河末端の氷河水が割れて、海や湖に流出する現象）だけでなく、氷河表面の融解現象が、氷河の消耗過程にかかわっていることを示している。

グリーンランド氷河上の風向と風力図（第六図）をみると、氷床北部で西風が卓越し、氷床南部では、東風または南風がみられた。そして、氷床の最高点付近（北緯七十二度付近）が、風向分布の移行地域となっている。

〈3-2〉グリーンランド氷床上の積雪状態について

ベンソン（一九六二）は、グリーンランド氷床上の積雪状態のうち、乾燥相（水を含まない積雪層）がグリーンランド中央部から北部にわたり分布していることを報告している（第六図）。植村の報告にあるとおり、北緯七十二〜七十三度以北では、午後の気温上昇があり、積雪表面が部分的に湿雪となることがみられたが、一般的には積雪は乾燥し、堅い板状となっており、このことがソリ犬の足裏の皮をすり減らす原因となったことがのべられている²⁾。ベンソンの示した積雪状態の分布図では、この乾燥相の西経四十度ラインでの南限は、北緯七十度付近となっており、植村の観察した乾燥相の南限である北緯七十三度付近とは距離にして三〇〇キロメートルほどの違いとなる（第六図）。本調査期間は、グリーンランド氷床上での最暖月にあたり、乾燥相の積雪分布がもっとも縮少する期間にあたるので、季節変動のおよばない通年にわたる積雪状態の分布を観察するには、良い時季であったといえる。

グリーンランド氷床の最高部は、北緯七十一度、西経三十八度付近にあり、その高度は三〇〇メートルをこえる。植村は、七月十二日縦断ルート上での最高点三二三〇メートルを、北緯七十二度、西経四十度付近で記録している。積雪状態からみると、もっとも内陸的な性質をもつ乾燥相の積雪の分布は、グリーンランド氷床の最高点を中心として分布せず、大きくみると、この最高点から北部グリーンランドにかけての北面に分布する（第六図）。これは北大西洋からの温かい気団の進入が、この氷床の上の分水嶺にさえぎられて、グリーンランド氷床北部に達しないた



○乾燥相積雪, ⊕乾燥相～失水相積雪, ●失水相積雪, ⇨ デューン方向, ---- 線によって囲まれた地域がベンソン (1962) による乾燥相の積雪分布を示す。
 --- 線は本調査によって観測された乾燥相の積雪分布を示す。

第 6 図 グリーンランド氷床上の積雪状態

め、この氷床北部地域が乾燥・寒冷化しているためと考えられる。グリーンランド氷床上の積雪の年間堆積量分布をみると、この乾燥相の積雪分布と、堆積量の少ない地域とがともにグリーンランド北部にみられる。グリーンランド氷床上での最低気温は、六月二十二日、北緯七十六・五度、西経三十九度付近で観測され、マイナス二十六度であった。この地域は、乾燥相の積雪分布のほぼ中央にあたっている。この乾燥相の積雪地帯で、橇の走行中、雪面が突然十センチほど沈下することを経験した。これは、積雪層中にできた下ザラメ層が、橇などの重量で破壊されたために、雪面が沈下したものと考えられる。

また、この地域で積雪の砂丘状の堆積（デューン）が東西方向に伸びていることは（第六図）、グリーンランド氷床北部にみられる西からの卓越風によるものと考えられる。グリーンランド氷床上の風向の地域性をみると（第五図）、中央部の氷床最高点付近で、南北の斜面方向の風が観測されたが、北部と南部グリーンランド氷床の大部分の地域は、西風が卓越する。このことは、南極氷床で見られるような大規模な斜面下降風は、五、八月のグリーンランド氷床上では発達しないことを示している。

第2表にみられる五月末から六月にかけての北部グリーンランド氷床で観測された低温期は、前述したように単に高度だけによるものでなく、この地域は乾燥相の積雪が分布する乾燥寒冷地域となっているので、その気候条件も低温化に寄与していると考えられる。

グリーンランド氷床の最高点から南部では、積雪は水を含んだ失水相となり、植村が、濡りだした雪が犬の足の裏にくっつき、ゲタの歯が雪を噛んでだんだん大きな玉になってゆくように、重そうなダンゴになる。犬たちは走りにくいので、口で噛みきろうとする。それを走りながら急いでやろうとするから、くり返すうちに毛までむしれ、血が出てきている。とのべているように、⁽²⁾ 堅い乾雪や低温下の積雪のみならず、湿雪もまた犬橇旅行の障害となった。

北緯六十一度三十九分、西経四十四度十五分にあるグリーンランド氷床最南端近くのヌナタック付近より低地の積

雪は湿潤相となり、部分的に池や川がみられるようになる。そして、植村は「この先はナルサスワックに下るコルプツクセルミア氷河である。この氷河は、無数のヒドン・クレバスがひそんでいる。夏の雪だけの時期に犬橇で通過するのは、ほとんど不可能と断言していい。」とのべているように、グリーンランド氷床上の乾燥相から湿潤積雪にわたる調査旅行を、終えた。

〈3-3〉雪 結 晶

本調査によって観測された雪の結晶型は、中谷の分類法によると、樹枝状六花、角板、つづみ型（角柱と角板の複合したもの）、平板付砲弾（砲弾と角板の複合したもの）などであった。

一九七八年六月二十日（夏至）、グリーンランド氷床北部北緯七十七度十一分、西経三十八度十一分、高度二三五〇メートルの地点で、〇一…〇〇GMTに観測されたつづみ型と角板型の雪結晶のレプリカによる写真を第七図A-1（観測番号10）、A-2（観測番号6）に、また同日一四…〇〇GMTに観測された樹枝状六花の同様な写真を第七図B-1（観測番号12）、B-2（観測番号11）に示す。〇一…〇〇GMTの天気状況は、マイナス八度C、層雲、雲量一〇、視程四Kmで、また一四…〇〇GMTは、マイナス十度C、層雲、視程七Kmで薄日がさした。

中谷の人工雪の研究によると、樹枝状結晶ができる気温条件は、マイナス十四〜十七度Cである。⁽⁷⁾ 樹枝状結晶がみられた時の気温は、マイナス十度Cであったので、気温減率を $-0.7^{\circ}\text{C}/100\text{m}$ （観測地点の高度に相当する750mbにおける -10°C と -15°C の湿潤断熱減率の平均値）とすると、この時、樹枝状結晶の形成される高度は、観測地点の上空六〇〇〜一〇〇〇メートル、つまり高度二九五〇〜三三五〇メートルとなる。第七図の樹枝状結晶には、過冷却水滴が凍りついた雲粒付結晶がみられないので、この時の層雲は雪の結晶だけからなっていたと考えられ、その雲頂高度は、樹枝状結晶のできた上限高度二三三〇メートルに相当すると考えられる。中谷の実験によって -14 〜 -17°C の間では、樹枝状結晶のできる条件のほうだが、角板や角柱などからなるつづみ型や平板付砲弾型結晶の条件にくら

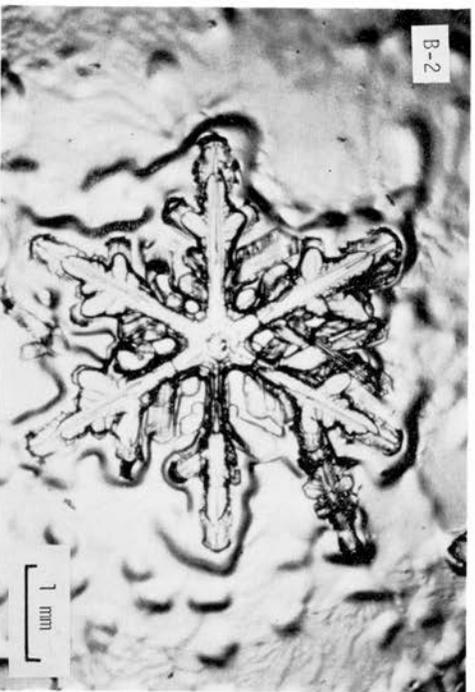
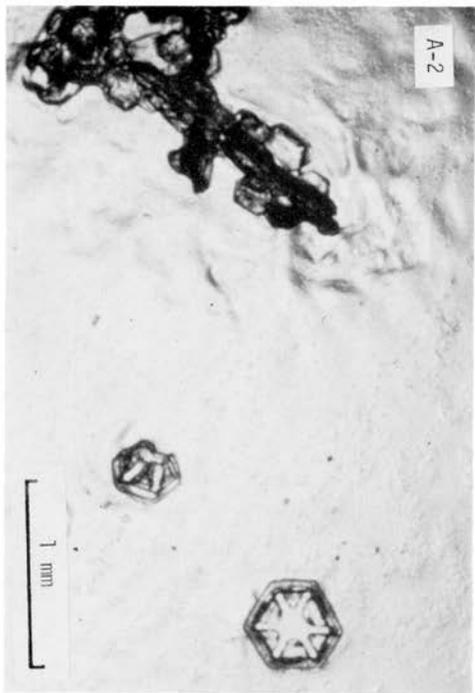
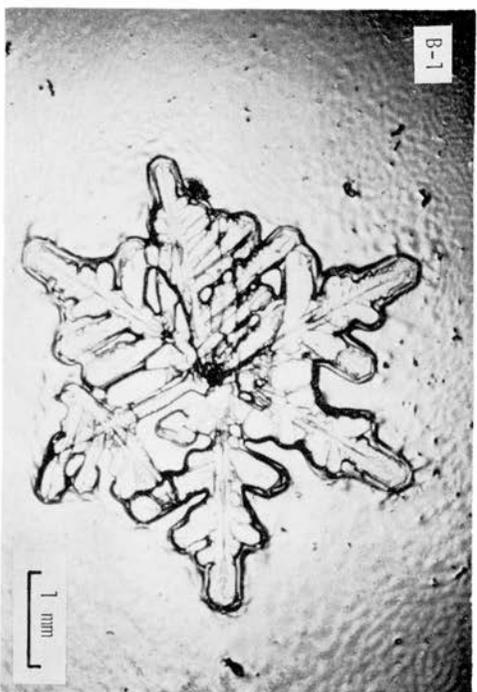
べ、氷についての飽和度が高いことが示されている。〇一〇〇GMTと一四〇〇GMTの氷床上の気温変化は、二度Cであり、雪が形成された上空の気温にも大きな変化がないものとする、六月二十日の約三〇〇メートル上空の気象状態は、乾燥から湿潤に変化したものと考えられる。このような高地における雪の結晶型から気象状態を考察した報告は、樋口 (1976, 1978) によつて、ヒマラヤ山脈での観測結果がある⁽⁸⁾⁽⁹⁾。

七月十六日、一九〇〇GMT (北緯七十一度二十二・四分、西経四十一度四十二・九分、高度二九〇〇メートル) と、七月三十日、二〇〇〇GMT (北緯六十七度二十四・八分、西経四十四度三十六・七分、高度二三〇〇メートル) の観測では、ともに気温マイナス二度C、積雲がみられ、そして樹枝状六花が観測された。同様な方法で、この時の雲頂高度を求めると、前者は五〇〇メートル、後者は四四〇メートルとなる。このことは、グリーンランド氷床南部での七月の積雲対流が約五〇〇メートルほどに達していることを示している。中緯度に位置する日本では、七月ともなると積雲対流はしばしば一万メートルにも達することと比較すると、北極圏のグリーンランド氷床南部では、はるかに低い値となっている。

〈3-4〉 エアロゾル

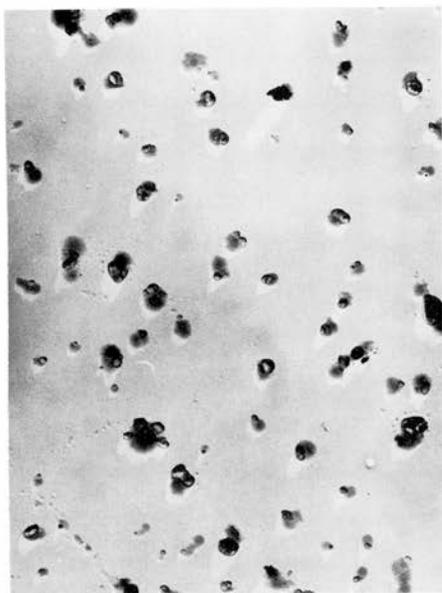
大気中に浮遊している微妙な粒子 (ダスト塵) をエアロゾルと呼ぶ。近年では工場の煤煙等の大気汚染に関連して話題となることが多い。しかしながら、大気中のエアロゾルの中には、我々に身近な自然現象である霧や雨・雪が降るメカニズムの上で大事な機能を果たすものがある。

グリーンランド探検の途上その生涯をとじたウェーゲナーは、気温が氷点下であるにもかかわらず、水滴からなる霧を、探検中に幾度となく観察した。元来、気象学者であった彼は、大気中で氷の粒 (雪) ができる為には核となる微小な物質が存在する必要があることに気付き、この作用をする粒子を氷晶核と呼んだ⁽¹⁰⁾。同様に、水蒸気が凝結して雲粒になる際にも核となる物質が必要であり、この作用をする粒子を雲核と呼んでいる。どのような粒子が氷晶核あ

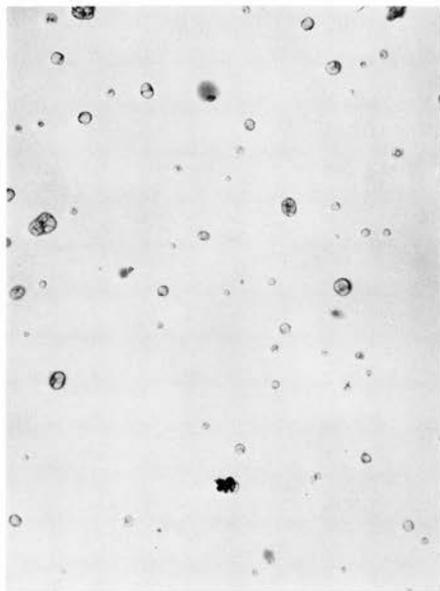


第7図 レゾリカ法による雪結晶の写真。1978年6月20日、グリーンランド氷床——北緯77度11分、西経38度14分、高度2,350 mにおいて 01:00 GMT (A) と 14:00 GMT (B) に観測された雪の結晶。

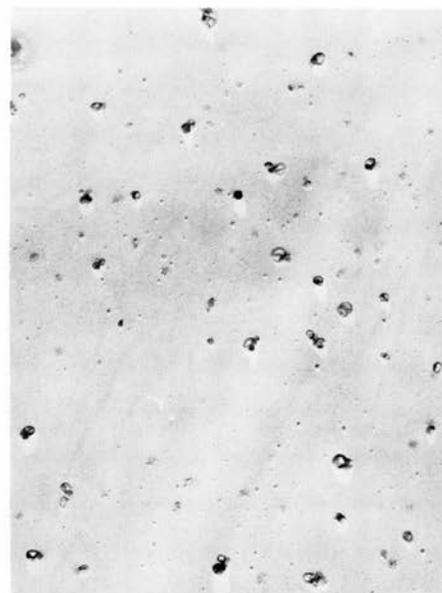
(a)



(b)



(c)



第8図 エアロゾルの電子顕微鏡写真(5000倍)
(a) 北極点 (b) グリーンランド北部(北緯 83°、西経 21°) (c) グリーンランド南部(北緯 62°、西経 44°)

るいは雲核として機能するかは、粒子の大きさと粒子を構成している物質によって決まる。

このように、エアロゾルの性質として大事であるのは粒径（大きさ）と、粒子を構成している物質である。それらを知ることができれば、エアロゾルに核としての機能があるかどうか、太陽光を反射するか吸収するか、といったことがわかる。さらに、エアロゾルの発生源を推定することもできる。

今回の観測でも、採集されたエアロゾルの粒径測定と物質同定を行った。粒子の大きさは、そのほとんどが1μm（ミクロン）以下であるので、観察するには電子顕微鏡を用いる。

第八図は、今回採集されたエアロゾルの電子顕微鏡写真である。粒子を立体的にみる為にシャドウイングという方法を使っており、白く見えているのは粒子の影（シャドウ）である。これによって粒子の形状がよくわかる。写真は（a）が北極点（観測番号5）、（b）が北緯八十三度（観測番号9）、（c）がグリーンランド南端の北緯六十二度（観測番号27）である（第四図）。どの地点においても半径一ミクロン以下の小さい粒子が圧倒的に多い。また、北極点では他の二地点に比べてエアロゾルの粒径が大きいのが特徴である。これは、エアロゾルの発生源の違いを反映している可能性が考えられ、興味あるところである。粒子の形態上の特徴をみると、輪郭のはっきりとした粒径の小さい粒子と、輪郭のぼやけた粒径がやや大きい粒子とがみられる。前者に関しては、全地球的に広く分布している、硫酸塩から成る粒子であろうと推定される。エアロゾルの物質同定については現在解析中であり、近い将来明らかにする予定である。

エアロゾルの濃度は、一般的に人口の集中している地域程高い。人間活動による大気汚染の結果を反映しているわけである。南北両極地は、その点で最も人里離れた地域であり、清浄な空気が期待できる場所である。今回の結果をみると、グリーンランドでは北半球の他の大陸部と比べれば、エアロゾルの濃度は低い⁽¹⁾が、南極や、筆者らが行なったヒマラヤ⁽¹⁾よりも高いようである。

謝 辞

北極・グリーンランド犬橇単独行を援助してくださった多くの方々や、西堀栄三郎先生、吉田宏氏、電通、文芸春秋社、毎日新聞社、毎日放送、スミソニアン研究所のリー・ハウチンズ博士、NASA、National Geographic Society、カナダ政府の North West Territory 地方政府、デンマークのグリーンランド省、そして連絡通信員の多田雄幸氏、鈴木喜久治氏、榊田睦彦氏に、あわせてお礼申し上げる次第である。

参考文献

- 1 Stefansson, V. (1962) : Unsolved mysteries of the Arctic. Collier Books, New York, 320 pp.
- 2 植村直巳 (1978) : 北極点グリーンランド単独行、文芸春秋社、261 pp.
- 3 Dansgaard, W., Johnsen, S.J., Miller, J. and Langway, C.C. Jr., (1969) : One thousand centuries of climatic record from Camp Century on the Greenland ice sheet. Science, 166, 377-381.
- 4 Benson, C.S. (1962) : Stratigraphic studies in the snow and firn of the Greenland ice sheet. U.S. Army Snow Ice and Permafrost Research Establishment, Research Report 70, 93 pp.
- 5 気象協会 (1963) : 北半球月平均気温偏差図 (一九二一年～一九五〇年)
- 6 Yowinkel, E. and Orvig, S. (1970) : The climate of the North Polar Basin. Climate of the Polar regions, World Survey of Climatology. Vol. 14, S. Orvig ed., Elsevier, Amsterdam, 129-252.
- 7 Nakaya, U. (1954) : Snow crystals, natural and artificial. Harvard University Press, 510 pp.
- 8 Higuchi, K. (1976) : Snow crystals observed at Lhajung station in Khumbu region. Seppyo, Vol. 38, Special Issue, 93-101.
- 9 Higuchi, K., Ageta, Y. and Inoue, J. (1978) : Snow crystals observation at Yalung Kang, Kangchenjunga region, East Nepal. Seppyo, Vol. 40, Special Issue, 45-49.

- 10 Wegener, A. (1911) : Thermodynamik der Atmosphäre. Leipzig.
- 11 Ikegami, K., Inoue, J., Higuchi, K. and Ono, A. (1978) : Atmospheric aerosol particles observed at high altitude of Himalayas. Seppyo, Vol. 40, Special Issue, 50-55.

ダウラギリⅠ峰南壁（一九七八年春）

——サウス・ピラーの初登攀——

雨宮節

ダウラギリへの情熱

一九七八年五月十日、午前十一時十五分、小林より交信あり。

「頂上です。ここより高い所はありません。各キャンプの皆さんにありがとうと伝えて下さい」

一九七五年三月二十六日、あの悪夢の日から数えて三年目。僕にとっては二度目のダウラギリ・サウス・ピラーは、ここに終止符が打たれた。（編者注・一九七五年、東京都山岳連盟隊Ⅱ雨宮節隊長以下十七人Ⅱはサウス・コルへの氷河上にC1を設けたが、三月二十三日からはじまった降雪は三日間つづき、C1は二十五日深夜雪崩に襲われ、沼尾吉忠、井村哲の二隊員とシェルパ三人が埋没死した。同隊はその後六二〇メートルに達したところで登攀を断念した。）

あの日以来、否、それ以前の準備段階以来から数えると、何年ダウラギリに情熱を傾けて来たことだろう。沼尾、井村、シェルパ三名を亡くして、リーダーの責任感から、山を止めたいと思ったあの帰りのキャラバン。そしてその中から、やはり僕にとってダウラギリ・サウス・ピラーはどうしても登らなければならぬ人生の壁ともいうべき存在となった。

その後の二年間は、僕の生活の全てはサウス・ピラーのみであった。はたして登ることができようか。夜、あるいは昼のふとした時間に思い出すのは、あの圧倒的に切れ落ちた一枚の南壁の写真であった。

一九七五年、東京都山岳連盟隊として出発した僕達であったが、遭難後の混乱の中で組織のむずかしさと、人間関係のむずかしさをいやという程体験した。僕にとつては、マナスル西壁や、成功した二次隊より、あの第一次隊の一人一人の隊員が忘れられない。人間は苦しい立場に立った時に本当の性格が出てしまうものだが、今振り返っても、素晴らしい友情であった。

第二次隊は当初、一次隊の人達で結成されたが、三年の月日に夫々の立場も変わり、参加できる隊員も少なくなってきた。引き続き参加できる隊員は、清水、永沼、加藤、小林と僕の五名となり、もう少し人数が欲しいということもあって、イエティ同人を作りそれぞれの仲間を集めた。

イエティ同人は、ネパール・ヒマラヤを含めて海外の山へ行こうという人達を集めた同人組織である。そして若手のクライマーの中から、吉野、佐々木、平原、三上。プロガイドとして生活している重野も僕達の仲間に加わった。ドクターとしては早い内に、女性ではあるがヒマラヤに是非とも行きたいという加藤が決まったが、途中で仕事の都合で行けなくなった。それでも出発迄準備を手伝うといっている内に、ヒマラヤ熱が重症になり、とうとう参加することになってしまった。

加藤が一時不参加を表明した時に、マナスル以来の友人である田中壮佑から前田ドクターを紹介された。まだ若い前田は前橋から熱心に通ってくれて、本業も外科ということで隊にとつても大きな力となった。

又、変わり種マネージャーとしては、大蔵省の役人である平井が、僕達のもっとも苦手とする資金調達を含めて参加したいといってきて、大変強力なマネージャーとなった。

これで僕達東京ヒマラヤ登山隊の十三名の仲間は揃い、遅れてくる平井を除いて全員がカトマンズに集結したの

は、二月二十七日であった。

キャラバン

既に荷物も着いており、僕は、観光省行き、シエルパとの顔合わせ、荷物の整理等に忙しかった。全ての仕事を終り、明日はポカラに向うという二月二十三日に、リエゾン・オフィサーがやっと決まった。K・B・タパ氏。ポリスマンで、眼鏡をかけたものすごく真面目そうな人であった。

二月二十四日、早朝の出発の予定が、ネパール特有のビスタリズムで、バスとトラックがきたのが九時過ぎ。荷物を積んで、それでも僕達のミニバスは十一時過ぎに出発した。途中でパンクし、ジャッキもないので後続バスを待つて直し、六時過ぎにポカラのチベタンホテルに無事宿をとる。トラックは午後十一時過ぎになってやっと着いた。

二月二十七日、キャラバンの初日だ。今日はスイケット迄なので、ポーター連中も近いのを良く知っており、仲々出発しない。ポーターは総勢三一〇人。僕達もタクシーに分乗してポカラの街外れ迄行った。タクシーを降りた所で予期しなかった長野山岳協会のチューレン・ヒマールのパーティーと一緒に、毎日一緒に行動することになる。ポーター達も入り乱れて仲々大変であった。

三月二日、カスマで後続の加藤達と合流し、これで全隊員が揃った。陸送で頑張った加藤はアメーバ赤痢で調子が悪く、キャラバン中に体調を直しておかないと大変だ。初めての連中も、先輩の行動を見て、それなりにうまくキャラバンを楽しんでいるようだ。

僕はポカラからシーバン迄、馬を雇ってみた。馬は大きいボックスはだめだが、小さいボックスなら二つは担げるので、丁度ポーター二人分だ。馬方も一つ担いで日当を稼いでいる。

通る路が違うので昼間はうるさくないが、夜、テントの廻りに離すのでガランゴロンという音と、テントの張り綱

にひっかかるので寝不足のもとになる。

三月十一日、テリトリーに着く。ポカラから十三日であった。ここは前回のベース・キャンプの一日手前の所である。前回は雪も多く難儀をしたので、今回は出発を一ヶ月遅らせたのだが、ここ迄は良かったが、この日に大雪となり、テントが三張りもつぶされてしまった。外で寝るポーター達は大変だった。

雪が出てきた時に頑張ってもらう為に、僕はカトマンズから三十名のポーターを連れてきている。この者達に運動靴とゴーグルを支給して、荷上げしてもらうことにした。それにつられて残るポーターも居て、総勢六十六人のポーターが残ってくれた。これにシエルバ、キッチンボーイも含めて十七人、それに全隊員が荷上げをすればなんとはいく、と荷上げの目安もついた。

三月十三日、今日は素晴らしく晴れた日だ。全員で荷上げに向う。旧BCより高い、前回の慰霊碑のある場所の標高三六五〇メートルにベース・キャンプを設営。この日九十個の荷物が上った。積雪の状態は前回よりも多いくらいで、膝ぐらいのラッセルになり、ポーター達もかなり苦勞していた。

三月十七日、僕を含めて十名がベース・キャンプに入り、明日からカルカの設営を始める。

サウス・ピラーに登る

三月十七日、今日から上部のルート工作を行う。永沼、重野、吉野の三名がルート工作に行った。姫路岳連の第一キャンプがあった四七〇〇メートル地点迄到達する。

前回の事故があった氷河ルートをとるか、その右の岩尾根をとるか、又、ベース・キャンプから一旦下り、前回偵察したもう一本右手の氷河ルートをとるか、決めるのが大変だ。

三月十九日、全員で日の丸とネパール国旗を立ててベース・キャンプ開所式をやった。愈々明日から上部へ向う。

Dhaulagiri I-South Wall

Chart 1

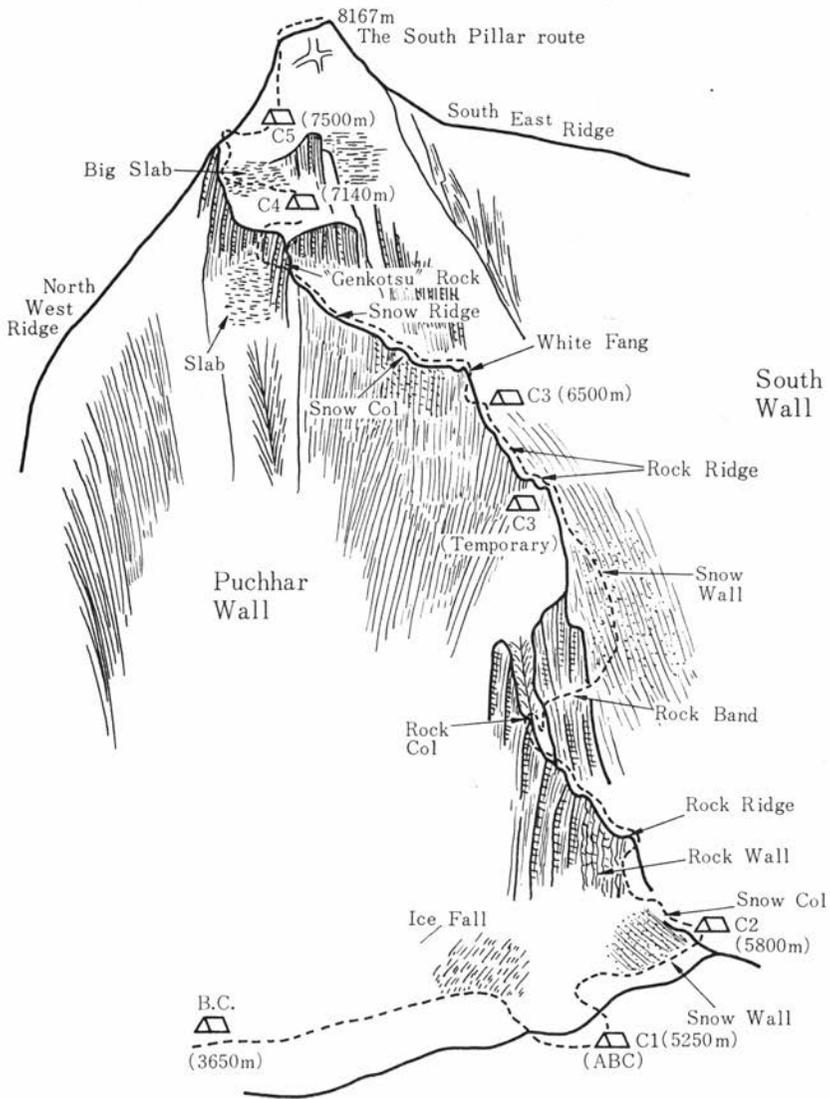




Plate 1-(a) : ダウラギリ I 峰サウス・ピラー, C2 へのルート (上部のコルがC2)。
Dhaulagiri I-South Pillar, The way to C2 (C2 built on the col
upside).

(Plate 1 (a)~(f), by T. Amamiya)



Plate 1-(b) : ダウラギリ I 峰サウス・ピラー, C2・C3 間の大岩壁。
Dhaulagiri I-South Pillar, The giant rock wall between
C2 and C3.



Plate 1-(c) : ダウラギリ I 峰サウス・ピラー, 大岩壁を抜け, 南壁側の雪壁を登る。

Dhaulagiri I-South Pillar, Climbing the snow wall above the giant rock.



Plate1-(d) : ダウラギリ I 峰サウス・ピラー, C3 上の岩壁帯, 後方はゲンコ
ツ岩
Dhaulagiri I-South Pillar, Rock wall above C3, the Gen-
kotsu-iwa rock seen backside.



Plate 1-(e) : ダウラギリ I 峰サウス・ピラー, ゲンコツ岩基部からスラブ帯をトラバースする。

Dhaulagiri I-South Pillar, Traversing the slab belt at the bottom of the Genkotsu-iwa rock.

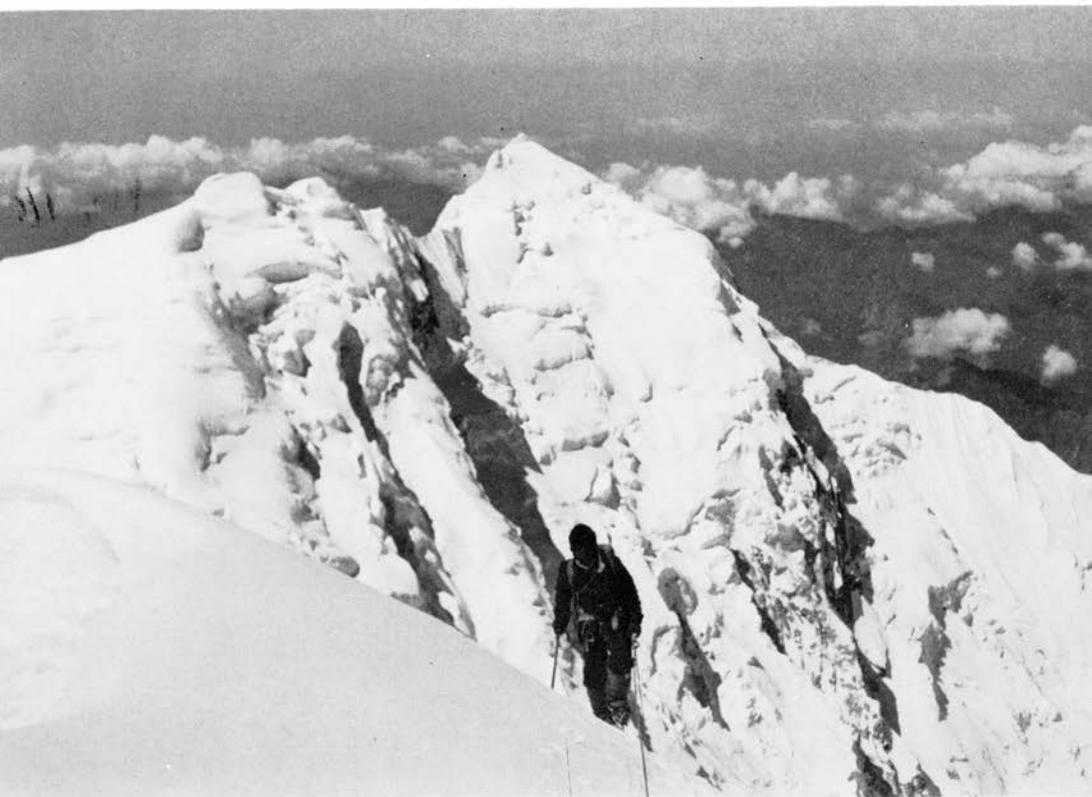


Plate 1-(f) : ダウラギリ I 峰サウス・ピラー, C3 上の雪稜を登る。

Dhaulagiri I-South Pillar, The snow ridge above C3.

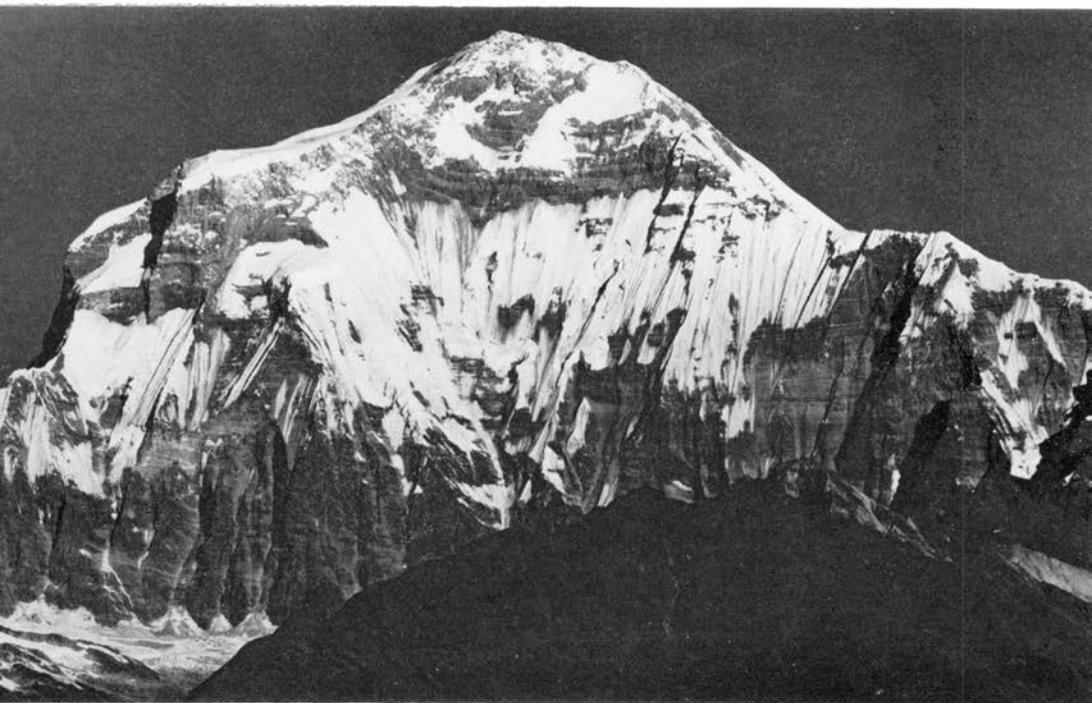


Plate 2-(a) : ダウラギリ I 峰南東稜, ゴラパニ峠から望むダウラギリ I 峰, 右稜線が南東稜, 左はサウス・ピラー。

Dhaulagiri I-South East Ridge, Dhaulagiri I seen from Ghorapani Pass. South East Ridge on the right and South Pillar on the left.

(Plate 2 (a)~(d), by K. Yagihara)



Plate 2-(b) : ダウラギリ I 峰南東稜, C3 付近より望む「ゴジラの背」。上部雪のピーク上が C4 (6,450 m).

Dhaulagiri I-South East Ridge, "The Gojira's back" seen from C3. C4 (6,450 m) built on the top of snow peak.

気分も一段と引きしまる。

三月二十日、三パーティに分れて第一キャンプ予定地である標高五二〇〇メートル迄行く。A 隊は小林をリーダーにシエルパ三名で前回のルートを行き、B 隊は僕がリーダーで佐々木、シエルパ二名で姫路岳連のルートを、C 隊はサーダーをリーダーに永沼とシエルパ三名で右の岩尾根、と分れて行った。

僕達と小林達のパーティは上で合流し、C 1 の予定地に到達した。その結果として、右の尾根は荷上げをする場合、すぐく遠廻りとなり、アルバイトがきついで止めて、やはり一番長く分っている氷河ルートに決めた。前回にこりて、氷河上にテントを置くのを止めて、BC から標高差一六〇〇メートルもある長いルートであるが、十キログラムを背負った時には八時間位のアルバイトで一気に荷上げをする。又二十キロを背負った時には四六五〇メートルの地点にテポを設け、ここ迄荷上げて、C 1 設営後、逆ボツカをすることに決定する。

三月二十一日と二十三日迄連日荷上げをし、二十五日にはC 1 設営と思っただが、二十四日夜、雷を伴う多量の降雪があった。サーダーにいわせると今日ダウラ二峰のパーティが入山してきた為、天気が悪いのだそうだ。

二日間の降雪で、テントの廻りに三十センチも積った。本日は快晴だが、氷河の中は雪崩そうなので思い切って停滞した。三年前の今日、沼尾達が雪崩でやられた日でもある。皆で昭和山岳会から預かってきたレリーフをC 1 が見える岩場に立てた。

三月二十七日、昨日に引き続き素晴らしい天気だ。本日一気にC 1 設営の予定だ。全員で荷上げとサポートを兼ねて行動をする。午後一時過ぎに上部のセラックが崩壊して、ルート上に大雪崩が発生した。幸い僕達のルートから左に外れ、清水、小林、佐々木の三名に雪煙が少しかかったただが、一時は全員が雪崩にまき込まれたかと、しばらく膝がガクガクした。

三月二十八日、BC に名古屋山岳会の小川隊長と小牧隊員が来訪、メールランナーを一週間おきに出すことを決

め、僕達のテントに一泊していった。

四月七日、五八〇〇メートルのスノーコルにやっとC2が設営できた。この日僕と加藤ドクターを除いて全員がC1入りをし、これでBCも寂しくなったが、上部へのルート工作に力が入る。

四月十日、清水と二人で僕もC1入りをし、これで全ての荷物と隊の中心はC1に移ったわけである。この日にシエルパが高山病になり、BCに下山させる。

四月十二日、前回の一次隊の最高到達地点に十一時三十分に着いた。これからいよいよ未知の部分になるわけだ。ここから見ると、C3予定地迄は直ぐに手が届きそうに見えたが、これが大変な見込み違いであった。

四月十四日、ルート工作の効率が悪いので、標高六三三〇メートルに仮のC3を設営することにし、小林、吉野の兩名をルート作業員としてステイさせた。

四月十五日、ルート作業隊は二八〇メートルのロープを張った。このルートはかなりむづかしく、ルートグレードもIV級を越える所もあり、岩登りのうまい重野を加える。又、清水、加藤の兩名は二十五キロを背負いC3迄荷上げをした。

この途中に高度差二五〇メートルの衝立岩があり、ワイヤー梯子をセットしたが、これを登れるシエルパが、十四名中、今のところ三名しか居ない為に、トランスポートに大きな誤算がでてしまった。本日平井がカトマンズからヘリコプターで一氣に到着した。

四月十六日、仮のC3から早朝三名が出発した。今日中にC3予定地迄到着したい。ルートが非常に悪く、短いが処々にV級の岩場も出てくる。それでも十時四十五分に標高六五〇〇メートルのC3に着いた。C2とC3間のルートが非常にむづかしく、シエルパが登れないので、今後の荷上げがキーポイントとなるだろう。

昨夜、強風の中をC3で一人過した重野は一睡もできなかった。永沼、加藤を迎えに仮のC3迄下った。昨日C3

迄入る予定で出発した永沼、加藤の両名は仮のC3付近で雷雲に遭い、仮のC3でビバークした。

今後のトランスポートは、C3に食糧、装備約三〇〇キロを荷上げしなければいけない。一人が約八キロの荷を担いで三十八名の人員が要る。それと同時に七一〇〇メートルのC4予定地迄のルート工作に二、三名要る。それでもこのルート工作に五日間みて、後、荷上げに専念すればなんとか上部迄の見通しもたつ。

永沼隊員倒る

四月二十日、重野、加藤は三〇〇メートルのフィックスロープを張り、C3に戻る。調子が悪いため本日C1迄下降する永沼は、一〇〇メートル程下降したが再びC3に戻ったとのこと、明日はどうしてもサポートをつけてでも下らせることにする。七〇〇メートルにあるゲンコツ岩も何とかルートがとれそうと交信あり、これで一安心。

四月二十一日、今日は永沼をC1迄下らせる予定。代りにC2に居る清水、三上、ザンブーをC3に登らせる。C3から全て懸垂下降の為、一人で降りることができると永沼が言ったので、一人で降りすことにする。ルート工作に重野、加藤の二名が向い、六八一五メートル迄ルートが伸びた。三時頃C3に戻ると永沼がテントの中で寝ていて、下降したが調子が悪く、再びC3迄戻ってきたということだ。清水達は午後六時頃C3に到着した。

四月二十二日、風が強かったが、朝七時の交信で永沼も元気ということだ。全員で逆ボツカをしながらサポートをして、C1迄降ろすことにした。

九時四十五分、永沼がトップで懸垂下降を始める。一〇〇メートル程下降したところで、永沼がフィックスロープにブラ下ったまま動かない。頭部等に負傷していた。後続の加藤が到着した時は、既に意識が無く、トランシーバーで加藤ドクターの指示で人工呼吸、心臓マッサージをするが、十時二十二分、瞳孔が開いて死亡と判定。遺体は一応その場に安置し、全員夫々のキャンプ地に戻った。隊の中心メンバーであった永沼の死は僕にとって大変なショック

であった。

生前の彼の口癖であった「ダウラを落としたい、どうしても今回は絶対に登るんだ」という、彼の意志を尊重し、登山再開を決定する。再び事故は起こさないという決意でだ。四月二十六日、僕達は再びサウスピラーに戻った。

ゲンコツ岩を越えプラトールへ

四月二十七日、ルート工作隊は二四〇メートルのフィックスロープを伸ばし、待望のゲンコツ岩基部に到達した。基部の標高は六九五〇メートル。ゲンコツ岩の大きさは一五〇メートル程だが標高も七〇〇メートルということ、行動もかなり息苦しく、又、ルートグレードも高くてむずかしく、苦勞させられる。

それでも人工登攀等をまぜて三日間程のルート工作で、ゲンコツ岩を抜け出ることができた。C4のキャンプ地がうまくあるか心配していたが、抜け出たところに素晴らしい場所があった。標高七一〇メートルであった。ここから上部プラトール迄スラブ帯を容易にルートがとれそうとの交信だったが、これが見た目より悪く、今迄から見ると傾斜がゆるく見えたのが誤算であった。

五月二日、快晴であったがC3のメンバーは連日の行動で、オーバーワーク気味なので思い切って休養させる。C2から加藤とダワサンゲの二名をC3入りさせる。これでC3に十一名が集結する。愈々最後のツメの段階に入った。

五月五日、今日のラジオ・ネパールはメスナーのエベレスト酸素レス登頂を伝えていた。僕達もあと一息だ。

五月六日、プラトールの下迄午後四時に到達した。後、五〇メートルも登れば平らになりそうということだが、時間切れでC4に戻る。標高七三二〇メートルの地点であった。

五月七日、C4に小林、吉野、アンカミの新手を入れ、C4の清水、重野の兩名は休養。

五月八日、今日はパーティを二つに分け、ルート工作には重野、小林、加藤、荷上げを清水、吉野、アンカミで行う。ルート工作隊は十一時に前日の最高到達点に達し、十二時三十分待ちに待ったプラトリーに抜け出る。標高七四〇メートル、岩原スキー場の様な所に出た、ということだ。これで事実上のサウス・ピラーの登攀を終った。だがまだ頂上迄七〇〇メートル程の標高差が残っている。手持ちの三五〇メートルのフィックスロープを張り、C4に戻った。第一次アタック隊の発表をする。重野、小林の二名。

五月九日、C5を七五〇メートルの地点に設営。

五月十日、昨夜はかなりの降雪があったが、夜半より天気も回復し、午前五時半、アタック隊はC5を出発した。十時、プチャールの頭。あと頂上迄は四〇〇メートルだ。ラッセルはくるぶし位。十一時十五分、小林よりコール。登頂だ。僕にとって長かったサウス・ピラーへの道はここに終りを告げた。

午後一時二十分、小林より再びコール、今、C5に到着した。かなり疲労したので今日はC4に泊りたいのと。午後四時十分、アタック隊C4に到着。

五月十一日、第二次アタック隊、清水、加藤、吉野、アンカミの四名は頂上に向う。

午前九時、ヘリコプターがBCに到着。永沼夫人と兄上が到着した。頂上に行けたことを報告する。二人とも心から喜んでくれた。

第二次アタック隊の加藤が雪盲にかかり、二日間C4に吉野と停帯。その後、五月十五日に全員無事にベース・キャンプに集結。亡き六名の慰霊祭を沼尾の父君を交えてすませてから、カトマンズに向った。

△記録概要▽

隊の名称 一九七八年イエティ同人東京ヒマラヤ登山隊

活動期間 一九七八年二月～六月

目的 ネパールヒマラヤ・ダウラギリI峰 南壁サウス・ピラー初登攀

隊の構成 隊長⇨雨宮節(42) 東京雲稜会、副隊長⇨清水清二(32) 鵬翔山岳会、隊員⇨平井拓雄(32) 日本山岳会、永沼勝己

(33) 東京ケルン山岳会、加藤康二(29) ソニー山岳部、小林利明(29) 鵬翔山岳会、吉野寛(28) 登攀クラブ蒼水、三上耕一(27) 鵬翔山岳会、平原泰則(28) 東京ケルン山岳会、重野太肚二(34) 日本登山用具研究会、佐々木慶正(23) 登攀クラブ蒼水、医師⇨前田光久(29) 群大山岳会、加藤淑子(28)、LO⇨K・B・TAPA、サーダー⇨サシケ(ガット)

行動概要

二月十七日、本隊カトマンズ着。二月二十七日ボカラ出発。三月十九日BC設営(三六五〇メートル)。三月二十日登山行動開始。三月二十七日C1設営(五三〇〇メートル)。四月十日C2設営(五八〇〇メートル)。四月十七日C3設営(六五〇〇メートル)。五月三日C4設営(七一〇〇メートル)。五月九日C5設営(七五〇〇メートル)。五月十日第一次アタック、重野、小林。五月十一日第二次アタック、清水、吉野、加藤、アンカミ。五月十五日BC着。五月十九日BC撤収。六月二日カトマンズ着。

ダウラギリ I 峰南東稜 (一九七八年秋)

八木原 圀 明

登頂と事故

苦しく悲しい日々をのりこえて、その朝はやって来た。宮崎、宇部、谷の三名は三時に起床、しかし、ガスコンロに火がつかない。気温は約マイナス三十度である。ボンベが冷え過ぎたと思われる。コンロを暖め、朝食が済むと出発は七時になってしまった。

昨日入ったC7から、さらに上部へ伸ばしておいたロープは雪の下になり、ヒザから腰くらいのラッセルを繰り返さなければならぬ。九時半、この山の初登頂ルートである北東稜上へ出る。

風はあるが天気は良い。ラッセルも部分的にするだけで良くなり、少しずつピッチがあがる。一本目の酸素が終ると、その重量分だけ軽くなる。急峻な南壁側を避け、北側から稜線をまくように登る。いくつものピークが見え、そのたびに頂上かと思ひ込む。いくつめのピークだろうか、急に向こう側が何もなくなった。頂上だ。ここが頂上だ。

(宇部隊員の登頂記より)

頂上付近には岩もかなり露出しており、かた通り頂上での儀式を済ませた登頂隊は、石をザックに詰めてから下った。十月十九日、十二時三十五分の登頂であつた。

翌二十日には第二次登頂隊の八木原、山田、鈴木及びシエルパのナワン・ヨンデンがC7へ入り、アタックに備えた。しかし、C4から荷上げに向つたはずの小暮副隊長が、午後になつてもC5へ到着しない。C5の石川は、十四時半に阿部、金子の二名を捜索のためにC4へ下らせる。

一方、C7の八木原は六時になつても小暮の消息が不明なため、小暮の事故は確定的と判断し、翌日のアタックをあきらめ、三名の第二次登頂隊を残し単身C6へ下る。C6に居るはずのシエルパは逃げ下つてしまい、二つのテントは空っぽだつた。

十六時半頃、阿部と金子はC4近くの南壁側に張つた固定ロープにぶら下がっている小暮を発見した。小暮に近づいて声を掛けるが、反応は全く無い。彼等は、その状況からすでに死亡していると判断して、C4へ行き、小暮の事故を全キャンプに伝えた。当時、九名の隊員と三々四名のシエルパがC5以上に居り、C4には小暮とシエルパ一名の二名だけが滞在していた。そのシエルパが不調なための単独での荷上げ中の事故であつた。

十月二十一日、新たな悲しみを背に、山田、鈴木、ナワン・ヨンデンは頂上へのラッセルを続けた。そして登頂。一カ月程前に雪崩で南壁の深い谷の底へ逝つてしまつた阿久沢、深沢、小林の写真を埋め、うれしいような、悲しいような、空しい気持で頂上を去つた。

この日、小暮の遺体は七名の隊員によりC4へ收容、安置され、翌二十三日、C4近くに埋葬された。この事故により、石川らによる第三次登頂も中止され、上部キャンプの撤収を開始した。

こうして、悲しくも仲間を失いながらも、それをのりこえて登頂するに至つた過程は次の通りだつた。

キャラバン

八月十日、BC地点の確定及びルートの選定のために、小暮副隊長、宮崎、深沢の両登攀リーダーがポカラを出発した。翌日、本隊はポーター（ナイケ三名を含む）二〇四名と共に出発。途中ビレタンテイからの川沿いの道が崩れ、大きく迂回させられた。その夕方の豪雨でイヤ気のさした五十名程のポーターに逃げられ、二隊員がゴラパニ峠やシールカで四日半荷物を持つ羽目になった。これはずっと尾を引き、最後の荷物がBCへ着いたのは八月末近かった。先発隊は七日間、本隊は八日間の旅であった。

BCはバンヤ・カルカという広い草原である。それは、一九六九年のアメリカ隊の遭難碑のある、チャタンというカリ・ガンダキ畔の人家のあるところから急登したところにある。たくさんのヤクや羊が放牧され、ヒマを持って余す牧童達の格好の遊び場となり、コック達と毎日のように賭けトランプに興じていた。

ルート工作

先ず一チーム三名ずつの五チームを作り、五チームをローテーションしながらルート工作をつづけることにして行動は開始された。

八月十七日に先発隊の小暮、宮崎、深沢がBC地点へ着き、十八日よりルート偵察を開始していた。私たちは南東稜へ取り付くための支尾根へ上がるルート捜しからとりかかった。一つは一旦東ダウラギリ氷河上へ出るルート、もう一つは支尾根をはさんで手前のルンゼからのルートが考えられたが、両ルートの試登の結果、東ダウラギリ氷河ルートに決定した。

八月二十六日、C1建設（四八五〇メートル）。昨日、すでに東ダウラギリ氷河を越えて南東稜への支尾根上に出て

CLIMBING ROUTE OF DAULAGIRI. I - SOUTH-EAST RIDGE



Chart 2

SUMMIT	8,167m
C7	7,800m
C6	7,450m
C5	6,950m
C4	6,450m
C3	5,850m
C2	5,400m
C1	4,850m
BC	4,200m

おり、建設地点は簡単に決定した。石川、宇部、金子は、初日に十本半（一本は五〇メートル）のロープを張り終えた。翌日、大ニードルを回り込んだが、キャンプサイトが無い、との報告が入る。しかし、いくら岩とは言え、壁では無く尾根である。岩を落し、尾根を削れば絶対に可能であると考え、心配はしない。C1では毎日大雨が降り、フライシートに溜る水はどんなに使っても使い切れない。隊員一名は順応がうまく行かず、隊長と共にカロパニへ下る。

八月三十日、C2建設（五四五〇メートル）。昨日、今日と岩尾根から五、六人がかりでやっとな動かせるような大きな岩を、いくつも左右の谷へ落し、硬い氷に固められている岩を砕き、キャンプサイトを作った。数名の隊員は激しい頭痛を訴えるが、

「ここでガマンをしてピッケルを思いきり振っておけば順応が促進されて後で良い結果が出るぞ」と励ましあい、取り敢えずテント二張り分の整地を完了した。

天気は五三〇〇メートル付近から寒、そして雪に変わる。アップザイレンによる下降で、ロボット下降器が見る見るうちにすり減ってしまう。ロープに砂が付くためらしい。深沢、真下、谷は、尾根上を忠実に辿れず、降雪の中でルートファインディングに苦勞する。しかし、雪壁の直上、トラバースを終え、再び支尾根上へ出ると、容易に南東稜へ合流出来た。

南東稜は見るからに困難そうである。C4下の大岩稜には岩塔がいくつも立っている。このあたりを我々は「ゴジラの背」と名付けた。

九月九日、C3建設（五八五〇メートル）。ここも急な雪壁を切ると、下は全く透明な硬い氷と岩となっている。ヒナ壇式のキャンプサイト作りは、又々大変な苦勞であった。しかし、これで困難な岩稜帯を乗り切る基地が出来た。ゴジラの背の基部をトラバースしたところで行き詰り、少し戻って岩稜上を直登する。ワイヤー・ハシゴを四カ所

に掛けて岩稜を突破し、雪庇の下を這い、雪壁を越えて、C4地点へ着く。やっと頂上が見え、南東壁上半を真近に観察出来た。この間十六日間を要した。

九月二十一日、C4建設（六四五〇メートル）。高度も上り、不調者も出て来たため、ここでチームの再編成をして、後半に備えることにする。すなわち強力な三チームを作り、交代でルート工作を行い、他の隊員は荷上げにまわるという方式にした。第一陣として阿久沢、深沢、小林がC4入りをする。

事故発生

九月二十三日、第一の事故発生。阿久沢パーティーは朝七時の定時交信をしただけでそれから何の連絡も無い。夜になっても、交代のためC4へ入ったはずの石川パーティーからも連絡が無い。トランシーバーの故障ならば良いが、と心配をする。

翌早朝、C4のあるスノーピークから一つの黒点が下りて来るのが、BCから確認された。昨夜来の心配が現実のものとなったと判断せざるを得なかった。そしてC3より届いたトランシーバーから、

「昨夜三名は帰幕せず、今日捜索に出たところ、ロープはたくさんスノーバーをつけたまま南壁側へ切れ落ち、三名の姿はその先端にも見えない」

と、石川より報告が入った。その後、事故は現場の状況から三名の足下より起った雪崩によるもの、と推定された。捜索と共に、全員で充分議論をつくした後、遺体の発見、収容は不可能だが、登山は続行しようとした。十月二日にカトマンズよりヘリコプターでBCへ帰った田中隊長は、南壁上空五五〇〇メートル付近より捜索するも、手掛りは得られなかった。

十月七日、C5建設（六九五〇メートル）。不安をおさえて事故発生地点を抜け、仮C5を作り、絶悪のナイフリツ

ジを越えて、初めての広いキャンプサイトに入る。しかし、南東稜は長く鋭く、厳しい表情を見せていた。

十月十四日、C 6 建設（七四五〇メートル）。八木原、山田、鈴木が入り、ここから C 7 へのルート工作隊のみ睡眠時に酸素を吸う事にする。彼等は十七日、高度を除けばルート中一番容易であったルート開拓をつづけ、C 7 地点へ到達した。

十月十八日、C 7（最終キャンプ、七八〇〇メートル）建設。宮崎、宇部、谷の第一次登頂隊は C 7 入りをし、残っていた五本のロープをさらに固定し、翌日のアタックに備えた。こうして、念願の登頂に至る態勢が、からくも整えられたのである。

むすび

七十日間にも及んだ活動を終え、B C の撤収をしたのは十月十五日だった。第二次登頂隊と撤収隊が二十四日に B C へ帰り着き、すぐに亡くなった四隊員の追悼式を行なった。その晩に登頂祝いのパーティーもして、翌朝 B C を撤収した。長期にわたる高所での活動を少しでも癒すため、関ドクターとサーダールの意見もあつての早期撤収であつた。

今回の遠征は、群馬岳連による二度目の海外登山であつた。当初はカラコルムの山を、とこころざして、一九七五年夏に偵察隊（奥原彦治隊長）を派遣し、チョクトイ氷河からシム・ラを越えて、ピアフォ氷河を回るラトック山群一周をして帰国した。しかし、その後も種々の比較・検討がなされた結果、ネパール・ヒマラヤの方が良いという事になり、ギャチュン・カンが目標に設定された。しかし、未解禁峰のためネパール政府よりの許可が得られず、一九七七年一月には八木原が、一九七七年秋には田中隊長と宮崎が、ネパールへ赴き許可の感触を探った。しかし、ギャチ

ユン・カンについては解禁の予定は無い、とのことで果たせず、ダウラギリI峰へ変更し、許可の内諾を得て、田中と宮崎はダウラギリI峰・南東稜の偵察を行って帰国した。

残念ながら前回のダウラギリIV峰に続き、犠牲者を出してしまった(一九七五年に宮崎と八木原がダウラギリIV峰登頂)。前回の反省に立ち、充分な計算、準備をし尽したと自負し、ヒマラヤ登山の経験者も増え、それなりに自信を持つてのダウラギリ登山であったが、思いもかけぬ結果となって悲しみにたえない。しかし、なくなった仲間の活躍のおかげで、ともかくも登頂出来たことを素直によるこびたいと思う。

同時期にツクチェ・ピークへ登っておられた山形県の長井山岳会隊(竹田憲作隊長)には一〇〇本ものスノー・バーを譲って頂いた。三名の隊員と共に大量のスノー・バーを失っていたので、それが無ければもっと苦労したことだろう。

△記録の概要▽

隊の名称 群馬県ヒマラヤ登山隊

活動期間 一九七八年八月～十一月

目的 ダウラギリI峰(八一六七メートル)・南東稜よりの登頂(南東稜の初登攀)

隊の構成 総指揮Ⅱ浜名一雄(75)、現地不参加、隊長Ⅱ田中成幸(43)、副隊長Ⅱ小暮勝義(35)、登攀リーダーⅡ阿久沢広(35)、

石川忍(32)、八木原團明(31)、宮崎勉(30)、深沢勇二郎(28)、隊員Ⅱ真下富夫(30)、宇部明(30)、小林清(28)

山田昇(28)、千木良一郎(27)、谷弘行(26)、阿部源(25)、金子一実(25)、鈴木茂(23)、福田純一(22)、医師Ⅱ

関章司(43)、L・O・スリー・バドゥール・タバ(35、警部補)、サーダーⅡラクパ・テンジン(39)、パサン(39)、

低・高所シエル、バ十六名

行動概要

七月二十九日日本隊成田空港発。八月八日ポカラへ(陸路)。八月十一日キャラバン本隊ポカラ発。八月二十二日全隊員・隊貨BC集結(四二〇〇メートル)。八月二十六日東ダウラギリ氷河上にC1建設(四八五〇メートル)。八月三十日

C 2 建設（五四〇〇メートル）。九月九日南東稜上に C 3 建設（五八五〇メートル）。九月二十一日悪絶な雪稜の始まる地点に C 4 建設（六四五〇メートル）。戦力アップのためにチームを再編成する。九月二十三日阿久沢、深沢、小林の三名雪崩により南壁側へ転落、行方不明となる。九月二十六日登山再開。十月二日田中隊長カトマンズよりヘリコプターで B C へ帰る。その機で南壁側を高度五五〇メートル付近まで搜索するも手掛り無し。仮 C 5 建設（六八五〇メートル）。十月七日 C 5 建設（六九五〇メートル）。十月十四日 C 6 建設（七四五〇メートル）。十月十八日 C 7 建設（七八〇〇メートル）。十月十九日宮崎、宇部、谷の三名登頂。十月二十日小暮副隊長荷上げ中（C 4 と C 5）に転落死。十月二十一日山田、鈴木及びナワン・ヨンデンの三名登頂。十月二十五日 B C 撤収。十一月三日カトマンズ着。

ランタン・リルン登頂（一九七八年秋）

伴
明

「三度目の正直」は実現された。ベース・キャンプへ入山当時、雨とガスに泣いていたリルンは、登頂に成功して下山する際には、紺碧の空を背景に晴々とした表情を秋風の中にさらしていた。

十七年前、森本隊長、大島隊員、サーダーのガルツェンをリルン氷河に残しての下山、十四年前、厳しい東南稜に無念の涙を飲んでの下山、そして今度の成功（編者注・一九六一年、森本嘉一隊長以下六名の大阪市立大学隊は、リルン氷河經由、国境稜線まで到達したが、五月十一日早朝、五六〇〇メートルのC3が雪崩に流され、前記三名が遭難死した。——『山岳』第五十七年「未踏の山ランタン・リルン」広谷光一郎参照。また、一九六四年、再びランタン・リルンをめざした近藤哲也隊長以下七名の大阪市立大隊は、リルン氷河のアイスフォールの状態が悪いので、南稜ルートをとったが、稜上の三角ピークまで達したところで、登攀困難のため撤退した。——『山岳』第六十年「ランタン・ヒマール一九六四年」近藤哲也参照。それらが交錯し、悲しみと喜びが一体となってヒマラヤの空に翔け昇ってゆく。

危険でかわしいアイスフォールとの闘いに消耗しつくした隊員たちが、唯一回の登頂を喜び合い、生色をとり戻して次々と下山してくる。伸び放題のヒゲの中からこぼれる白い歯がすべてを物語っていた。



Plate 2-(c) : ダウラギリ I 峰南東稜, 仮 C5 (○印, 6,850 m) 付近のナイフリッジ, 後方
左より, ニルギリ, ティリツォ・ピーク, マナスル, アンナプルナ I。
Dhaulagiri I-South East Ridge, Knife-edged ridge near temporary C5
(marked ○, 6,850 m).

In the background, from left, Nilgiri, Tilitso Peak, Manaslu, Anna-
purna I.



Plate 2-(d) : ダウラギリ I 峰南東稜, 7,350 m 地点より C4 (◎) 及び仮 C5 (○) を見る。

Dhaulagiri I-South East Ridge, C4 (◎) and temporary C5 (○) seen from 7,350 m on the ridge.



Plate 3-(a) : ランタン・リルン C3 より望むランタン・リ (左) とホロン・リ (中央)
Langtang Ri (left) and Porong Ri (center) seen from C3 of Langtang Lirung.



Plate 3-(b) : ランタン・リルン : C4への途上より見下ろすリルン氷河内の C2 (左◎印) と C3 (右◎印)。
Camps in the Lirung glacier seen from the way up to C4. C2 (left ◎) and C3 (right ◎).

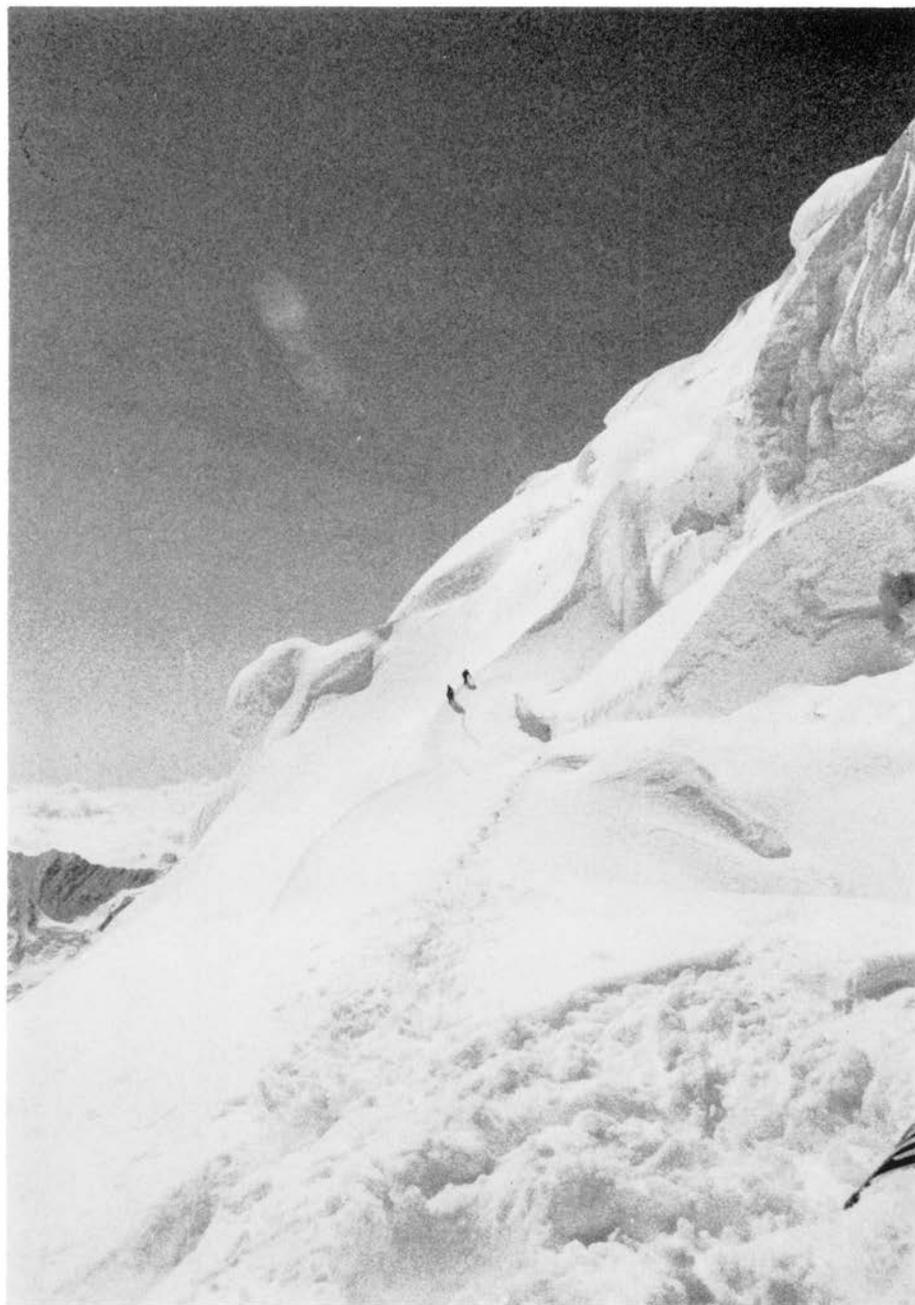


Plate 3-(c) : ランタン・リルン : C4 への道。

The way to C4 of Langtang Lirung.

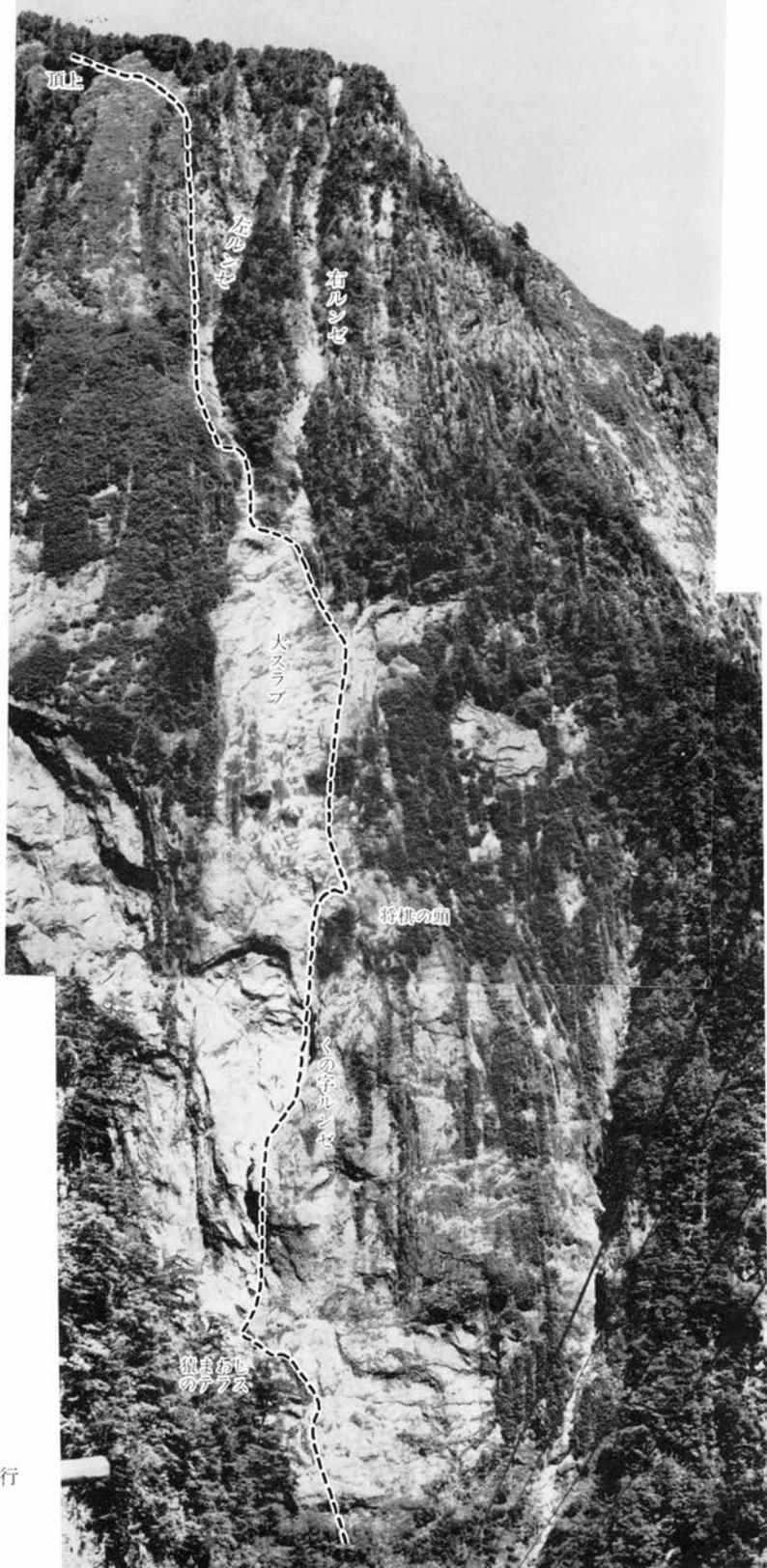


Plate 4
黒部奥鐘山西壁・
紫岳会ルート
(志合谷より望む)

撮影・阿部和行

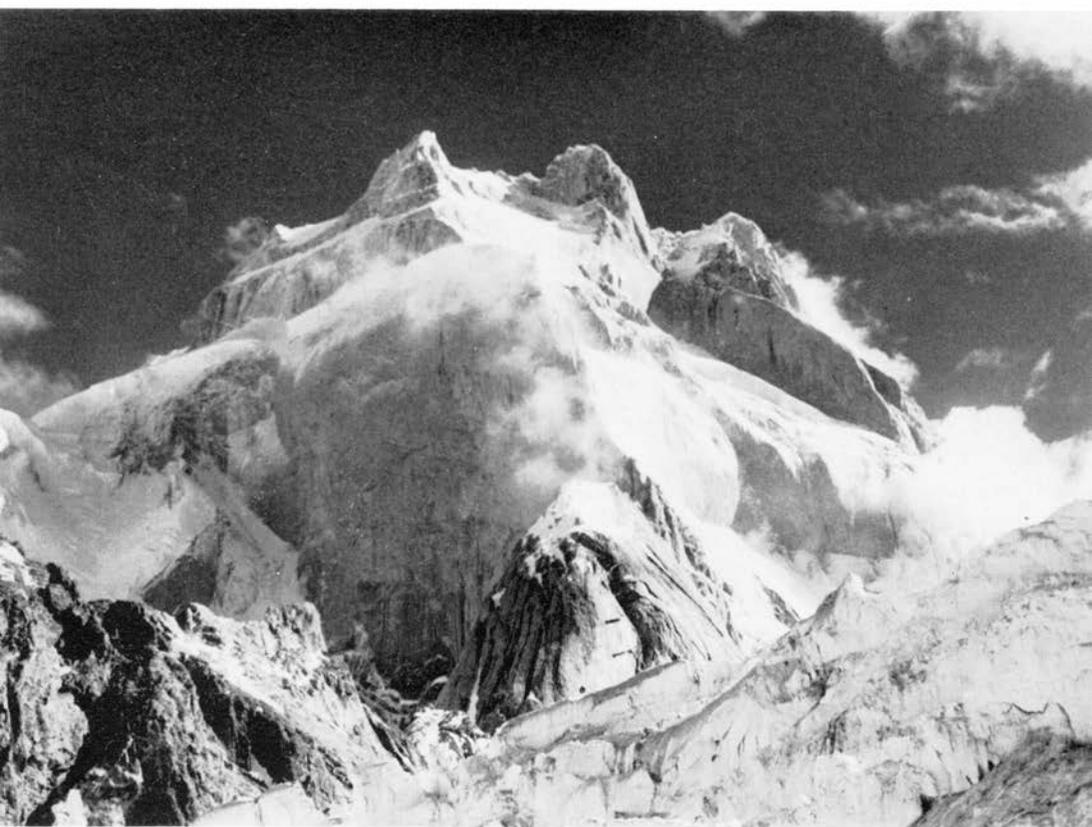


Plate 5 : バインタ・ブラック (7,285 m) —南面より望む。
Baintha Brakk (7,285 m) seen from the south.

(by K. Itokawa)



Plate 6-(a) : ハラモシュ (7,409 m), の北面
Haramosh (7,409 m), North face.

(Plate 6 (a)~(c) : by Showa Expedition)



Plate 3-(d): ランタン・リルンC3より望む周囲の山々 (200mm望遠にて)
Panorama Seen from C3 of Lantang Lirung (by Telescope 200mm)

アイスフォールとの闘い

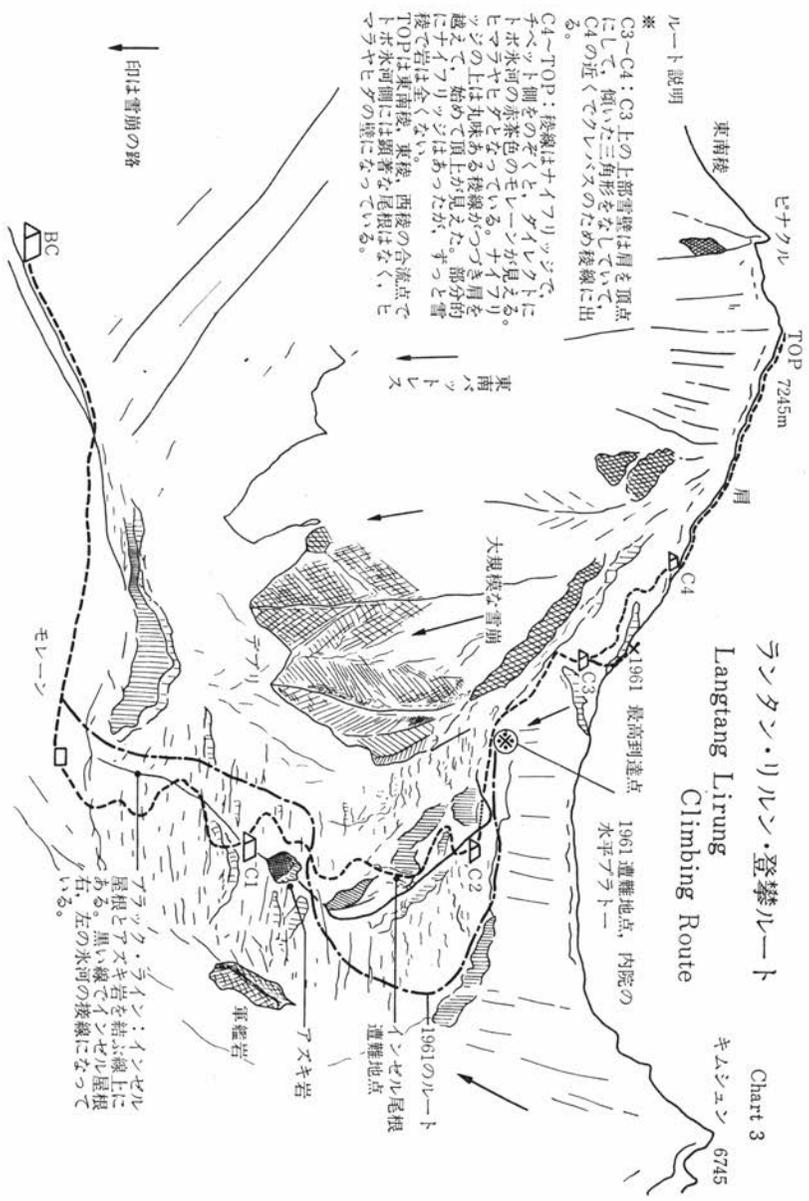
九月九日、雨のベース・キャンプ（四二〇〇メートル）入りをした私たちは、ランタン・コーラ対岸のガンジャラチユリ峯へ高度順化のためのトレーニング後、九月二十二日よりリルン攻略を始めた。

過去二度のプレモンズン期とちがいが、ポストモンズンのアイスフォールの荒れ方はひどかった。幅約五〇〇メートルの下部アイスフォール地帯は、いたるところセラックの崩壊がはなはだしく、崩壊跡が無気味な青磁色に光っていた。数限りないクレパスをとび越えたり、ジュラルミン製ハシゴ、ワイヤー製ハシゴをかけて、時を選ばぬセラックの崩壊に肝を冷やしながらも、ひたすらアイスフォールの中央突破をはかった。

一度は、九月二十九日に第一キャンプ（四八〇〇メートル）を建設したが、まだモンズンが終らぬため、連日の悪天候で雪崩が頻発した。雪崩については、入山以来、毎日何時にどこからどこへ落ちたかを記録して雪崩地図を作成しており、第一キャンプはアイスフォールの真中にあつて安全な筈であつた。ところが、リルン東南壁の雪崩道を滑り落ちる雪崩の余波が、テントをゆるがす爆風と雪片を伴って、三度、四度と襲い、ついにはテントのポールが折れた。特に十月五日の降雪時の爆風の襲来には、夜を徹してテントを支え、翌六日やむなく、全員ベース・キャンプに下山せざるを得なかつた。

十月七日から始まつた快晴を利用して、十月九日、四九〇〇メートルの地点に第一キャンプを張りかえ、私たちは第二キャンプへのルート工作にかかつた。上部アイスフォールは、一段とクレパスの幅が大きくなり、雪崩道を通じて通過するにはハシゴを二台つないでも渡れない。結局、日数、装備等を考えた結果、イタリア隊のつたインゼル尾根を直登することにした。

十月十二日（快晴、午後二時より曇り）、C1の西村、義本、片岡はとりあえずインゼル尾根がルートとして使えるか



ルート説明

※ C3~C4: C3上の上部雪壁は肩を頂点にして、傾いた三角形をなしていて、C4の近くでクレバスのため稜線に出る。

C4~TOP: 稜線はナイフリッジで、チベットの側をのぞくと、ダイクが見える。トホヤ河やヒタとある稜線が、つづ部分のヒンジの上は丸味ある稜線がた。すつと雪を越えて、始めて頂上が見え、すつと雪にナイフリッジはあったが、すつと雪後TOPは東南稜、東稜、西稜の合流点でトホヤ河側には顕著な尾根はななく、

印は雪崩の路

ク・ライン：インセル屋根とアスキ岩が線にある。左の氷河の残骸になっている。

ランタン・リルン・登攀ルート
Langtang Lirung
Climbing Route

Chart 3
キムシエン 6745

どうか、雪稜まで登るべくルート偵察に出る。後藤、ラマ、ノルブはC1デポ地点（四八〇〇メートル）へ逆ボツカ。広瀬、和田、ツェリンはC1にて休日。伴、岡本、プタール、パサンはBCにて休日。BCにて双眼鏡で偵察隊の行動を追っていたところ、十時三十分、事故が発生した。インゼル尾根取付より四ピッチ登ったルンゼ内で、西村ひとりだが（義本、片岡は既にルンゼを抜けていた）突然ブロック雪崩の襲撃（約二分半）を受けたのである。

狭いルンゼのことゆえ避けることができず、左手でフィックスにユマールをセットしたまま右手で体をかばった西村は、右前腕骨折、両ヒザ打撲、左鎖骨痛という重傷を負った。すぐさまハンディトーカーにてC1と緊急連絡をとる。幸い西村が尚一人で歩ける状態だったので、義本、片岡とアンザイレンしてC1へ下降に移る。十一時C1からビヴァークの用意をして、広瀬、和田、ツェリン、ラマが事故パーティの収容に出かけ、後藤はC1にて連絡のため待機。BCでは事故パーティにケガの様子を聴き、東ドクターより処理方法を指示した。

午後一時、救援隊と事故パーティが合流した。西村は案外元気でしっかりしており、意識も正常。四時半全員無事にC1へ帰着した。再度ドクターより投与薬品及び処置の指示をもらい、夜八時やっと緊張した一日が終った。

十月十五日、やっとの思いで第二キャンプ（五七一〇メートル）を設営した。雪崩、セラックやブロックの崩壊、日毎に大きくなるクレバスなどに悩まされるルートとC1のことを考えると、一刻も早く登頂を済ませたい。第一次隊遭難現場である第二キャンプの雪原より上部は、遭難の原因となった大アイスブロック群に最大の注意を払って通過し、十月十九日第三キャンプ（六二八〇メートル）、十月二十三日第四キャンプ（六六三〇メートル）を急ピッチで設営した。しかし、C3では片岡が高度障害で意識が徐々に弱まって、アタックの前日というのに、一晩中、広瀬と義本が介抱をして緊張が続く。明日は登頂と収容の同時進行となろう。

登 頂

十月二十四日、C2までは曇りだが、C3とC4は雲海の上で快晴となる。いよいよ十七年振りに王手をかける日がやってきた。午前四時、BCではガスが濃くたちこめ、十月七日から十七日間続いた早朝の快晴が今日に限ってとまり、ここしばらくリルン頂上にかかっていた夜明けの月も満天の星も、濃い闇の中に姿をかくしている。初登頂を許すのが恥しいのだろうか。

五時、C4のアタック隊との交信で、エベレスト方面に黒いレンズ雲が湧いてきており、ひよっとすると天気が悪くなるかもわからないので、そうなれば無理をせず途中で引返しますよ、と和田がいう。絶対に無理をしないよう答えておく。下部氷河のルート of の危険、不安定さ、片岡の症状から考えても、又天候が悪くなつて雪が降ればたちまちピンチを招く恐れ（表層雪崩）があることなどからすれば、正直なところ、今日を逃せば永久にだめかも知れない、何としても登ってきてくれと言いたいところだが、口には出せず唯、心の中で念ずるのみである。

アタック隊の和田、ツェリンの二名は六時C4を出発。一方C3よりC4へサポート隊として広瀬、ノルプが発。C2へ下山予定の義本、片岡だが、片岡の呼吸数一分間三十二と多く、憂慮される。高度障害は決定的ゆえ、C2へおろすよう指示するが、全身の倦怠感にはなはだしく、起きてもすぐ横になる。かたや登頂、かたや高山病による下山、というわけで、BCではトランシーバーをつけっぱなしにして連絡にあたる。

七時、アタック隊はC4より上部三〇〇メートルのナイフリッジを通過し、白い斜面の下に到着。高度六八〇〇メートル。おそらくBCから見える肩のあたりと思われる。八ミリ撮影機は動くが、カメラは寒気のため凍って作動しない。八時二十分、アタック隊は七〇〇〇メートルに到達、南稜のピナクル、西稜末端のランタンII（ホビン）が見える。そこから頂上が見え、九時過ぎには頂上に着きそう。ザイルは不必要なようすなので、置いていく。

九時、一方、義本と片岡は、やっと食事を終えて、下山にかかる。片岡は靴、アイゼンの装着が一人で出来ず、頭痛もひどい。義本は苦心の末用意を整え、片岡をアイザイレンしておろし始める。

上空は五〇〇メートル位から上が雲でおおわれ、南方ホンゲンドプケのあたりは晴れ、頭上もわずかクレバスの裂け目の如く青空がのぞいている。急にブーンという飛行機のうなりが層雲を通してきこえる。今まで四回五回BCの上空へ飛んできたマウンテン・フライトに違いない。先日の快晴の時にはキムシュンの側壁をかすめ、C1のテナト地にぶつかるかと思うほどの曲芸飛行を見せてくれた。我々への挨拶のつもりだったのだろう。

九時五十分、アタック隊の和田から待ちに待った声がとび込んできた。

「こちらアタック隊、頂上につきました。まわりの山は全部雲海の上に見えます。東はマカルーから西はマナスル三山まで見渡せます。快晴です。高度は七〇七〇メートル。これは高度計がおかしいかも知れません。ここより高い所はありません。チベット高原も見えます。九時二十五分に頂上に着き、既に必要な儀式は済ませました。頂上の様子、360度のパノラマ、ネパール、日本、トリブバン、市大の旗、それから亡くなられた森本隊長、大島隊員、ガルツェン、浅井さん、永田君の写真等々八ミリにて三本とりました」

この間、靴のヒモすら結べない殿下（片岡のアダ名）を伴って義本は必死でC2へ下山していた。片岡がまったく下ろうとしないので、シッタゲキレイ、とても交信の余裕なし。しかし、十時四十分、義本より「これからブロック地帯の通過、C2まであと二、三時間かかる」と交信があった。

そして、十三時十分、義本と片岡はついにC2に到着。兩人ともフラフラの様子である。さっそく東ドクターよりトランシーバーで診察。保温、水分、糖分の摂取、強心剤及び抗生物質の投与。どうやら肺水腫の危険は去った模様。

十三時四十分、アタック隊、サポート隊、共にC3に帰着。

……長い長い一日が終った。アタック隊、サポート隊、救助隊、ルート整備隊、ドクター、いずれもが大活躍の一日だった。雪崩はすっかりおとなしくなり、岩と氷と雪の中で夜が更けていく。今宵は各テントの隊員は何を想い何を考えながら寝袋に入ったことだろうか。ともかく十七年越しのランタン・リルンはこうして終った。

装備・食糧

装備は一九六一年プレモンソーンの第一次隊の記録を参考にしたが、当時は、ベース・キャンプからC3までルート工作は七日を要したのみ、フィックスロープも一〇〇メートルを使用しただけで、あとは全てコンティニューアスで登れるという容易なルートであった。

今回、BCからC2までの氷河内の被害が多く、十月五日の雪崩でC1のテントが破られ、支柱が折れた。十月二十三日にもC1が雪崩に襲われ、テントが一張吹きとばされ、多くの装備を紛失した。その他、クレパスの激しい変化により、毎日ルート変更を余儀なくされ、すでに固定したロープは放棄せざるを得ないし、セラックの崩壊で多くのロープを失った。

C3が建設された時、すでに登攀用具が底をついていた。スノー・バー不足のため、BCで木製のスノー・バーを作ったり、ハシゴの連結用ジュラルミン板、そしてテント用の竹ペグを使った。ロープだけは代用がなく、下部のものをはずして上部へ上げざるを得なかった。

特記したいのは超小型トランシーバーで、パーティ間の連絡に欠かせず、一五〇グラムという軽量でポケットに入り、性能もよく、大いに重宝した。

次いで食糧について報告すると、ベース・キャンプでは、石造りのカルカ風のりっぱなキッチンテントが完備し、常時、木コリが運んでくる豊富な薪が燃やされ、相当手の込んだ料理が可能だった。ちらし寿司、とうふの冷やっ

こ、サモサやランタン部落より仕入れた七頭の羊料理など、キッチンには隊員のたまり場だった。

一方、C1以上のキャンプでは、BCとは対照的に調理の簡便なインスタント食品を用いた。ラーメン、うどん、乾燥米、みそ汁、各種缶詰など十二人日分をダンボール箱詰めしたものをそろえ、その他にスペシャルボックスとして、日本茶、紅茶、ココア、ようかん、果物の缶詰を各キャンプに配して単調な食事をカバーした。もち、スルメ、干カレイのバター焼きも好評だった。

おわりに

十七年前に、氷河上部の五六〇〇メートルで遭難した三人の遺品が、今回偶然にも四三五〇メートルの氷河末端で発見できた。シュラフ、キスリング、高所服、オーバーシューズ、下着、オーバー手袋等々。ある物は氷河の上にはうり出され、ある物は氷河にその一部を埋めながら幅約五十メートルにわたり散逸していた。三人の御霊に私達の庇護を願いながら、登山の合い間に遺品を収集した。今、大町の山岳博物館に収められているそれらの遺品は、二度と遭難を起さないよう、全国の山仲間話に語っている。

△記録概要▽

隊の名称 大阪市立大学第三次ランタン・リルン登山隊

活動期間 一九七八年八月～十一月

目的 ランタン・リルン（七二四六メートル）初登頂

隊の構成 隊長Ⅱ伴明（38）、副隊長Ⅱ岡本恒夫（39）、登攀隊長Ⅱ後藤昌行（31）、医師Ⅱ東隆、装備・会計Ⅱ広瀬秀雄（31）、梱包・輸送Ⅱ和田城志（31）、写真・トレーナーⅡ西村正男（30）、食糧Ⅱ義本幸一（27）、気象Ⅱ片岡泰行（24）、ネパール側隊員Ⅱ4名

行動概要 八月十七日カトマンズ着。九月三日キャラバン開始。九月九日リルン氷河BC（四二五〇メートル）。九月二十二日登

山行動開始。九月二十九日C1建設（四八二〇メートル）。十月五日C1撤収。十月九日C1建設（四九三〇メートル）。十月十二日インゼル尾根にてプロック崩壊による事故で一名骨折。十月十五日C2建設（五七一〇メートル）。十月十九日C3建設（六二八〇メートル）。十月二十三日C4建設（六六五〇メートル）。十月二十四日九時二十五分登頂（七〇七〇メートル）。十月二十六日全員BC集結。十月三十日BC撤収。十一月四日カトマンズ着。

積雪期黒部奥鐘山西壁（一九七九年一月）

——紫岳会ルート冬期初登攀——

鳥居瑛

敗退

「わっ、雪崩だ！」

私は大声で、ねぼけまなこの三人を叩き起こした。一九七八年一月四日未明、暗黒の闇の中から身体を揺り動かす無気味な轟音が響き、暫くしてビーク中の我々四人の頭上へ、強烈な白い奔流が落下して来たのだ。その瞬間、我々はかなり重圧を受け、岩壁より剝がされない様にと祈るばかりの気持で、雪崩が一刻も早く通過するのを体を丸めて耐えていた。重圧が次第に弱まり、やがて静寂が戻った時、我々は生への希望をつないだ。実際にはわずか二十秒足らずの短い時間だったが、私には無限に長く感じられる恐怖の時間だった。

その時点で、我々の第一回目冬期バージョンルートへのアタックは失敗に終わった。まだ雪崩の危険から解放されない我々は、激しい降雪の中を「猿回しのテラス」より、必死で、懸垂下降を続け、逃げ帰った。その時は、敗退の悔しさなどを思う余裕はまったくなかった。

冬の西壁について

奥鐘山西壁の開拓初登ルートである紫岳会ルートが築かれたのは、一九六三年夏のことであり、西壁の冬期初登攀は、一九七二年三月に正面壁が登られ、それ以後も、正面壁はたびたび冬期登攀が行われたが、紫岳会ルートは、開拓されて以来十五年の歳月を経ても冬期末登であった。しかし、このルートは冬期に於ける諸条件の悪さと危険なことから敬遠されていた。私は度々奥鐘を訪れ、冬期登攀の対象として幾つかのルートを選んでみたが、最終的に紫岳会ルートをターゲットとすることに決めた。そして敗退の年、宇奈月への暗く長いトンネルをとぼとぼ歩きながら、来年は必ずこのトンネルを完登の喜びに身を震わせて歩きたいと心に誓った。それは他の三人の仲間も同じだった。

その後我々は、幾度となく奥鐘を訪れ、最良と思われるルートの確認と、登攀に必要な物資の荷上げを完璧に済ませ、本番に焦点を合わせ各々が充分なトレーニングに励んだ。私の持論として、岩壁では極地法式登攀は避けたい、しかもユマールの積極的使用は絶対に避け、トツプ以外でもトツプと同一条件で登り、スピードアップのための能力を各自がトレーニングで身に付けること、そしてあくまでもラツシユタクテイックで登攀することを義務付けた。その為に、四人が同等の実力をたくわえていて誰れでもトツプに立てるといふ条件をととのえた。

とにかくルートは雪崩の巢の中にある様なものなので、ルート中絶対安全な場所は全く無い。特に、上部緩傾斜帯での雪崩は、確保点が無いので、そのまま死を意味する。奥鐘山では冬でも雨が降る。そんな時は壁や斜面に付いた雪が一気になだれ落ちる。又、雪が降れば降ったで、名だたる豪雪地帯にあるだけにたちまち雪崩の競演となる。かと思つと、晴天になればなつたで、壁自体の標高が低くしかも西面に位置する為、すぐに気温が上昇し雪崩が始まる。その上悪いことに、融雪による濡れが登攀者を苦しめる。氷も軟弱となり危険になる。それに、ハングと言うハ

ングに見事にぶら下がったツララが、いつ始まるか判らぬ直撃弾の恐怖を常に与えてくれる。ありとあらゆる悪意に満ちた、まことにシビアな壁である。この壁の恐しさは、実際に冬の奥鐘に來た人以外には判らないだろう。それに付録として、あの宇奈月からの暗く長い、そして閉所恐怖症のある人ならたちどころに逃げだすこと請け合いの、狭いトンネルが延々と二十キロ余続く。さらに、実に楽しくない黒部川の寒中渡渉が、アプローチの最後を飾ってくれる。壁の下迄、常に雪崩の危険に晒される本当に酷い所だ。こんな所へ一度ならずも二度も冬に來る我々はとんだ酔狂だと自ら思う。

今迄の少ない冬期完登。パーティーを見ても、壁に雪の無い三月頃の登攀が多いが、壁に雪の付いている一月と二月頃の登攀は難渋を究めている。因に、一月と二月で壁を完登し、ピーク迄達しているパーティーは、我々を含めてわずか四パーティーのみである。この壁の冬期の条件はあまりにも悪すぎて危険である。特にルンゼルトは、条件によっては登攀不可能になる。この壁の未登ルートは多い。今後も壮絶な登攀が行われることだろう。この壁では、いつからいつ迄が冬期かを決めることが非常に難しい。実際の冬期とは果していつなのか、それはこの壁を登った者が判断すれば、いいことだが、私自身の判断では、壁に雪が付いている十二月末と二月末迄ぐらいが、まあ妥当な線だと考える。

再び西壁へ

そして雪辱の冬がやって來た。一九七八年十二月三十日、激しい降雪の中、足どりも軽く宇奈月を後に、樺平への長いトンネルに入る。途中で単独のT君を交え、今回持参の小型カセットレコーダーで楽しい唄を聞きながら、午後三時過ぎ樺平着。デポ品を回収して、乾いたプラットホームに幕営する。

十二月三十一日、曇天の下樺平を出、渡渉用の運動クツに履き替えて黒部川に潔よく入る。水は去年の冬ほど冷た

くない。西壁対岸にある大きな岩小舎は、二日前に入山した神奈川のT山岳会諸氏で満員だったが、別の小さい岩小舎を快く明け渡してもらった。見上げる西壁は、多量の雪で白いベールにつつまれている。しかし幸いなことに、心配したツララの発達は大したこともなく、ホツとした。が、安心もつかの間、AC設置直後、紫岳会ルートより轟音と爆風と共に岩小舎迄達する大雪崩が発生、体中、飛沫で真白になった我々四人は、何とも言えぬ顔でお互を見回した。

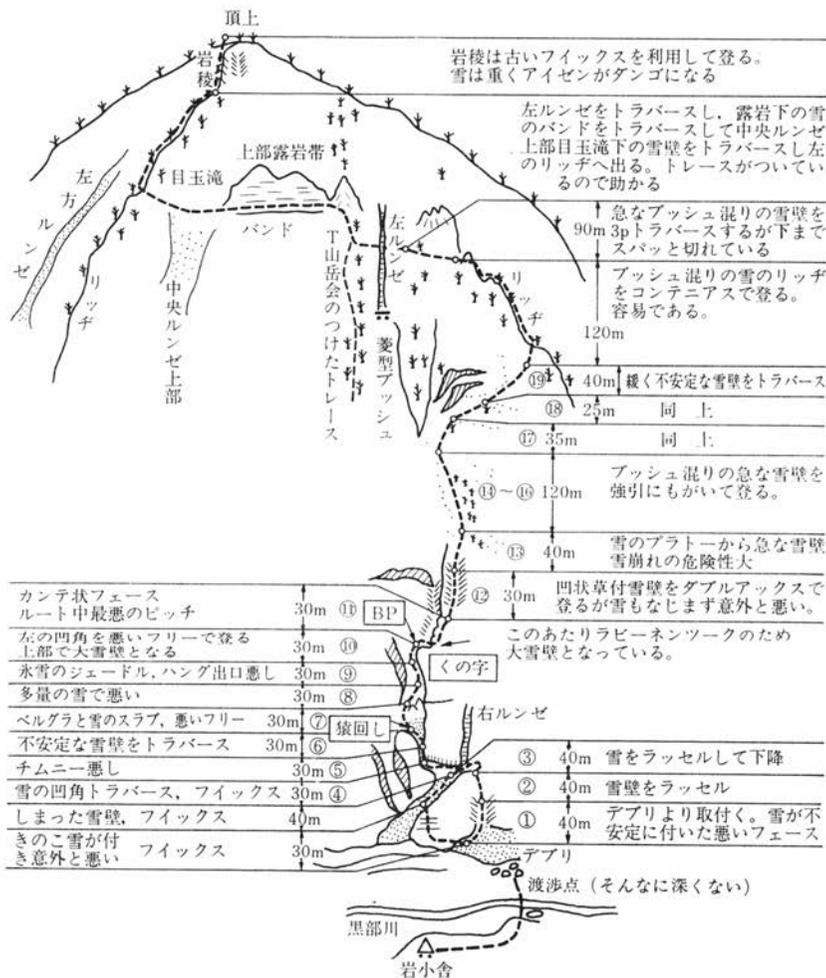
気を鎮め、午後より三名でフィックス工作へ出る。紫岳会ルートは、岩小舎より一度黒部川を渡渉しなければ取付けないので、厄介である。取付きフェースは、きのこ雪が張り付き危険な為、右側のルンゼ状部分を登る。腰迄のラッセルをつづけ、フェース下からアンザイレンする。

一ピッチ目。見た眼より悪いフェースを、雪落しをしながら、ハーケン二本打ち苦勞して突破。先が思いやられる。つづいて深い雪を左上ヘラッセル(二ピッチ目)。トラバースバンド迄、雪壁を下降する(三ピッチ目)。ハング下の悪いバンドを、きのこ雪を崩すのにひいひいながら、凹角迄ザイルを伸ばしたところで引き返す(四ピッチ目)。ザイルをフィックスして戻る。そこからバンド取付きの直下雪壁を四〇メートル、フィックスしながら下降。さらに三〇メートルフィックスし、取付点の河原へ戻った。雪を蹴散らして下り、岩小舎へ戻る。その日、夕方より雪となる。

一九七九年一月一日、あまり元氣のない新年のあいさつを交わして、本日は二名がフィックス作業に出る。凹角迄、フィックスのおかげで片手ユマールで快調に達する。五ピッチ目に当る凹角状の岩に取付くも、凹角に詰まった雪は岩になじまず、全て落して、フリー・クライムでザイルを伸ばすが、難しい。折悪しく、降雪が激しくなったので、即刻中止し、下降する。京都ルートをアタック中のT山岳会も、遅々として進まず、かなり苦勞している様子だ。フィックス工作は、予定より二ピッチ少ないが、明日よりラッシュをかけることにして、我々は早々にシュラフに

奥鐘山西壁「紫岳会冬期ルート」作図：鳥居 瑛

Chart 4



もぐり込んだ。

西壁を完登する

一月二日、未明に望まれた星空も、出発の頃にはドンヨリして、今にも降りそうなので気分が重くなる。薄暗い中をT山岳会諸氏の激励を受け、勇躍出発する。毎度のことながら、冷たい渡渉をして取付迄行く。その分だけ時間のロスだが仕方ない。準備が出来た者から、フィックスを片手にユマールをホールドにしてハング下の雪のバンド迄登る。最後になった者が、フィックスを回収しつつ、バンドの雪のテラスへ集結する。

「さあ、行くぞ。頑張っていこう」

Tのトップで、さらにフィックスを利用して、凹角のトラバース開始である。五ピッチ目よりフィックスはなく、本格的な登攀に入る。垂直の凹角は依然として悪く、雪を落しながらの悪いフリー・クライムが続く。確保している者は、トップの落す氷雪塊をまともに受けるので、たまらない。

この頃より、遂に風雪が舞い始める。黒部特有の湿雪は、体を徐々に濡らし始めた。とにかく早く登ることだと、全員スタートをかける。六ピッチ目、湿雪が不安定に乗ったスラブを左斜上して、雪壁化した「猿回しのテラス」に出た。七ピッチ目、激しくなった風雪の中、時おり襲って来るチリ雪崩にビクビクしながら、ベルグラと新雪の張り付いたスラブを登るが、非常に悪い。無雪期なら、ラバーソールで快適に登れる所だ。じわじわ残置ボルト迄登り、ボルトのリングにアイゼンの爪を引っかけて、今にも落ちそうになりながら左へからむが、顔面が引きつり心臓が止まりそうになる。必死にボルト一本を打ち、上部にわずかに付いた凍った草付に、岩まで突き抜けるとばかりにピッケルをぶち込み、かろうじてぶら下がって悪場を突破する。全員歓声と共に拍手する。

八ピッチ目、くの字ルンゼ入口も悪く、太いツララがぶら下がっている。苦しい雪かきで疲れる。主に人工登攀を

つづけて、くの字ルンゼ下の小さな足場まで登り確保する。つづいて、くの字ルンゼを人工登攀で登るが（九ピッチ目）、氷雪がバッチリ張り付き、トップがピンを掘り出す度に、強烈な塊を落とすので、下の者には地獄の仕置きだ。機関銃や、バズーカ砲並みの奴が来る。悪いことに、ハングは冷水迄流れ出し、ザイルも凍り始めた。全員かなり濡れ、寒さで口も聞けない。十ピッチ目、悪いフリーで大雪壁となったルンゼへ飛び出す。ビレーピンが深い雪の下となり、仕方なく確保用にボルトを埋める。

時間も午後四時半になり、この先の悪いピッチを考え、不本意だがビバークと決める。幸い雪もいつの間にか止んでいた。少しでも雪崩路より外れているところをえらんで、雪壁を切り崩し、ビバークサイトを作る。ツェルトを被ってしまえば、後はくそ度胸で、楽しく夜を過ごすのみだ。Yの持って来たMSRのコンロは快調で、豊富な燃料をパンパン燃やす。その夜、かなり冷え込んだ。

一月三日、青空が広がり、ついている天氣に感謝しつつ、気を引き締めて取付く。冬期はルート中最悪のピッチになると想像した通り、十一ピッチ目は非常に悪い。無雪期には、ハーケン一本で快適にフリクションを利かせて登る三十メートルのカンテ状フェースだ。フリーの限界を越す所があり、やむなく、三本のピンを打つ。全員が墜落しそうになった。十二ピッチ目、雪の詰まったぐざぐざの草付凹状を、ピオレトラクシオンで登り、緩傾斜の雪のプラトーに出る。ここより、時間短縮の為、二人ずつに分かれツルベで登る。気温が上がリ、雪崩の危険を感じる。ここで喰らったら、空中ダイビングである。追われる様に、急なブッシュ混りの雪壁を泳ぐように登る（十三〜十六ピッチ）。十七ピッチ目、緩いスラブに乗った不安定な雪壁を、ゼーゼー息を切らして駆け登る。四十メートルをずっとノーピンである。

つづく十八、十九ピッチは、右へ不安定な雪壁をトラバースし、右上の太いブッシュ帯へ飛び込む。ここで一応、雪崩の恐怖から解放された。見覚えのある稜を疲れた体を引きづって、コンテニユアスで登る。コルに出たところで、

どっかり腰を下ろし、空腹を満たすべく行動食を詰め込む。時間も昼頃であった。

少休止の後、左上へ一二〇メートル程、スタカットを交え、ブツシュをつかみながら急な雪壁をトラバースし、左ルンゼを横切り、安全地帯に出る。そして、半日前に京都ルートを完登したT山岳会パーティのつけたトレースに出合い、ザイルを解く。ラッセルなしのトレースに感謝しつつ、かなり疲労した体を引きずる様にして、上部露岩帯下を左へトラバースし、さらに目玉滝下の雪壁をトラバースし、中央ルンゼと左方ルンゼを分けるリッジへ出る。二、三個所悪い所があったが、全員良く頑張り、遂に午後六時、暗くなった奥鐘山頂に立った。意外にも想像していた程の興奮もなく完登の握手を交わす。これ以上暗くならないさ、とばかり、頂上でツェルトを被り、ゆっくりと腹ごしらえをする。元気になった所で、北西尾根を夜の下降をする。途中二回の懸垂下降を交え、午後九時半頃、樺平のプラットホームに戻った。

そこには、すでに就寝中のT山岳会諸氏がいて、彼らは飛び起きて祝福してくれた。彼らのトレースに感謝の言葉を表わし、切れていたタバコを一本いただき、満足感に浸った。

一月四日、我々は初登攀の感激を胸に収めて、宇奈月への長いトンネルを軽い足どりで歩きつづけた。

△記録概要▽

隊の名称 名古屋・浜松・鈴鹿・合同登攀隊

隊の構成 登攀隊長 鳥居瑛(36) 名古屋道い松山岳会、隊員 田中成三(31) 浜松登攀クラブ、塩崎宏司(29)、山中保一(25)

鈴鹿アルパイン・クラブ、計4名

活動期間 一九七八年十二月三十日～一九七九年一月四日

目的 黒部奥鐘山西壁紫岳会ルートの冬期初登攀

行動概要 一九七八年十二月三十日、宇奈月へ樺平。十二月三十一日、樺平へ岩小舎(フィックス工作)。一九七九年一月一日、

フィックス工作。一月二日（ラッシュユ）取付七・〇〇―猿回しのテラス十二・三〇―くの字ルンセBP十六・三〇。
一月三日、BP発七・三〇―上部壁十一・三〇―リッジ上十二・三〇―奥鐘山頂十八・〇〇（大休止）発十九・一〇
―樺平着二十一・三〇。一月四日、樺平発九・三〇―猫又十二・三〇―宇奈月着十五・三〇（帰名）
（実際3Pのフィックス工作の後、ラッシュユにて一ピバ―グで完登）

東海支部の二十年

中世古隆司

支部設立に至るまで

一九五七年三月、我が国の登山史上に特記すべき二つの登攀が成された。前穂高IV峯正面壁及び谷川岳一の倉滝沢の冬期初登攀である。この二つの大初登攀は、その後に行なわれた数々の冬期登攀あるいは従来登攀不可能視されていた岩壁への挑戦という新しい時代の幕明けにふさわしい、象徴的な登攀であった。

当時東京では第二次R.C.C.が結成されたが、そうした新しい動きは、我が東海地方でも例外ではなかった。前記前穂高IV峯の初登攀者の一人である加藤幸彦が中心となって、東海地方に

もそうしたクライマーの集まりを持つことになったのである。現在と異なり、当時は、登山は自己の所属するクラブという枠内で行なわれ、他会との交流はまれであったが、この集まりはそうした枠を破る大変意義深いものであった。私自身もそれ迄は学生登山家以外にはあまり交際が無かったが、この集まりを通じ、多くの優秀な社会人登山家と知り合い、非常にいい刺激を受けた。

この会合にある日石岡繁雄氏が石原国利とともに現われた。席上石岡氏は、これからの登山は国内の登攀云々というより、こうした若い力を結集してヒマラヤ遠征を考えるべき、と発言された。当初この集まりは、クライマー同志の情報交換、協

力、研究等を目的としてスタートしたのであったが、石岡氏の発言が契機となつて、当初の趣旨とやや異なり、ヒマラヤが第一の目標となつていった。

それから暫らくして私も大学を卒業したが彼等との交際は続き、石岡氏の家に集まり、夜遅くまで登山論に花を咲かせ、やがて我々の目標は石岡さん久恋のジャヌーと決定し、ヒマラヤに向かつて第一歩を踏み出そうとしていた。

ところが、ちょうどその頃、中京山岳会を中心に愛知県山岳連盟にも、ヒマラヤ計画が持ち上つていた。この背景には、従来日本山岳会が一手に受持つていた登山用スポーツ外貨が山岳連盟にも入ることになつたという経緯があつた。そして当時日本山岳会と関係の無かつた我々は、岳連の窓口を通じて外貨を申請することになつたわけだが、日頃岳連活動に無関心であつた我々の案は通るに至らなかつた。しかし石岡氏等の頑張りにより、石原、加藤の二名が、我々のグループから岳連の遠征隊メンバーに選ばれた。東海岳連は翌年ビッグ・ホワイト・ピークに遠征し、登頂こそ逸したものの、多くの貴重な体験を東海地方にもたらした。

さて石原、加藤も帰国し、今度こそ我々で遠征しようという熱意は、以前にも増して強くなつていた。それと共に、常に登山家の集まれる場が欲しいということも切実な願いとなつてきた。山岳連盟はグループ単位の加入であり、登山家個人の交流

の場としては難点がある。そうした点を種々考え合わせると、日本山岳会が最も適していると思われた。そして、皆が日本山岳会へ加入すれば、海外登山のみならず、国内の登山や研究においても自由にお互が協力できる。それと同時に、日本山岳会は層も厚く、ともすれば一方に片寄りやすい我々も、年配者との交流等を通じ、自己の登山も豊かにできる。マイナス面もあるだろうが、それは本人次第であらう。しかし正直なところ、私自身はこのような考えをしっかりと持つて入会した訳ではなく、我々のグループのような仲間と交わり、かつ遠征が出来れば楽しいことと、山の大先輩から直接話を聴ける楽しみがあるといった単純な理由が第一であつた。

このような訳で、以下の人々が相前後して日本山岳会に入会した。各人がどのような意識のもとに入会したかは、はなはだ疑問であるが、会報の入会欄によると、会員番号五一七三の鈴木真吾以下、二村嘉彦、竹内博美、磯村思元、原武、中世古隆司、南山大学山岳部、石原国利、加藤幸彦、一柳政右エ門、大口瑛司、本田善郎、須賀太郎、少しとんで高橋達雄、熊田宗次、鈴木重彦の諸氏が一度に入会し、東海支部設立の基礎となつたのである。

このようにして、東海地方にも山岳会員が増えて来た訳であるが、それにつれて全国にはいくつかの支部があるが、登山の盛んな東海地方に支部が無いということは淋しいことであると

いう意見が出てきた。そこで石岡氏が本部理事の山崎安治氏と相談された結果、山崎氏も賛成され、名古屋には八木道三氏のような山岳会の長老も居られることでもあり、そうした方の意見を参考にしようということになった。そして石岡氏が八木氏を訪ねて意見を聞かれ、また跡部昌三氏等とも相談し、石岡氏が世話役となって、東海地区（愛知、岐阜、三重）で住所のわかった会員五十二名に設立趣旨の手紙を送ったところ、四十四名の会員から賛成の返事をいただいたのである。直ちに須賀太郎名古屋大学教授に発起人代表になっていただき、当時の日高会長宛、支部設立承認願を提出し、一九六一年四月正式に設立承認を受けた。

こうして設立総会も間近にせまった四月初旬、設立後役員予定になっていた石原国利、鈴木重彦、原武の三人のザイルパーティが、鹿島槍北壁でブロック雪崩に遭い、我々のグループで将来を期待された最年少の原武君を失なってしまったのである。さらに実質的な面で一番仕事をやる石原氏も入院し、大変あわただしい日が続いたが、予定通り、一九六一年四月二十三日、名古屋大学医学部共済会館に於て、日高会長、津田関西支部長、山崎理事等に出席いただき、支部設立総会を開催した。

出席者の中には、冬期上高地初入山の前記の八木道三氏、また柴山乙彦氏、中村慶三氏等三桁の古い会員の姿も見え、またそれぞれの自己紹介もユニークなものが多く、会は盛大で、さ

すが日本山岳会なりの感を深めた。そして支部長に須賀太郎氏、副支部長に石岡繁雄氏を予定通り選出し、我々若い会員が委員となった。

設立よりアンデス遠征まで

(一九六一—一九六六)

かくして東海支部は設立されたが、設立の中心となった若手は、ただ集まって山の会話をするだけのサロンムードに満足する連中ではなかった。その年の秋、カンチェンジュンガ山塊のトウインズへ遠征しようと臨時総会を開き、支部の承認を求めた。その結果、支部として何もやっていないうちから遠征はおかしい。これだけのことをやりましたと云えるような実績を作ってから計画すべきであること、また経済界が不安な時であるから資金のメドをつけてからにすべきであると先輩から云われ、この計画は時期尚早ということになった。

この臨時総会の反省として、もっと支部全体の横のつながりというか、支部員間の親睦を深めようということになった。そこで臨時総会の翌十月、御在所岳で第一回の親睦山行を行なった。ところが会員で参加したのは、須賀支部長と私の二人だけで、後は支部長の教え子達であった。これでは何の意味もないと、今後は町でやろうということになった。そして講演会や懇親会等を何度か行なった。こうして書けば簡単であるが、何を

やるにしても支部には予算が殆んど無いので、それなりに苦心が要った。講演会などは、講師となる人が来名するというニュースをキヤッチすると、早速コネをつけて、殆んど無料で講演をしてもらおうというやうなわけであった。

こうした小さな積み重ねが効果があったのか、翌年（一九六二）の総会には、常連の若手以外にも年輩の会員の姿も見うけられた。そしてこの時の総会では、我々が気軽に集まれる場所が無いということが致命的であり、本部のように支部もルームを持ちたいということが大きな話題となった。従来私の家が支部の事務所としてあったが、ただ連絡場所というだけでルームとしての機能を果たすだけのスペースは無かった。総会後暫くして、会員の藤森元夫の勤務する水谷商店の好意で、会社の一室を使用する許可を得て、十月三十日ルーム開きを行い、以後毎月第二木曜日に定例集会を行なうようになった。またこの年の末には、支部でも年次晩餐会を行ない、ここ数年忘年会は新年会に変ったが、いまに至るまで続いている。翌（一九六三）二月、鈴鹿山麓の尾高高原で猪を喰う会とハイキングを行なったが、川喜田壮太郎氏を初め多数の参加を得て、一年前の第一回親睦山行に参加した私にとっては、いささかの感慨があった。

一九六四年一月から四月にかけ、名古屋市中区広小路通りのガーデンビルにて、朝日文化センターの一環として登山教室が

開設され、東海支部がこれを担当した。週一回の講座には熱心な受講生も居り、登山全般にわたって広く講義した。第一回は松方会長、深田久弥氏等も講義された。

この年の十月、待望の東海山岳第一号が発刊された。題字の「東海山岳」は尾張の最後の殿様、徳川義親氏の筆になるものである。内容は一九五七—一九六二年に至る、東海地方の岳人による主要な登攀を中心に、支部員の紀行、随想、論説研究等、それなりに貴重なものであった。こうしたことが着実に出来るようになったのは、原真のような実行力のある支部員が増えて来たためであった。また東海山岳の発刊と時を同じくして、会報に当る「支部通信」第一号も発刊、これは支部員間の横の繋がりを密にするのに大いに役立つことになった。その後支部通信は十一号まで続き、一九六七年六月から装いも新たに「東海支部報」と名を改め、現在（一九七九年春）に至るまで二十三号の発刊を記録している。

このようにして支部も、少しづつクラブらしく形を整えて行った。それと共に、設立以来の懸案であったヒマラヤ遠征にも具体的に第一歩を踏み出した。一九六四年ブレの全岳連ギヤチュン・カン登山隊に参加した加藤幸彦は、一九六六年ブレのガウリ・サンカールの登山許可を取りつけた。その後ネパール側の事情により変更をせまられ、六五年ブレのローツェシヤールに変更した。ところがこの計画は早稲田大学と競合することに

なつてしまつたのである。すなわち東海支部がネパールと直接交渉し仮許可を取得したのに対し、早大は外務省を通じて申請をしていたのである。その解決には山岳会本部があたることになり、本部と支部、本部と早大との間に何回か話し合いがもたれ、結局松方会長の裁定でローツェンシャルは早大に決定した。

そのため支部では直ちに目標を一九六五年ポストのマカールの東南稜に変更し、一九六四年十一月臨時総会を開き、ローツェンシャル計画の終了の報告と同時に、新しい目標としてのマカールを全員一致で可決した。しかしこの臨時総会に於て、我々を設立以来指導して下さつた須賀支部長、石岡副支部長が辞任された。当時、ヒマラヤ計画を強力に推し進めようとするあまり、人の和を欠いたことは事実であり、またこの頃から、良きにつけ、悪しきにつけ俗にいう東海支部的性格が芽生えつつあつた。

さて、従来の計画は、実行の主体が明確でなかつたので、支部の中にヒマラヤ登山実行委員会を設置し、また原病院の一室を事務所として、遠征計画はそこを中心に進められることになつた。そしてマカールの許可取得のため石原新支部長をネパールへ派遣した。ところが一九六五年三月ネパール政府は、すべてのヒマラヤ登山を向こう数年間全面禁止する旨発表した。長い間かかつてここまで漕ぎつけた我々は、まさに暗澹たる気持

であつた。しかし我々は、もうかなりの程度準備を進めて來てゐる以上、今更引返すことは出来なかつた。直ちに目標を変更し、ヒマラヤ以外で最も高度のあるアンデスのアコンカグアを選び、従来協力関係にあつた名古屋大学高所医学研究所と合同遠征を行うことになつた。

こうして書いてくると、遠征のことばかりやつていた様だが、従來通り集會や懇親会もきちんとやつていた。また東海山岳第二号も発刊した。この二号に掲載された放談会「登山界の諸問題をめぐりて」は文字通り放談になつてしまい、読む人によつては相当物議をかもした。

またこの年（一九六五）、支部員である高田光政がアイガーの北壁を登攀し、渡部君の死という大きな犠牲をしいられはしたが、彼のもたらしたものは少なくなかつた。我々のアコンカグア南壁の登攀にも非常に参考になつた。

こうして二転、三転した支部の遠征も一九六五年十月十一日アコンカグア目指して川崎汽船ポリビア丸にて出航、翌々日室蘭で我々の良き先輩である塩田良仲氏のムシデンの歌声に送られて日本を離れた。遠征隊は十二月中旬から一月初旬にかけ、アコンカグア北面でテレメーターによる高山医学の研究を行い、一月中旬から二月にかけて南壁を登攀、その後数隊に別れてパタゴニア方面を踏査し、翌五月までに全員が帰国した。

マカルー目指して（一九六六一—一九七〇）

遠征の後に来る一時的な沈滞、それは東海支部に於ても例外ではなかった。我々若い者を励まし、良き相談相手であった塩田良仲氏は札幌へ転勤となり、永田弘氏は単独で登山に向う途中、運転を誤り、谷川に転落死された。また遠征の事務局長として、我々にハッパを掛け、また時には良き相談相手であった関谷誠氏もアンデス遠征直前に交通事故で他界されてしまった。その上支部の中心的存在であった石原国利も家業を継ぐため、遠く九州へ去った。しかし幸なことに一方では、また実行力のある仲間も増えつつあった。田中元、尾上昇、松浦正司等マカルー隊の主要メンバーは、原真を中心に我々の最初の目標であった、ヒマラヤを目ざして活動を開始したのである。

またマカルー遠征には参加しなかったが、湯浅道男、沖允人、吉川友章、賛田統亜等このマカルー遠征までの期間は、東海支部の二十年を通じて最も多々済々の顔ぶれが揃った時期であった。そしてヒマラヤへの準備はもとより、その他の行事に關しても最も充実した期間であった。さらに原病院の好意で遂にルームらしいルームを持ち、出かけていけば誰かが居るといった具合で、真にクラブらしい雰囲気になって来たのもこの頃である。

一九六七年の通常総会に於て、支部長に名古屋大学名誉教授

の熊沢正夫氏、副支部長に伊藤洋平氏が選出され、支部の活動も軌道に乗り、活発に動き出した。そして一九六八年一月、ネパール政府は一部登山許可を出す用意があるというニュースを公表した。我々は直ちに一九六八年の通常総会に於て、翌年ブレにマカルーに遠征隊を送ることを議決し、熊沢支部長をヘッドにヒマラヤ登山実行委員会を設置した。そして具体的な準備、研究が着々と進められた。（この時の研究成果は海外登山研究会資料ⅠⅡⅢに収められている。）しかし肝腎のヒマラヤ登山解禁の正式発表は仲々行なわれず、皆をいらいらさせたが、八月十九日遂に待望のマカルーを含む三十八座の正式解禁のニュースが入った。直ちに外務省を通じて許可申請を出したが、ネパールからは何の連絡も無いため、止むを得ず計画を一年延期し一九六九年ブレに偵察と交渉の隊、一九七〇年ブレに本隊を送ることに変更した。一九六九年二月下旬、松浦隊長以下五名の調査隊は予定通り日本を出発し、一九七〇年の仮許可とマカルー東南稜の可能性を確認し、六月帰国した。

一九七〇年二月十四日、熊沢総指揮以下十五名の本隊は羽田を出発、二月二十二日キャラバンを開始、三月二十二日B C建設、そして未踏の東南稜をたどり、五月二十三日遂に登頂に成功した。

マカルー以後（一九七一一一九七六）

かくしてマカルー東南稜の初登攀という、東海支部二十年を通じて最大の成果を上げることが出来た。しかし反面、多くの人が支部から離れて行ったことも事実である。遠征の計画から何らかの都合で離れて行った人、また準備が佳境に入つて来ると、計画外の人は近寄り難い雰囲気グルームに生れたことも事実である。「たまには顔を出すように」と連絡すると、「ルームに行く、来てもらうのは結構だが、準備の邪魔にならないようにして欲しい」と云った態度が見えるので、馬鹿らしくて行く気にならない。」とはつきりと云う者も居た程であった。またマカルーの隊員自身、遠征終了後、勤務の都合等であまり支部に顔を出さなくなった。さらにマカルーの報告書を作るに当り、編集の中心となった者は、自分の意見を出すに急なあまり、各隊員の原稿も自分の意に添わぬ所は書き直してしまったこと等もあり、隊員の気持も支部から増々離れていってしまった。隊員の中には、報告書を途中迄読んだら頭にきて、捨ててしまったという者も居た。設立以来意気盛んであった東海支部に、最大の危機が訪れんとしていた。

やがて東海支部解散論とか休会論なる意見が出はじめたので、止むを得ず私が支部を預かることにし、東海支部の活動も開店休業のような形となった。数人の会員の手を借りて支部の

備品の一部を、長い間世話になった原病院の地下室から私の家へ運んだ。十数年ぶりで振出に戻った感じで、ある意味では、とても淋しかった。

やがて一年もすると、再び支部は活動を開始した。しかしその頃の事を書き始めると、私の筆は遅々として進まない。再開した支部は、その報告を「山」誌上で発表したのが、その内容は私のことをはじめとして、何故か個人中傷に終始していた。それも最初の原稿は返却されたと云うのだから、余程ひどいことが書いてあったのである。だから私はその時のことを思い出すと、今でも腹が立つ。とても当時のことを冷静に書くことは出来ない。あまり雑音は気にしない私も、この一文を見て、遂に支部に愛想をつかし、以後数年間殆んど支部の活動に関与しなかった。それ故書く資格も無いので、支部報や東海山岳から要点のみを記したい。

原、浅見のマカルー以来のメンバーに加え、池沼、伊藤等の若手の参加を得て、支部はカラコラムに向け活動を開始した。そして支部長に氷河の権威、名古屋大学の樋口敬二教授を迎え、カラコラムに學術遠征隊を派遣した。当初の計画ではパツーラを希望した。しかしパキスタンからは許可の連絡が無く、四月になって突然ラトック峰の許可が来た。そのためこの資料の無い、未知の山にぶっつけ本番であったが、可能なルートを見出すに至らず登頂を断念し、付近の氷河の踏査を行いそ

れなりの成果を上げて帰国した。

カラコラム遠征の翌年一九七六年には、日本山岳会創立七十周年を記念して、講演と歌と映画の会を企画し、多数の聴衆を得て盛大に行なった。卒直にいつて、ほとんど支部に人が寄りつかなくなっていた状況の中で、原真を中心とするほんの数人の人々は、それでも東海山岳の発刊、遠征の報告会等多くの企画を実施して東海支部の盛名を維持した。

現 在（一九七七年以後）

さて支部再開の一文が頭に来て、東海支部とは縁を切る積りでいた私であったが、ことはそんなに簡単にはいかなかった。

あの一文を読んだ元及び現在の東海支部員の多数から、直接間接に同情と激励が、そして東海支部を真に開かれたクラブに再建すべきであるという意見が寄せられた。最初私はあまり乗り気ではなかったが、何時の間にかまた渦中に入ってしまった。当時の東海支部中枢のやり方、特に人を無能呼ばわりするやり方を腹にすえかねていた者が大勢居たのである。我々は何回もそのことで話し合った。そして陰で文句を云っていても始まらないので、とにかく支部の活動に参加すべきであるという観点から、一九七六年の総会に志を一にする者が何名か出席し、うち四名がその年の役員となった。そして翌一九七七年の総会に於て、尾上新支部長をヘッドに東海支部は新しくスタ

ートすることになった。

当初、新支部長を誰にするかで多くの議論があった。従来東海支部は、どちらかと云うと外部の著名な学者を支部長に頂いて来たが、支部もすでに二十年近くにならんとしているので、今回は新しいスタートという意味も含めて内部の若手から出したいと考えていた。私個人としては、沖允人、湯浅道男、尾上昇の三人のうちから出したいと思った。また私に限らず、当時の支部を知る者は大体この三人に考えが落ち着いたことだと思う。結局のところ、若くて実行力のある尾上昇を新支部長にすることで意見の一致を見、湯浅、中世古が全面的にバックアップすることを約して尾上に承諾させた。そして現在私のみるところ、東海支部も支部長に関しては、他の支部並に長期安定政権の兆があり、誠に喜ばしく思っている。

現在東海支部では、一、会員の親睦（新旧の会員が親しみ易い支部と他支部との交流、新会員の獲得）、二、自然保護（現在は主に山岳地の水質の汚染についての調査、告発）、三、海外登山（一九八〇年にガウリサンカールに登山隊を派遣すべく準備中、また海外遠征を通じ、将来の東海地方の登山界のリーダーたる人材の育成）の三つを柱にその運営がなされている。さて東海支部の歴史を簡単に振り返ってみたが、支部で活躍した者は殆んど支部の役員であり、またその遠征隊員であった。その意味では、歴代の支部役員の変遷はそのまま支部の変

遷に繋がるものであった。支部の変遷の歴史を御覽戴く為に、最後に歴代の支部役員及び遠征隊員を列記する。

東海支部役員及び遠征隊員名簿

- 一九六一年度 支部長 須賀、副支部長 石岡、常務委員 石原、高橋、中世古、委員 加藤、鈴木、二村、鈴木、会計監事 磯村。
- 一九六二年度 支部長 須賀、副支部長 石岡、常務委員 中世古、原、委員 石原、高橋、大口、会計監事 高橋。
- 一九六三年度 支部長 須賀、副支部長 石岡、常務委員 石原、中世古、藤森、委員 加藤、沖、原、大口、会計監事 高橋。
- 一九六四年度 支部長 須賀、副支部長 石岡、常務委員 藤森、木村、委員 石原、加藤、高橋、中世古、橋村、原、箕岡、関谷、吹原、大橋、大口、小栗、会計監事 山本、佐野、東海山岳Ⅰ号編集委員 塩田、石原、原、中世古、箕岡。
- 一九六五年度 支部長 石原、副支部長 原、常務委員 中世古、木村、委員 藤森、黒山、矢入、田中、吹原、小栗、橋村、佐野、高橋、吉川、高井、会計監事 山田、村上。
- アンデス學術遠征隊 隊長 高木、隊員 石原、高井、高田、中世古、原、橋村、市川、矢入、黒山、小栗、増山。
- 東海山岳Ⅱ号編集委員 原、矢入、田中、田村。
- 一九六六年度 支部長 石原、副支部長 原、常務委員 田中、中世古、委員 大橋、小栗、兼田、沖、佐野、鈴木、田村、都竹、吹原、本多、矢入、吉川、会計監事 木村。
- 一九六七年度 支部長 熊沢、副支部長 伊藤、常務委員 中世古、原、委員 吹原、黒山、小栗、矢入、本多、山田、田村、高橋、湯淺、吉川、大橋、木村、尾上、会計監事 村井。
- 一九六八年度 支部長 熊沢、副支部長 伊藤、常務委員 尾上、吉川、湯淺、田中、黒山、委員 生田、浜井、黒宮、郡、吉村、山田、木村、湯淺、向井、原、大橋、多和田、大須賀、森、高橋、池沼、亀井、佐野、会計監事 村井、中世古。
- 一九六九年度 支部長 熊沢、副支部長 伊藤、常務委員 尾上、松浦、贊田、山田、原、委員 村木、生田、徳島、坪井、石垣、小川、曾我、花井、橋本、酒井、黒山、白井、池沼、小栗、柴田、郡、湯淺、尾崎、渡辺、田中、橋村、杉田、加藤、会計監事 村井。
- マカルー調査隊 隊長 松浦、隊員 尾崎、山田、生田、小川。追加委員 中世古、吉原、沖、越山。
- 一九七〇年度 支部長 熊沢、副支部長 伊藤、常務委員 尾上、松浦、山田、委員 生田、西沢、田中、松浦、京、原、沖、橋本、酒井、村木、湯淺、尾崎、小川、田中、橋村、花井、杉田、中世古、督永、会計監事 村井。
- マカルー學術遠征隊 総指揮 熊沢、隊長 伊藤、隊員 原、市川、田中、尾崎、松浦、尾上、川口、後藤、吉原、長谷川、橋本、越山、生田、浅見、中世古、芦谷、白旗、谷。
- 一九七一年度 支部長 熊沢、副支部長 伊藤、常務委員 贊田、沖、浅見、委員 松浦、山田、橋本、田中原、中世古、尾上、督永、生田、越山、村木、杉田、磯、湯淺、国島、舟橋、会計監事 村井、京。
- 一九七二年度 支部長 熊沢、副支部長 伊藤、常務委員 浅見、生田、小栗、委員 郡、山田、舟橋、中世古、国島、督永、渡辺、下里、原、後藤、会計監事 村井、京。
- 一九七三年度 支部長 熊沢、委員 中世古、池沼、小栗、鶴田、会計監事 村井。
- 一九七四年度 支部長 樋口、常務委員 浅見、池沼、委員 石本、蟹

江、郡、石川、国島、会計監事〓後藤。

一九七五年度 支部長〓樋口、常務委員〓浅見、池沼、委員〓沖、伊藤、後藤、石川、蟹江、永井、渡辺、松井、会計監事〓郡、東海山岳Ⅲ号編集委員〓浅見、原。

ラトック登山隊 隊長〓原、隊員〓浅見、池沼、石川、伊藤、大宮。

一九七六年度 支部長〓樋口、副支部長〓原、常務委員〓池沼、伊藤、尾上、鶴田、中世古、松井、堀田、委員〓阿部、池上、沖、岡田、小川、小栗、藤森、湯浅、会計監事〓郡。

一九七七年度 支部長〓尾上、副支部長〓中世古、常務委員〓沖、松井、岡田、伊藤、小川、多田、原田、会計監査〓村井、東海山岳Ⅳ号編集委員〓沖。

委員〓沖。

一九七八年度 支部長〓尾上、副支部長〓中世古、常務委員〓沖、岡田、小川、多田、湯浅、丸山、木村、梅田、会計監事〓村井。

一九七九年度 支部長〓尾上、副支部長〓中世古、常務委員〓沖、小川、湯浅、木村、丸山、大口、今井、山本、鈴木、中田、会計監事〓村井、郡。

静岡支部発足より初期の十年

山本朋三郎

支部創立時代

静岡支部創立は昭和二十一年、静岡登攀会（現在の静岡山岳会の前身）会員であった、山本朋三郎、磯野兼二郎、塩田一二の三名が発起人となり、本部に問合せたところ、二十名以上の会員が無ければ支部設立は原則として出来ない事が判明したことに始まる。若かった上記三名は何とか支部を設立しようと熱意を燃やし、調査の結果、県内に十八名の会員の存在を確認、二名不足だが本部の了解を得て支部発足への準備を進めた。

あれこれ考え、当時静岡大学文学部部長の大室貞一郎氏に入会して戴き、谷口現吉本部長の来静を得て、昭和二十五年二

月二十六日、松坂屋集會場で創立総会は開催された。出席者は井手賞夫、武者正明、大室貞一郎、伏見鎌次郎、山本朋三郎、野崎峻、磯野兼二郎、塩田一二、松山英夫、太田繁の十名。常任委員、磯野兼二郎、塩田一二、委員、渡辺徳逸、山本朋三郎、伏見鎌次郎、武者正明、太田繁、県体協理事、伏見鎌次郎、監事、井手賞夫、竹中要、支部費二〇〇円、事務局塩田宅の体制でスタートすることになった。

× × ×

創立記念行事として、塩田提案の第五回国体記念富士登山、学生山岳部統合の二案を常任委員に托することが決まり、今から考えると強引な計画であったが、とにかく、塩田が庶務全般

を引受け県体育課、日本山岳会本部との折衝に当り、山本が登山実行計画及び実施を担当することとした。

二十五年十一月二日より六日の五日間、静岡県富土宮口、御殿場口、須走口、の三登山道の集中登山が行われた。登山隊長、堀田弥一氏を始め各班に国体技術委員の内十七名が参加、国体選手からは、愛媛七名、岐阜十六名、千葉一名、石川十一名、北海道五名、神奈川二名、岩手五名、茨城一名、山梨十三名、静岡二名、計五十三名が参加した。

「リーダーは堀田、辰沼両理事の他は何れも三十才前の若い者ばかりであり、地方から参加した人々も、新制高校の生徒、或いは同じ様な若い人達許りで、お互いの若さの中に何か通じ合うものを感じさせる様な張切った雰囲気の中に……: 学校出の若い登山者と地方の若い登山者がお互いに理解し合う機会を少しでも持ち得たと言う意味で此の富士登山は決して無駄ではなかった」(村木庸益記、会報No.一五三、頁八) しかし支部員の中には計画の強引さを批判する空気もあり、支部参加は庶務の塩田、三コースに分れて登山した山本、磯野、太田の計四名のみであった。

登山終了後、栗野県体育課長の計らいで予定外の事だが、御殿場においてになって居られる山の宮様に御挨拶することになり何日も風呂に入らぬ汗くさい山男が大勢参上させて戴いた。

堀田隊長以下リーダー十八名と地元支部員二名。応接間に入る

時、順次、出身校と名前を自己紹介、立礼して着席。約一時間程、戦後の山岳界のことを堀田、辰沼両氏がお話し申し上げ、御質問には両氏と栗野課長がお答えした。一同は妃殿下お手製のケーキ(戦後流行していた電流を通じて作った電気パンだったと思う)とお茶の御接待にあずかった。此の様事は戦前、戦後を通じて初めてでありまた最後であったらう。宮別邸を辞する時の富士を仰いで中庭に立つ秩父宮殿下の登山姿のブロンズ像と、のき下に日陰干しに吊されてあった、八ツ目うなぎかマムシが強烈な印象として残っている。

支部発足後は常務理事の塩田、磯野、伏見が牽引力となり県下高校山岳部の育成に力を入れた。支部発足から国体開催前年までの六年間に十九名入会、内十七名が高校山岳部員か其のOBであった。当時は本部でマナスル計画が強力に推進されていた頃であり、支部が高校山岳部育成に力を入れたのも当時としては当然と思う。高校生を集め毎夏洞沢合宿も続け、ラカボシ遠征計画が考えられもしていた。

当時国体部門は日本山岳会が主管していたが、静岡県でも支部の常務理事が国体選手の選考方法を選を引続き毎年実施していた。第三回国体が二十四年九州で行なわれた折、全国的な山岳界の組織問題が改めて表面化して以来、中央での討議も地方に来ると大いにニュアンスが異なり論議を呼んだ物である。

静岡県体育協会には日本山岳会支部と県岳連の二団体が二十

八年まで登録されていた。当時山岳関係の県体協理事をしていた伏見の提案で支部は体協加盟から抜けた。二十九年中央で日本山岳会の中に国体委員会が正式に発足し、実際の国体準備は地方の支部または岳連に一任し、リーダーを中央から派遣するという型がいつの間にか出来上っていたのを継続したにすぎない。

静岡国体でのトラブル

日本の経済力向上、マナスル計画等の大きな刺激は爆発的な登山人口の増加を促進し、山岳界の底辺の拡がりはその質の向上をもたらしした。国体の開催もまた登山人口を益々ふやす原因となっていたのである。

一方、戦後、登山者は交通の便の良いアプローチの短い山へと集中した。アプローチの長い南アルプス南部を専門的に二十年代の早い時期から入山していたのは、県内でも二、三の団体にすぎなかった。

二十九年、静岡国体開催の決定はなされたが、以来登山部門の会場が仲々決定されなかった。「目下南アルプスでやるか富士でやるか問題になっている。施設の面からも南アは不可能で、夏期大会に持つて来るようにして富士でやるというねらいにすればよいのではないかと思うが、地元が二つに割れているので複雑である。(金坂)」（会報No.一八八、頁十一）

会場問題も決着がつきかねていた時、静岡国体の登山部門を実施するのは支部か県岳連なのかという問題が提起された。この、全国的な問題が静岡県で表面化したのである。筋を主張する県体協と実施の準備動員の実情から、寄合世帯的な組織で一時的に国体を行なえば良いとする山岳団体や、あくまで一本化を指導する県体協の主張に応じない岳人との話し合いが続けられた。県体協幹部が日本体協とも協議したが結論は出ず、県体協の判断で、話し合いの出来ない山岳部門は静岡国体から除外するとの県決定が三十年七月二十七日に発表され、同時に県岳連は県体協から脱退処分に使ってしまった。

山岳部門については中央では日本体協へ日本山岳会が加盟しているが、静岡県に於ては加盟団体がない事になったのである。全国的には日本体協に山岳も加盟しているのだから国体参加の資格はある。しかし、静岡国体の山岳を実施する加盟団体の県岳連は判らずやだから脱退処分にした、と言うのである。国体に参加したければ問題をスッキリとさせ一本化してから相談に来い、と言うのがどうやら県体協の意向らしかった。

十一回兵庫国体では登山部門は除外されておりこのままでは二年連続登山部門の国体は実施されない事になる。静岡の山岳界も大きな政治問題を自ら巻き起したことになる。二年続く除外は登山部門の国体から永久追放をもたらしかねない。此の問題の責任を負って尾崎県岳連会長は辞任し、三十二年国体開催

間近かまで会長不在の県岳連が続く。国体準備活動は一切封ぜられ県体協は支部と県岳連が何等かの形で統合せぬ限り県体協復帰も国体開催も不可との方針をつらぬいた。四十一年全国的規模での山岳協会は発足するが、その十年前に静岡県ではすでに問題解決への努力を余儀なくされていた事になる。

問題の解決、国体の実施

県体協、支部、県岳連各々の面子も立ち全国山岳人待望の静岡国体開催への方策を討議するため、急速第一回打合せを三十年八月一日、尾崎忠治宅に池田徹、山本朋三郎、鈴木正平、望月計郎、山崎卯三郎、野崎峻の各氏が参集し開かれた。その後引き続き問題解決の方策は熱心に検討された。

苦肉の案として、県山岳連盟会長、副会長を始め重だった役員は日本山岳会に入会して従来の支部員と、新しく静岡MCC（マウンテン・クライム・クラブ）なる団体を作り支部常務理事磯野が会代表として県岳連に加盟し理事になる。支部員で静岡MCCへの加盟拒否する者には強制しない。静岡MCCは県岳連会長以下幹部と支部の有志を以て構成され、日本山岳会支部員のみ団体ではあるが支部そのものではない。従って支部は県岳連に加盟したことにはならない。この様な無理な方法と解釈により、両団体を何とかまとめあげ、体協と交渉の結果、県体協への復帰は一年ぶりの三十一年九月ようやく許され

たのである。これにより国体参加への足掛りは得ることが出来たがまだ国体参加許可は翌年となる。此の統合問題のこれから支部員の二、三名は日本山岳会を退会、理事長に磯野兼二郎が新たに選出され事務局は同氏宅へと移った。同じ月県岳連は臨時総会を開き尾崎会長復帰を決議した。

一気に国体開催

やがて他種目では着々と準備が進む内に国体開催年の三十二年を迎へてしまふ。山岳関係者の焦りは大きい。県体協に認めてもらいたい一心で、全国的な署名運動や自分達で運営費捻出のため、酒井菊雄氏作品の十六ミリ山岳映画を県下主要都市で上映、基金募集もした。

同年一月待望の登山部門国体開催許可が条件付きで通達された。山小屋、新道等設備一切補助なし。単に運営費五十万円程度でやることの条件付である。脱退処分取消、国体開催許可の為にはあなたまかせにする他手はなかつた。

永い二年間のプランクであった。運営費補助のみである以上、今迄の国体と異なり、各パーティーは天幕食糧等全て持参自炊する形で南アルプスでの開催を一気に決定、国体へと突走ることになったのである。

「いろいろな困難をのり越え南アルプス南部の山谷を舞台として実行されることになり、山岳会支部と県岳連との関係もこ

れを機会にスッキリしたのはおめでたいことである。……登山路も諸施設もまだ充分整っていないこの地方で六コースを出すというのは相当思切ったことでいろいろ心配もしたが……ほかではみられない、いろいろな特徴を今日まで保っているが、世間からうとんじられていた南アルプス南部の山と谷が全国の岳人に親しまれることになったことはよろこばしい。」(日高信六郎、会報No.一九五、頁二)

悪夢の様な静岡国体ではあったが終了と同時に静岡MCCは消滅し、また国体遂行の為岳連理事長制を強引に創設し、初代理事長として大会実行委員長を務めた山本朋三郎は国体残務整理の報告書作製完了と共に任期を残して辞任した。

国体以後

若く熱心な山男達に国体は色々の影響を残して終わった。翌年、国体で大変御世話になった本川根村の方々にお礼を兼ね、静かな南ア南部のひなびた大間の出湯を訪ね、鹿の肉を喰う会を有志で催した。

第一回鹿肉を喰う会(紅葉会)

三十三年十一月十五日～十六日。於 大間

まだ温泉町の出来ない大間部落へは千頭宮林署の材木運搬用ジゼルに便乗させてもらい入る。温泉は大間部落の先、尾崎坂宮林署小屋から大間川に沿って小一時間、溪谷に自然に湧出

している野天風呂であった。後年大間部落まで引湯して出来たのが大間部落の寸又峽温泉である。当時は民家へ分宿。

(参加者) 日高信六郎、神谷恭、折井健一、松本熊次郎、小原勝郎、小原晴子、小原由規子、小原岳郎、浜野正男、浜野長男、佐藤佳年、田口三郎助、牧野衛、小林四郎、(以下世話係の静岡山岳会会員) 山本朋三郎、岩永安雄、望月福治、菅沢茂治、塩沢圭三、巻本健介、河村栄二、粟山典子、川口ミツ江、大石久子、鷲野フサ江、計二十七名。

南ア南部の名ガイド榎田雄作氏がその日のためわざわざ鹿射ちに行き、前夜山からおろしたばかりの雄鹿肉のサシミを、採りたてのワサビ醤油で賞味した。静岡山岳会の世話で始まったこの鹿肉を喰う会は五回目から神谷恭氏の動議で『紅葉会』と改名し、以後日本山岳会静岡支部行事として引継がれている。

南アルプス国立公園が制定された昭和三十九年には、この最後の国立公園の決定への、ささやかではあるがムード作りの一助に、との願ひも込めて、第七回の紅葉会が開催されたが、その時はラッキーマンにあやかかって紅葉会も終りを宣言しかかったことである。しかしその後も県外参加の会員の強い声で、十回記念集会で終りに、との願ひも空しく、えんえんと二十二回も続いている。

第二回鹿肉を喰う会、於 井川村

三十四年十一月七日～八日、小雨けむる大日峠を越え井川村

へ、翌日、中電軌道で接阻峠を経て金谷に出る。(参加者) 日高信六郎、折井健一、小原勝郎、小原由規子、金坂一郎、松本熊次郎、沼倉寛二郎、鶴岡元之助、田口三郎助、岩永信雄、松田雄一、尾崎忠治、山本朋三郎、岩永安雄、河村栄二、望月福次、他世話係静岡山岳会員十五名、計三十名。

第三回鹿肉を喰う会、於 梅ヶ島村

三十五年十一月五日～六日 梅ヶ島温泉梅薫楼でバーベキュー。名付けて山賊焼。翌日八紘嶺往復。北岳が白く見えた。

(参加者) 神谷恭、足立源一郎、村井米子、同知人、小原勝郎、小原晴子、小原由規子、小原岳郎、西川加耶子、磯崎可代子、金坂一郎、折井健一、沼倉寛二郎、松本熊次郎、牧野衛、岩永安雄、山本朋三郎、他十四名、計三十一名。

三十六年度、資料 (一) 会員への通知

日本山岳会静岡県支部長大室貞一郎氏送別会開催通知

今回、支部長大室貞一郎氏定年にて郷里千葉へ五月十七日午前十時四十一分、新東海号にて帰郷されることになりました。大変早急ではありますが、何分帰郷される日までわずかでずので取急ぎ連絡致します。

記

(一) 日時 五月十五日午後六時 (二) 場所 昭和町竹中工務店
二階 (三) 会費 六百元也 尚本部から会費納入状況の連絡が

あり貴殿は昭和三十二、三十三、三十四、三十五年度分会費が納まって居りませんからお知らせ致します。出来れば当日御持参願いたいと思います。年間八百円也です。

亦、当日は日本山岳会会長日高信六郎氏の御来静をお願いしてありますので、本年度初の会合として送別会を主体とした昭和三十六年度総会を兼ねさせて載きます。参、不参を問う時間的余裕がありませんので近在の方は、なるべく参、不参の御返事を左記に頂戴致したく思います。

電 静(2)一五一四 県観光協会内池田徹(但し支部長送別会の件と前置して下さい)

(支部出席者) 大室貞一郎、尾崎忠治、石間信夫、磯野兼二郎、牧野衛、池田徹、山本朋三郎、計七名

資料 (二) 往復ハガキ

昭三十六・九・一〇 日本山岳会静岡県支部

磯野 兼二郎

池田 徹

山本朋三郎

支部員各位

残暑酷しき折柄お元気ですか

さて当支部長大室貞一郎氏が辞められて以来そのまゝの状態にして支部活動も一頓座の形となっており、その後諸兄と顔合

東九州支部の歩み

梅 木 秀 徳

東九州支部が、大分支部の名で設立されたのは一九六〇年のことである。お隣の熊本支部より三年ほど遅れ、全国で十六番目の支部として承認された。来年が創立二十周年であり、ようやく成人になろうとしている。

しかし、支部設立当時、そのためにさまざまな努力をした人たちは、既に早くから日本山岳会に籍を置き、大正末から昭和の初めにかけて九州の登山界をリードした人たちだった。そうした会員の足跡はそのまま大分の登山史であり、東九州支部の前身ともいえる。従って、まず、設立にいたるまでの日本山岳会員の動きを少し追ってみよう。

九州に近代登山の気風がおこったのは、日本山岳会の創立よ

りかなり遅く、一九一〇年代に入ってからだった。九州の屋根といわれる九重山群の南のふもと、久住町に九州最初の社会人山岳団体として九州山岳会が誕生したのが一九一五年である。当時、名和昆虫研究所にいた工藤元平氏が郷里に帰って組織したもので、翌年夏の黒岳踏査を皮切りに、九重山群の調査と開発に努力した。工藤氏はその後、久住郵便局長から久住町長な

どを歴任、九重山に千回以上の登山を果たしている。

一方、宇佐市には六鶴保氏がいた。日本山岳会創立時代からのメンバーで、当時長州郵便局長をしていた。由布・鶴見山群で粘菌の研究にはげむとともに、市民に呼びかけて清談会を組織、山々を登り回っていた。

だが、こうした人たちの活動も、まだまだ調査研究など学術的な面や、自然愛護、観光宣伝などが中心で、本格的なスポーツ登山ではなかった。いうなれば、やがて訪れるスポーツ・アルピニズムのための下地を、大分を中心とする九州の山々で準備していた段階だったともいえるだろう。

スポーツ登山の夜明けは一九二〇年代後半にやってきた。その幕を開けたのが加藤数功氏である。同氏は北九州市の出身。東筑中学時代から登山を始め、北九州から大分の山々へ足を伸ばした。慶応大に進むとすぐ山岳部に入り、当時の先端を行く登山の精神と技術を身につけて一九二八年に九州に帰ってきた。以来、築紫山岳会の先頭に立ち、九州全域で活発な登山を行い、次々と新しいルートを開いた。例えば、祖母・傾山群だけでも、同氏の初登攀、初縦走の記録は一九三五年までに十九を数えている。著書も多く、とりわけ九州の山の初のガイドブックである「九州山岳案内」と、それに続く「九州山岳大観」は、九州の登山人口を一挙にふやしたといわれる。

登山人口の急増に伴い山岳会も次々と設立された。九州山岳会に続き、一九一九年に組織されたわらじ会が一九二八年に二豊山岳会と改称、本格的なスポーツ登山を始めた。その中心となったのが永井清一氏で、この二豊山岳会こそ、今日の東九州支部の大きな母体となるのである。さらに大分県下では、一九三一年の大分山岳会、翌年の中津山岳会、朽網山岳会、また別府

山の会、竹田山の会から、大分中学山の友会、銀嶺スキークラブなど、一九三六年までに九つの登山グループが誕生した。なお、当時九州全域の山岳会は五十五団体で、うち福岡三十四、熊本、佐賀各四だった。

ところで、加藤数功は一九四三年に大分県に居を移し、愛する九重山群のふもとで暮らすようになるが、これより少し前、日本アルプスで鍛えた優秀な登山人が大分にやってきた。野口秋人氏である。同氏は長野県の出身で、幼いときから故郷の山であるアルプスを登り回り、東北大で大きく成長した本格的アルピニストである。縁あって一九四〇年に別府市の野口病院に入ることになり、以来、二豊山岳会を足場として幅広い活動を展開したが、その最新の登山技術と精神が、大分の登山界に強い刺激を与え、花を開かせることになった。

しかし、それも間もなく戦争。大分の各山岳会は行軍登山などで細々と活動が続けてはいたが、重苦しい時代だった。登山界が息を吹き返したのは終戦の翌年、一九四六年である。九州山岳連盟が復活、大分県からはさっそく五つの山岳会が加盟した。大分県山岳連盟も生まれ、一九四八年には福岡県で開かれた国民体育大会の登山部門が大分の九重山群で行われるなど、大分の山岳団体は急速に復活していった。

その後、前記の各氏に加え、戦前からの登山人、あるいは新しい登山人の手でスポーツ登山は隆盛の一途をたどるが、そう

した中で、日本山岳会に入会する人も多くなった。例えば三谷忠一、木本善重、南崎大海、橋本祥案、首藤宗利、大津省吾、松尾健氏、矢野真の諸氏であり、いずれも大分県登山界のそれぞれのリーダー格として知られた人たちであった。

このように、個人的にはあったが、県内各地で日本山岳会に入る人がふえてくると、山行で出会うたびごとに、日本山岳会のこと話題になるようになった。それがやがて、支部設立に關しての話にもなっていたのである。

支部設立の話が最初に出したのは、一九五五年だったといわれる。二豊山岳会がその前身であるわらじ会の創立三十五周年を記念して、この年三月、別府市でにぎやかな記念總會を開いた。当時、大分県の知事だった細田徳寿氏は「山の知事」と呼ばれるくらいの登山好きで、折りをみては県下の山々を歩き回り、觀光にも力を入れていた。同会では、この總會に細田知事を引っぱり出し、名誉会長に据えたのである。おかげで總會は盛り上がり、意気も上がったというわけだが、その頃の同会の中心人物が前記の永井清一氏や野口秋人氏であり、さらに木本、三谷、南崎各氏らも同会で活躍していた。まだ日本山岳会に入会していない人もいたが、これを契機に、支部設立の具体的な考えが出てきたのは当然といえ当然のことであった。

また、当時竹田山岳会にいた首藤宗利氏や大津省吾氏、山口迪氏らが、熊本との距離的な近さなどもあって、熊本支部の設

立に参画しており、その後、すぐに同支部の設立をみた。こうしたことも大分における支部設立の機運を大きく刺激したといえるだろう。しかし、支部設立には最低二十人の会員が必要であった。首藤氏らが熊本支部に加入していることもあって、人員が不足していたのである。こうして、新人会員の募集が始められた。

一九六〇年になって、会員は二十人を超えるところまでふえた。さっそく設立の準備、手続きなどがとられ、同年八月五日、別府市流川にあるレストラン「スワン」で設立總會が開かれ、大分支部が発足した。当時の役員は顧問に工藤元平、加藤数功、溝口岳人の三氏を迎え、支部長が永井清一氏、副支部長が野口秋人氏、常任委員利満成功氏、会計委員木本善重氏、委員松岡実氏、監査三谷忠一氏らであった。支部会費は年二百円、事務所を別府市流川の永井支部長宅に置いた。

考えてみれば、工藤、加藤、六鶴、永井、野口各氏ら、早くから日本山岳会員となっていた人たちの活動の古さに比べ、大分支部の設立はたいへん遅れた。活躍の根拠地が異なっていたこと、あるいは大分県登山界のさまざまな事情などが重なったの結果ではあったが、いずれにせよ、残念なことといえるであろう。

だが、その後の歩みは順調だった。支部員がいずれもそれぞれ別個に所属する山岳会のリーダー的存在であり、それ故に支

部としてまとまった大きな山行などはやりにくいという側面はあったが、親睦登山会でのまとまりは良かった。定期的な小山行や各種の研修会、講演会、さらに自然保護運動なども着実に行われていった。

その間、会員の目は次第に海外に向けられて行く。加藤、野口両氏を中心に、一九六二年に大分支部を主体に広く一般に呼びかけて大分ヒマラヤ研究会が組織された。これには、のちに会員となる矢野鉄雄氏、姫野和記氏、三浦忠之氏、西諒氏や筆者が参加した。ここでは、ヒマラヤ方面について勉強が行われるかたわら、野口氏のヨーロッパ・アルプス行、あるいは西氏と筆者の台湾・雪山（次高山）―大霸尖山縦走などの海外経験が蓄積されていったのである。

やがて機は熟し、一九六四年秋、目標をヒンドゥ・クシユ中部山群のコー・イ・モンディ峰に置き、大分ヒマラヤ研究会は大分ヒマラヤ登山委員会と名を変えて大分支部の傘下に入った。代表は加藤、野口両氏。研究会メンバーの主力が日本山岳会への入会手続きをとり、具体的な準備が進められることになったのである。そして翌一九六五年矢野真氏を隊長とする登山隊は七月三日、コー・イ・モンディ登頂に成功した。これによって、日本山岳会大分支部、大分ヒマラヤ委員会、大分ヒンドゥ・クシユ登山隊は、この秋、地元の大分合同新聞社の文化表彰に当たり特別功労賞を受賞することが出来た。

なお、この間、支部長の永井氏は一九六四年十二月、子息の勉強の関係などもあって大分を離れて上京することになった。このため役員が交代することになり、二代目支部長に現在の野口氏が就任した。また、一九六五年八月には、宮崎市に在住する大谷優氏ら宮崎県下の会員九人が大分支部に入籍することになった。そこで、この年、従来の大分支部という名称を変更して地域を拡大、東九州支部という現在の支部名を採用することになったのである。

ともあれ、ヒンドゥ・クシユを皮切りとして、支部会員の海外登山は盛んになった。ヒンドゥ・クシユのメンバーを中心に、その年秋には大分市に大分登高会が生まれ、東九州支部は二豊山岳会、大分登高会という二つの地域山岳会と繋がりを深めることになったが、この大分登高会は翌年から相次いで韓国・漢拳山、台湾・玉山（新高山）に登山隊を送った。前者は西氏を、後者は三重野勝彦氏を隊長とし、数多くの会員が参加したのである。

現在も、こうして海外へ出ていく傾向は絶えない。ここ数年でちょっと数えてみただけでも、野口支部長をはじめ、木本氏、南崎氏、大平展義氏や筆者らの数次にわたるネパール行をはじめ、矢野（真）氏のアラスカ、西氏のカフカーズ、岡村孝治氏らのヨーロッパ・アルプス、木本氏の台湾・玉山、筆者の韓国・雪岳山など、小さな支部にははなかなかにぎやかであ

る。こうした積み重ねが、いずれはビッグ・クライムに通じてくるものと期待しているし、準備もまたそれなりに進められているところである。

ところで、支部発足以来およそ二十年。先輩たちの幾人かが相次いで死去されていった。工藤元平氏が一九六八年に、そして翌六九年には加藤数功氏、さらに最近では一九七七年に永井清一氏がなくなられた。九州登山界を創り上げ、東九州支部を育んでくれた人たちであるだけに、淋しい限りである。おかげで、現在支部に籍を置く者は、みんな会員番号四〇〇〇番台以降の会員である。

こうした支部にとって、本部或いは他の支部から来訪者があるのは本当に嬉しいし、なによりの励ましでもある。楨有恒氏、吉沢一郎氏、そして最近は今西錦司氏にたびたびおいでいただいている。今西先生の最近の御来県は一等三角点を訪ねての山行が目的だが、いろいろとお話を伺い、共に山で歩くことは支部会員にとってもたいへんな楽しみである。お客さんといえば、最近珍しい人が来た。カトマンドウのガウリサンカール

社社長、ドルジ・ツェリン・シエルパ氏。現地で世話になった支部会員も多いだけに、九重から阿蘇へと共に遊んで楽しかった。

それはともかく、死去される先輩のほか、事情あって去っていく人もいたが、会員は次第に増加している。八〇〇番台の会員番号を手にした人たちが続々と入会してくるし、一九七九年春から初夏にかけては、大分県山岳連盟の中核部にある人たちが相次いで入会の手続きをすませた。そしてなりよりも最近嬉しかったのは、松田雄一、柳子御夫妻が東九州支部に入籍してくださったことである。さっそく講師としてお招きし、豊富な登山経験に裏打ちされた話をうかがい、支部として得るところが大きかった。

一九八〇年は支部ができて満二十年、成人になるにふさわしいだけの立派な支部として、それなりの活動をやりとげたいと考えている。本部及び先輩各支部の励ましと、お力添えを得たいものである。

富山支部に就いて

中田清兵衛

○創立總會

昭和二十三年三月二十三日

支部長 松村高

事務所 富山市衣服部三〇、アキレス商會内

○支部活動経緯

昭和二十八年 クラブルーム設置。富山市桜橋通り、電気ビルディング五階。

昭和四十三年 クラブハウス設置。呉羽山山中に建設、落成、同年九月三十日、「呉羽山荘」と命名。

昭和四十四年 米国シエラクラブ一行二百名、立山登山の為

来訪。

昭和四十五年 ヒラリー郷夫妻来訪、立山登山の世話。

○地元登山界とのつながり

昭和二十三年 富山支部が発起人となって富山県山岳連盟設立。会長、牧野平五郎、加盟団体十七、事務所富山支部内。

昭和三十三年 第十三回国民体育大会登山部門を担当。立山、剣にて実施。

昭和四十二年 文部省登山研修所を立山山麓千寿ヶ原に誘致、開設。

以上は支部創立より今日に至る迄の主たる展望であります



昭和43年10月10日、呉羽山荘（支部山荘）開所式の記念撮影（三田幸夫、深田久弥氏参加）

が、創立当時私は東京在住であり、昭和二十四年以降に支部長に就任、その後勤務の都合で一時中断しましたが、再任、今日に至っております。

昭和二十三年の創立から昨年は丁度満三十周年に当り、現在記念行事を検討中ですがまだ結論が出ておりません。ただ、従来各地の支部が催された様に、全国の支部長の参集を求め記念山行をするという形式ではなく、何か将来までも残る記念事業を考慮しております。

現在の支部の活動は残念ながら極めて不活発であります、その不活発の原因を探求して、記念事業に取り組む機会を把握して大転換を計ろうというのが現在の私の心境です。

周知の如く当県は山岳に恵まれ、横先生の御尽力により日本で唯一の登山研修所も存在しております。従来、支部と研修所の関係は極めて密接なものであり、私が研修所の運営委員に任命される一方では、研修所長自身が支部に加入されるなど、登山界に寄与する上では非常に好ましい関係にありました。ところが、どのような事情からか、数年前私は委員を免ぜられ、現在では支部には無関係の地元の学者がその任に当たっている。また所長も交替されて以来というもの、支部と研修所の間は絶縁状態になっております。この点に関しても機会を見て元通りの好ましい連繋に持って行きたいものと思っております。

一方、幸いなことには現在支部の委員長を務める若林啓之助

氏が富山県自然保護協会の委員長を兼ね、また会員の深井三郎氏がやはり同会協会長を務められている関係上、同会と支部の間には非常に効果的な協力関係が生れております。この辺の事

情を勘案の上、前述の改善、改革を通じた支部の発展策を考慮中です。

バインタ・ブラック南壁（一九七八年）

糸川 公 夫

静岡登攀クラブは、一九七四年、初めて南面のウズンブラック氷河からバインタ・ブラックの試登を行った。その時は、五三〇〇メートル地点に建設したC1にブロック雪崩を受け、テントを爆風で吹きとばされた上、二人の怪我人を出したので、それ以上の登攀を断念しなければならなかった。

再起をうかがっている内に、一九七七年、イギリス隊が西稜から西峰直下に出て南壁上部を横断し、バインタ・ブラックの初登をはたしてしまった。しかし、我々は七八年、南壁の初登を目指し、またこの山にやって来た。六月十一日、BCに入つた後、五〇〇メートルの下部岩壁を四回のビバークの未突破し、南壁中央部を左斜上する氷雪の大バンドを経て七〇〇メートル地点に到達したが、悪天候のためいったんBCに戻つた。

七月二十七日、五人で再び南壁にとりついた我々は、三日か

けてC3に到着、翌日は二隊員が不調で脱落したものの、六四〇〇メートル地点のクレバスでビバーク、さらに三十一日には七二〇〇メートルまで登ってビバークした。

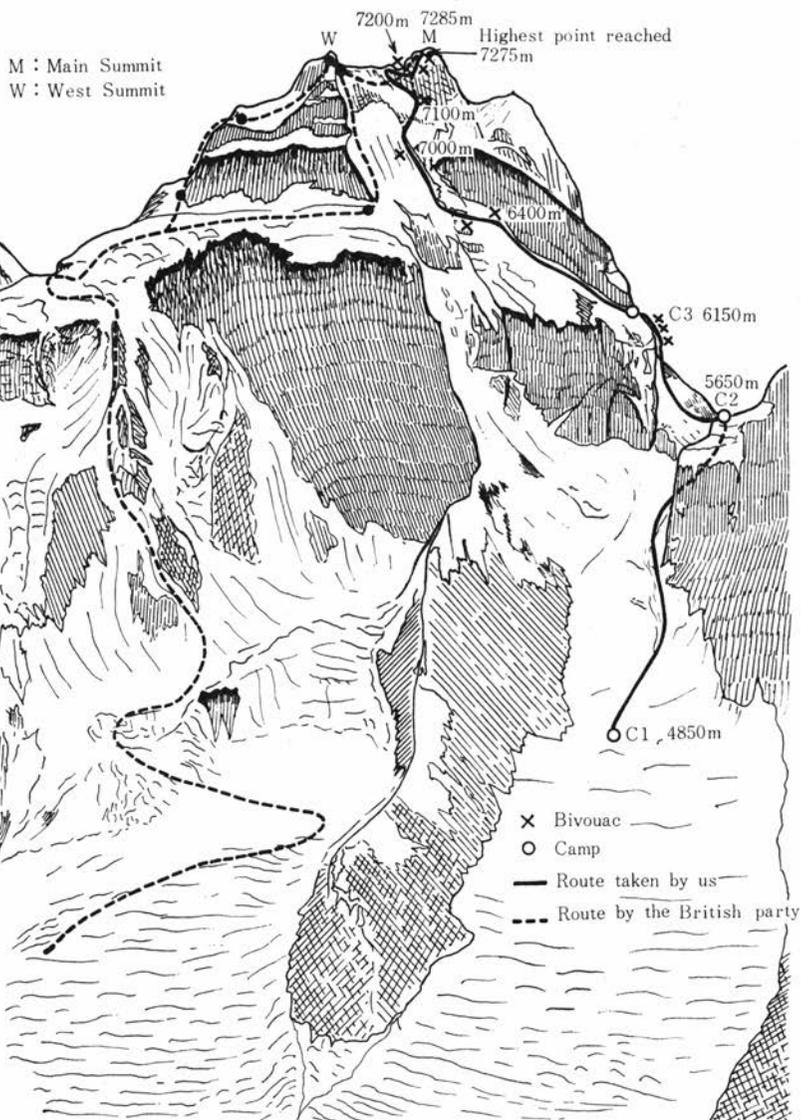
一九七四年の遠征以来、四年越しのバインタ・ブラック南壁登攀もいよいよ頂上岩壁を残すだけとなった。しかし、七月二十日に全員で到達した最高点七〇〇〇メートルまで、今回登ることが出来たのは、故障などにより登攀続行することが出来なくなつた四人を除く、勝見、北村、糸川の三人だけになってしまった。当然、荷上げされた食糧、装備も十分とはいえない。必要最少限いや最少限にもたらないもので、時間的にも長時間の登攀は不可能だった。最後の一回きりの頂上アタックというきびしい状況となった。

七月三十一日、三人は六四〇〇メートル地点の雪壁にある、

BAINTHA BRAKK

Chart 5 (a)

South Face - Climbing Route



クレパス中のビバークサイトを出発した。重荷となるトランシーバーとカメラはデポしていくことにする。これから先は、たとえ我々に事故が発生しても交信することは出来ない。フィックスロープはほとんど雪に埋もれてしまっており、掘りおこすのに苦勞する。いやな感じの水壁のトラバースをして、雪壁を直上し、初回アタックの七〇〇メートル地点ビバークサイトにデポしてあった食糧三日分をザックに入れ、さらに登る。

初回のアタックで北村が墜落したかなりの傾斜の露岩帯を、今度はポルトを打ち慎重に登りきり、頂上岩壁基部の雪壁に抜ける。四十メートル直上したところをビバークサイトに決め、頂上正面岩壁に北村トップで取付く。午前中は太陽が出ていたのに、岩壁基部に着いた頃は、ガスが流れ時々薄日がさす、という天気が変わり、岩壁上部までの遠望もきかないうえに、頂上までのルートは傾斜がきつくと、見通すことは出来なかつた。正面から北村がアタックしたものの、垂直に近い凹角を四十メートルほど登ったところで行きづまってしまい、再び十メートルほど右側にルートを変えた。さらに四十メートル登るが、傾斜がきつすぎると、リスもほとんど無いのでルートが一向に延びず、薄暗くなったので下降、岩壁基部でビバークすることにした。雪壁を切り開き腰をおろせるスペースを作り、ビバークサイトとした。雪を落とすと、下に氷がそのすぐ下はスラブとなっており、広いスペースは作れず、腰をおろすのがやっと

という狭いもので、これから先のビバークが思いやられた。

三人で明日からのルートについて話し合う。このまま正面を直上しても、このきつい傾斜では何日かかるかわからないので、このルートはあきらめ、もう少し基部の雪壁を上まで登り、稜線に抜けてから、頂上へのルートを探すことにした。イギリス隊の記録をもっとよく研究しておけば良かったと後悔しても、今となってはおそすぎた。しかし、ここまで来たら、何が何んでもルートを探し出し登るんだと、覚悟を新たにした。

八月一日、時々青空もみえるまずまずの天気になる。昨日の直上ルートのフィックスロープを回収し、頂上岩壁基部の雪壁を西峰に向って八十メートルトラバース、そこから岩と氷のミックスした凹角を四十メートル登ると、西峰と主峰との稜線直下に達した。南壁側の急なスラブに不安定な雪のついた壁を下に達した。一旦稜線に出て三十メートルで胸までスッポリ入り込むクラックに入りピッチを切る。我々にとつて今まで見るこの出来なかつた、この山の北側にどこまでも広がっている山々と氷河を見渡すことが出来た。くの字型に曲つたスノーリッジが主峰に向かつて続き、三十メートル先で三十メートルほど切れ落ち、頂上岩壁とのコルとなっている。スノーリッジはあまり強く踏むと、腰のあたりまでズボッと落ち込んでしまうという、全く不安定なものだった。

スノーリッジの末端から十メートル下降したところで、ラス

トの勝見さんを確保するが、いつになっても来ない。声をかけると、ロープの回収がうまくいかず苦闘している様だ。トップの北村はすでにコルヘビバークサイトを決め、三人分のスペースを切り開いている。勝見さんは回収を断念し、ロープを切断して下降して来た。私達がさらに二十メートル下降し、北村の待つビバークサイトへ着くころは、あたりはもう真暗闇で、ロープと北村が照らすライトの明りだけがたよりという手探りの行動だった。登攀用具を整理してツェルトの中にすわった時には、食事をとるのもおっくうなほど疲れ切ってしまった、調子の悪い不完全燃焼のコンロをだましました使って、食事を終るころには十時をとくに回ってしまっていた。

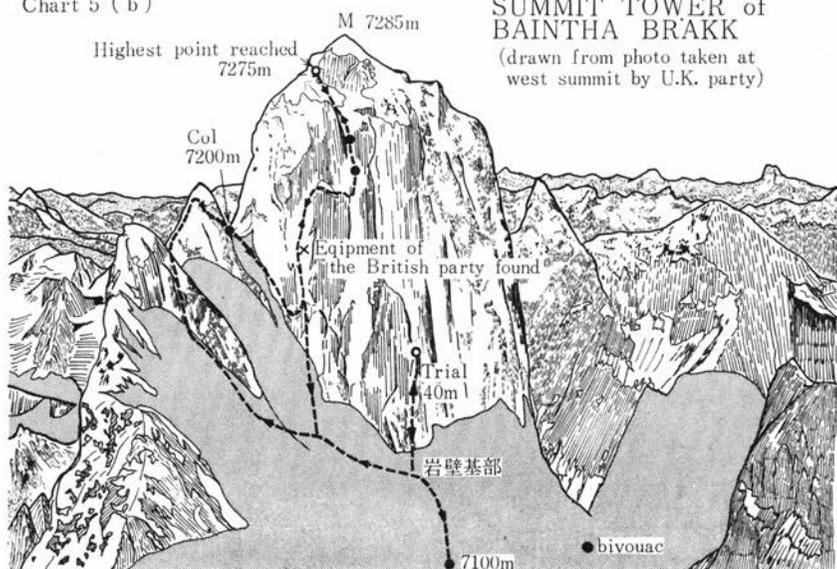
八月二日、コルから頂上への稜線は垂直の岩壁にはばまれ、直上するのは不可能に見える。取付まで行くが、声も届かないほど風雪が強くなって来たので、今日の行動はあきらめ停滞することに決める。ツェルトの内側に息が凍り付いてとても快適とはいえない。しかしガソリンも残り少ないのでコンロも使用せず、肩を寄せ合い暖をとり我慢する。飢えている我々の会話といえは、帰ってから真先に何を食べようか、などということばかりだった。

八月三日、天気は相変わらず良くない。朝食のスープも温まらないうちにコンロの火は消え、ガソリンは全く底をついた。いつまでここに留っていても、水さえ飲むことは出来ない。一

時の猶予もない。今日中にルートを見つけて登頂し、下降に移りたいと気はあせるばかりだ。朝食も早々に切り上げて、登頂ルートを決めて出発した。ガリーを四十メートル下降すると、トップで下降した北村は右上に続くルートになりそうなガリーを登り始めていた。四十メートル登ったところで昨年のイギリス隊が残っていた、ザック、ユマール、カラビナなどを見つけた。やむなくここに登攀用具を残してくだったイギリス隊の苦闘のあとをうかがうことが出来た。同時にこのままこのルートを登れば良いのだという確信を得た。そこは、ビバークしていたコルから数メートルさがっているだけという場所で、我々は下降してからほとんど同じところへ又登り返しただけということだった。

そこからさらに、クラック、凹角を登り、三人が腰かけられるテラスにザックをテポし、頂上を目ざす。十メートル登ると凹角は終わり、右へ下りぎみに雪のついたバンドとなっている。ナイロンロープを固定しトラバースすると、そこから頂上に向かって凹角が走っており、上部はハンギギみとなって行く手をさえぎっている。相変わらず北村がトップで頑張るが、傾斜がきつく疲労した体では仲々ルートも延びない。頂上への見通しも立たないまま一日が暮れようとして来た。このままここで着のみ着のままビバークしようか、それともザックのあるところまで下ろうかと相談し、体力の消耗を少しでもおさえるため、ツ

Chart 5 (b)



SUMMIT TOWER of
BAINTHA BRAKK

(drawn from photo taken at
west summit by U.K. party)

エルトのあるザックのデポ地点まで下降することに決定する。七〇〇メートル以上の連日のビバークで、我々の体力もそろそろ限界に近く、ただ、俺達は登るんだ、登り切るまで帰れないんだ、という気力で持っているだけと言えた。

八月四日、凹角にそってさらにルートを延ばしていくと、ハングの下にイギリス隊の残した黄色のシュリンゲがあった。彼らはハングを直上せずにこのシュリンゲを使い右側にトラバースしてから頂上へ抜けたらしい。トップの北村は、ハング帯を直上する方にルートを決め苦闘している。確保している我々の足元には、足場が無くなるほど氷が落ちて来た。

毎日々々、頂上へ抜けられると思いつながら、又、今日もハングを乗り越せないまま暮れてしまった。ザックのところまで下降し、氷を切つて三人が腰をおろせる場所を作る。ツェルトをかぶるとすぐにでも眠りたくなってしまった。皆、疲れきつて、元気もなく口数も少ない。アルファ米に粉末スूपと雪を混ぜ、腹の足しにする。勝見さんが最後までとっておいたビスケットを分けてもらい、少しずつ味をかみしめながら食べ、あしたこそ登りきれんだと自分自身に言い聞かせ、目を閉じた。

八月五日、今日も天気は回復せず、青空を見ることは出来ない。昨日に引き続き、トップの北村は三メートル張り出したハングに取付き、苦闘していたが、ついに抜けたらしく、雪と氷がどかどかと落ちて来ると、間もなくザイルも延び出した。ト

ップから声がかかり、氷ついたロープをユマールがスリップしない様だましまし登り出す。ハングは体が大きく空中にとび出るもので、頂上直下の高度で大きなハングを登った北村の闘志に感心させられた。ハング帯を抜け出たところは、雪の付いた稜線で、頂上はそこから高さ十メートルほどのピナクルの上にあった。

稜線は風雪が強く視界も全くなりかかない。頂上のピナクルをどうするか、三人で協議する。時計は十一時になっていた。明かるいうちに、食糧とガソリンのある七〇〇メートルのデポ地まで、確実にたどり着かなければならない。すでに処女峰では無くなっている頂上まで登るのはやめ、ここを登攀終了点とすることに決めた。眺望もきかないが、あたりを八ミリカメラに収め、一息入れる間も無く懸垂下降に移った。長い長い苦勞の割りには余りにも報われぬ一瞬だった。精神的にも肉体的にも、消耗しつくし疲勞しきったよれよれの我々は、さらに二日のピナクルの後、C2まで事故も起こさず無事下降することが出来、久しぶりにシュラフの中で横になり、ぐっすりと眠った。C2から二日後に、十日間も連絡を絶っていたベース・キャンプに戻り、我々の安否を気づかっていた皆と再会することが出来た。無事帰り着いたと思った途端、体中から緊張感が抜けていくのを感じた。

登山隊としては三流以下の力しか持っていない我々が目的を

達成出来たのは、七人の隊員の誰一人不平不満を言うものも無く一人一人が持っている力を出しきれたというチームワークの結果だと強く感じている。又、有能なコックと人格者であるリエゾン・オフィサーに恵まれ、全ての点で素晴らしい山行となった。初登頂こそ前年のイギリス隊に先を越されたものの、十分満ち足りた気分です、すでに夏も終わり秋の気配を感じるベントーのベースキャンプを後にした。

△記録概要▽

隊の名称 静岡登攀クラブ一九七八年カラコルム遠征隊

活動期間 一九七八年五月と八月

目的 バイスタ・ブラック（七二八五メートル）南壁初

登攀

隊の構成 隊長 勝見幸雄（38）、医療・通訳 糸川公夫（30）、

記録 青木士郎（29）、食糧 加藤章作（27）、輸

送 古田徹司（27）、装備 北村敏郎（27）、会計

米沢正信（27）、LO アサド・レマン（27）、

コック ガーブル

行動概要

六月二日スカルド全員到着。六月五日キャラバン

開始。六月十一日ベントーBC（四三〇〇メー

ル）建設。六月十二日ウズンブラック氷河（四五〇〇メートル）。六月十七日C1（四八五〇メー



Plate 6-(b) : ハラモシユ北壁—北西稜の登攀ルート (C1 より).
Haramosh, North West Spur route seen from C1.

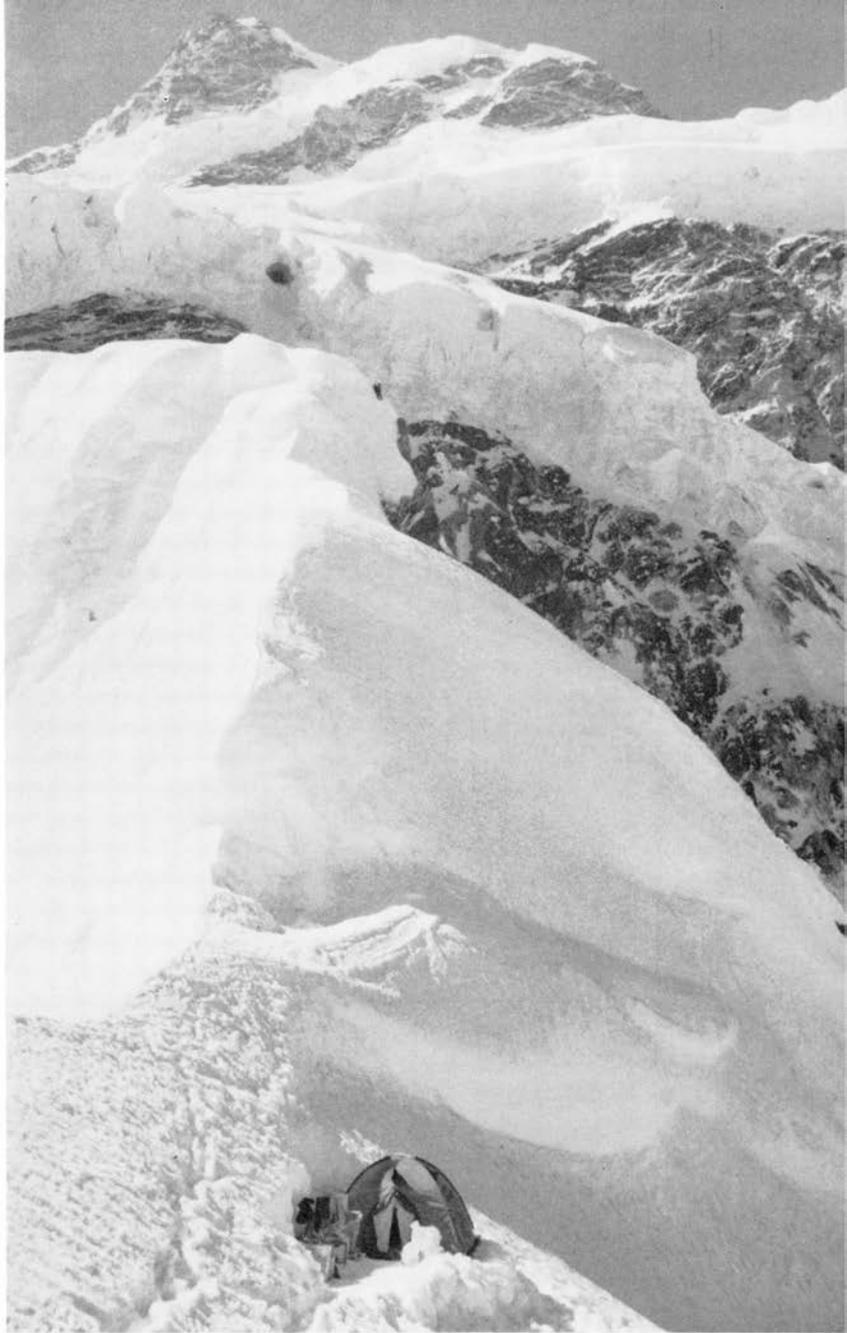


Plate 6-(c) : ハラモシュ, C4 より頂上を望む。

Haramosh, summit seen from C4.



Plate 7-(a) : スノープラトーからのクン西壁 (望遠撮影)。

West face of Mt. Kun from Snow plateau (Tele photo).

(Plate 6-(a)~(d) by M. Oki)



Plate 7-(b) : パルカチック村の裏山からのヌン (右), クン (左奥)。

Mt. Nun (right) and Mt. Kun (left) from the small peak behind Parkachik.



Plate 7-(c) : センティック氷河から D41 峰。
Mt. D41 from Sentik glacier.

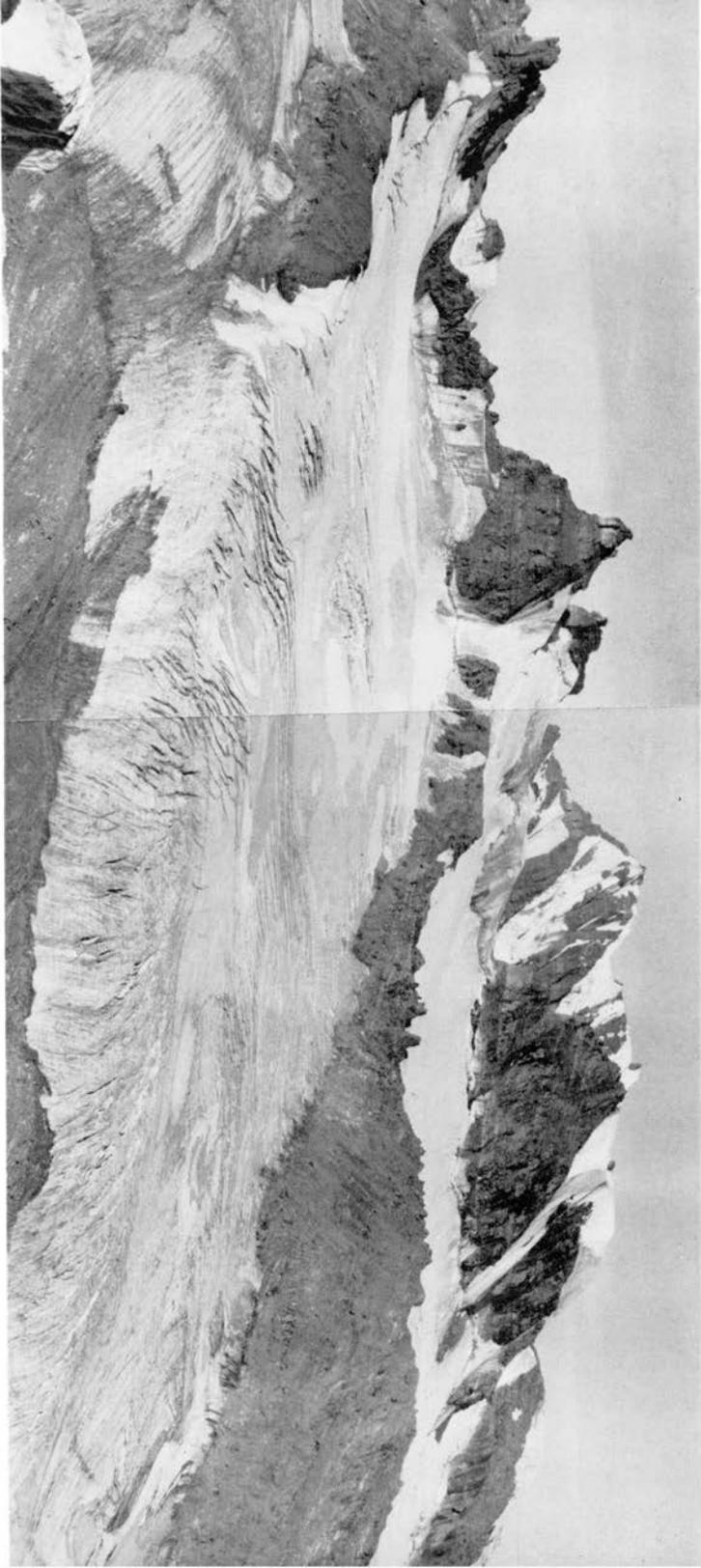


Plate 7-(d) : センテイクツク氷河源頭の間々。
Peaks of upper part of Sentik glacier.



Plate 8-(a) : ヌン東稜—ホワイトニードルより望むディフィカルト・ビット (右上) と C3 (右下)。

Nun East Ridge-Difficult Bit (top right) and C3 (bottom right) from White Needle.

(Plate 8(a)~(d), by Itami)



Plate 8-(b) : スン東稜へせまる，頂上が左上に見ゆ。

Approaching the East Ridge of Nun, the summit seen at left.

トル)建設。六月二十五日C2(五六五〇メートル)建設。六月二十九日下部岩壁ルート開拓開始。七月六日、七月十二日C2停滞。七月十七日下部岩壁抜けC3建設(六三〇〇メートル)。七月二十日七〇〇メートルまで全員到達する。七月二十一日悪天の為下降。七月二十六日第二回目

アタックBCより出発。七月二十九日C3。七月三十一日頂上岩壁アタック開始(七一〇〇メートル)。八月五日北村、勝見、糸川バインタ・ブラック南壁初登攀。八月十四日BC撤収。八月十九日スコロ・ラ越えにてスカルド着。

ハラモシユ北壁（一九七八年）

—北西支稜の登攀—

昭和山岳会

はじめに

昭和五十三年五月二十三日、それは遠征隊隊員全員が初めてハラモシユの北面にまみえた日であった。前年の偵察の失敗から、隊員の誰一人として、実際にそれを見た者がいなかったのだ。もちろん写真でのハラモシユは心をやきつけてはあったが。その場所は、ハラモシユの北面を東から西へ流れる、マニ氷河を対岸にわたる位置であった。ここから見るハラモシユは、厳密には北西面となる。そして正面には、北面氷河がアイスフォールとなりマニ氷河に落ちていく。非常に大きく、堂々とした七千メートル峰である。ここからだとその頂上までの高度差は四千三百メートル以上あると思われる。

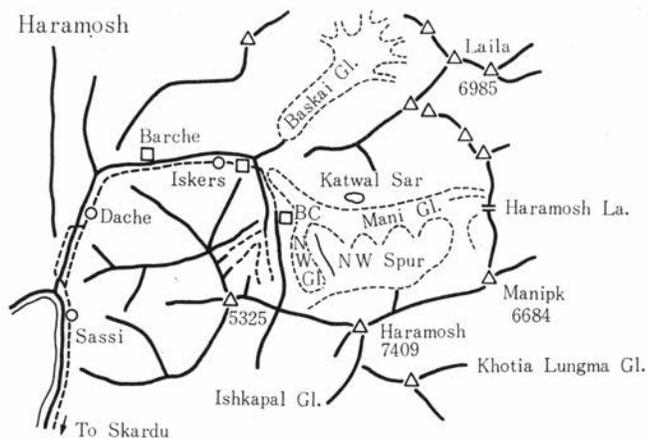
私たち昭和山岳会カラコルム登山隊は、会の四十周年記念事業の一環としてヒマラヤ遠征という看板をひっかけて、はる

ばるここをやつてきたのだった。

この日私たちは、三つのパーティにわかれ、とるべきルート
の偵察を行なった。一つは北西氷河左岸からのルート、一つは
マニ氷河から北壁基部へのルート、そしてあと一つはこの山の
初登ルートとなったハラモシユ・ラへのルートである。この日
より、それぞれのルートでの約十日間の偵察、試登、それによ
る初期の高度順化を行ない、五月三十日、ルートを北壁・北西
支稜と決定した。

ハラモシユ北壁

ここで、ハラモシユの北西の地形を説明しよう。ハラモシユ
には、主峰と、その東側にマニ・ピークと呼ばれるハラモシユ
II峰（六六八四メートル）がある。ハラモシユと、このマニ・
ピークを結ぶ稜線からマニ氷河に落ちる懸崖が、ハラモシユ北



Haramosh N Face · NW Spur route

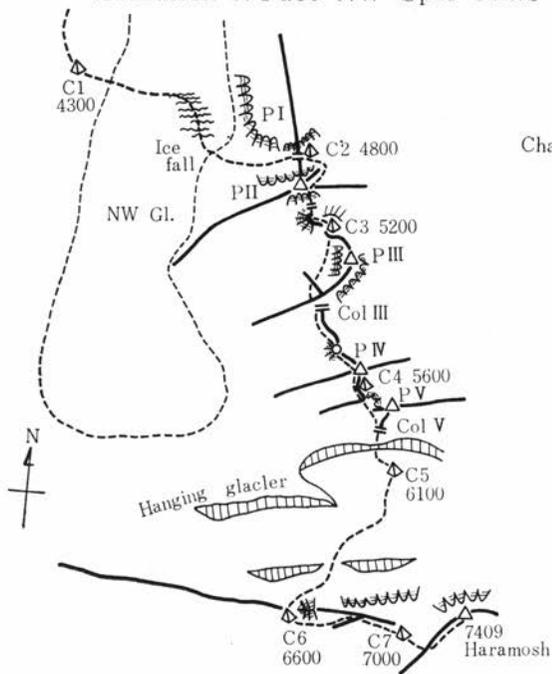


Chart 6

壁を形成している。北面の標高六〇〇〇メートル付近には、東西に連なる巨大な懸垂氷河の帯が走っている。そして、この懸垂氷河より下部の三〇〇〇メートルが北壁をなしている。懸垂氷河を越えると、その上部は広大な雪原となり、その上に頂上岩壁を持つハラモシユが聳えている。しかし、北面からこの懸垂氷河を越して、上部雪原にまで続く明確なリッジは存在しない。端的に言えば、北壁はスラブ状の岩壁と氷壁が複雑に入り交っているといった所だ。

私たちの採用した北西支稜は、その北壁の一番西より位置する、五つの岩峰をもった稜で、その西側は北西氷河が深くきれ込んでいる。北壁を登攀ルートとして検討した場合、もっとも可能性があるのがこの北西支稜であろう。しかしこの稜も上部懸垂氷河の下で、北壁にすい込まれるように消えているのである。

登山活動

六月一日、ベース・キャンプを北西氷河左岸にある樹林帯に設営した。ここは現地名でマレイトクと呼ばれ、昔の狩場であったらしく、緑多く快適な所である。高度は約三四〇〇メートルである。

六月三日より、C1予定地への荷上げが始まった。いよいよ本格的な登山活動となる。C1まではほぼ問題のない北西氷河

左岸を行く。翌四日、四二〇〇メートル地点にC1を設置した。ここより、ルートは北西氷河を横断し、北西支稜のホルIへ上っている広い雪面になる。十六日にやっとホルI（四八〇〇メートル）にC2を建設する。

ここから、北西支稜をたどるわけである。北壁側の雪壁を巻きP IIの頭に達し、ホルIIへ下る。ここより直登せざるをえない約一〇〇メートルほどの岩峰（トサカ岩）に、ワイヤーばしなどによるルート作業をし、その先のやせた岩稜と雪稜をたどり、懸垂氷河上の台地にC3を建設した（二十二日、五二〇〇メートル）。C3から見上げるP IIIは、はるかに高く聳えている。実はC3位置決定の数日前、雪稜を忠実にたどってP IIIに達したルート作業隊は、その先がスッパリと切れているのを発見し、ルートを次のように変更した。つまりP IIIの岩壁基部の北西氷河側を大きくトラバースしてホルIIIに上り、P IV（スノーピーク）へつづく雪稜へとたどった。C4はそのスノーピークを越したところにあるホルIVに設営した（二十七日、五六〇メートル）。

ここからが、もっとも問題となる懸垂氷河の突破となる。C4よりやせた雪稜を登ると、そこは広い雪田となり、その先がホルVとなる。このホルVで、私たちがたどってきた支稜は終るのである。この先は頭上にいまにも落ちてきそうな懸垂氷河をもった、岩と雪のミックステ壁となる。これらはBCから

もながめられ、このルートを採用した当初からの問題となった所だ。ルートはこの壁をほぼダイレクトに登り、懸垂氷河のことも弱点と思われるわずかの凹角部をぬけ、上部雪原へたどるのだ。

三十日、いよいよコルVより上部の壁のルート工作がはじまった。はるか上の懸垂氷河の氷の一かけらでも崩壊すれば、この壁は一面にその破片に洗われる。ただいのるだけだ。下部岩壁部に五十メートル六本のフィックスをする。そして懸垂氷河の乗越しにある程度目安をつけた所で、全員BCで休養日をとった。

七月に入ったBC付近は、一面のお花畑である。のんびりと草の上になねころび、はるかかなたのハラモシュの頂上を眺めながらの昼寝も、たった一日だけだ。七月五日には、C4までのそれぞれキャンプに入り、後半の態勢を整えた。しかし、翌六日よりモンズーン第一波がやってきた。上部では雪になる。この日より丸六日間停滞がつづいた。七月十二日、やっと晴れあがり、各キャンプは上部への行動を始めた。しかしこの日は新雪にうまったフィックスロープの掘り出しや、ルート整備についてやした。

十五日、ついに問題の懸垂氷河を乗越し、上部雪田六一〇〇メートルにC5を建設した。ここは広い緩傾斜の雪原の中にある、雪崩のおそれのある場所でもある。しかしここまでくれば、この先のルート自体にそんなに問題となる所はないはずである。この雪原をたどり、西稜の肩六六〇〇メートルにC6を建設したのは十七日となった。ここまできるとハラモシュの南に位置するナンガ・バルバットがはるかに見られる。

この西稜の肩から、ルートは南側のイシユカバル氷河側をまいて、最初の岩峰を越したコルに上る。西稜の広い雪稜をあえぎながら登る。ここまで上ると、空は黒ずんだ青色である。二十日、約七〇〇メートルの地点に、アタック・キャンプとなるC7を建設した。ここから頂上まで高度差四〇〇メートル、すぐそこである。しかし強烈な頭痛と倦怠感で、キャンプ設置に苦勞する。この日C7に、島方、磯野、錦織の三名、C6に長谷川、佐々木、小野寺、内田の四名が入り、明日からのアタック態勢は整った。

しかし、翌日よりモンズーン第二波の来襲である。隊員の高度障害もつづいて、停滞となる。翌二十二日、C7の三名は心もち弱まった風雪のあいまをみて、アタックを決行する。チャンスは今日しかないかもしれない。頂上から南西にむけて顕著な稜が一本おちている。これが頂稜と思われる。西稜上にあるC7から、その稜へは尾根はつづいておらず、急な雪壁を登り、その頂稜へ上ることになる。

四時、まだうす暗い。天幕を出て、アンザイレンをする。視界はよくない。ここからはスタカットによる登攀となる。フィ

ックスはすべて使いはたしてしまつた。雪崩そうな雪壁をラッセルしながら進む。やがて頂稜に出た。稜上の岩にハーケンを打ち、確保する。ここからはやせたナイフリッジになる。すこし行くと大きな岩に行手をさえぎられる。左へまわり込み、再びリッジに上る。次は両面に雪庇をもつた稜である。慎重に進む。天氣がよければ高度感のある所だろう。やがて広い緩傾斜の雪面に出ると、その向うは頂上である。十二時十分、ついに頂上に立つ。やや広い台形状の雪のピークである。心もち頭上に青空がでてきた。しかしそれもまわりの山々を一望できるほどではなかつた。まるで一瞬の間隙であつた。C6の仲間への通信、旗をふっている写真を交替でとったり、頂上の雪の中に物をうめたり、約一時間ほどいただらうか。天氣は一向によくならない。

まわりの山々がまつたく見えない頂上には長居は無用である。さっそく下山にかかる。登つてきた時のトレースはまだ残っている。しかし視界は悪く慎重に下る。さきほどの大きな岩をまわり込み、雪面を下る。ここまでくるとトレースもかすかになり、腰までのラッセルである。やがて見なれた露岩が見えてきた。やっとC7にたどりつく。十六時頃だつた。

翌日好天になれば、C6から一気にアタックということも考へられた。しかし翌二十三日は前日にもまして悪天となつた。第二次アタックは中止と決定する。C7の三名は吹雪の中をC

6に下る。C6よりのサポートを受け無事C6に帰る。登頂の喜びもつかのま、この吹雪がいつまでつづくか、苦しい食糧制限に入らねばならない。降雪時に、雪崩の恐れのあるC5へ下ることはできないのだ。

二十八日、やっと天氣は回復した。早朝から行動を始める。三名が先発する。日があたつてくると、足元から板状に雪面が流れる。必死の下りである。天幕のはつていないC5は案の定埋没していた。若干の食糧、装備類が箱に入れて置いてあつたが、思いあたる所をピッケルでさがしてみるが、特徴のある地形ではないので結局わからずに放棄する。C4へ下ることになる。懸垂氷河の崩壊の恐怖の中を次々に懸垂下降していく。岩壁も新雪をかぶり、トップはフィックスを掘り出しながらの下降となる。やっとコルVにおりたち、C4に全員集結する。

七月三十一日、全員がB Cに下り、五十九日間に及ぶ登山活動は終つた。

おわりに

私たちのハラモシユ登山の二つの目的、新ルートからの登頂と、登攀隊員全員の登頂の内、後者はあいついだモンズーンのために達成しえなかつたが、登頂前日にそのための準備だけはととのえられていた。また前年度の偵察の失敗から考へて、充分な偵察期間をもうけたことで、期間的に長くなつたことは

あるが、その間初期の高度順化を充分行なえたというメリットもあつたと思う。またBC以上ではハイポーターを使用しなかつたので、荷上げによる順化もよかつたと思う。しかし隊員一名がBC建設直後持病の自然気胸を再発し、彼自身思うような活動ができなかつたのは残念であつた。単一山岳会での遠征であり、たて割りの構成の利点もあつたように思える。

最後に、パキスタン北部の道路事情は非常に悪く、一雨ふれば土砂崩れで交通止めになり、開通の見通しのたたないこともあり、思わぬ時間をとられることがある。

(文責・島方健次)

△記録概要▽

隊の名称 一九七八年昭和山岳会カラコルム登山隊

活動期間 一九七八年五月～八月

目的 ハラモシユ北壁・北西支稜からの登頂

隊の構成 隊長Ⅱ島方健次(30)、副隊長Ⅱ磯野澄也(27)、登

攀リーダーⅡ長谷川信(27)、渉外Ⅱ小野寺斉(27)、

行動概要

食糧Ⅱ佐々木正人(27)、会計Ⅱ錦織良(27)、写真Ⅱ内田裕司(23)、装備Ⅱ大谷雅行(27)、医師Ⅱ藤井裕介(26)、LOⅡアームド・ファイアーズ・カーソン(24)

五月一日先発隊日本発。五月五日日本隊日本発。五月十日ブリーフィング。五月十四日スカルド着。五月十七日サシ着。五月十九日キャラバン開始。五月二十日イスケレ着。仮BC建設。五月二十二日偵察開始。六月一日BC建設。六月四日C1建設。六月十六日C2建設。六月二十二日C3建設。六月二十七日C4建設。七月十五日C5建設。七月十七日C6建設。七月二十日C7建設。七月二十二日島方、磯野、錦織ハラモシユ登頂。七月三十一日BC集結。八月十二日キャラバン開始。八月十四日サシ着。八月十八日スカルド着。八月二十四日ビンディ着。八月二十八日デブリーフィング。

ヌン西稜（一九七八年）

沖 允 人

第三キャンプ（五八〇〇メートル）のテントが半分ほど燃えてしまい、安藤隊員が顔面に大火傷をおってしまった、という緊急連絡が第一キャンプ（四九〇〇メートル）に入ったのは八月二十一日の夕方であった。ハイポーターの一人が、ガスコンロのボンベを新しいものに交換しようとして操作を誤まり、ボンベからもれ出たガスに、すでに点火していたもう一台のガスコンロの火が引火して爆発的に燃えてしまったという。

明日、頂上へアタックを試みる計画は一時延期しなければならぬだろうか……、安藤隊員をどうして下のキャンプへ収容しようか、いやそれよりもとりあえず第三キャンプの四人にどのようにして今夜を過ぎさせるか……。

しかし、名案はなかった。とにかくありあわせの装備で何とか今夜を持ちこたえてくれと飯村隊員にたのんで、トランシーバーの交信を打切った。

このテントが焼失したという連絡を聞いてから、それまでそれほど気にしていなかったもう一つのことも、急に心配になってきた。今朝、第三キャンプを出発して第四キャンプ（六二〇〇メートル）に入っただけの東隊員以下2名からの連絡が杜絶えていたのである。トランシーバーの故障だろうかとは思うのだが、悪いことは重なるような気がして心配でならなかった。

*

ヌン・クン山塊は、土地の言葉でセール・メールとも呼ばれ、「塩の岩、水晶の柳」の意だという。また「スルの王様」という意味もあるといわれる。インド・カシミール・ヒマラヤの盟主である。

カシミール州の湖と森の街、スリナガールから、砂と石ころばかりのラダックの街、レーへむかう自動車道路のほぼ中間の地点にある、カルギルの街から南へ分れ、スル川沿いの道をさ

かのぼって行く。道の両側は赤茶けた岩山ばかりで、樹木とはいえば、川沿いに少しばかり植林された柳が、うすみどりの細かい葉を力弱く風になびかせているのを見掛けられるくらいである。

カルギルからこのような風景の中を約六十キロメートルほど走ると、数軒の民家が点在しているメータの村に着く。通常なら、カルギルからこの村を通過して、ヌン山麓のタンゴールの村まではトラックで入れるのだが、私たちがヌンへむかった年の夏には、季節外れの豪雨があり、土砂が山から崩れ出したため、カルギルから少し入ったところで不通になっていた。小川登攀隊長の率いる本隊の隊員八名とシェルパ二名は、不通個所の両側でうまくトラックを掴まえて乗り替えをし、一足先にタンゴールの村に到着していた。私とリエゾン・オフィサーの二人は登山手続のために入山がおくれ、本隊を追ったが、その時は都合のよいトラックの便はなく、やむなく馬でタンゴールへむかったのだった。そして、その途中、日が暮れてしまい、メータの村で一泊することになった。

次の朝、暗いうちから起きて待っていたが、肝腎の馬が一向にやってこなかった。お茶をのみながらなかなか腰を上げる気配のない馬方をせかせると、つないでいた馬が、山の上方へ逃げてしまったので、今、村の人につれにいつてもらっているというのんびりした返事だった。

いらいらする気持をおさえながら、外に出てみると、思わぬ大ききでヌンの純白の姿が目の前にあった。左右に肩を張り、雪をびっしりとつけたヌンは、とれたたの「塩」を思わせる。まさにヌンは氷の水晶と塩の山である。左側には、少し傾いたような西壁の一部と、それに続く東へのびた雪の東稜で特徴的な、三角定規をふせたような形をしているクンが続いている。

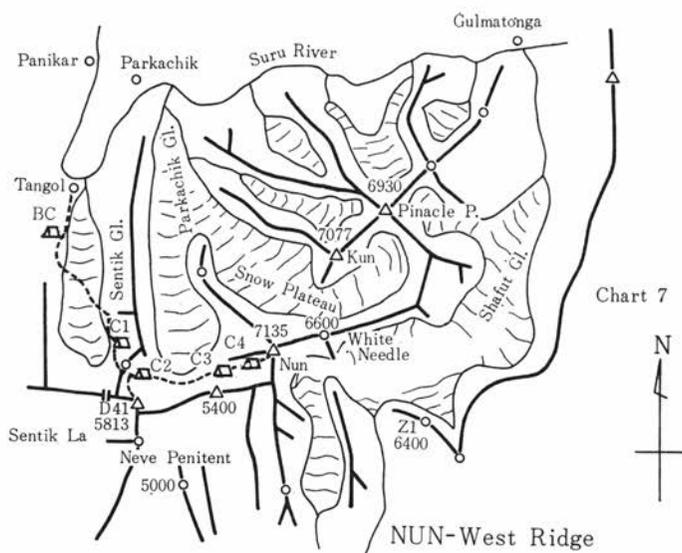
一九七四年の秋、日本人として初めてヌンの北面に接近したとき(文献(1)参照)の感激が、再び胸の底からわきあがるような気持である。あのとき一緒だった小川が今回も参加してくれている。そして、一九七五年には、前年の偵察をもとに、西郡光昭を隊長とする私たちの仲間がヌンの北稜を試み、頂上近くの六七〇〇メートルに達した(文献(2)参照)。今回の私たちの隊は、これらの経験をもとに三度目のヌンの登山にやってきたのである。全期間を一ヵ月以内とし、山に入っている期間も約三週間におさえて、七〇〇〇メートル峰に登ってみようという計画である。一九七六年、パミールのレーニン峰を約一ヵ月間で登頂した仲間の経験と研究(文献(3)参照)もあって、成算は充分にあった。このためには適当な山をさがし出すのが第一の仕事であった。アプローチが短かく、ポーターも得やすく、登山のルートもそう難しくなく、できれば日本人の登っていない七〇〇〇メートル峰というところ、そんなに数は多くなく、いろいろと検討した結果、このヌンとガルワール・ヒマラヤのトリスル

(七二二〇メートル)などの数座が候補となった。この中で、
 自身の好みとこれまでの知識や経験から、ヌンを対象とする
 ことに決めた。なお、ヌンの登山のすぐあと、一九七八年の九
 月にトリスルも私たちの仲間の隊が同じような方法で登頂した
 (文献(4)参照)。

*

タンゴールの村から北側の急斜面を登り、センチック氷河
 から流れ出る川の左岸に、八月八日ベース・キャンプ(四一〇
 〇メートル)を建設した。日本を出発してから五日目である。
 センティック氷河をつめ、途中から支氷河を右岸へ渡って東
 へ折れ、速くからも見えている屋根の形をした岩山の下へ出、
 第一キャンプ(四九〇〇メートル)を設営する。そのすぐ右上
 に高差約四〇〇メートルのアイスフォールがある。写真から想
 像していたよりも急傾斜であり、両側がときどき崩れて無気味
 である。少し不安であったが、短期間の入山ということもあり、
 思い切ってこのアイスフォールの真中の一番安定している
 ところをほとんど真直ぐに上部へ抜けることにする。ルート工
 作をし、約四〇〇メートルのロープを固定した後でも、核心部
 を抜けるのは約一時間がかり、クレパスも多くて大変気を使
 うところであった。

ここを登りきると、スノープラトールと名付けた大雪原へ出
 る。正面のそぎおとしたような北壁の上の、首をねじまげて見



る位置にヌンの頂上がある。私たちがルートにした西稜への取付点は、このスノープラトローを六キロメートルほどむこう側に横断したところにある。うねうねと続くこのスノープラトローのトラバースは、雪に足をとられ、天気の良い日は焼けるように暑く、悪天の日にはリングワンドンデルングの危険のある、まさに忍耐力養成のコースである。

八月十一日、西稜末端にドーム型のテントを二張はった。前進基地となった第二キャンプ（五三四〇メートル）である。ここに、約二週間分の食料と上部キャンプの資材が集結された。

ここから、ルートは西稜を忠実にたどり、急傾斜のガラ場と氷の斜面を経て「カニノハサミ」と名付けた岩峰の上に出る。そこが第三キャンプ地点である。この間約千メートルのロープを固定した。そこからいったん五十メートルほど下り、クレバス帯をぬうように通過し、さらに上部の雪稜にルートを開き、ちよつとした台地に最終キャンプの第四キャンプ（六二〇〇メートル）を建設した。ベース・キャンプを設置してから十五日目である。オーソドックスなヒマラヤ登山なら、隊員はここでいったん高度をさげ、少し休養した後、頂上アタックにむかうところであるが、私たちは、隊員の順化の程度、体力と気力、そして天候の推移などを慎重に考慮した後、思いきって頂上へむかうことにした。

第一次登頂隊が第四キャンプから頂上へむかうとともに、第

三キャンプの第二次登頂隊も頂上へむかう。それと同時に、第一キャンプから第二キャンプ、第三キャンプとサポート隊が動く。登頂隊は、頂上に立った後は第二キャンプへ強行下山する、という作戦を立てた。そして、続いて第三次頂上アタック隊を出し、全員登頂するという計画である。あと三日ないし四日、ヌン登山は成功裡に終るといふ明かるい希望が、各キャンプにみながっていた。

その前夜、第三キャンプが火事だという連絡である。不安と無念さで息がつまりそうであった。

第一キャンプのすぐうしろの岩壁から落ちてくる落石の音を聞きながら考え込んだり、うとうとしていたうちに八月二十二日の朝が近づいてきた。小川登攀隊長と八嶋隊員を起こし、急いで第二キャンプへむかわせる。

小川がアイスフォールの核心部にさしかかったとき、上部にラテルネの灯がちらりと見えた。人間だ！

どうしたのだろう、こんな時間にいったい誰がおりてくるのだろうか……。胸は重苦しく動悸を打ちはじめた。ラテルネの灯は消えたりついたりしながらおりてくる。消えているように見えるのはクレバスを渡っているのだろう。下からの灯りも上っていく。第四キャンプに何かあったのではなからうか……。

やがて三つの灯は一つになった。突然トランシーバーが鳴った。下ってきたのは安藤隊員一人だという。顔と手にひどい火

傷を負っているが、何とか気力で下山してきたのだ。アタック隊のブレイキになることをおそれ、命がけて下ってきたのだろう。第三キャンプでさえも酒を相手に過すという、どちらかといえば静かな男だったが、隊のことをまず先に考える芯のおおったところを見せてくれた。

第一キャンプに収容し、火傷の手当をし、抗生物質を飲ませて安静にさせる。そんなことをしているうちに、お昼近くなってしまった。しかし、上部の隊員からは何の連絡も入らない。

一九五三年のクロード・コーガン女史らのフランス隊によるヌンの初登頂のときは、私たちと同じ西稜がルートにとられた。頂上アタックのとき、広い雪面が崩れて九死に一生を得ている。一九七五年の隊も第二キャンプで雪崩にあっている。

不安な時間との戦いも、飯村隊員からの連絡で終りをつげた。十三時三十分、飯村、寺本、ナワンの第二次登頂隊はヌンに登頂したという連絡であった。そして、東、高橋、ニマの第一次アタック隊も十二時に登頂し、先刻、すれちがいに下山していったのに出会ったという。第二次登頂隊は、第三キャンプから頂上までの標高差千メートル余りを約九時間で登り切った訳である。第一次、第二次登頂隊とも、夜おそくなったがその日は予定通り第二キャンプに下山した。登頂の報は第一、第二キャンプへ同時に入った。第一キャンプのテントの中で安藤隊員もだまってこの報を聞いていた。

以下は高橋隊員の登頂記である。

八月二十二日、四時三十分起床。六時出発。昨日、第四キャンプに入ったときは一面ガスがかかって、ルートを発見することができなかったが、今は登ろうとするルートが明瞭に見出せる。三人でアンザイレンし、南壁の方をめざし、斜め上にグングン高度を稼ぐ。二十日と二十一日の降雪はくるぶしまであるが、体調はベストだ。絶対に登りきるぞ、と何度も自分に言い聞かせる。寒気も昨日よりは一段ときびしい。

セラック帯の端の小さな雪壁に少々手こずる。ダブルアックスで抜け、小さい雪のプラトールに出る。九時三十分。高度六五〇〇メートルである。小休止。行動食をつまみ、写真をとる。上部の雪壁に目を走らせる。斜度は五十〜六十度。所によっては七十度はありそうだ。雪のプラトールを斜上気味に登り、さらに、頂上岩稜沿いにはぼダイレクトに登ることにする。堅雪の壁の上に新雪が付着し、ところどころに岩も露出している。昨晩の寒気で雪面がクラストしているので、雪崩の心配はなさそうだ。ビレーはピッケル一本、それと十二本爪アイゼンの出歯四本の確保なので登攀は気が抜けない。ただ、一歩一歩確実にステップを印すだけである。ニマも懸命に長いアイスパイルを振ってステップをきざむ。口数は少ないが良い奴だ。

約三時間の苦闘の末、西稜に抜け出る。高度約六七五〇メートルである。たいした疲労を覚えないのは気が張っているためだ。または昨日食べた餅のせいか。これが本当の力餅だ。頂上はもう目の前だ。頂上直下の西稜は、フカフカの雪のやせ屋根で、膝頭までもぐる。最後のひとあがきをし、十二時〇〇分、遂にヌンの絶頂に立った。

「コングラチュレーション！」ニマが祝福してくれる。感激の握手。

八月二十五日、第一キャンプからベース・キャンプを通過し、タンゴールの村へおる。運よく掴まえたトラックに乗って、その日の夜にはカルギルのゾージ・ラ・ホテルのベッドに横になることができた。翌日、スリナガルへ帰着した。スリナガルを出発してから、ベース・キャンプ以上で過した十七日間を含み、全日程は僅か二十一日間であった。

スリナガールのグリーン・エコー・ホテルの庭には、リンゴの原木があつて、夏の終りをつげる風に濃い緑の葉がそよいでいた。

△記録概要▽

隊の名称 一九七八年日本ヒマラヤ協会カシミール登山隊

活動期間 一九七八年八月四日～九月三日

目的
ヌン（七一三〇メートル）の短期間登頂

隊の構成

隊長Ⅱ沖允人（43）、登攀隊長Ⅱ小川務（33）、会計Ⅱ鈴木正規（47）、装備Ⅱ安藤忠夫（34）、先発Ⅱ飯村富彦（33）、輸送Ⅱ高橋太一郎（30）、食料Ⅱ東英樹（28）、食料Ⅱ八嶋寛（27）、装備Ⅱ寺本政幸（27）、LOⅡファリッド・ハッサン・カシミーリ（30）、シェルパⅡニマ・ノルブ（27）、ナワン・トンダップ（26）

行動……

八月五日スリナガル着。八月八日タンゴール着。
八月九日センチック川BC（四一〇〇メートル）着。八月十日C1建設（四九〇〇メートル）。八月十一日アイスフォールを突破し、C2建設（五三四〇メートル）。八月十六日西稜上にC3建設（五八〇〇メートル）。八月二十一日上部雪稜にC4建設（六二〇〇メートル）。八月二十二日飯村、東、高橋、寺本、ニマ、ナワン、ヌン登頂。八月二十三日小川、鈴木、八嶋、高橋、D41峰（五四一四メートル）に登頂。八月二十五日BC撤収。八月二十六日スリナガル着。

報告書

『カシミール・ヌン登頂 帰国報告書』日本ヒマラヤ協会（一九七八年十月十四日刊）

「ヌン峰・スピード登山」『岳人』第三七七号（一

九七八年十一月

文 献

- (1) 「ヌン・クン北面偵察」『岩と雪』第四十一号（一九七五年二月）
(2) 『カシミールの盟主 ヌン・七一三五m』日本ヒマラヤ

協会（一九七八年四月一日刊）

- (3) 『パミールの山と草原』日本ヒマラヤ協会（一九七七年十二月二十日刊）
(4) 『トリスル二十八日間・一九七八 TRISULU 七一〇』日本ヒマラヤ協会（一九七八年二月二十五日刊）

ヌン東稜（一九七八年）

伊丹紹泰

はじめに

明治学院大学創立百周年記念事業の一環として派遣された登山隊は、未踏の東稜よりヌン登頂をめざし、東稜からの初登頂を果たした。以下はその記録である。

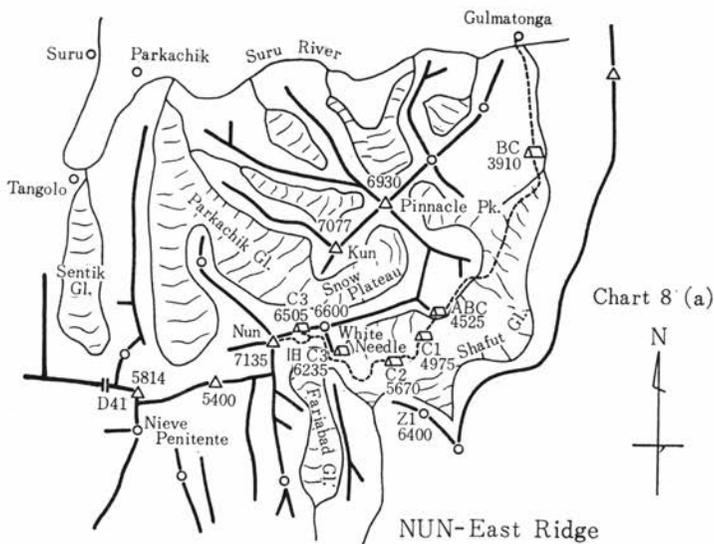
ヌンは、山容の秀麗なこともあいまって、古くから多くの探検家や登山家を魅了してきた。一九五三年、ベルナル・ピエールの率いるフランス隊によって、西稜からの初登頂がなされた。また一九七六年には、チェコスロバキア隊が北稜からの初登頂をしている。そして私たちは新たな課題、東稜をめざした。

A B C に至る道

九月十七日早朝、コーランの読経が家々の甍を包み、停車場

では粗末な着衣のクリーたちが、生活の糧の荷物をうばいあつてゐる。私たちは、喧噪の街、水と緑の都スリナガールを出発した。隊荷をカシミール州政府の輸送トラックに積み込み、隊員たちは二台のジープに分乗した。ゾージ・ラを越えると周囲の様相は一変し、ドラスを過ぎると乾燥地帯が始まった。インドス河にスル川がそそぎ入るバルティの街カルギル、ここからレーへの道と別れ、スル川に沿って進む。サンコー、パンカールと途次の村々は、折から収穫期で人々があわただしく立ち働いている。背中いつばいに草を背負った女たちが、路傍に車をさける。家畜たちの冬草なのだ。荒涼とした土地を縫っていく。

ヌン北面の村、パルカチで、山羊の買い入れとポーターの契約を終えたのち、シャフト水河入口、スル川の渡渉点グルマトンガに降り立った。平原の草いきれが秋の深さを物語る。晩秋の



風が吹き渡り、スル川の水面をさわめきたてる。「四季」の秋の旋律を思いおこす。デリーを出発してから四日目のことであった。

九月二十日。身を切るような冷たさのスル川の浅瀬を選んでポニーで渡渉し、シャフト氷河舌端のモレーン上に隊荷を移動、ベース・キャンプを建設する。シャフト氷河の源頭に未踏のZ1を望見する。偵察行ののち、荒れた単調なモレーンの中にルートを見出し、九月二十二日ABCを建設する。風邪をひいた松葉、ナムギャルをしばらく休養させ、他の隊員で高度順化を兼ねて荷上げを開始した。隊員をA（伊丹、ダラムチャンド、グブドラム）、B（永川、村松、ルブドラム）、C（高橋、斉藤、タラチャンド）、D（小堀、松葉、ナムギャル）に分け、登攀活動を行なうことにした。全隊員には全員登頂を目標とし、頂上への人一番強い意志の保持と、隊への献身、没我の精神を要求した。

比較的順化の早い伊丹隊は、最初にABC入りし、流水が得られ、雪原が始まる地点をC1（四九二五メートル）とした。C1からのルートは、クレバスの危険を除いては技術的に困難な個所もなく、机上の計画よりも早く工作が進んでいた。九月三十日、C2予定地を、ホワイト・ニードルとクンを結ぶ尾根から派生している支尾根上に定め、ABCへと下った。十月一日、全員がABCへ集結し、今後の登攀活動に備え、つかの



Plate 8-(c) : ヌン頂上からの展望, クン (左端) とピナクル・ピーク。

View from the summit of Nun, look to Kun (left edge) and Pinnacle Peak.



Plate 8-(d) : ヌン東稜C2 より望むキシトワールの山々。

Kishtwar Himalayas from Nun East Ridge C2.

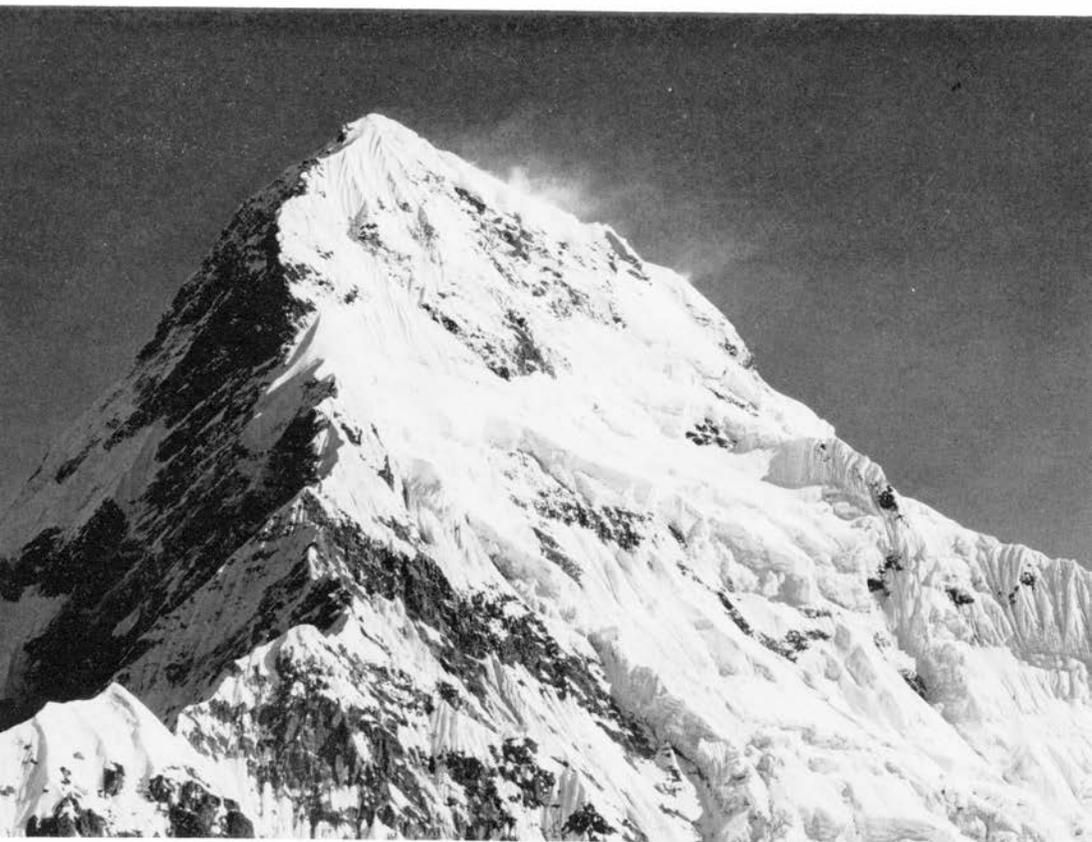


Plate 9 : アンナプルナ南峰 (7,219 m) — C1 (5,700 m) より望む南西稜の全容。

Annapurna South (7,219 m)-South West Ridge seen from C1 (5,700 m).

(by T. Kouno)



Plate 10-(a) : ゲントII峰 (7,343 m) —デバック峰 (C. 6,900 m) より望む。

Ghent II (7,343 m)—seen from Mt. Depak (C. 6,900 m).

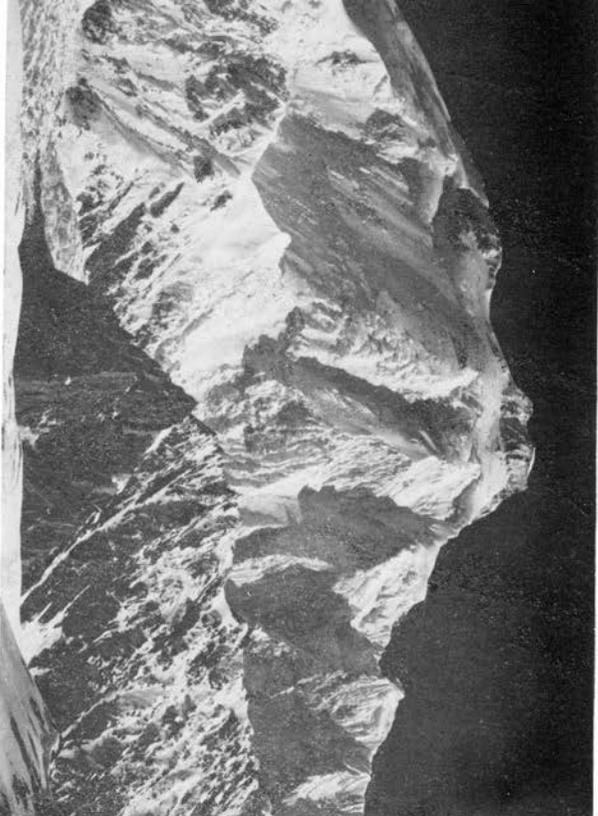
(Plate 10(a)~(d) by T. Takenaka)



Plate 10-(b) : ゲントⅡ峰—C4 (6,100 m) より望むデバック峰。

Mt. Depak seen from C4 (6,100 m) of Ghent II.

Baltro Kangri (7,350m)



Conway Saddle (6,300m)



Sia Kangri (7,422m)

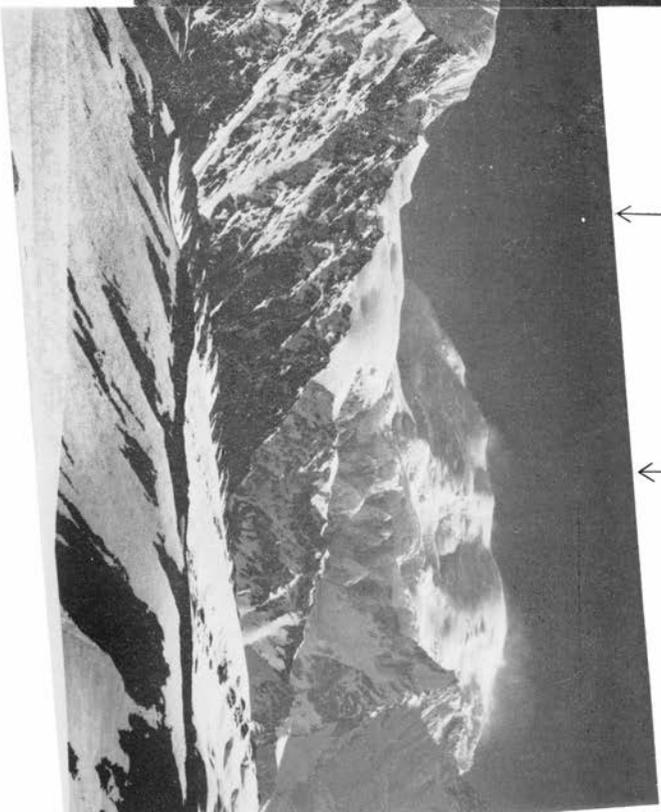


Plate 10-(c) : コンダス氷河上 4,600 m 地点から望むバルトロ・カンリ (左) とシア・カンリ (右)。

View from point 4,600 m on Kondus Glacier.

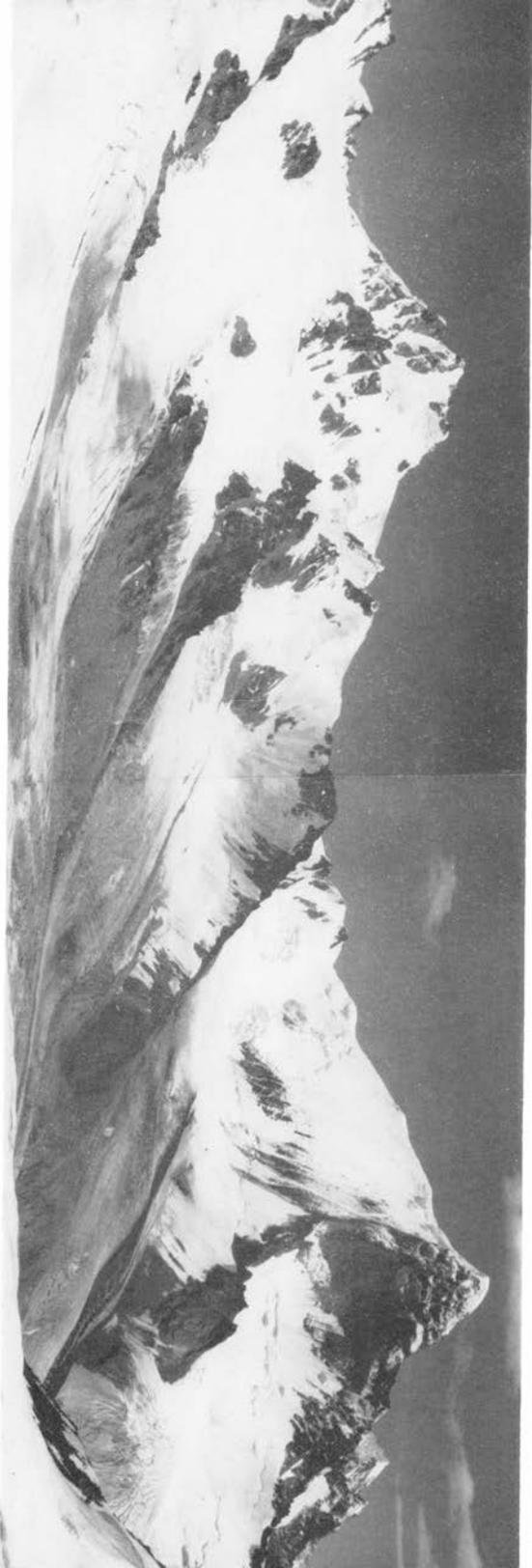


Plate II-(a) : ミルザ・カンヤール米河の西側コルより東方を望む—(右) 鶴ヶ峰 (C. 6,300 m) —伝佈。
Looking east from the western col of Milza Kaphal Glacier—(right) Tsuruga-Mine (C. 6,300 m)

(Plate II(a)~(c), by M. Yamamura)



Plate 11-(b) : 乳首山 (仮称) 頂上より東方の無名峰 (C. 6,500 m) を望む。
Unnamed peak (C. 6,500 m) seen from Chikubi-Yama.

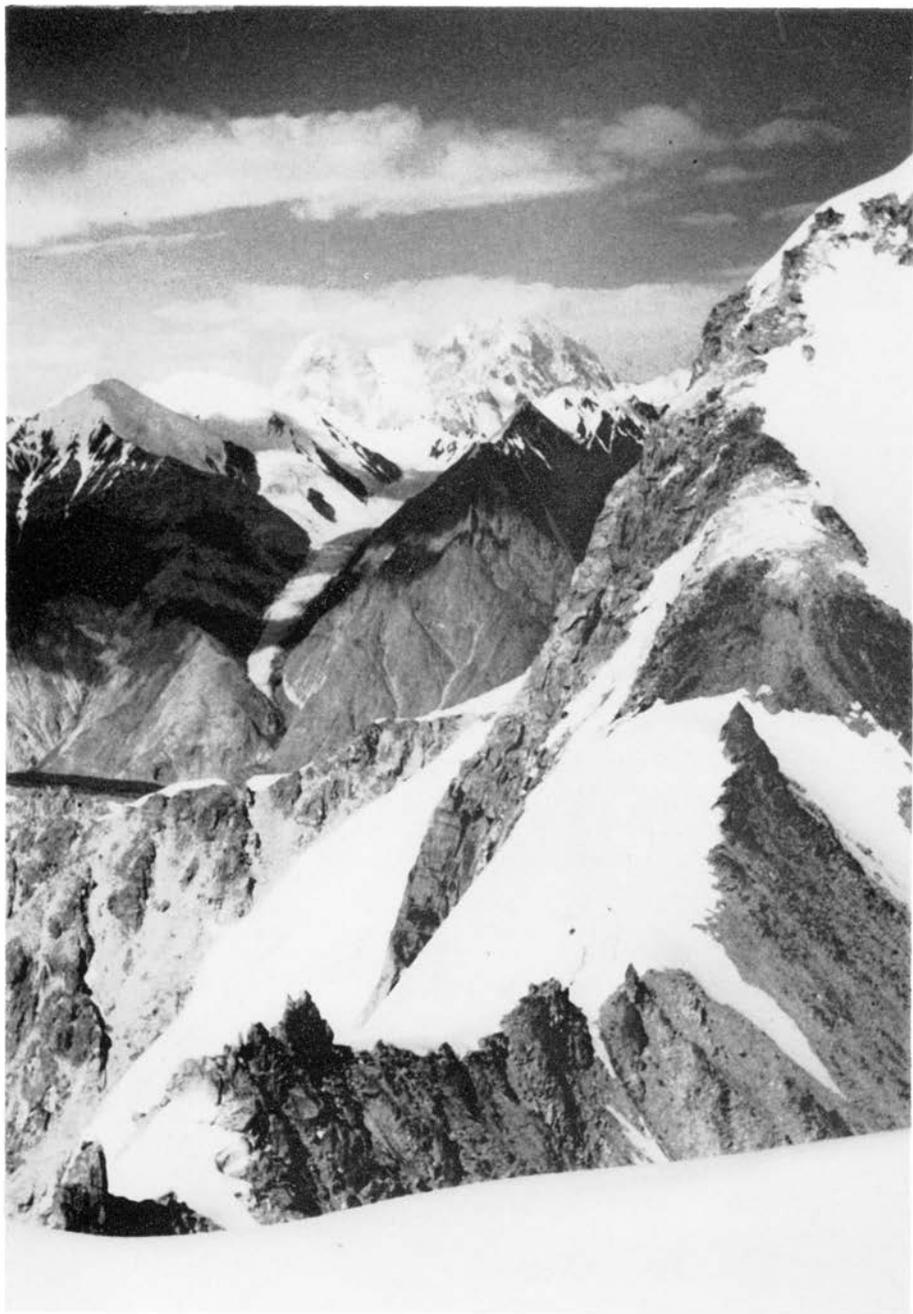


Plate 11-(c) : 南ハスラット氷河 5,858 m 峰支稜よりリモ山群を望む。
Rimo mountains seen from South Hasrhat Glacier.



Plate 12 : 日高山脈ペテガリ岳 (1,736 m)

(撮影 : 日本大学山岳部)

間の休養とした。

登攀活動

十月二日、本格的なキャンプ作りが始まった。天候も幸いし、順調に荷上げが進む。C2直下の氷壁に八十メートルのロープを固定する。六日に伊丹隊、七日に永川隊がC2入りをす。八日、両隊によりホワイ・ニードルから伸びる尾根上を六二三〇メートルまでルート工作をし、そこをC3予定地とする。そしてアタックに備え、班ごとにA、B、C、Dと順次B Cへ休養に下る。

十二日、再びC3を占拠する。穂高に逝った大島、羽山両先輩、鈴木の写真がビニール袋に入れられて高橋から届けられる。翌十三日、頂上へ向かってルート工作を開始し、寒気と強風の中、ホワイ・ニードル(六六〇〇メートル)を経由し、デフィカルト・ピットのコルまで八〇〇メートルのロープを固定する。コルから見上げると、岩と雪のジャンダルムが挑戦的に立ちほだかり、われわれを威圧し、前進を阻止していた。

十四日、朝食時に、ダラムチャンドが不調を訴える。グブドラムもカンチェの時の凍傷が再発したという。その日はダラムの調子を診るため休養とする。下部のキャンプでは、當々と荷上げが続く。十五日、食欲もなく、口数も少なく、横になっているダラムを下らせることにする。私がダラムと共にした登山

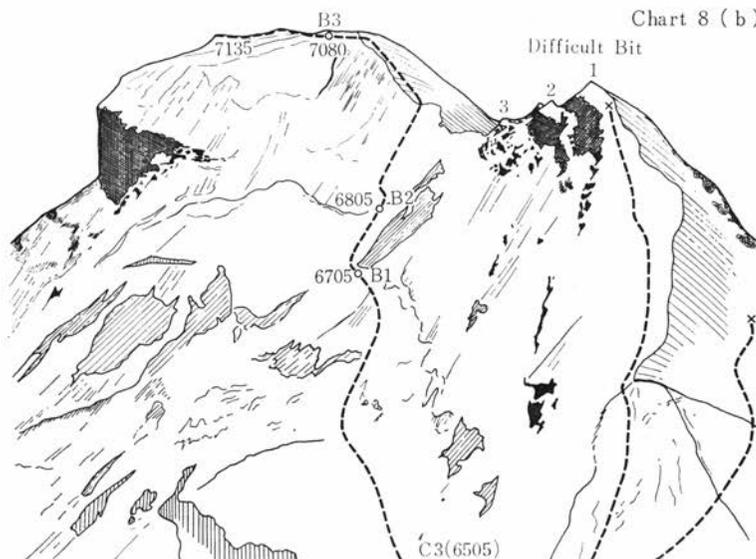
中、彼は弱音をはいたことも、不調を訴えたこともかつてなかった。C2まで義弟のグブドラムを同行させた。

十六日、昨日C3入りした永川隊と伊丹の四名で、デフィカルト・ピットを攻撃する。しかしピーク直下五十メートルまで固定ロープが張れたのみであった。悲観的なルートの状況に加えて、相馬ドクターからABC用主食の米が残り少なくなつたことと、リエゾンのパタック教授がデリーへ帰りたがっている旨の報告が入る。

十七日、元気な高橋隊と永川隊により、再度デフィカルト・ピットにいどむが、急傾斜と足元からくずれる不安定な雪質のために、新たに四十メートルをかせいだのみで、傷心のおもちで帰幕する。

小堀隊長、伊丹でトランシーバーを用いて作戦会議を開く。東稜の解釈をめぐり、「デフィカルト・ピットを忠実に攻撃するべきだ」という案と、「デフィカルト・ピットを回避するトラバース・ルート(バルカチ側あるいはシャフト側)をとつても、東稜は東稜だ」という二案に別れた。ホワイ・ニードルを越えての時間的な損失をなくすため、現在のC3をデフィカルト・ピットのコル(六五〇三メートル)へ移動することにする。ナムギャル、ダラムが病気で倒れ、グブドラム、ルブドラムの凍傷の再発と、相次ぐハイポーターの故障に士気の下は否めなかつた。キャンプを移動することは、デフィカルト

Chart 8 (b)



The upper part of Nun with route and bivouacs marked.

ト・ビットと頂上に対する意欲の集中、隊員間の士気高揚を図ることを目的とした。

十八日、予定通りC3を移動する。この時点でジャンダルム攻撃を放棄する。温度計は毎夕六時、マイナス三十度以下をさすようになった。

十九日、疲労の色濃い永川、村松をC2へ下らせ、休養のうち登頂隊の収容に当たらせることにする。風雪をついて、伊丹、高橋、斉藤で南北両面を偵察する。この結果、南面シャフト氷河側は雪は深い、クレバス帯を迂回してデフィカイカルト・ビットの部分避けてトラバースしたのち、東稜に直上可能と判断する。夕刻、雪まみれの小堀隊長、松葉がC3に入る。私は咳とたんに悩まされ、仰臥して睡眠がとれず、ここ二、三日間すわったままで寝たが、それが肺水腫の初期症状であることを自覚していた。

二十日、猛烈に寒い。毎夜、登山靴は寝袋に入れて寝るのだが、毎朝靴をあたためてはくのがひと仕事だ。混合ガスの出も悪く、炊事に時間を取られるようになってきた。私の役目は今日が最後だ、と意を決して外に出る。クランポン等、登攀具を掘り出す。凍つた雪面を無情の風が吹き抜けてゆく。明後日二十二日からの登頂を推し進めるために、南面のトラバース・ルートへできる限り固定ロープを張ることにする。視界は悪く、その上雪は胸までもぐる。高橋他の登頂隊員たちの体力

を温存させるために、私が終日トップに出る。身体は鉛のように重く、自分の意志で制御できない他の物体のようだ。登頂の成否はC班高橋、斉藤にあると私自身は考えているのに、この日私を確保する高橋の体調が非常に悪く、トレイルをたどるのがやつとのような。後方で斉藤、松葉がロープをくり出すのが、ガスの切れ間に垣間見える。遅々としてではあるが、クレパスを避けながら着実に固定ロープを伸ばす。切れ飛ぶガスのかなたに、ディファイカルト・ピットを迂回し終えたことを確認する。高橋を呼び、東稜へと直上するルートを打ち合わせ、すべてを託す。

「これで終わった」

私の仕事は終わったと思った。カチンカチンに凍った固定ロープに導びかれて帰途につく。ピッケルを持つ手が切れるように痛い。まつげ、まゆ、口ひげ、鼻毛が凍り、冷気にさらされた顔面はひきつったようだ。夕刻六時、頂上への見通しもたち、一日の行動に満足して帰幕した私は、睡眠薬を服用して眠りについた。

登頂まで

十月二十一日、私の下るべきときがきたようだ。昨夜小堀隊長と相談の結果、六名を三パーティに分け、C3よりビバークを積極的に入れてアタックさせることに決定する。同じテント

の高橋、斉藤に最後の指示を与えてテントの外に出る。小堀隊長、松葉、高橋、斉藤と握手をする。涙でゴーグルが曇る。

自分で固定したロープに導びかれて、ホワイト・ニードルの頂稜に出る。C3も背後になった。張り出した雪庇のかなたに、ナンガ・バルバット、カラコルムの山並が傷ついた私をなぐさめてくれる。そして、しばらくヌンと対峙する。昨日、胸までもぐる深雪と苦闘して得た到達点を確認する。自分の行為に対する満足感と、頂上へ背を向けて戻らねばならない悲しみとが複雑に錯綜する。登頂隊員がたどるであろう東稜から頂上への、予期されるルートを目で追う。先行するグブドラムが心配そうに引き返してくる。今では彼の頬もやせこけ、ひげも伸びほうだいで、若き日のヘルマン・ブルーに似た小綺麗な男のみる影もない。さらばヌン、と一瞥を送り、ホワイト・ニードルの雪壁を下った。

二十二日、双眼鏡とトランシーバーとの生活が始まった。小堀―松葉、永川―村松、高橋―斉藤の三班が頂上へ向け出発した。最後の仕上げをするために。足早に忍び寄る冬、時間との闘いである。その日夕刻四時、彼等は、小雪降る中、六七〇五メートル付近の斜面でビバークした。二十三日午後、村松の顔面浮腫がひどく、登攀続行は不可能という永川の進言を受けて、永川―村松はC3へ下降させた。

二十四日、快晴のうちに一日が始まった。村松がC2へ帰っ

てくる。飛び交うガスにかき消され、東稜上での苦闘を見ることはできず、安全を祈る以外に手だてはなかった。十二時半、トランシーバーに緊迫した松葉の声が飛び込んできた。

「小堀隊長が東稜直下でスリップをしました。事無きを得たものの、動揺と疲労の蓄積がひどく休んでおります」

私は血の気の失せるのを覚えた。小堀隊長と交信し、松葉と共にC3へ下ってもらうことにする。東稜をゆくのは、高橋と斉藤だけになった。長い沈黙ののち、夕刻五時、北稜とのジャンクション付近で、二人は三度目のビバークに入った。小雪が舞い始め、緊張したムードがキャンプ間を流れた。彼らへの想いと、焦燥と不安が癌細胞のように私の内部に拡がった。深更、強風がテントを打つ。

二十五日、一晚中開局したままのトランシーバーが醸す（醸す）ジージーという雑音でハッとわれに返る。万一のときの、二人の遺体の収容方法をまじめに考える。睡眠不足の重い身体で、テントからはい出す。乳白色の霧が下部の谷間にたたずみ、すべての山々がつかの間の休息から目ざめ、夜の帷子（かたびら）を脱ぎ去ったばかりであった。太陽が東面の雪壁を繊細な真紅の指で愛撫しはじめた。双眼鏡で雪煙の乱舞するヌンの頂上を追う。高橋たちは無事だろうか。

ABCの相馬ドクターから、朝の一声が入る。頂上手前に黒い点が見えるという。指示された頂上部を双眼鏡で追い求め

る。間もなくもたらされるであろう栄光の報への期待に胸がときめく。「もうすぐ終わるのだ」と自分に語りかける。

高橋から連絡が入った。頂上直下でタバコを吸いながら休んでいること、斉藤の体調も良く、登頂は時間の問題であることを告げてきた。

八時四十二分、二人は頂上に立った。あとからあとから涙が頬を伝う。ABCからトランシーバーで祝いのメッセージを送ってくる。感動はない。登頂した二人の強固な意志と、それをささえた他の隊員たちへの感謝の念だけだ。

撤収

十月二十六日、「風林火山」の相言葉通り、C3、C2からいっきにABCへ下る。日焼けした高橋、斉藤の顔には、女神の祝福と苦闘を克服して得た歓喜との刻印が深く刻み込まれていた。

終りに

ヌン遠征にあたり、明治学院大学、日本山岳会等多数の人々に、物心両面に亘りたいへんお世話になった。特に一九七六年ナンダ・デヴィ隊の友人加藤、小林、小原さんたちは、未経験な私たちに適切な助言を与えてくれた。また、鹿野隊長には精神的に負うところが大きかった。スリナガール、ダル湖上のハ

ウスボートの一室でアドバイスを受けた日々が昨日のようだ。お世話になった方々に誌上を拝借してお礼を申し上げる次第です。

△記録概要▽

隊の名称 明治学院大学ヒマラヤ遠征隊

活動期間 一九七八年九月～十一月

目的 ヌン東稜からの初登頂

隊の構成 隊長Ⅱ小堀一政(33)、隊員Ⅱ伊丹紹泰(28)、永

川憲明(28)、高橋健司(25)、松葉光雄(23)、

斉藤繁也(22)、村松茂(21)、医師Ⅱ相馬民太郎

(29)、リエゾンⅡP・パタック教授(31)、ハイ

ポーターⅡダラムチャンド(29)、チリン・ナム

ギャル(38)、グブドラム(28)、ルブドラム(27)、

行動概要

タラチャンド(40)、コックⅡラマ・タシ・ザン
ブー(54)

九月十四日デリー出発。十六日スリナガール着。

二十日BC(三九一〇メートル)建設。二十二日

ABC(四五二五メートル)建設、二十八日C1

(四九二五メートル)建設、十月六日C2(五八

七〇メートル)建設、十二日旧C3(六二三五メ

ートル)建設、十八日C3(六五〇三メートル)

建設。二十五日登頂。二十八日撤収(グルマトン

ガ集結)。

十月三十日～十一月六日ザンスカール騎馬旅行。

八日スリナガール着。十日デリー着。

アンナプルナ南峰（一九七八年秋）

— 南西稜の登攀 —

河野 照行

計画と作戦

私達は一九七五年のチューレンヒマール西稜に続き、一九七七年にはヒマルチュリに遠征隊を送り、これらを通じて多くの成果と苦い失敗を経験してきた。これら過去の遠征隊がどちらかというところドックスな方法で登山を展開してきたのに対し、今回の計画はより小人数で軽量かつスピーディな登山を目標として進められた。具体的には登山期間はBC建設後二十九日間、キャンプ数は三（BC、C1、AC）とした。各キャンプ間の高度差が大きくなり、そのため高度順化に問題が生ずるが、BC建設以前に高度順応期間を設けて順応をおこなうことにした。そしてフィックストロープを頂上付近まで張りめぐらせることによって、スピードと安全性を確保することとした。以上の基本方針に基いて計画が立案され、炉辺会海外登山委員

会の承認を得た。

アンナプルナ南峰は毎年のように各国の登山隊が挑んでいるが、その割には成功率の低い山である。面白いことに成功した隊はすべてポストモンスーンの隊であり、これには何かポカラ特有の気象などが関係しているのかもしれない。私達がルートとして選んだ南西稜は、ナイフエッジと岩稜の続く尾根であり、一九七四年ブレモンスーンに蒲郡山の会隊が挑んでいるが荒天や二度にわたる南壁からの大雪崩などにより六〇〇〇メートルで登攀を断念している。

登山活動

九月七日、隊員六名、シェルパ六名、総勢十六名がポーター百十一名と共にポカラを出発、キャラバンをスタートした。連日雨とヒルに悩まされたキャラバンであったが、ポカラを出発

してから八日目、四〇五〇メートルのキユムロンコーラサイドモレーンに仮BCを建設した。翌日から六日間、四八〇〇メートルのBC予定地まで往復を繰り返して高度順化をおこなう。

九月二十日、BCを予定の南西稜取付台地に建設する。ここから先は第一岩峰下のルンゼから右上し岩場を抜けるコースを取る。岩場は三々四級。九月二十七日、四日間のルート工作の末五七〇〇メートルのピークをけずりC1を建設する。ここから見るめざすアンナプルナ南峰は堂々として立派である。しかし南西稜はC1から見るとAC予定地までアップダウンの連続で予想以上に高度の稼げない尾根である。ACルート工作を行うにも行く迄に三時間、帰りに二時間も要し効率が悪くなったため、十月三日、やむを得ず五七七〇メートルのコルに予定外のC2を建設した。

登頂前後

六〇〇〇メートルラインを越すあたりから徐々に高度が稼げる様になった。しかし岩場も難しくなり極端にやせたナイフェッジが続き、六四〇〇メートル地点、氷壁の基部にやつとの事でACを建設し得たのはC1建設後ルート工作に十二日を費した十月十三日のことであった。稜線には雪煙があたり風が相当強い。フィックスドロープが不足し残り四四〇メートルばかり。稜線までフィックスドロープを張りめぐらせるにはさらに四〇

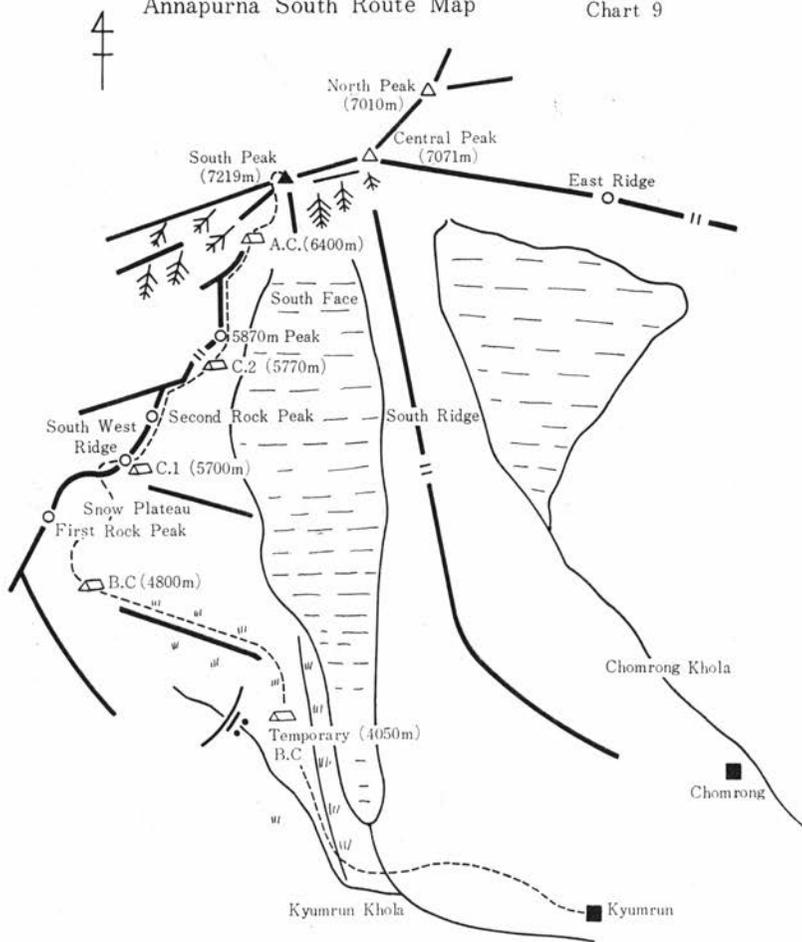
〇メートルは必要である為、急遽河野、宮川の二名でBC1C1間のフィックスドロープ五六〇メートルを回収した。加藤ドクターもC1入りする。十月末まで頑張れるよう、食糧、プロパンの荷上げも完了した。C1より下はフィックスドロープを全て回収した為、連絡はトランシーバーのみになる。いよいよこの遠征も大詰めにきた感じである。夕方四時頃チベット方面から飛来したツルの一群がアンナプルナ南峰を越え南へ飛んでいった。あいにくガスがかかっており隊列は見ることはできなかったが、鳴き声は、はっきり聞くことができた。モンズンは完全に明けたようだ。

十月十四日 昨夜すこし積雪があつたが、風もなくきれいに晴れあがる。ナイター承知でC1より河野、宮川、綱川の三名で昨日回収したフィックスドロープ十四本をAC迄あげる。予想通り本日の頂上ルート工作隊は手持のフィックスドロープを使い果たし、六七〇〇メートル迄フィックスス工作をおこなつた。

十月十五日 風もなく快晴。頂上ルート工作隊はこの天気以南壁に順調にルートをのぼしていく。C1からは双眼鏡で彼らの動きが手に取る様に見える。トランシーバーによるC1からのルート指示に従い、頂上ルート工作隊は適確にルートをとらえ、ついに三時三十分三名が稜線に達した。南壁は傾斜約六十九度、部分的には七十度の箇所もある氷と雪のミックスした難し

Annappurna South Route Map

Chart 9



い壁であった。この快晴無風の好天もそう長くは続くとは思われないので、連日のルート工作に疲労はしているが、明日、三谷、中西の二名で第一次アタックをかけることを決定、その翌日には河野、宮川の二名で第二次アタックをおこなうこととした。アタック態勢は整った。各キャンプの人員配置は、A C、三谷、中西、C 1、河野、宮川、綱川、加藤ドクター、ピンゾー、ギャルツェンの六名。

十月十六日、月明りの中四時にA Cを三谷、中西が出発する。六時の交信ではすでに半分は登っているとのことと二人共元氣との事。河野、宮川は第二次アタックにそなえA Cに向けてC 1を出発した。アタック隊は七時に稜線に達した。河野、宮川はC 2にてトランシーバーを開局、C 1では綱川が双眼鏡でアタック隊の動きをとらえ、トランシーバーで我々に刻々と知らせてくる。スカイラインからアタック隊の黒点が消えた。裏側にまわりこんだようだ。八時四十五分待望の交信が三谷から入る。「八時四十五分南峰に到着しました。登頂しました」興奮した声が飛びこんできた。今迄の苦しさも、今、この瞬間実を結んだのだ。お互い自分の胸の中で喜びをかみしめる。稜線までフィックスドロップが張つてあるので、最も危険なアタック隊の帰還も安心して見守れる。午後十二時三十分アタック隊は無事A Cに帰幕した。

十月十七日 昨夜から風が強くなり心配するが、明け方にはその

風も弱まり、昨日と同じく四時、第二次アタックに出発する。七時三十分稜線に達し、九時二十一分、頂上に達する。チェーレンヒマールの時に比べて行動に余裕あり、頂上ではタウラギリ・アンナプルナ山群の大パノラマを充分楽しむことができた。

十月十九日 B C—C 1間に再びロープをフィックスし、昼食後C 1を撤収した。C 1より下は様子が大分変わっており第一岩峰は雪が融け岩が完全に露出している。四時三十分サーダー、コック、リエゾンの出迎えを受け隊員全員がB Cに下山した。安全な場所に降りてきたことでホッとすると同時に、皆の満足した顔を見て、この遠征が成功裡に終わったことを実感として感じた。

あとがき

小人数による七千メートル峰の短期速攻を目指した今回の登山であったが、隊員の内にヒマラヤ経験者は僅か二名であり、その為前半の高度順化には特に気を配った。この順応のうまくいったことが、今回の成功の大きな要因であった。

また長く険しい南西稜に対する認識の甘さが、フィックス用ロープの不足をもたらした。しかし結果的には、ルート工作に万全を期したことが、スピーディなアタックを可能にし、ひいては安全確保の意味でも有効であった。

最後に私達、アンナプルナ南峰登山隊に寄せられた多くの方々の暖い励まし、心遣いそして援助に対して、改めて感謝する次第であります。

△記録概要▽

隊の名称 明治大学ヒマラヤ登山隊一九七八年

活動期間 一九七八年九月～十月

目的 アンナプルナ南峰(七二一九メートル) 南西稜からの登頂

隊の構成

隊長 河野照行(27)、隊員 宮川良雄(28)、三谷統一郎(22)、中西紀夫(20)、綱川雅之(20)、医師 加藤賢明(27)、サード ダーダワ・ツェリン(33)、コック パサン(30)、ハイアルティエード・シエル パビンゾー(37)、ギャルツェン・ノルブ(30)、ハクバ・ドルジ(28)、ローアルティエード・シエル パアジワ(24)、ザンブー

行動概要

(28)、キッチンボーイ リテンディ(23)、マイルランナー カンチャ・タマン(30)、リエゾン・オフィサー コランジット(47)。

九月三日日本隊カトマンズ着。九月七日ポカラよりキャラバンスタート。九月十四日仮BC四〇五〇メートル)建設。九月二十日BC(四八〇〇メートル)建設。九月二十日C1(五七〇〇メートル)建設。十月三日C2(五七七〇メートル)建設。十月十三日AC(六四〇〇メートル)建設。十月十五日稜線(七〇五〇メートル)迄ルート工作終了。十月十六日三谷・中西第一次登頂。十月十七日河野・宮川第二次登頂。十月二十日登山活動終了。十月二十二日BC撤収。十月二十四日～二十八日アンナプルナ内院トレッキング。十月三十一日ポカラ着。十一月十一日帰国。

二人のマナスル登山（一九七八年秋）

— オリンパス・マナスル隊 —

清水 清 二

行動計画の作成と準備

当初、われわれは東稜からの登山を予定し、他の登山隊とノーマル・ルートでの競合を避ける考えであった。しかしネパール側では、東稜は、東面の一部と見なし、ノーマル・ルートとの同時許可は出さないとの方針であった。しかし、外国隊からのノーマル・ルートのキャンセルもあり、また国内でも関係機関の人の協力もいただき、どのルートを登っても良いこととなったので、ノーマル・ルートをとることにした。また、登山規則にある、許可を与えられる対象は、二人以上のパーティとなっており、二人でも許可する登山局サイドの見解も確認出来た。

われわれの今までのヒマラヤ登山の体験から見て、いかにヒマラヤに行った回数が多くとも、高所の順化は、その人の体

質、体力等により大きく異なると判断しており、今回も最少限、順応期間を考慮に入れたスケジュールを組んだ。六千メートルのキャンプ2まで六日間、七千メートルのキャンプ4まで登ったら下降して休養を取り、次に一気にアタックとして次のような基本日程を作った。

日本出発からキャラバン開始

五日間

往路キャラバン

十八日間

登山活動

十八日間

帰路キャラバン

十五日間

カトマンズ着から帰国

七日間

かつ、この日程に余裕日数を持つ為に、帰りのキャラバンは行わず、ヘリコプターを利用することにし、日本出発から帰国迄を、二ヶ月間とした。しかし実際は、悪天候と、ヘリコプターの待ち時間が長引き、合計八十日程となってしまった。

日本中どこを見ても暇と金を備えている者は少ない。ところがわれわれはその両方ともなかった。しかし常識では考えられない幸運が起きたのである。資金的余裕の全く無いに等しい、私の計算でも、今回の総費用は七百万円。仮りにこれを二人で分割負担しても、一人三百五十万となる。一人当りの費用として考えたら、目玉が飛び出しそうな金額であるが、幸いにも、加藤君を通じて、私達がカメラでお世話になっているオリンパス光学工業の支援を全面的にいただくことになり、一気に資金の問題も解決した。

メンバーと仕事の分担

少人数であるが、形式上、登攀隊員として私と加藤保男、ドクター兼マネジャーとしてマナスル西壁以来の仲間である田中壮佑ドクターに同行を願った。仕事の分担に付いては、登山隊の性質上、一人で何役もこなす必要があるため、お互いの仕事を明確にすると同時に、完璧に各人の責任を果す事を前提として、進行中の状況チェックは無しとした。逆に言い替えるならば、一方が、リードして、サポーターが必要な状況に至ったら、一方がその為に潰れかねない。もつと極論を言えば、若し山の中で、アクシデントが発生して、リードしていた者がいなくなったらどうなるか。登山期間中も準備期間中も、パートナーに對しては、おたがい絶対的な信頼を置くと同時に、自分の分担

する事柄については相手を頼りにしないことを最大の前提とした。

私は六月にダウラギリ登山から戻って、早速マナスルの準備にかかったが、わずか一ヶ月半の準備期間しかなかった。また加藤は、出発の一週間前までは、ヨーロッパにトレーニングに出掛ており、田中ドクターは高崎在住であり、全員が顔を合わせたのは出発当日の成田空港であった。しかしお互いになすべきことは実行していたので、全くトラブルは無かった。又このような行動が出来るのは、同レベルの力量で、かつ二三人パートナーならではのことだ。

行動の概略

九月十三日 四二〇〇メートル(B C)より五二〇〇メートル(C 1)までのルート工作。
 九月十四日 (B C)と(C 1)への荷上げ。
 九月十五日 (B C)と(C 1)への移動。
 九月十六日 五二〇〇メートル(C 1)と六〇〇〇メートル(C 2)へのルート工作。
 九月十八日 五二〇〇メートル(C 1)と六〇〇〇メートル(C 2)移動。
 九月二十一日 六〇〇〇メートル(C 2)と六五〇〇メートル(C 3)ルート工作。

二人のマナスル登山

- 九月二十二日 (C2)~(C3)への荷上げ。
 九月二十三日 (C2)~(C3)への移動。
 九月二十四日 六五〇〇メートル (C3)~七二五〇メートル (C4) ルート工作後、六〇〇〇メートル (C2)へ下降。
 九月二十六日 六〇〇〇メートル (C2)~六五〇〇メートル (C3) 移動。
 九月二十七日 六五〇〇メートル (C3)~七二五〇メートル (C4) 移動。
 九月二十八日 七二五〇メートル (C4)~七五〇〇メートル (悪天の為中断)~七二五〇メートル (C4)
 十月一日 七二五〇メートル (C4)~六〇〇〇メートル (C2)、悪天のため下降。
 十月三日 六〇〇〇メートル (C2)~六五〇〇メートル (C3) 移動。
 十月四日 六五〇〇メートル (C3)~七二五〇メートル (C4) 移動。
 十月五日 七二五〇メートル (C4)~七五〇〇メートル (C5) 移動。
 十月七日 七五〇〇メートル~八〇〇〇メートル~七五〇〇メートル (C5) アタック。
 十月八日 七五〇〇メートル (C5)~六〇〇〇メートル

(C2)へ下降。
 十月九日 六〇〇〇メートル (C2)~四二〇〇メートル (BC)へ下降。

以上は私達のBC以上での行動日と内容を記したものであるが、第一回のローテーション、七二五〇メートルまでのルート工作及び荷上げは、十二日間、実質行動九日間と最も理想なパターンを、たどっていた。二回目のローテーションでは、五日間の行動で、C2より一気に登頂を行いベースキャンプに下降するスケジュールで動いたが、七五〇〇メートルで悪天で行動中止をせまられ、あげくの果て、雪崩の危険性を無視してC2への脱出をする結果となった。三日目のローテーションで、再度、五日間の日程で頂上を登るべく試みたが、七五〇〇メートルで、またも悪天となり、スノーエプロンの中に雪洞を掘り、C5とする。天候待ちの後、プラトリーから頂上を目指す、プラトリー上の一メートル以上のラッセルのため、行程は捗らず、十月七日、四時、八〇〇〇メートル地点で登頂を断念、下降した。

結果から見た今後の可能性

今回は前記のごとく八千メートルラインまでの到達で終わってしまった。しかし今後、このような計画を行う場合、条件が満たされれば十分に登頂は可能であると確信する。今回の登山を

基に、そのポイントを上げて見よう。

△メンバー▽ お互いに体力、技術面で、他に気を配ることも無くマイペースを守った。

△天候▽ 天候の安定性から考えると、十月に入ってからの方が有利にも思われる。私達は九月末登頂の予定であったが、前半の天候不順に苦しめられた。この点から見ると十五日以上の日程を遅らせることも一考する必要はあろう。但し、八千メートル峰では、十月に入ってから寒気と、ジェットストリームの強さはとてもきつい。これらにどう対処するかは別に研究する必要がある。装備等で一考を要する。

△ルート工作▽ 今回は、キャンプ間のルート工作は全て一日で終わっている。結果から見ると最大の効率であったと確信している。多少苦しくとも、また帰幕時間が遅くとも、一日で全て完了することが望ましい。二日以上、数日に及んだ場合は、前日迄の工作したルートは全てアプローチと化する為、日数が増えれば、それだけアプローチの往復時間が多くなり、ルート工作に使える時間はルートが延びる程短くなって来る。従って一日で完了して翌日を休養に使うか、荷上げに使うことが、全日程の短縮と体力の確保にもはるかに効果がある。これは大きなパーティにも言えることと思う。

△高所順化と登山期間▽ 少人数の場合、状況のいかんにかかわらず、途中で人員を交代することは全く出来ない。従っ

て、体力の確保と同時に登山期間を出来るだけ短縮する必要があった。なぜならば一人の人間の持続出来る体力には限界があり、体力を使い果してしまうことは、即失敗に結び付くと同時に、最悪は致命的にさえなり得る。その為、ローテーションも短かく取る必要があった。かと言って高所順化のバッテリーを無視する事も逆に失敗に結び付く。私達は一つのキャンプへの移動は、ルート工作、荷上げ、移動を含め、基本的に三日間で行った。結果的には高所順化を含めて、充分に行動出来た。また、行動中、一方が不調を感じた場合、即翌日は休みとして、体力を一定以上に保つことに努力した、特に八千メートル峰の場合、七千メートル以下で、いかに体力をコントロールして登降を続けるかにより、七千メートル以上での、ラッシュ要素の行動に余力を持って望めるかイナカが、大きな要素としてかわって来ると思われる。

△キャンプ配置と酸素▽ JACルートで、初登頂時と同様のバッテリーでキャンプを配置して見た。しかし結果から見ると、七千メートル以上の行動に順化して、単に移動用のみに各キャンプを考えた場合、キャンプ位置の削減が考えられる。特に七千メートル以下において、高所順化が終了した場合は、一日に千メートル以上の移動は、実際に行つて見て可能である。従つて次回に考えられる方法として、

①(B・C)を四九〇〇メートルの水河の取付点近くに持つて行

く。

②(C1)をカットし、六〇〇〇メートルの(C2)を(C1)とする。

③ルート工作中は、(C2)六五〇〇メートルを設置するが、順化が終った時点で、そのまま七〇〇〇メートルに移動する。

④七〇〇〇メートル以上の行動をより楽にするため、七五〇〇メートルラインのキャンプは、ツェルト等と保温材のコンビネーションを考え、軽量化を計り、出来るだけ上部に持ち上げる。

⑤頂上と、ラストキャンプの間を出来るだけ短くする。

また、酸素の使用に関しては、使用しないことが資金的、輸送面から見ても最も望ましいが、それには使用せずとも登れる体力と、登攀方法を考える必要がある、これを無視して先の事は語るべくも無い。七千メートル峰に毛の生えた程度のマナスル、アンナプルナ等は、充分に無酸素登山は可能と思う。

△スポンサー付き登山隊の是非論について▽ 私達は、オリ

ンパス光学工業の全面的支援を得てこの登山を実施したわけであるが、一部の人達にはプロ行為と言われているように聞いている。今までのヒマラヤ登山で、全面的な単独スポンサーが付いたケースは無いので、いろいろな見方をする人が居ても当然である。山の登り方同様、今までに前例の無いことになる、必ず何か言う人がいるようである、かつて、大きな登山隊を編成し、ヒマラヤ行を実施した人達は、何十社、何百社と、物資、資金の寄付願いに走り廻り、食料、装備の大半を一般の企業からの寄贈品でまかなっていたはずである。今回の私達の場合、単独スポンサーにより全面的な資金援助をいただいたわけであるが、自分達の給料を得て居たわけでは無いので、プロとはちがう。これが問題視されるとなれば、たいがいのアマチュア競技は成り立つまい。スポンサーに協力を受けても、それによつてアマチュア・スポーツがより発展するならば、それだいたいと思う。時代が変わつて登山の方法が変わると共に、登山の社会的あり方も変らざるを得ないのである。ただ、アマチュア・スポーツとしての本質だけは失なつてはなるまい。

ゲントⅡ峰登頂（一九七八年）

小林 治 俊

出発まで

本遠征隊の母体である関西学生山岳連盟OBの会(AAVK・OB会)は、大阪を中心とした大学卒業後二、四年の若手OBによって、一九七二年五月発足した。大学山岳部時代をAAVKの中で共に過ごした横のつながりを自覚的に継続させ、大学の枠を越えた交流の中で、大学卒業後の山行を広範かつ積極的に行なおうとしたのである。そこではもちろん、ヒマラヤの計画も暗黙の了解事項だった。そして会の趣旨に賛同する現役学生達とも、共に数多くの山行を行ってきた。今回の遠征は、こうしたOB会の日常の活動の延長線上にあると考えてよい。OB会のまいた種が一つの実りをみたと考えよう。

今回の遠征の発端は、一九七六年の阪大隊のアブサラサス遠征であった。三名の当会の仲間がこれに参加しており、ヒマラ

ヤを希求する会員に大きな刺激と方針を与え、彼等の帰国後、はずみがついたように、七八年を目指す雰囲気が生えて来た。これまで幾度か生まれた計画が流れていただけに、今回は必死であった。

各自思い思いの対象をぶつけ合ったが、結局カラコロムの七七〇メートル級のバリエーションに落ち着き、ラカボシ、マッシャーブルム、サルトロ・カンリといった大物を狙って、七年三月には準備会が持たれ、活動が開始された。七月、会のメンバーである和田がバキスタン入りし、いよいよ夢を実現させる下準備が揃うことになる。

一方、私は会初めての遠征に参加したい気持であったが、諸般の事情があり静観の姿勢であった。八月末に、ようやく加わることを決心し、隊長を引き受けることになった。

ところで、この時点における準備会は、その意気込みに反

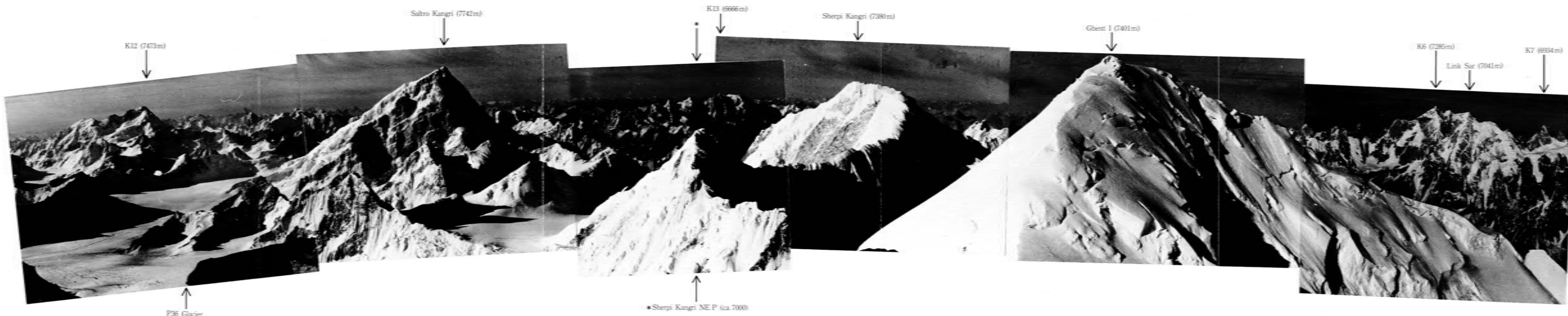


Plate 10-(d) : ゲントII峰頂上からのパノラマ
 Panorama from Ghent II (by T. Takenaka)

し、遠征遂行のための運営方法や遠征に対する認識が甘く、うわすべりの活動しか出来ていなかった様だ。候補としていた山に関する情報はもとより、登攀計画、装備、食料に対する検討も不十分であった。日本山岳協会へ申請書を提出する最終期限の十月十二日もせまり、この様な状態で七七〇〇メートル級のバリエーションを探ることは、不都合であるのは明らかに思えたので、候補の山の変更を提起した。連日の議論が行なわれたが、結局押し切る様なかたちで、東部カラコルムの未踏峰デントII峰を第一志望とすることを了解してもらった。

三月に、パキスタン政府より許可がおり、懸案の弘前大山の会との競合問題も、山の会が譲歩してくれ解決した。あわただしい準備が出發間際まで続けられ、四月二十四日、先発の四名が大坂を発っていった。

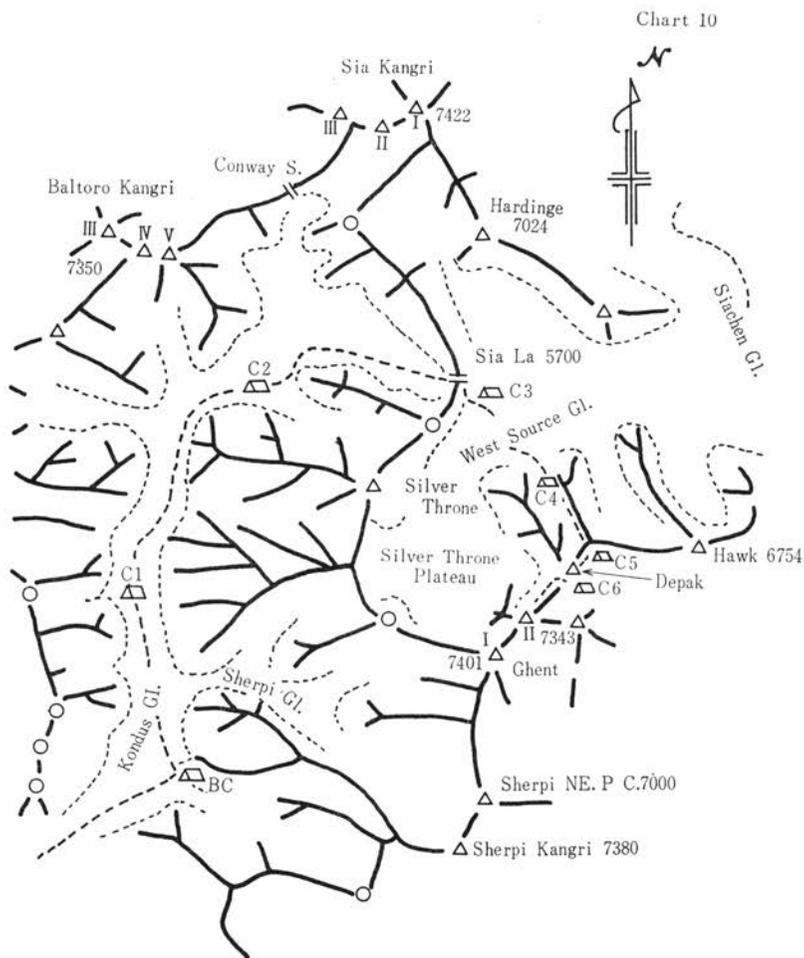
アプローチ

五月十五日、リエゾン・オフィサー、コック、そしてポーター九名とともにカブルーを出發した。コンダス河沿いのキャラバン・ルートは泊り場が固定化しつつあるようで、当初の計画どおりにはゆかなかつたが、おおむね順調に進んだ。ピンデイ以来の下痢で体調を崩している隊員にとっては、つらいゴーイング・マーチであった。最奥の村、カルマディンで、レギュレーション通りの休養日をとる。

二十二日、コンダス氷河舌端のグロンジンに着く。以後はコンダス氷河に入ったり、左岸のモレーンに出たりの行程となる。二十三日は、昨年のオーストリア隊ペースだと言って、ポーター達は実働三時間であった。二十四日は、たった二時間歩いた所で荷をほどこ。昨日はリエゾンとポーター頭ジャファールとの話し合いで、こちらが折れた経緯があるにもかかわらず、この有様である。ジャファールに更に進むよう、強く再考をうながしたところ、突然彼はポーター達を煽動し、荷物を放棄させるといきまき、一時は騒然となった。結局リエゾンの調停で騒ぎはおさまったが、ジャファールはカブルーへ戻り、代りにサリンのマハディを頭目とする。

五月二十五日、昨夜来の雨がテントを濡らしており、天候は思わしくなかった。キャラバン途中で雪となり、シエルピ氷河の一つ下方の無名氷河と、コンダス氷河左岸の合流点のモレーンの外のBC（四〇〇〇メートル）にキャラバン隊が到着した時には、みぞれ混じりの雪が間断なく降り続けていた。九十人ものポーターをこの地にとどまらせる装備もなく、やむを得ず明日からの荷上げに備えて十九人のポーターを残し、他を解雇した。賃金支払い後、彼等は雪の降るコンダス氷河を下って行った。

ここは乾いた砂地の平坦地で、モレーンのすぐ横に大きな池のある絶好のキャンプ地である。六一年、七七年のオーストリア



Route Map of Gjent II

ア隊のBC跡でもあり、付近の岩壁には、七七年のオーストリア隊員の遭難レリーフがあった。

五月二十六日も小雪の舞う日であったが、ポーター達に食糧と若干の装備を支給し、さっそく荷上げを開始し、翌二十七日、C1（四三〇〇メートル）を建設する。BCからは岩屑の堆積したコンダス氷河の中央部左岸寄りや緩やかに高度を上げて登って行く。C1付近から雪が出てきたが、早朝の行動ではほとんど潜らない。コンダス氷河は、シルバー・スローン西稜の末端付近で右へ大きく旋回し、なお平坦かつ広大に開けてゆき、その最上部は左はコンウェイ・サドルへ、そして右はシア・ラへと吸収されていく。C1から途中でデポ地を設け、三十一日、C2（四八〇〇メートル）を氷河湖のそばに建設した。六月一日、和田、山本でシア・ラ偵察。ルートが長く、荷上げに苦勞しそうだ。

デバック峰を越えゲントⅡへ

四日と五日の両日で、全員が待望のシア・ラ（五七〇〇メートル）に到達した。ここでようやく、いままで見えなかつたゲント山塊を目の前にする。左へ目を転じれば、シンギ・カンリ、テラム・カンリと続き、振り返れば、チョゴリザ、ガッシュヤールム山群と、素晴らしい展望だ。一方、四人のポーターと隊員により、デポ地の隊荷を全て回収、C2に集結した。こ

れにより予定通りここを實際上のBCとして、今後の登山活動を行うこととした。見上げれば、バルトロ・カンリが堂々の姿でそびえ立ち、我々の志気を鼓舞し、遠征気分を盛り上げてくれる。

七日、三人の隊員によって、シア・ラにC3が建設され、その後C3への荷上げと、隊員の高度順化のための登降を繰り返した。そして、不調の片岡を除き他の隊員は、ほぼ高度順化を完了し、こうしてゲントへの登攀態勢が一応整った。

しかし、ここで我々は六〇年の合同隊と同じように、ゲントⅡ峰とデバック峰を誤認する失敗を招くことになる。すなわち、シア・ラの南東、すぐ前面にそびえ、ウェストソース氷河にポリュームのある雪の北西稜を大きく張り出しているピークが、実際はデバック峰（約六九〇〇メートル）であるのに、それをゲントⅡ峰であると誤認したのである。わずかばかりの偵察行、バルトロ・カンリからの写真、そして地図などにたよった結果であった。やはり、在るはずの無いゲントⅡ峰の北西稜にまよわされず、徹底した偵察、パーティを、シルバー・スローン・プラトリーの奥まで出すべきであった。

ともあれ、この判定により、今後の登路を（ゲントⅡ峰と思っていた）デバックの北西稜の内院氷河に決定する。十三日から十七日まで雪模様となり、停滞、休養日となる。十八日、C3に全員が集結。ここに至ってもなお、片岡は調子が出ず、

高度の影響であろう、常に熱を出している。他は大丈夫である。

十九日、山本、竹中、岡本は予定の内院氷河のプラトリーまでルート整備に出かけたが、ウエストソース氷河を横断したところで、プラトリーへの急斜面の登りにあるクレバス帯の幅一メートル程のヒドンクレバスに山本が十メートルほど墜落した。幸い大腿部の打撲のみでことなきを得たものの、以後一週間隊列を離れた。二十日、急斜面にフィックス工作を行い、五〇〇メートルのロープを固定し、プラトリーの一番禺にC4（六一〇〇メートル）を建設した。

二十二日、和田、板倉、池田は、C4から最初のクレバス帯をスノーブリッジで越せば、上部のプラトリーに出て、長い登りの後デ・バック北東稜上にC5が建設出来ることを伝えてきた。二十三日、C5をデ・バックへの急なリッジの始まる手前の平坦地に建設。二十四日、全隊員C3に集結。アタック態勢に入る。二十六日、和田、板倉、池田は、デ・バックへの雪稜に一五〇メートルのロープを固定、他はC4に入る。

二十七日、アタック隊は、C5を出発、ところどころロープ工作を重ねながら頂上に到着する。そこからコルを隔て、ゲントⅡ峰の白い姿が望まれた。従って彼等が立っているピークが、デ・バックという事になる。ゲントⅡ峰は、頂上から少し下った地点より壁となつて、シルバー・スローン・プラトリーへス

ッパリと切れ落ちていているのが確認された。アタック隊はC4へ下る。二十八日、竹中、岡本、片岡は、デ・バック峰からコルの下りに二〇〇メートルロープを固定する。高差は約一五〇メートルぐらいか。この日、小林、山本、沢井、小川、C5に入り、明日はデ・バックに登り高度順化を兼ねることにする。二十九日、C5を出るも、ただちに沢井不調をうったえる。協議し、山本、沢井はC5に戻り、小林、小川が登高を続けた。行けるところまでと、デ・バック峰からコルに下り、幅広く、わずかに上下する稜線を進み、ゲントの北面の雪壁を試みたが、膝までのラッセルとC5からの長時間、長駆の行動で体力を消耗させ、約七〇〇メートル（基部から一五〇メートル）が最高到達点であった。

七月一日、C3に全員が集合し、こうして、ゲントとデ・バックの誤認にもとずく、ゲント攻撃の第一ステージは終了した。C3のシア・ラで休養の後、再攻撃のために、アタックメンバーの再編成を行う。片岡にはドクター・ストップがかかり、ドクターは調子出ず、アタックを断念、逆に復調している山本がアタック隊に加わる。

第一次隊を和田、板倉、小川、第二次隊に竹中、岡本、池田、しんがりの第三次隊は小林、山本とした。デ・バック上の最終C6からの、ゲント頂上へのルートには、特に困難な箇所は無いようだが、ルートが長く、一日でアタックが可能かどうか

多少の不安が残る。

七月五日、第一次隊C4着。しかし翌日から吹き荒れた吹雪によって、ゲント山塊は乳白濁色と化し、最悪のコンディションとなった。食料も底をつくようになり、悲観的な空気がテント内に充満し出した。アタックを第一次隊だけにしては、との意見も出たが、この悪天も七月下旬までは続かず、必ず好天気がやってくるだろうと、出来るだけねばることにした。

十三日、待望の晴天がやってきた。まわりの山々はすっかり雪化粧をほどこし、見事な姿を見せてくれた。雪に埋れたテントやフィックスド・ロープの掘り出しなどを続け、十四日、第一次隊は最終のC6に入った。C4には第二次隊が、C3には第三次隊、そして沢井、片岡が待機した。

十五日、午前二時半、C6を出発した第一次隊は快調に飛ばし、六時にはゲントへの登りに着き、ゲントの雪壁に入る。少し右上にダイレクトに登り、右の肩が接近すると、左へブレイカブルな雪面を大きくトラバースし、八時過ぎ、頂上直下に辿り着いた。ひと休みの後、岩の露出した雪稜を急登して、九時二十二分ゲントII峰の頂に立った。

十六日、第二次隊が、十七日、第三次隊が引きつづいて登頂に成功した。

△記録概要▽

隊の名称 関西学生山岳連盟OB会カラコルム遠征隊一九七

八年

活動期間 一九七八年五月～七月

目的 ゲントII峰(七三四メートル)の初登頂(全員

登頂)

隊の構成

隊長 小林治俊(31、大阪市大OB)、副隊長 山本浩(29、大阪工大OB)、和田城志(29、大

阪市大OB)、隊員 医師 沢井敏安(34、名古屋大OB)、記録 竹中時夫(31、大阪工大OB)、

食料 岡本正人(30、竜谷大OB)、会計 板倉健二(27、関西大OB)、装備 小川宣明(27、

近畿大OB)、輸送 池田芳則(23、竜谷大四年生)、食料 片岡泰彦(23、大阪市大四年生)、連絡 将校 ザファール・サリム(Nafar Saleem、

陸軍大尉、26)

行動概要

五月十一日カブルーに先発、後発隊が合流。五月十五日キャラバン開始。スルモ、ウルセ、タガス、ブラックホール、ラチット、カルマディン、

グロンジン、ビヤンガ、ビヤヒティーンと進み、五月二十五日、コンダス氷河モレーンの外にBC

(四一〇メートル)建設。五月二十七日C1建

設。

設（四三〇〇メートル）。五月三十一日C2建設（四七〇〇メートル）。六月七日シア・ラにC3建設（五七〇〇メートル）。六月二十日C4建設（六一〇〇メートル）。六月二十三日C5建設（六六〇メートル）。六月二十七日～二十九日沢井を除く九名がデバック峰（約六九〇〇メートル）に登頂、同峰頂上に最終のC6建設。七月一日全隊

員C3に下る。七月十三日一週間の悪天候の後、ゲントII峰へのアタックを開始する。七月十五日和田、板倉、小川がゲントII峰に登頂。七月十六日竹中、岡本、池田が登頂。七月十七日小林、山本が登頂。七月二十二日BCに集結。七月二十三日BC出発。七月二十八日カブルー着。

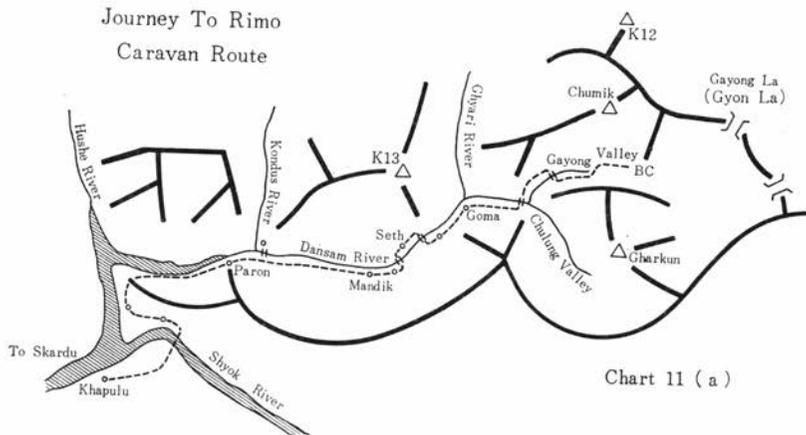
リモへの遠い道（一九七八年）

大 沢 宣 彦

今日独立峰としてその処女を守っている山々で、七五〇メートルを抜く山は少ない。シアチェン氷河東側の雄峰が次々と日本隊に登られていることを考えれば、ほぼ隔絶された地の七五〇メートル未踏峰、リモに我々の目が向けられたのは当然の成行きかもしれない。しかしリモに関する資料は少なく、具体的に登攀を考えるのは隊の構成上からも不可能だった。そこで今回はリモに近接する六千メートル峰に登り、フィッサー以来の未踏領域を探ることを主目標として計画がたてられた。私達はテロング氷河側からリモに接近することにした。それから、アプローチは、ピラフォンド・ラを越えシアチェン氷河を南下するルートが無難のようだが、それは実に長い距離になる。最短コースとして、地図上から、ガウン・ラ（従来と呼ばれるギョングヤONGは、土地の人が例外なくガウンGAYONGと呼んでいるので、これに改めた）が考えられた。一九

〇九年、ロングスタッフがガウン氷河側から峠に達したが、越えずに引き返し、一九三九年にはヤングがシアチェン氷河側から試みたが、近づくことも出来ず退却していた。うまく行けばリモ方面への最短アプローチになるのに、以来、近年のはなばなしい登山活動にもかかわらず、こうした地味な地理的探検には努力が払われず、未知のまま残り残されている。

私達は、このルートの開拓こそ価値あるものとし、更にこのルートをリモにまで延ばすことに決定した。ゴマーガウン氷河―ミルザ・カファール氷河（ガウン氷河支流で、無名と思つたが、土地の人から名前のあることを知つた）―ガウン・ラー無名氷河―シアチェン氷河―テロング氷河―リモ山群を結べば、私達の経験と知識を全力で投入すべき、未知の広大な山域がひろがる。リモ周辺からいくつかの六千メートルの峰を地図からひろい出し、登山許可を申請した。印・パ停戦ラインにすこぶる



近く、不許可も覚悟のことだったが、四月になりテロング氷河の六四七六メートル峰に許可が下りた。幸運としか言いようがなかったし、喜びに湧いたのは言う迄もない。しかしこの山については、全く知ることを得ず、あれこれと想像するだけであった。ぶっつけ本番の手しかない。

この計画には二つの未知数がある。リモ周辺と、ガユン・ラである。そしてガユン・ラが通過出来なければ、リモは論外になってしまう。従ってガユン・ラは、少くとも隊員には越えられるもの、どうしても突破しなくてはならないものとして、ガユン・ラ以遠は隊員のみによる強行軍をもって、リモに近づき計画で具体案を練った。

☆

ラワルピンディでのフライト待ちはただただ不運だった。今度は私達の番だという時に、長期の悪天に入った。六月下旬のことである。千四百キロの荷物と共にじりじり待つ。好天になり次第、一回で全部運べるようドイツ隊と協力して、C一三〇機を出す約束をとりつけた。予定をはるかに過ぎた七月十二日、やっと飛行機が出る。私達を含め計五隊がこの日スカルド入りした。長いフライト待ちは、最悪なことに登山日数の縮少を余儀なくし、生鮮食料の大半を腐らせた。ひどい出足である。しかしこの時間のズレで私達はジャファールという統率力抜群のサーダーを雇用出来た。登山活動中、悪評高いポーター

によるトラブルは些細なことひとつ起らず、煩わされずにすんだのだ。ドクターは口癖「塞翁が馬」をとばすのであった。

シャイヨーク河はグラディと呼ばれる渡しカゴで渡河、サルトロ谷を歩いて四日目で最終部落ゴマ。左手にピラフォンダ谷が広く見えるのに、ガウン方面は狭く曲りくねって見える。ソバの緑は荒地と対照をなし一段とみずみずしく、隊員は帰りに喰ってやろうと期待している。

山入りを前に山羊二頭が殺された。ポーターは少し歩いてはすぐ休むことを繰り返すから、私達のペースとかく違ってくるが、彼等流にやらせておくのが最良だ。ゴマから三日目にガウン氷河上、四三〇〇メートルにBCを建設した。モレーン脇の清流と、草花の咲く気持の良い所で、ガルクンの北面が真正面に見える。

一日休養して作戦が開始された。天気はゴマ以来ずっと悪く雨模様。ガウン氷河の支流ミルザ・カファール氷河に入る。ステファンソンの報告通り、後退が著しい。この辺り歩きづらく、ポッカ泣かせた。一旦デポを作ってから、五一〇〇メートルにC1を作った。この間先発の二人は早くもガウン・ラらしきコルに到達していた。七月二十九日、やっと晴れる。大沢ら三人が、そのコルを偵察する。信頼出来る地図とてなく、絶対的と思われるガルクン、チュミック、K12を基準点にして、相対的位置を推測することにしたが、このコルからはガルクン

しか見えない。馬蹄形の山稜中、概念図に示されている左寄りの最低コルに登ったのだ。納得のいかない地形のまま、一応これをガウン・ラとした。しかし翌日全員の参加による調査で、全く違ったものであることが判明した。そこを下れば何とガウン氷河へ逆戻りしてしまうのだ。試行錯誤第一回である。覚悟の上だが気が重くなる。

サーダの積極的な協力で休みを返上し、二隊が残る二つのコル偵察に出た。どちらかを突破しなくてはならない。C1を中心に扇形に展開した偵察隊をトランシーバーで結ぶ。こうすれば偵察を重複させずに、その場で同時に二者を比較出来た。

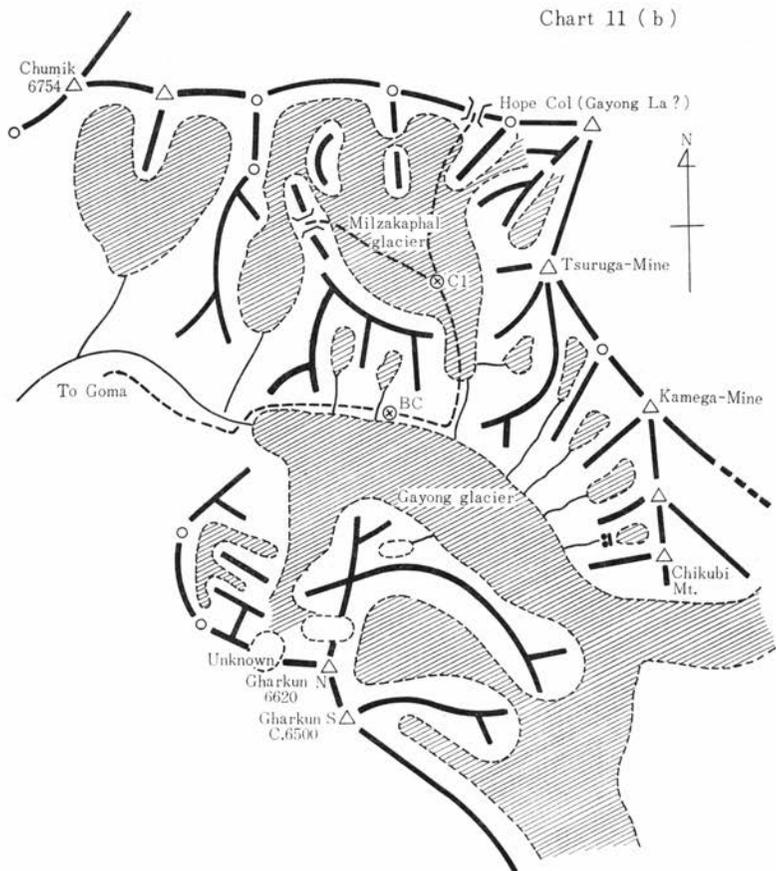
ほぼ中央のコルへは、クレバスとブロック雪崩の危険があった途中で断念。部分的に見えた反対側も、急峻な氷壁が予想され、ルートならぬものと判断した。位置からすると、ロングスタッフの登ったのはこのコルらしいのだが。残る右側のコルは、アプローチが良く、永田、ジャファール、アブドウルが到達した。反対側は懸垂氷河で下降は難しい。しかし突破できることを示唆してきた。とてもラー峠とは呼べない。左程の困難を伴わず人の行き来出来る所を峠と呼ぶなら、その様な地形はここには存在しない。その意味ではロングスタッフはギョーン・ラと名付けることは出来なかった筈だ。長駆永田隊に合流した中島隊も、難しいながら下降の可能性ありと報告してきた。

中島の誕生日を兼ねた休養日は、ハイポーターをまじえてガ

Journey To Rimo

—Gayong glacier and surrounding area—

Chart 11 (b)



ユン・ラ談議になった。アブドウルのお父さんの話も出て来て、どうもワークマン夫妻の探検行に加わつたらしい。ガユン氷河とラヤグマ氷河のことになると、前後の辻褄があわず、興味深い話が未完になってしまった。一時そのラヤグマ氷河調査、又はC Iに近い鋭峰（鶴ヶ峰と仮称）に登つたらとの意見が出たが、眼前にある広大な未知の領域こそ私達の目ざす本来のもの、これを全力上げてやってみることを再確認した。

☆

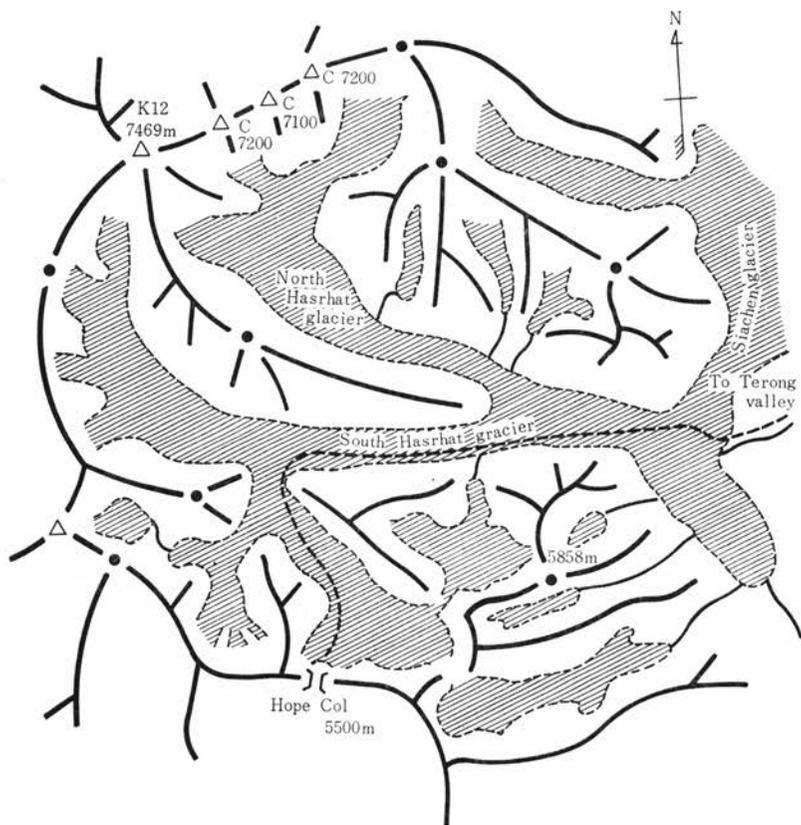
C 1から五五〇メートルのコルへは、大沢ら四名、ハイポーター五名によるボッカ、特にハイポーターはダブルボッカをして、たった一日でC 2を作ってしまった。ヒドン・クレバスが沢山ある。この氷河地帯の中で、無名氷河側からこのコルを越え、盛んに蝶がとぶ。観察してみると、ヒメアカタテハの蝶道になっているのだ。おそらく遥かヌブラ川の方から長大なコースを飛翔してくるのだ。少なからず感動した。出来ることからこのコルこそピラフォンド・ラ（蝶のコル）と名付けたかったが、同名の氷河が近くにあるので採用出来ない。しかし前途への希望が湧いたところから、希望のコルと名付け、ケルンを積み、クラブ先輩の故三井松男氏、故君島久登氏の写真をその基部へ埋めた。

約三百メートルのクライムダウンが必須だ。ポーターが使えないのは、コルに立ったサードに意見を聞く迄もない。悪天

の中で下降ルート工作をする。中島は腰痛が激しく、残念にもC 2を下った。三日間の降雪の後、二百五十メートルのザイルが固定された。岩に打ち込んだアイスハーケンが唯一の頼みだ。出発と決めた日に快晴になった。K 12南面の眺めが素晴らしい。下降出発点の雪はどうにも悪く、足場が作れない。固定ロープにぶら下るようにして下る。アイゼンの爪先だけが壁と私達をつなげている。荷物はまとめて吊り下した。五時間かかって雪壁の基部にたつ。帰路にはここを登攀することになるから慎重に目印をつけた。激しい照りつけの中で、大沢、永田、上原の三人が荷物を背負う。縦走用三十五キロを越える重荷だ。見上げると、私達のとつたルートが最短であり、恐らく一番容易であつたのはまさに幸運であつた。前進への熱い意志が道を開いたと満足感が湧く。無名氷河は後に伝説中の人名をとりハスラット氷河と名付けた。本流に入るとすぐアイスフォール帯になる。右往左往のあげく、右岸に下降路を見つけた。チュミックの双峰、サルトロ・カンリさ見え。ここから見ると、概念図（宮森氏作成のもの）に示されたロングスタッフのギョーン・ラ反対側は、とんでもない氷壁であつた。Y 字状氷河が直線にシアチェン氷河に向う所で、V 字谷の遙か先にかすんだ白い帯が見えた。シアチェン氷河だ。私達は歓声をあげた。歩きにくい凸凹のモレーンに悩まされ、目標はなかなか近付かない。氷河はその厚みを著しく減じて五十メートルは沈下して

Journey To Rimo
—Hasrhat glacier area

Chart 11 (c)



いる。山腹にその痕跡がはつきりとうかがえる。ヤングの踏査した北氷河（彼は便宜上、南・北氷河と呼んでいるが、氷河そのものには名をつけていない）の急なアイスフォールが左手に現れた。アイスフォールの奥は見えず、ただK12がその上にのしかかって見える。彼が高い山にひかれて北氷河に踏み込もうとしたのもよくわかる。コルから四日目、遂にシアチェン氷河の端に立った。

登山許可の下りた山もしかと見えたが、それはとてもいい山とは言えず、ただ登り上って六五〇〇メートルに達したという程のものであった。少なからずがっかりしたもの、既にこの山に登るゆとりさえない。シアチェン氷河の中央部は突然白い氷塔が流れに沿って立ちならぶ奇観を呈していた。あたりの黒いモレーンに比して全く白い。そして大きな結晶粒界がはつきり見える。

一日がかりで横断を終ると、対岸はテロング谷であった。氷河はずっと奥迄後退していて、シアチェン氷河との間は大濁流で結ばれている。谷は広く河原があり、テロング氷河舌端迄は容易にたどりつけそうに見える。谷へはモレーンの急なガラ場を駆け下ると入れる。しばらく行くと、細い清流があり、カヤツリ草の類が緑をなした大きな柳も数本ある。その根元にキャンブを張った。シアチェンⅡ「野バラの豊かな」の名の通り、野バラの株がいっぱいある。花は散りかけているところだ。この

地方特有のヨモギの強い臭もするし、わずかな地形の差でできる、湿、乾地に各々の草が花をさかせている。伝説のテラムシエール氷河のロスト・オアシスには及ばないが、荒涼たる氷河地帯のただ中の緑なす地は小さなオアシスと呼んでもいいだろう。高さは富士山山頂と同じ。アイベックス等の足跡、糞があり、封鎖された小さな生活圏を作っているようだ。

☆

濁流は大きく蛇行して、左右の岩壁をけずっている。再び悪天周期に入った中をただ前へ進む。勿論リモは前衛の山にかくれて全く見えない。川が二つに別れ、谷を右から左へ横切っている所に来た。テロング氷河の汚れた舌端が見える。左右のへつりは岩壁の為不可能で、残された道は徒渉しかない。急流は二つに別れてもなお幅広く、かつ氷塊がどんどん流れてくる。非常に冷い。着るものを着て水に入る。中央部迄行くと、腰の深さの水ですごい圧力がかかってくる。氷塊が遠慮なしに冷えた手足を打つ。ザイルに助けられて岸へ戻る。三回目に永田が徒渉に成功した。だが次の急流は一段と幅広く悪相をなし、試すまでもなく、私達の意志と希望を流し去った。

胸から下をビシヨ濡れにして河原にうずくまる。「駄目だ」の一言のあとが続かない。厚い雨雲に覆われた山々は、私達の気持を象徴していた。あっけないアンチクライマックスな終りであった。

しかし未知に対して私達はまだ貪欲であった。シアチェン氷河に戻り、ヌブラ川の源頭を見に行った。舌端の大氷壁から奔流が出ている。両側の扇状地に縁を点在させる広い谷が南に延びている。ラヤグマ谷の入口も見えた。若い二人は、これが文明発祥の地インダス川のさらに源流なのだと感激していた。このまま谷を下って人家のある所迄行ってみたい気になる。

「その方が楽だしね」

と久しぶりに笑いが戻った。

歩き易いルートがわかっていること、荷物が軽くなったことで、復路はスピードが上った。三日でハスラット氷河上部のアイスフォール帯を突破していた。天候も回復した。四日悪天、三日好天の周期だが、次第に悪天の方が長くなる気配だ。最後のチャンスなので、長大な尾根の一端に登ってシアチェン氷河東側を観察したい。希望の科尔からでは、この尾根がすっきり東部をかくしてしまっているのだ。氷河を源頭部までつめ、右岸の科尔目指して登る。うんざりした科尔への登りは、小さな氷河に繋がっているだけで、更に稜線をピークに向って登らなければならなかった。しかしナイフリッジの岩峰に行く迄もなく、シアチェン側の雪庇の基部に立つことよって、一瞬にして驚くばかりの景観を得た。高度五六〇〇メートル、望みうるあらゆる山々が目に入って来た。なじみ深いK12、サルトロ・カンリを北に、テラム・カンリ、アプサラサス、問題のリモ、

マモストーン・カンリ、更に南には、何とサセル・カンリ迄見えたのだ。リモは薄茶の岩壁を一気につき上げている。山頂付近が雲の中だが、Ⅰ峰は抜きんで高く、Ⅱ、Ⅲ峰はほぼ同高度と思えた。いずれも急峻な岩壁にまもられ、北側同様、南西面からの登攀は、はなはだ難しそうだ。遠くイタリアン・コルを通り、東側からが未知だが、それ故に可能性を秘めている。

それにくらべ、マモストーン・カンリ北西面はほぼ雪の斜面で、鷹揚な山容をしている。こうした中でシオルカチョルテン氷河の源頭に立つチョンクンダムⅡ峰七〇〇四メートルを無視することは出来ない。実際私達もあわよくば登ってやろうと心中に秘していたものだった。テロング谷の合流点に入れさえすれば、氷河をつめるルートによりおそらく容易に登攀出来るものと思われる。独立峰として雪のおだやかな山容を持つと同時に、マモストーン・カンリの北面を間近に見、リモの東面ものぞける絶好の位置にあるのだ。いずれこの地を訪れる登山隊の目標になるだろうが、印パ停戦ラインに対し微妙な位置にあるので登山許可が問題だ。全く私達にとっては忌むしい国境線である。

☆

私達は希望のコルを越えてテロング谷に達した。地理的には空白部を埋める成果は上げたが、登山面から見た場合どんな意味を持つだろうか。このコルがハスラット側へ降りる唯一無二

のルートであることは間違いない。しかしコル越えはシェルパに較べ、登山に不馴れなバルティスタンポーターには荷が勝ちすぎる。とすれば隊員による荷物輸送しかない。そしてテロング谷迄は長い氷河の道が続くから、多くの人数が要求されるし、長期戦になる。むしろ私達のとった方法の方が有利だ。

勿論ラッシュタクティックによる登頂になる。相手がチョンクンダムならば最良の方法と思う。但し濁流徒渉を忘れてはならない。私達日本の登山家には、徒渉術は馴みの深い技術だ。きつと妙案があるに違いない。あるいは時期を早めれば、水量は少ないかもしれない。

BCに居を構えた、山村、松野、中島の三人は、ミルザカフアール氷河の概念図作成と、ガюн氷河奥の調査を行った。残念ながらラヤグマ氷河にぬける地点を観察出来なかったが、登山路としての利用価値から見ると、ヌブラ川廻行があり、一考を要する。

C2以来互いに全く連絡を絶たざるを得なかった私達は、八月十九日で再会した。あとはキャラバンだけが残された仕事で

あつた。

△記録概要▽

隊の名称 一九七八年鶴城山岳会カラコルム遠征隊

活動期間 一九七八年六月～九月

目的 ガюн・ラ踏破とリモ山城踏査

隊の構成 隊長Ⅱ大沢宣彦(37)、記録Ⅱ山村正光(50)、装

備Ⅱ中島敏行(28)、渉外Ⅱ永田秀樹(24)、食料

Ⅱ上田昭則(22)、医師Ⅱ松野正紀(36)、LOⅡ

モハメッド・アジマル

行動概要 七月十二日スカルド着。七月十四日スルモ着。七

月十六日キャラバン開始。七月二十三日ガюн氷

河上BC建設。七月二十八日C1建設。ガюн・

ラ偵察。八月二日C2建設。八月六日氷河下降開

始。八月十二日テロング谷で濁流に行手を阻ま

る、後退開始。八月十九日BC合流。八月二十四

日BC撤収下山。八月三十日スカルド着。

積雪期日高山脈全山縦走（一九七九年三月）

日本大学山岳部

はじめに

僕達が雪の日高に憧れた理由は、その処女性と未知性にあった。仲間の誰一人として冬の日高を知らなかったばかりか、北海道へ渡った者も数人しかいなかった。しかしその純白で長大な山脈に自分達だけのトレースをつける事を考えると、心は北の山々に飛んで行くのだった。そしてまたもう一つ、僕達には「大学山岳部のあり方」という頭を悩ます問題が常にあった。部のまとまりとは何なのか、全員結束して遠征をやるろう、とは決めても、結局は北極、アラスカ、ヨセミテ、台湾と、気の合った者同志がバラバラに出て行ってしまった。更に冬山合宿も魚沼三山縦走、鹿島槍、八ヶ岳（女子）と分散して、それぞれ充分な準備と情熱で成功を取めたものの、どうも割り切れない気持ちが残ってしまった。

全員が一丸となって一つの山に取り組む事はできないのか？ 近年のように登山が個人主義的傾向を示す時代に、三十名近い部員が一つになるなんて事はしよせん無理なのか？ 時代遅れなのか？ しかし「時代遅れ」と言い切るだけの思想裏付けも経験も、僕達は持っていない。とにかくやってみよう！ やってみなければ結論は出せない。

こうして目標を日高に決め、検討に検討を重ねた上でやっと以下の計画が決定した。

縦走隊 C L木津以下四名。三十一日間（実動二十日、予備十一日）で、薬古岳から芽室岳までの縦走。

横断A隊（コイカク隊） L村口以下六名。二十七日間（実動十五日、予備十二日）で、札内川よりコイカクシュ札内岳にBC設置。縦走隊サポート後、ペテガリ岳西尾根下

山。

横断B隊（イドンナップ隊） L今野以下四名。二十二日間（実動十四日、予備八日）で、カムイ岳北東尾根より頂上
に食糧デポ後、イドンナップ岳を経て新冠川へ下山。

一見オーソドックスなものになった。二十年前の北大、青山学院大等による全山初縦走計画と大差はないが、今なお、それは充分魅力に富んでいる。僕達はリーダー会でその意義についてケンカごしの論争をくり返し、登山の理想と部の現実を何度も見詰め直し、やっとこの計画をひねり出したのである。

縦走隊の記録

三月六日 遅れて入山するB隊のメンバーやOBに見送られて、夜の東京フェリーターミナルを出航。ちよっとした遠征気分だ。

三月八日 曇り 入山。タクシーでメナシユウンベツ川の上学校跡まで一気に入る。

三月九日 曇りのち晴れ 小学校跡―標高尾根七〇〇メートル地点。四十キロの荷物に苦しみながらメナシユウンベツ川を遡り、標高尾根下部に幕営。更に二名で森林限界までトレースをつける。近づく日高の主稜と夕日に輝く海はすばらしい。

三月十日 曇り CS―楽古岳先。トレースのおかげでスム

ースに頂上を踏むが、下降点は氷化しておりザイルを使用する。

三月十一日 吹雪 停滞。ドカ雪でテントが完全に埋まる。

三月十二日 快晴 CS―十勝岳先。十勝岳への広大な雪稜をたどる。まるでアラスカのように。とても千メートル級とは思えない。はるか地平線に一六三九メートル峰を望む。あそこ
でまだ半分の地点なのだ。

三月十三日 晴れのち曇り CS―野塚岳先一二四〇メートル峰。オムシヤヌプリ、野塚岳と二つの双耳峰を越える。野塚岳のコルの雪庇にザイル使用。

三月十四日 快晴 CS―トヨニ岳。大鷲のようなトヨニ岳。ルートは岩峰、ナイフリッジと目まぐるしくザイルを出し入れする。頂上に着いた時はヘトヘトだった。

三月十五日 快晴 CS―ピリカヌプリ。快調に進むが、ピリカは手強い山だ。恐ろしい雪庇を越え、氷壁、雪壁にルート
を拓き、頂上に達する。ヒマラヤのように。BCとの交信に初めて成功する。

三月十六日 風雪 CS―一五三〇メートル峰。出発するが二時間程で暴風雪となり、ザックごと吹き飛ばされそうになる。斜面を削って設営する。BCとの交信不通。

三月十七日 風雪 停滞。昼間は必死に除雪する。天幕が破られそうな恐怖を感じる。

三月十八日 曇り CS—ソエマツ岳。悪天に思うように進まない。予定日数内にBC入りできるだろうか。食糧統制と下山路の確認をし、暗い雰囲気に含まれる。

三月十九日 快晴 CS—神威岳。風のやんだチャンスをつかんで、一気に神威岳へ進む。三日ぶりにBCの声をキャッチ。

三月二十日 晴れのち吹雪 CS—一四九九メートル峰前コル。

三月二十一日 快晴 CS—ペテガリ岳手前一四六九メートル峰。好天にピッチをあげてフル行動。不安定な雪庇が多い。北大パーティーと会う。

三月二十二日 晴れ CS—一五九九メートル峰前コル。早大尾根ジャンクション・ピークまでの稜線は非常に悪い。ルートワークを続けペテガリ岳頂上で握手。

三月二十三日 曇り CS—コイカクシユ札内岳BC。強風をついて、ついにBC入りする。出迎えるコイカク隊のメンバーがどれだけ頼もしく見えたことか。すばらしい感激だ。

三月二十四日 晴れのち吹雪 BC—ピラトミ山分岐。コイカクの下りは氷化した急斜面で、非常に緊張した。

三月二十五日 風雪 停滞。

三月二十六日 晴れ CS—カムイエクウチカウシ山。雪庇に神経をとがらせながら一八二三メートル峰、ピラミッドと越

えて行く。疲れた体にムチ打ってカムエクの頂上直下に達する。イドンナップ隊がレサツピにいと伝えてくる。

三月二十七日 曇り 停滞。視界ゼロ。

三月二十八日 曇り CS—エサオマントッタベツ岳先コル。風は強いが気温は高い。ナメワツカ分岐より尾根が広くなり、いよいよ北日高の感が深い。体力の続く限り歩く。

三月二十九日 曇りのち晴れ CS—カムイ岳デボ回収—一七九一メートル峰先コル。仲間の残してくれたデボは本当にうれしい。夜は腹一杯つめこむ。

三月三十日 曇りのち吹雪 CS—トッタベツ岳東ノ肩。

三月三十一日 吹雪 停滞。台風なみの低気圧が通過。ポロシリへのアタックを控え、今後も低気圧が続くそう。食糧も多くはなく、不安な停滞だ。

四月一日 風雪 CS—パイロ岳手前。相変わらず天気は悪い。残念だがポロシリ岳アタックをあきらめ、地図とコンパスを頼りに何とかパイロの手前まで進む。

四月二日 快晴のち曇り CS—一七三四メートル峰手前。いよいよクライマックスの感があるが食糧は少ない。

四月三日 風雪 停滞。いよいよ下山という日に記録的な大雪となる。出発するやいなや、ヤツケはバリバリと凍ってしまふ。無理をせず残りの食糧を食いつなぐ事にして、もう一度天幕をたて直す。つらいつらい停滞だった。

四月四日 曇り CS—芽室岳—林道終点。三つのインスタントラーメンを四人で分けて出発。胸までのラッセルに遅々として進まない。みんな無言だ。しかしジワジワと最後の山、芽室岳に近づく。風雪の頂上で固い握手を交わす。そして一気に下降する。

四月五日 快晴 CS—羽帯駅。すばらしい快晴だ。最後に残った非常用のコンビーフをかじりながら、広大な原野の中を一直線に進んで行く。飛びこんだ羽帯駅の売店、帯広の街、そして牧場での横断隊との再会、どれもみな夢のように過ぎて行った。思えば最終下山を二日後に控え、食糧を完全に食い尽しての下山だった。

横断A隊(コイカク隊)の記録

三月九日 札内川林道最奥人家付近より、荷上げを始める。林道は膝上のラッセルが続き、スキー隊を先頭に一人当り約三十キロの荷を背負って荷上げをくり返す。コイカクシュサツナイ川に入っても、相変わらずのラッセルで、なかなか進まない。沢は所々ブリッジ状を呈し、深いラッセルもあり、苦勞する。上二股より夏尾根に取付き、ルート工作、荷上げをくり返す。

三月十五日 コイカクシュサツナイ岳にベースキャンプを設営完了した。あとは、縦走隊の来るのを待つばかりである。

三月二十一日 一八三九メートルへのアタック日和となった。ひさしぶりの行動で、全員元氣よく飛び出した。ヤオロマップまでは、クラストした日高側に行く。足首が痛くなる所だ。ヤオロマップより一八三九メートル峰へは、両雪庇のラッセル尾根で、所々スタカットで通過する。無風の一八三九メートル峰からは、ペテガリ岳が眼前に見える。充実した行動を終えBCに帰り着く。

三月二十四日 サポート隊の使命も無事果し、我々独自の行動へと踏み出した。縦走隊の安全と成功を祈り、新たな目的を持つて思い出のコイカクを後にした。ヤオロマップより一五九九メートル峰まではゆるい雪で歩きにくい。午後より天候悪化のためリング畑に天幕を張る。

三月二十五日 停滞。

三月二十六日 風は強いが天気は良好。ルベツネ山を越し、いよいよ憧憬のペテガリ岳へと足どりも軽い。快晴のペテガリ岳にて縦走隊のルートを目で辿る。この日は西尾根コルに泊まる。

三月二十七日 視界はまるでできない。小雪が舞っている。西尾根は深いラッセルが続き、所々ガスのためルート確認ができない。午後より暑い春山となり、交替のラッセルにも力が入る。がんばってペテガリ山荘に到着した。明日は下山だ。

三月二十八日 山荘よりスキー二名は村道をスツとばして行

くが、ワカン隊は所々ボコンともぐって苦勞している。下山というと一年生はやたらと強く、あつけにとられる。数々の思ひ出を残してひさしぶりに人里に下りた。

横断B隊（イドンナップ隊）の記録

三月十三日 晴 拓成より荷上げを始める。四時間でピリカペタヌ沢菅林署に着く。小屋には石炭ストーブがあり、快適である。二時間で拓成にもどり、午後五時に小屋到着。

三月十四日 晴 ダブルボッカ。七時に出発するが、やわらかい雪でスピードが上らない。今日中にカムイ岳にデボのつもりだったが、東尾根取付点につく頃、天氣が悪化し吹雪となる。春だといっても日高は冬であり、冷たい風であった。午後三時半、一一二〇メートル道点にデボし、七時三十分小屋に戻る。

三月十五日 くもり 子犬が現われた。犬をつれてゆくか、この小屋に閉じ込めるか。つれていってもだめだろうし、置いて行けば下山するパーティについて助かるだろうと思ひ、置いてゆく。ところが、とうに鳴き声は聞えなくなっている所まで来ても、耳の内で鳴き声が止まらない。ふと、いやな予感があったので、ただちにもどって小屋から出してやった。犬は、うれしそうに一日中トップを走っている。雪崩の音が時々聞える。今野が、関節炎を再発する。

三月十六日 雪 今野はテントキーパーにのこし、他はデボ食糧をカムイ頂上にあげる。

三月十七日 十八日 停滞。

三月十九日 晴後くもり カムイ岳に着く。樹林が分岐まであり、雪庇は大きくはない。トツタベツ岳が美しく、近くまで見にゆく。六時に縦走隊の声をトランシーパーでキャッチする。

三月二十日 くもり後雪 吹雪で出発を迷ったが、七時に出発。ハイマツの間に足をとられる事が多く、九時頃より風がまた強くなり、十時にエサオマンの最低コルに天幕を張る。

三月二十一日 晴 六時半にコルを出発し、七時五十分エサオマンに着く。十二時にナメワッカ分岐のコルに着き、天幕を張る。一年生が元気がなくなった。まだ十日目である。

三月二十二日 快晴 四時に起き、五時半出発。分岐からナメワッカまでは細く両雪庇と困難だったが、多くの雪庇は十勝幌尻側に張り出している。十時にナメワッカに着く。十二時に一四二八メートル峰上に天幕を張る。白樺が美しい。

三月二十四日 晴後雪 イドンナップのコルは、にくたらしい程低い。登りは二箇所急な雪壁があるが、崩して登る。十二時にイドンナップの頂上付近の広い尾根に着く。明日の天氣が気になりブロックを積み備える。

三月二十五日 強い低気圧にぶつかり停滞する。花札をやり

気をまぎらす。

三月二十六日 晴 昨日の低気圧が残り待機。七時半よりガスが切れはじめ八時に撤収。視界がよく、樹氷が見られ、今回の山行では一番すばらしい。パノラマが見られた。イドンナップの豚尾根とは名ばかりで、頂上に近づくにつれ細くなっており、雪がやわらかければ、いやらしい所だろう。十一時に頂上に着き、とうとう新冠ダムが見えた。二時に一三一〇メートル峰手前に天幕を出し、下山ムードとなった。

三月二十七日 快晴 一三一〇メートル峰からレサツピまでは、樹林が多く、軽いラッセルである。二時にダムに着き、とうとう十六日間の合宿は終了。長い山行であった。

(文責・木津直人、村口徳行、今野善郎)

△記録概要▽

隊の名称 日本大学体育会山岳部春山合宿

隊の構成 縦走隊(木津直人、チーフリーダー、森和彦、佐藤徹、野中精二) 横断A隊(村口徳行、鈴木弘之、大上淳、矢崎裕巳、中田二照、福島幸之助) 横断B隊(今野善郎、川那辺一、向笠茂雄、本間源一)

目的 日高山脈の積雪期全山縦走と二つの横断。

活動期間 一九七九年三月八日―四月五日

行動概要

縦走隊 楽古岳から芽室岳まで、実動二十三日、停滞六日、計二十九日。

横断A隊 札内川よりコイカクシユ札内岳BC設置(縦走隊を待ち六日停滞)後、ペテガリ岳西尾根下山。実動十日、停滞八日、計二十一日。

横断B隊 カムイ岳北東尾根より縦走隊用食糧デポ後、イドンナップ岳を経て新冠川下山。実動十二日、停滞四日、計十六日。

劍岳の第二登頂

—吉田孫四郎について—

藤 平 正 夫

はじめに

明治四十年に当時の陸地測量官・柴崎芳太郎一行が劍岳に登ったのは、紛れもない事実である。同四十二年七月二十四日、第二回目の登頂者の一人である吉田孫四郎が『山岳』第五年一号に「越中劍岳」と題して第二登の記録を発表しており、その中で頂上の写真に柴崎一行のたてた測量の櫓がうつっている。

発表者は吉田孫四郎で、同行者は石崎光瑤、河合良成、野村義重である。石崎光瑤は著名な日本画家であり、河合良成は小松製作所中興の祖であり、政財界に戦前戦後大活躍した人である。しかるに、吉田孫四郎と野村義重については、どの文献をみても詳しいことはわからない。

たまたま私の勤めている北陸銀行は昭和五十二年に創業百周年を迎えた。私は「創業百年史」編集のプロジェクトをも担当

していて、前身銀行関係の文献など一通り目を通していたが、どうもその中で記憶に吉田孫四郎なる名前があったような気がしたのである。早速プロジェクト・チームに調査させたのが、吉田孫四郎なる人物にぶつかるとなつたのである。

略 歴

ここで簡単に四名の略歴を述べよう。

△吉田孫四郎▽

明治二十年十二月十八日生。大正十三年五月十九日死亡。

富山県高岡市野村、吉田藤兵衛三男。吉田家は高岡市郊外の地主、親戚関係は頗る有力である。孫四郎の妹いねは富山市の十一代密田林蔵に嫁し、まだ健在である。密田家は富山県切つての名家で、北陸銀行の前身、十二銀行創設の功労者で

あり、現日本山岳会富山支部長中田清兵衛氏の父は密田家から出ている。孫四郎の妻ときは同じ高岡市の五代木津太郎平の五女である（現存）。

木津家は戦前高岡市の御三家といわれた有力者の一つであり、高岡共立銀行（後年高岡銀行と合併し、戦時中他三行と合併して北陸銀行となる）の創設者でもある。富山県山岳連盟初代会長故木津誠一氏は木津家第七代に当る。

孫四郎の長女みのりさんは健在で、今回の調査でいろいろ貴重な資料やお話を伺うことができた。

明治三十八年高岡中学第四回卒業。卒業時の成績は六番であった。当時の卒業生名簿は成績順になっていた（これは長女みのりさんに見せていただいた）。河合良成は同中学の二年先輩である。高岡中学から金沢の第四高等学校に進み、続いて東京帝国大学に入り、卒業後大阪の住友倉庫入社、大正二年高岡共立銀行入行、大正五年同行金沢支店副支配人、同年富山支店支配人、同八年本店副支配人となっている。高岡共立銀行は大正九年二月、高岡銀行と対等合併しているが、合併時の職員名簿に孫四郎の名がのっていない。合併の話が出た頃健康を書して銀行を辞し、大正十三年死亡している。

△野村義重▽

明治十八年六月生。大正三年三月死亡。富山県舟橋村仏生寺、野村長右衛門四男。富山中学第十五回卒業。四高から東

大法学部卒業。明治二十八年富山市岩瀬の植村覚治郎家へ養子縁組。明治四十二年六月（二十四才）離縁、野村家へ帰り、大正三年病死。多分腸チブスと思われる。離縁の原因は、外交官を志し植村家を継ぐ意志がなかったためとのことである。野村家は当時、富山県切つての大地主で最盛時は富山県新川郡一帯に約六十町歩の田を有していた。

残念なことに二度火災にあい資料は全くない。

△石崎光瑤▽

明治十七年四月十三日生。昭和二十三年三月二十五日、六十三才没。富山県福光町生。本名石崎猪四一（イシイチ）。

明治二十九年十二才の時、金沢の山本光一（光琳派）について日本画を学ぶ。明治三十六年十九才の時、京都の竹内栖鳳の門下生となる。大正元年、文展初入選。

大正五年十月、第一回の渡印、ヒマラヤ登攀。アジャンタ、エローラの遺跡探勝、大正六年帰国。大正七年「熱国研春」（インド旅行で取材）で文展特選。昭和八年第二回渡印、ヒマラヤ山の中に行く。第一回の渡印では、八ヶ月余の間に二度にわたってヒマラヤ山の中に入っている。ダージリンを経てサンダクフ高原に入り、カンチエンジュンガ、シニオルチュー、ジャヌーを間近に見ている。その後カシミールに入り、マハデムユ峰登頂に成功。シシャナム峰、コラホイ峰に向うが悪天候のためついに断念する。第二回目の渡印では十七年

前に果せなかつたコラホイ峰（五四四〇メートル）登頂に成功した。

石崎家は代々加賀藩の十村（トムラ）役（大庄屋）で持ち高八百石、十二代彦多郎は欧州留学後、海運業を営み伏木、兵庫、東京に回船問屋を設け、貨客輸送を行ったが、明治二十二年持ち船「ギーロン」号が沈没したため衰微した。福光町に残った和泉尾善右衛門は和善と称し、同じく海運業を営んだが、これも前記「ギーロン」号沈没からんで没落した。光瑠はその五男である。河合良成の父はその石崎和善商店に支配人格として勤め、良成と光瑠は幼時より一緒に住んでいた。因みに光瑠は良成の二才年長である。

△河合良成▽

明治十九年生。昭和四十五年没。富山県福光町に生れる。高岡中学、四高を経て東大政治学科を卒業、農商務省に入る。大正八年退官、東京株式取引所理事に就任。日華生命、中央毛糸紡績、帝国火災の各取締役を経て、昭和十七年東京市助役に就任。戦後、農林次官、厚生大臣に任ぜられたが、パージで追放。その後トラクター生産が行詰っていた小松製作所の相談役となり、見事更生させ社長に就任する。やがて世界的ブルドーザー・メーカーとして各国に輸出するようになる。

四人のつながり

四人のつながりの始めは四高時代であろう。河合、野村、吉田の三人は、先後輩の差はあれ、同時に四高に在学している。光瑠は学校との関係はなく、河合との関係から他の三人と知りあつたのであろう。

後述するが、孫四郎が死の寸前の手紙に「二十年來の友」と光瑠のことを言っている。逆算すれば四高時代になる。

河合、野村、吉田の三名は東大に入り、加賀藩の子弟留学のための施設、明倫学館（小石川伝通院裏）に入寮している。ここで三名は同郷意識で非常に親密になつたようである。良成は自叙伝に、加賀、能登、越中の出身者の対立が激しく、同郷同志の団結がかたいことを記している。

良成は正力松太郎（読売新聞創設者）と同級で、孫四郎と三人は学生時代一緒に登山を重ねたようである。三人で海路、伏木から直江津に出て信州路をたどり、渋峠を経て（勿論徒歩である）浅間山に登っている。ここで良成は浅間に登らず、二人と別れて富士山に向っている。孫四郎と正力松太郎は浅間登山中、途に迷って野宿し大変難渋している（孫四郎長女みのりさんによれば、麦の握り飯を正力が捨てようとしたら孫四郎にとめられ、それが野宿の際役立つたとのことで、正力は孫四郎を生命の恩人と言っていたとのことである）。

光瑠の五箇山からの白山登山記に、高岡で友人と待ちあわせ
ているが、孫四郎かとも思われるが、詳かにする由もない。た
だ光瑠は、登頂前年の四十一年七月下旬から八月上旬にかけて
立山へ登っている。足どりは、はっきりしないが「立山写生画
巻」が残されており、表題は自ら記し、明治四十一年となつて
おり、高山植物のスケッチに終始しており、日付と場所が記入
されている。それによれば、立山温泉から松尾峠（画巻では待
雄坂）を経て、雄山、大汝に到り、七月二十六日剣岳山谷で高
山植物を写生している。そして大日岳を往復、再び松尾峠を帰
路にとつている。剣岳山谷とは剣沢のことであろう。剣岳第二
登を意識しての偵察の意味を持っていたのかも知れない。

四人とも子供の頃から毎日、剣岳を眺めており、自らそそら
れるものがあつたのだろう（それは私自身も物心ついてから、
晴れた日は東を限る立山連峰を飽かず眺めたものである。特に
印象的だったのは、池の谷の雪渓である。ただひたすらに直上
する大雪渓には三の窓の大キレットとともに、ひどく探求心を
そそられたのである）。

河合長成の自叙伝の中にも、同じような一節がある。

「朝晩立山連峰をにらんで暮した。……そして少年時代からの
考えでは、伊折谷というところに白い布のような雪渓が中腹か
ら八合目位までかかっているから、その雪渓をたどつて登れば
相当のところまで行ける。そのあとは岩石づたいに登つて行

けば頂上まで行けないこともなからうと思つて、十数年間も朝
晩眺めていたわけである」としている（『明治の一青年像』昭
和四十四年）。

第二回登頂について

一応『山岳』に発表された孫四郎の記録によつて登頂の概要
を記そう。

明治四十二年七月二十二日、立山温泉（今はさびれて跡形も
ないようであるが、当時は立山登山の大根拠地であつた）を出
発して、松尾峠を経て追分に出、正午室堂着。室堂で数日前に
登つていた石崎光瑠とおちあう。翌二十三日、雷鳥沢を登つて
剣御前に到り、剣沢を下つて真砂平に到着、早速小屋掛けをし
ている。二十四日午前四時半出発、昨日下りてきた雪渓を廻り
長次郎谷に入る。長次郎谷を登っている時、雪溪上部に熊を発
見し大声を發して追いはらう。巨岩にぶつかり左俣の雪渓に途
をとる。その岩を「熊の岩」と名づけている。八時雪渓を登り
切り、三十分にして頂上に着く。頂上で光瑠の撮影で記念写真
をとつている。『山岳』にのつているが人物の説明がなされて
いないので、説明をつけておこう。左から宇治長次郎、河合長
成、吉田孫四郎、野村義重、佐々木浅次郎、立村常次郎であ
る。

十時三十分下山の途につく。三十分で雪渓につき下降開始。

大変苦勞して下り熊の岩まで一時間四十分を要している。三時小屋に着く。二十五日午前六時出発、八時二十分剣御前着。室堂で昼食をし、夕方立山温泉に帰着している。

これが第二回登頂の概要であるが、剣岳登山は誰が発意したのだろうか。良成の自叙伝でも、孫四郎の登攀記でもはっきりしない。考えられるのは、光瑠を除いて三人は同じ明倫学館で寢食を共にしているので、この三人から誰ともなく話が出て、光瑠が同調したのではなからうか。実際のリーダーについては不明であるが、良成は当時ノイローゼにかかり休学している状態だから、少し無理であろう。野村義重については、特に他に行の記録なり山好きであったという話は残っていないので、リーダーということは考えられない。

光瑠は明治四十年七月、白山登山、四十一年五月日本山岳会入会（会員番号一五〇番）。孫四郎は四十二年四月入会（会員番号一九五番）。因みに良成は四十三年五月入会（会員番号二〇三番）している。野村は入会していない。

たしかに光瑠が一番年長であり、登山歴も最も古いようで、数日前に立山へ先発して待っているなど意欲満々であるが、どうも偵察の役割が濃厚で、立山温泉で一切の支度を整えているのは、孫四郎であって全体の指揮は孫四郎のようである。良成の自叙伝によると、剣岳登山中、

「石崎君が画家で、運動神経が鈍いものだから、細引きで両方

から引っ張って、いろいろ苦心したことを今でも覚えていいる」とあることや、『山岳』に発表したのは孫四郎であることなどから、吉田孫四郎がリーダーであったと考えるのが順当であろう。

登頂余聞

『山岳』第五年一号の孫四郎の登頂記の中で、一、二註釈を要するところがある。

柴崎の登頂記録を『山岳』第三年二号の「剣岳先発記」としているが、正確には第三年三号である。この「剣岳先発記」は柴崎の書いたものではなく、新聞記事の転載である。『山岳』第三年三号の雑録に、「越中剣岳先発記」として会員田部隆次（富山出身）より「剣山登攀冒険談」という四十年七月末の富山日報の記事が送られたとして、記事を転載している。これは全くの転載であって少し違うところは、四十年七月末ではなくて、正確には四十年八月六日の富山日報である。それは、富山日報の記者「呉山人」が立山温泉で柴崎一行に会い、剣岳登頂の談話を取材し記事にしたものである。

孫四郎は剣岳登頂記の後尾に、「余記 柴崎測量員登山の真偽」として二点の疑問をあげている。

第一は、剣岳頂上三角点についてである。「剣岳先発記」には「二等三角点を設けんとせしも、名にし負う険山とて、機械

及び材料を運上ぐる能はず、止むを得ず、四等三角点を建設する事とした。其も四本を接ぎ合はせて、漸く六尺位になる柱一本を建てたにすぎない」とあるが、自分の見たのは「一丈許りの一本の自然木の皮を剥ぎしにすぎない」。

第二は、第一回登山に伴った人夫、宮本金作と会った談話である。孫四郎は剣登山の帰途、宮本金作と会っており、金作の言として、金作は第二回目の登山即ち造標観測の時に登っており、柴崎は前後両回とも参加していないと言っている。これらについては孫四郎自身、「もとより敢て紛議を惹起するの意にあらず。物云わざれば腹ふくるるの感あればなり。」としているが、文章の意気込みは相当激しく、如何にも青年客気の感がある。

この相当挑戦的な孫四郎の疑問に対して、『山岳』第六年一号に、「本誌五年の第一号所載剣岳登山の記事に就て」と題して柴崎芳太郎の反論文がのっている。

それによると、柴崎は東北方面の測量に従事し本を読む暇もなかったが、仕事が一段落して帰京した際、『山岳』第五年一号の孫四郎の記事を見たとする。そして、「当時余の顧念する所は、唯測量の建標及び標石運搬の能否如何の一事にありしのみ」として、先ず測夫生田に命じて査察をなさしめた（これが第一回の登頂である）。然し三等建標が可能かどうかの判定を下すべく生田を率いて自ら登山し、四等三角点の建標を建設し

た。「登山の事実は、夫れ只此くの如きのみ」。

そして立山温泉で資料整理中のところへ、同地新聞社（富山日報のこと）の記者が来て、談話を取材して行って新聞に発表した。「しかして載するところの教節、事実に相違するものありしも、之が正誤を加うる必要なきを以て、其儘不問に措けり」。例えば投網を使つて登つたとか、建標のため教本の木をつなぎあわせたということである。

宮本金作の言については、「隴上偶語、未だ俄に其の真性を判するに難し、彼が言として紹介せられたところ、己に一二の相違あり」としている。

そして「登山の事、余に於て何等之を珍異とするの感念なし、斯の如き事は、余輩職に海岳の際に奔馳する者としては、日常の事たるのみ」として、孫四郎の疑問は「畢竟一場の戯言ならん」と一蹴している。いかにも剛直な柴崎芳太郎の性格を偲はせる反論文で、勢いこんだ若武者の切先が古強者に軽くあしらわれたようである。このやりとりは当時としては相当センセーショナルなものであつたらう。日本の中で唯一の処女峰についての初登者と第二登者の論争である。言葉をかえればプロとアマの論争であらう。

『山岳』第六年二号の雑録で、「キンボウゲ生」が「越中剣岳最初の登山者に就きて」の一文を寄せている。キンボウゲ生は誰なのか。筆者の未熟で詳かにしえないが、大変大胆な臆測を

許して貰えれば、吉田孫四郎ではなからうか。孫四郎長女みのりさんによると、芳太郎の反発文に対して、更に反発文を寄せたと孫四郎が言っていたとのこと、前後の『山岳』にはこの問題を扱ったのは、このキンポウゲ生の一文だけだからである。

キンポウゲ生によると、『山岳』第三年二号で富山日報の記事の紹介の前文に、明治三十九年十月刊行の『風俗画報』によると同年九月に芦崎寺の佐伯某が毛勝谷より登っていることが報ぜられているのを大きく取り上げ、それを探求することが大切なのではなからうかと論じ、吉田、柴崎の問題については、「自分は吉田氏が柴崎氏に致した非難を柴崎氏の弁解と対比して考えて、柴崎氏の言の方を採りたいと思つた」としている。

山岳会の大会

日本山岳会では第一回大会を明治四十年五月開いている。第二回は四十二年五月で、出席者に孫四郎の名前がある。孫四郎の入会は明治四十二年四月から五月にかけてと考えられるから、当然であろう。その山岳会の雰囲気の中で、剣岳第二登頂の意志をかためたのである。

第四回大会は四十四年五月七日東京府教育会館で開催され、講師に柴崎芳太郎が招かれ「山岳と三角測量との関係」と題して講演している。その記事に「氏の剛健なる、壇上に自ら称し

て山男といい、蛮勇を以て事に当ると声言せられている、加えて氏の熱誠は一言一句に溢れて、聴者として同感せしめざれば止まない概がある」と評している。同記事にのっている柴崎をうつしたスケッチもまた頗る傑作で所謂剛直なる感じが良くでている（多分茨木猪之吉のスケッチであろう。当日の参会者に同氏の名があり、画風からみても）。

ところが参会者の中に孫四郎の名がのっている。柴崎と孫四郎は言葉を交したのだろうか、これは一切わからない。ただ登頂後時間も経っているので、当時の興奮も去つてお互い目くじらをつたてることでもないとして軽く挨拶を交したぐらいかも知れない。

孫四郎の晩年

孫四郎の山のことについての話はこれで終るが、筆者がここまで調べているうちに、最後ということで高岡市郊外の吉田家へ参上したのである。孫四郎の長女みのりさんとお話している一冊の本を見せられた。

『信仰生活』と題する一書である。これしか残っていないと洩られるのを無理に借用証を入れてお借りしたが、一読巻を措く能はず、一気に読み切った。

若くして死病にとりつかれ闘病に明け暮れして遂に仏教信仰に打ち込み、最後には死生を超越した心境に到った一人の男の

森嚴な精神の記録である。蛇足と知りながら、敢えてこの一節を挿入したい。

前後の關係から推察すると、銀行の仕事の俗悪さに愛想をつかし、一方つりのりくる身体の不調から高岡共立銀行を辞している。そのままならば係累といい、学歴といい申し分のないエリート・コースなのだが、孫四郎はそんなことを考えたこともない。不治の病（腎臓結核）にかかったことを自覚し、仏教信仰に打ちこんだが、『信仰生活』は彼の信仰に関する書簡を記録したもので、父が夭折した息子を憐んでつくったとのことである。大正十三年没するまで最後の二年間、寝たままであつたらしいが、その中で丹念に手紙を認め、画もかいている。

冒頭の一文は、自分の一生を略述し、最後に葬儀のことを指示している。いわば遺書である。一部を抄録しよう。

「父上へ。大正十二年十一月二十八日

三十七年間寸刻も忘れず愛撫せられたる鴻恩は余りに尊いことです。今日難症に災せられて、再び起つ能はず。命終漸く迫らんとするに際し、古稀の寿を越させられたる、父上様の御胸の中を察しまいらせては正に断腸の思があります。何という不孝の兒としての苦痛でありませう。」「大学四年の月日は、素純にして健全に送ることができました」（この期間に劍岳登頂を遂げている）。「大正二年より八年に亘る銀行時代は、不幸にして無意義に暮しました。——中略——私の一生より此の六年間を抹

殺したいものです。恐るべき病魔も亦、此間隙に侵入した訳であります」（銀行家のハシクレである筆者にとつては、いささか納得できないところではある）。「医師より不治の難症と宣告せられ、一旦は断頭台上に上りました苦痛は、並々ならぬものがありました」

そしてこの苦惱の中で信仰を求めて遂に、「人生究竟（くきょう）を体得し、少々その大目的を達し得たことは、洵に慰悦至極です。そして葬儀についてはことごとく簡單にしてほしい、その代り自分が尊敬していた安溪先生（大西安溪となつてゐるが不分明）を時々招請して、「一年に三度以上、私の命日若しくは其他の日を選んで講話を願ひ、私の親愛なる人々に私の家へ打ち寄りてもらえば、私の満足にすぐるものはありませぬ。己上」

浄土真宗を信仰したが、必ずしも正統派ではなかつたらしい。異安心と言われたが、という言葉が時折見える。だが非常に勉強家だつたようである。たとえば「長阿含遊行經」を訳している。これは原始仏教の最も古い經典の一つで、その中でも最高傑作とされているものである。

劍岳同行者中、石崎光瑠とは格別親しかったようである。芸術家と求道者の純粹なものを求める心性に共感するものがあつたのであろう。病にかかつてからも光瑠はたびたび訪れ、書簡の往復も多い。

大正十一年一月八日

「光瑠大兄。印度の山の絵を頂いて御札と御手紙の返事を致します。……立派な高峰の美観が展開して来たのです。よほどこの絵が気に入ったらしく、みのりさんによれば病床から見えるようにかけ、毎日眺めていたとのことである。」

大正十二年十月十一日、石崎光瑠宛

「新聞紙は大兄の審査員に推薦せられたことを報じて来ました。」

大正十二年十月二十九日（前述の遺書は一か月後に書かれていた）

「この間石崎光瑠兄が訪ねられましたが、云々」

大正十三年二月十日

「先月の二十五日でありましたか、私の二十年來の友人、石崎光瑠画伯が突然に訪れられ、最近の欧州旅行の感想など終日聞かせて下さいましたので、私は発熱の苦も打ち忘れ、そのお札代りに我田引水論をやりました」

病状は悪化の一路をたどり、大正十三年四月十三日夕。

「先日（六日）御来駕下された夜の八時過ぎから危篤を自覚するに至りましたので」

そして大正十三年五月十九日死亡。親しい友人が集って、追弔法会を行う案内状が残っている。煩をいとわず全文を引用しよう。孫四郎の人柄が偲ばれるからである。

「畏友吉田孫四郎兄久敷病床にあり、念仏三昧に住して奇蹟の如く生き、聖者の如く法音を四国に宣べ居られ候処、既に此の世の化縁尽き、五月十九日遂に安養に向つて還帰せられ候。御同様哀惜の情やるかたなく候。せめてものことに一夕諸兄と共に精舎に集り、故人の追弔法会を営み、いささか故人が生前の友誼を懐ひ、我等に遺せるその尊き印象を新に憶念しつつ、心ゆく許り語り合度奉存候間、御用務御多端の折柄とは存候得共、万障御繰合何卒御参会被下度、御待申上候。」

六月一日

頓首再拜

田中良雄

極く入魂の十二の方々」
發起人筆頭は石崎光瑠である。

『信仰生活』は信仰に関するものだけを集録したようで、山の写真やスケッチが相当あったようだが、遺族にとつては、よくわからないので棄却したものもあり、未整理になっているものもあるようである。

みのりさんによれば「父は常に求めている人でした」という。だが病床でヒマラヤの絵をあかず眺めた孫四郎の胸中、見果てぬ夢・ヒマラヤがあつたかも知れない。

穂高のパイオニア・鶴殿正雄の生涯

上 条 武

鶴殿正雄が逝って三十有五年、その深い生き様の底はどうであろうかがえないが、登山家・鶴殿の理念は、おぼろ気だが肌を感じるものがある。日本の近代登山の黎明期に、探検登山家として不滅の足跡を刻しながら、一村夫子としてその生涯をとり、誇ることもなかった人間・鶴殿正雄に、いま贈るにふさわしい呼称はたやすく探せない。穂高にも、上高地にも、彼を偲ぶよすがは、何ひとつない。

最近、私はまぎれもない鶴殿正雄の遺品の数々に接した。長い間それを探して来た私は、とうとう求めていたものに会えたと思つたが、まだ鶴殿正雄を語るのに充分材料がそろつたとは云えない。しかし、以下に私に出来る範囲でこの知られざる登山家の紹介を試みたいと思う。(以下敬称略。年齢は数え年)

生い立ち

鶴殿正雄は、明治十年(一八七七)十一月二十七日、現在の長野県小県郡丸子町大字長瀬三四五八番地、池内家の三男として生れた。池内家は幕府天領の長瀬で歴代大庄屋をつとめ、父は市左衛門、母をてへといつた。

明治五年(一八七二)学制の布告で、当時鳩ヶ谷宿(現川口市)に住んでいた旧幕臣旗本の士族鶴殿直記が、長瀬の学校に教師として着任した。直記は、明治七年(一八七四)池内市左衛門の妹やそと結婚したが、彼は明治十一年(一八七八)に早死した。

二人に子供はなく、兄市左衛門の許に身を寄せたやそは、生後間もない甥の正雄を愛し、ついには鶴殿家の跡目にと、兄夫婦に懇願しつづけた。そして、明治十五年(一八八二)二月二



Plate 13-(a) : 鶴殿正雄肖像

明治 43 年 10 月 11 日撮影

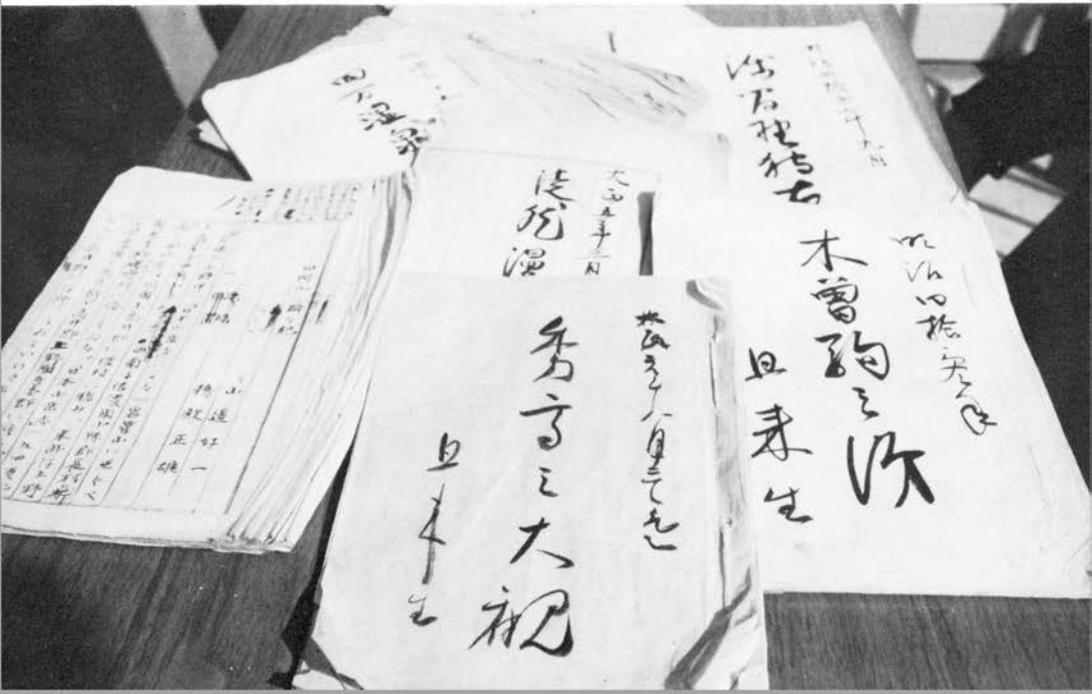
北岳，地藏，鳳凰の山旅終了後の撮影と思われる。

(Plate 13(a)~(c), 上条武 提供)



Plate 13-(b) : 木曾駒集団登山の鶴殿正雄（山林学校二年生，中央坐る）
 明治 37 年 7 月 11 日撮影。

Plate 13-(c) : 鶴殿正雄の紀行文原稿。



十七日、正雄は六才で鶴殿家に入籍した。正雄は、養母のやそと共に池内家に在って成人する。彼は生来頑健で、旺盛な向学心と冒険心に富む少年だった。

明治二十五年（一八九二）、鶴殿は高等小学校を卒業し、生家池内の家業についた。池内家は、田畑山林數十ヘクタールを所有する資産家で、二十数ヘクタールの田畑を自作し、常時十五、六人が従業する大規模営農家でもあった。

「……近想スレバ予ノ小学課程ヲ卒ヒシハ、実二十五才ノ春ニテアリキ、ソノ課程ヲ終ルヤ躍起一番軀ヲ中学ニ投ジテ、以テ帝國国民タルノ養素ニ資シ、他日有為ノ人材タラント期シ、頼リニ阿父ニ向イテ嘆願ストイヘドモ、事情ハ予ノ要求ヲ納レズ、空シク恨涙ヲ仰ギテ農耕ニ服務シ、断然以テ他意ナキヲ示シ又然リトイヘドモ、予甚ダ奇癖アリ、唯々諾々トシテ驢尾スルヲ好マズ、ヌスムヲ以テ遺憾トナストイヘドモ、偶々内堀師徒弟ヲ棟メテ晨夕講誨怠ラズト聞ク、予欣然其門ヲ叩キ親シク其卓説ヲ仰ギ大ニ得ル所アリ……」

とあるは、遺稿「一号之答」の一節で、二十五才の春彼岸に書き置き、号を養鬼という。文中の内堀師は名を茂八といい、郡下で開かれた青年会夜学の漢学の先生である。この頃の数多い遺稿は、儒学の人道主義に基く倫理道德教育を受けて、人間鶴殿正雄を形成していく過程を鮮かに見せる。「驢尾スルヲ好マズ」とする彼が、内堀師から受けた薫陶は実に大きく、それが

登山家鶴殿の理念を生み、誠実な人生を送らせる。

岳との出会い

鶴殿の遺した紀行は、「夢科山（一名建科山）ニ登ルノ記」が最も古い。明治二十八年（一八九五）八月二十日、十九才の鶴殿は、同村の友人を誘い、案内人を伴って一行六名で夢科山に登った。同紀行の一節に、

「……西方ニハ飛越ノ界ニ乗鞍・槍・穂高・常念・蝶・大天井等ノ高峰一眸中ニアリ、頼ル壯観也……」

とあり、頂上付近の見取図が描いてある。

「……予思ハズ快ト唱シ、仙境ニ入ルト絶叫ス、写真手ヲ従ヘザルヲ憾ム……」

とのくだりもあって、彼の本格的な登山はこれが初めてとは思えない。紀行に後年の素地が見え味もある。

ちなみに、これより僅か十ヶ月先に、志賀重昂が穂高のない

『日本風景論』を出版している。鶴殿の遺した書籍の中には、『日本風景論』は見当らなかつた。

「浅間岳ニ登ル記」も見落しはできない。明治三十年（一八九七）七月十日、計画は鶴殿の立案で、青年会夜学で数学の講師を兼ねる、上田の成明学舎々長鮫島理学士を隊長に仕立て、生徒学友ら十九名と、一泊で浅間山登山を執行した。紀行は充実し、風格が出て見応えがある。鶴殿は頂上で濃霧の去るのを

頑固に待つ。その手には双眼鏡が握りしめられ、二十一才夏のこの登山では、ようやく西北方の槍・穂高に熱く鋭い目差しを向けている。

小島烏水は『日本風景論』の内容を明治二十九年（一八九六）六月に知り、初めて登山らしい登山に浅間山を選ぶが、鶴殿のこの紀行におくれること二年、明治三十二年（一八九九）晩秋のことである。

鶴殿はこの年の徴兵検査で、「甲種合格くじ逃れ」となり、探検登山家鶴殿の誕生に力を貸す、運命的で大きくくじを引いた。彼の勉学には休みがなく、明治三十三年（一九〇〇）には、当時一般的には極めて関心の薄い民有林経営に着目して、大日本山林会通常会員となって、各地を巡り見分を広めた。

明治三十五年（一九〇二）の紀行、「四方温泉ニ遊ブ記」は趣がある。富士に五回登ったというが、記録はなくてもこの時代のことに間違いないようだ。この年の春、養母やそが五十五才で没した。

木曾山林学校時代

進学の灯を消さない鶴殿に、念願の叶う時がきた。彼は既に二十七才だったが、明治三十六年（一九〇三）四月、ためらうことなく木曾山林学校に入学した。先輩の二期生に加藤純一がいた。加藤は鶴殿より九才年下で、ウェストンでなじみ深い島

島の旅館、清水屋加藤惣吉の養嗣子だ。養子同志で二人は気が合った。二人の結びつきは、登山家鶴殿に大きな幸せを呼ぶ。

鶴殿の山林学校時代、最初の山行きは入学間もない六月二十二日の木曾駒登山で、寄宿の学友を誘い、軽装で悪天候を押し登った。頂上では晴間があつて、眺望にこうこつとするが、やはり穂高・槍に懸想する。紀行は、「紀登駒岳」と題して残った（鶴殿はその後四回木曾駒ヶ岳に登る）。

翌明治三十七年（一九〇四）七月の木曾駒集団登山の記念写真には、彼の登山姿を偲ぶただ一つのものだ。裏面一ぱいに同行者を詳記、この登山で行方不明者が出て学校あげての騒ぎとなつた様子を、簡潔に説明して、「珍事の記念」と結んで面白い。夏には、有明・中房・常念方面に遊ぶが、前穂高初登攀の偵察行とみてよからう。日本人登山家として不滅の足跡を刻した

前穂高初登攀の快挙は、明治三十八年（一九〇五）九月十二日、三年生最後の夏休みも終りに近い頃の出来ごとだった。彼は、「一日に二十里余の道（山道）はしばしば踏んだ」と書いたが、山林学校入学当時は国鉄中央西線はなく、長瀬と和田峠と下諏訪と塩尻峠と鳥居峠を経て、木曾福島まで歩いた。この道程は約三十里（約一一八キロ）ある。後年、長女の美津に応えたという。「なあに、お TENT トウさまと一緒に歩いてきたさ」と。つまり、「日の出に立てば、日の入りに着く」ということだ。彼は実に健脚だった。登山家としても抜群で、前日は上高

地から槍ヶ岳を日帰り登山し、翌日には前穂の初登攀という芸当をやつてのけた。登山道のない黎明期のことである。

明治三十九年（一九〇六）一月に学友三人と撮つた写真がほほえましい。裏面に各人の体格が記入されている。鶴殿は身長五尺五寸（約一六七センチ）、体重十六貫二五〇匁（約六一キロ）、胸囲二尺八寸五分（約八五センチ）、肺量四五〇〇である。几帳面な性格と、臨機にさとい一面がうかがえる。

明治三十九年三月、第三期生として木曾山林学校を卒業したが、而立と呼ばれる三十才であった。

結ばれなかつた初恋

山林学校を卒業した鶴殿を待っていたのは縁談だった。ところが、彼には既に意中の人があった。自分からは士族と書かない彼だが、家柄とやらを楯に許されない結婚だった。失意のその人は、他県へ旅立つて行く。この頃に「山岳会設立の主旨書」が彼にも寄せられるが、それどころではなかつた。断りにくい縁談に、鶴殿は遂に韓国に飛ぶ。明らかな逃避行は、父親の苦肉の策だろう。

『山岳』一年三号（明治三十九年十一月）に、「新入会員―韓国・鶴殿正雄」と載っている。明治三十九年（一九〇六）八月、韓国から山岳会に入会し、会員番号は九十四番。韓国では宮林廠勤務で、「雇員、月給三十五円也」の辞令が残っている。

る。清国の盛京省に遊んで間もない明治四十一年（一九〇八）七月には、長瀬の生家に舞戻つて、加藤純一と交信している。縁談のほとぼりがさめ、岳が恋しさに帰国を急いだか――。

鶴殿の恋物語は、明治四十二年（一九〇九）に「浅間の狩衣」と題して、私小説風にその人らしい相手と二人連れの赤岳登山紀行を遺した。彼は登山の趣味についてその人とふんだんに語つて興味深い。その人敬子は実在し、後年、鶴殿夫婦とほほえましく交際した。生涯を独身でとおしたその人の実名は、いま明すことはできない。

穂高・槍縦走の側面

帰国後の鶴殿の山行きは、せきを切つたように盛んだ。大方は『山岳』に掲載されている。先生方の解説した著書も少なくない。私は、先生方の触れない側面をのぞき見して、危険だが素人推理を加えてみたい。

鶴殿と、鳥々の加藤惣吉、純一親子のことは前に書いた。彼は惣吉の知遇を得ていた。惣吉は、明治四十二年（一九〇九）から、上高地温泉株式会社の経営を一任され、嘉門次、嘉代吉父子とは一層密接になっていた。嘉門次父子と鶴殿との初対面が、明治四十二年八月以前であることに疑問はない。嘉門次は、登山家鶴殿の人柄、実力を高く評価して、互いに信頼関係があつたと見てよい条件が揃っている。

嘉代吉は、明治四年（一八七二）の生れで日露戦争で負傷した。鶴殿の兄八百次郎は嘉代吉と同年で、やはり日露戦争で不幸に戦死している。鶴殿が韓国時代に遊んだ清国の盛京省は、嘉代吉が日清・日露両戦争で転戦した地であった。二人に共通の想出があった。しかも同じ信州人同志、この秀れた山男三人が、親近感を深めて不自然さは全くない。

明治四十二年八月、時に加藤惣吉四十五才、上条嘉門次六十三才、嘉代吉三十九才、そして鶴殿が三十三才（加藤純一は青森大林区署勤務で不在）。近代日本登山史上にそれぞれ名を刻した開拓者が顔を揃えていた。この人間関係が、世紀の穂高・槍の初縦走を成功させる根源となった。

さて、鶴殿は「穂高岳槍ヶ岳縦走記」に、

「此処から槍迄は、主系の連峰を辿るのだ、即ち信・飛の国界、処々に石を積み重ねた測点……」

と書いていたが、積まれた石は明治三十五、六年（一九〇二〜〇三）にかけて、大林区署（今の営林局）の測量員らが境界測量のために設置した石塚である。槍ヶ岳の頂上から中尾峠までの稜線上に、石塚は百十一個所、木標、固定岩石、樹木など、合計三百九個所に測点を置いてあった。翌三十七年七月にこの境界測量作業は完了している。

鶴殿も「……嘉門次父子を先鋒とし、陸地測量部員の他、前人未知の奥穂高を指す」と書いているが、嘉門次父子が大林区

署の測量に従事したことは、想像に難くない。嘉門次はそれを黙して案内に立った。仮に烏水であったら、危険の程度からして、いかに嘉門次でも遠慮したであろう。

この初縦走に、石塚など測点の果たした役割りは大きい。しかし、山林局関係の測量登山を、登山史のなかで見ることがはない。『山岳』八年二号の「穂高山南稜跋渉記」で、大正元年（一九一二）八月十二日、鶴殿が清水屋で落ち合った学生の一人、沼井鉄太郎は、東京府立四中在学の少年で、鶴殿は美髯をたくわえた三十六才の分別盛りであった。後に日本山岳会評議員となった、「鶴殿は信州小諸に住み、小林区署勤務」との誤報を流したのが、この沼井という人らしい。二人は『山岳』十六年三号（大正十二年）奥上州の誌上で再会する。鶴殿の最終投稿「秋の四阿山」と隣り合うが奇縁である。

沼井らと徳本峠越えをした鶴殿は、その足で嘉門次を表敬訪問して教示をうけ、奥穂・西穂初縦走に成功、いわゆる鶴殿の穂高三部作を完成させる。それは、穂高探検登山時代に終幕を告げるものであった。鶴殿にとって、この縦走行は熱愛した穂高の峰々、親睦の嘉門次、なつかしの上高地や温泉場との、秘めた別れの旅でもあった。至難とされた穂高岳開拓の全てを完了させて、鶴殿は再び穂高の紀行を残さない。

ここで、穂高に係る遺品の一部を見よう。携行した地図は、明治二十七年印刷の陸測部二十万分ノ一輯製図、鉛筆の跡と汚

れが目立つ。空盆晴雨計はロンドン製。パリ製のカリレオ型
 双眼鏡は視野が広い。いまでいう万歩計が立派で、腰に当る部
 分の銀がすり減って地金が洩く光って印象的だ。『山岳』五年
 一号に発表した、等高線入り五万分一の「槍ヶ嶽穂高嶽附近
 踏測図」の下書きは、消しゴムと鉛筆の跡が生々しく尊い。加
 山竜之助の写真と、スケッチの原画が作成過程を教える。前穂
 の三角やぐらの写真もめづらしい。どれも深い感銘を覚える。
 双眼鏡をもめづらしがってしつこく聞いた幼い長女の美津
 に、「銀座のウインドに出ていたのを五十円で買った」と話し
 たことを六十二才の美津が思い出してなつかしんでいた。

『山岳』誌上の鶴殿

遺稿「無頓着ノ説」(青年期の作)は、「無頓着ハ無責任ニア
 ラズ」と書き起し、

「吾人ハ冷語ヲ聞き做ス程ニ無神経タルヲ欲セズ、讀語ヲ冷
 語ト聞き僻ムル程ノ過敏神経者タルヲ願ハズ、然カモ世間ノ
 毀誉ヤ他人ノ褒貶ニハ頓着ナク、自己ノ所信ヲ泰然、平然ト
 シテ貫徹スルガ如キ、人タラン事ヲ望ム。蓋シ若シ内ニ自信
 カアレバ、如何ニ鞭撻シテ、外聞ノ紛々タル小事ニ頓着セシ
 メント欲スルモ克ハザル也」
 と結んでいる。

『山岳』誌上の鶴殿は、まさに「無頓着の説」を地で行くも

のだった。

「鶴殿は『穂高岳槍ヶ岳縦走記』など、二十九本以上の原稿を
 『山岳』に投じ、二十七本は掲載されたが、少くとも二本は未
 掲載で残された。多くは第五年から第八年に集中して、断然異
 彩を放っている。彼は探検登山家らしく、厳しく記録を重視し
 た。『山岳』には克明に目をとおし、誤りを発見し、疑問を抱
 くことを見逃すことをしなかった。ことに、鳥水ら山岳会幹部のそ
 れに対しては厳格である。

山岳会の幹部で、何らかの指摘を受けない者は少なかった。
 高山植物の乱採を嘆いて、暗に山岳会主流に反省を求めた。彼
 には野心はない。提言や意見は情理を尽し、常に是々否々の立
 場にあるが、いかに正論でも、受ける側が穏やかであるはずは
 ない。ついには異端視されるが、鶴殿は無頓着だ。彼は人間と
 して常に誠意をつくし、山岳会員としては、余りにも純粋に過
 ぎた。自分に厳しく、反骨ともみられる理想主義は、草草会、
 博物会が主流の日本山岳会では、全く異色でなじまない存在だ
 った。

明治四十三年(一九一〇)十月二日、鶴殿は雨と霧の中を北
 岳絶頂に立った。例のように、標高を三一七七メートルと見事
 に測る。この時の旅は五日間、その一部を「白峯(北岳)に攀
 じ登る記」と題し、四十五枚の記録を他の原稿とともに『山
 岳』に投じたが、行方不明となってしまう。赤石山脈の諸

高峰」という三十三枚も、同じ運命をたどったようだ。二本とも、素原稿が遺されているが、『山岳』が理由なく没にするわけがない。推理をたくましくすれば限りなく、興味はつきない。しかし鶴殿は言うであろう、「小事小事」と。

鶴殿と鳥水のからみ

山博士・小島鳥水の名は余りにも大きく、その名声と地位は、何事にも微動だにすまい。明治四十二年（一九〇九）、鳥水は北アの案内人横沢類蔵の言を信じて、穂高・槍縦走は不可能と判断した。嘉門次でないところが面白い。鳥水は、高頭式らと大がかりな一行で七月二十日から三十日にかけて、白峯と赤石山脈の縦断を得意満々に終えた。

鶴殿は、七月十九日付で、高頭式が甲州西山温泉から、「——不二大井の水源問題は、東京にて明瞭仕り、云々」と寄せてきた葉書を見て、おもむろに始動し、穂高・槍縦走を成功させている。鳥水らの驚きは想像を越えるものだろう。

大正元年（一九一〇）の奥穂・西穂縦走を完了させて、穂高開拓は鶴殿の独断場に終わった。文字どおり穂高を彼の独占に任せた鳥水らの無念は、生涯消えることがなかった。鳥水は『山岳』八年一号（大正二年）で、

「言つて宜しかろうと思はれるが、岩壁の急峻と、危険な程度は、飛驒山脈の穂高岳から槍ヶ岳への縦走を、小規模に、

短時間に、切り詰めた観がある」

と、鶴殿の縦走記を評したが、これに対し鶴殿は、『山岳』九年一号（大正三年）で、

「小島氏は（——）とせられた。大体そんな按配であるが、私の想像したよりは小なるものだった。しかし、最高峰と次高峰との間は、前述のとおり、至って危険の個所が多いから、低小な山である等と侮って、不測の災を蒙らざる様、此に一言する」

と、手厳しく応じた。

鳥水は、明治四十四年潤沢谷へ雪上をすべり落ち、嘉代吉に抱きついて助かっていた。鶴殿は余人の如く、鳥水に迎合しなかつたのである。明治四十三年（一九一〇）の鶴殿の白峯登山は、鳥水の後づけをしたもので、鳥水らには皮肉なものとなる。「白峯（北岳）に攀じ登る記」など二本の原稿は、いまわしい「白峯机上登山」の暗い影を背負ってひた走る鳥水が、ためらうことなく没にした、との推理は、私の分析によれば成り立つ。

私の推理によれば、鳥水にとって、鶴殿は不気味で迷惑千萬な存在であった。性格は陰性で、自尊心の強い鳥水は、齒に衣を着せない実力の人鶴殿に秘かに恨念を燃し、奥に劣等意識を隠した。鳥水は、自から最大の武器ペンで、或は黙し、鶴殿の偉業とその名を消去し、埋没させる作業に当り、生涯しんぼう

強くつづけた。鳥水の『アルピニストの手記』と「山の因縁五十五年」だけを見ても、穂高と鶴殿のことに限って奇妙に歯切れが悪く、論旨が不透明である。鶴殿消去の苦心の跡だ。その成果があった。鶴殿の名は淡く遠のき、その業績も埋没への道をたどっていった。

話題を変えて、鳥水の古典「鎗ヶ嶽探険記」の、「神河内の孤屋」は有名だ。

「……狭き小舎ながら（中略）三間に割りて在り（中略）我等はその一室に草鞋を積きたりしが、隣りにての室には洋服を着けたる山林巡廻の吏二人、導者一人と……」

とのくだりがあるが、あとで「あれは嘉門次小屋で……」と、鳥水は再々言う。

鶴殿は「穂高岳槍ヶ岳縦走記」に、

「……嘉門次の住居、方二間余、（中略）檐端に近き小島の大根は……」

と描写した。三間に割って、大きないろりを造るには小さ過ぎる住居である。

二人の描く嘉門次小屋は明らかに違っている。鳥水は『山岳』六年三号（明治四十四年）の、「日本アルプスと万年雪の關係」のなかで、次のように書いている。

「……私は霞沢の頂きから、この狭谷―即ち上高地（中略）へ下りて、熊をとる獵師小屋に一泊して、翌日初めて槍ヶ岳

を登ったが、それは今ここには言はない。私が初めて上高地へ下りたときは（中略）河畔に温泉はあったが、湯壺もなく……」

孤屋すなわち嘉門次小屋とは、ここで言う獵師小屋になるが、いかにしても怪しい。鳥水が一泊したのは嘉門次小屋ではなかった。上高地温泉場の掘立小屋だった。明治三十五年八月、ここには三間に割って、大きないろりのある小屋があった。湯壺はないが温泉はあった。発足（登記は明治三十五年六月）直後の上高地温泉株式会社の原景に相違はない。現在の明神地籍に温泉湧出の記録はない。

鳥水の「梓河畔に立ちて穂高山を觀する記」は、總体的に罪な小説と思えてならない。無欲に真実を追求する鶴殿の紀行、名譽欲や功名心、原稿料のために書く鳥水の小説的紀行、その相違が即ち鶴殿と鳥水の違いである。

「山岳原稿御恵投被下 乍毎度ありがたく存候 本年の第三号え掲載光彩を添えたく楽しみ居候

新聞の切技等毎度お心づけ被下

多大の便益を享け居候 鳥水生」

大正二年（一九一三）四月一日付で、小島久太が鶴殿に送った葉書の文面がこれだ。鳥水に協力も惜しみなくした鶴殿の、人柄のよさが浮き彫りされて、二人の人間像とからみを物語って余すところのないものだ。

百姓鶴殿と山登り

鶴殿が、奥穂・西穂初縦走を完了した年の秋十一月（大正元年）に、父市左衛門が七十二才で長逝する。池内家は長男は日露戦争で戦死、次男は幼くして亡く、市左衛門の死は鶴殿を激しくゆさぶった。厳父が登山家鶴殿を一人理解し、精神的に経済的にささえてくれたことを、誰より鶴殿自身が痛い程に知っていた。亡父の寛大な愛に報いるに、彼は末妹の富貴恵に養子した岩人に協力して、池内家の家事に従事し、農耕、養蚕に専念した。登山家鶴殿は、百姓鶴殿として見事に変身したのである。

登山は、大正二年（一九一三）秋の鋸岳縦走を節目に、以後数年は記録を残さない。しかし、山への愛着は絶ち難く、大正五年（一九一六）発起人となって、町組内に立山講を組織し、毎年夏、くじ引きで立山に登った。また、婦人雑誌に「徒然漫筆」なる軽妙な連載ものを寄せ、自然の趣味の啓もうにもつとめ、日本アルプスの呼称を幾分やゆして面白く、他に緻密なところを見せる。号が三たび南溪と改められている。

この間、モチ米の品種改良に成功し、「いわとモチ」と命名されて、長年近郷で作付けされたが、義弟岩人の労苦と協力に報いて、その名を冠したという。義に厚く、何事も自分のためにならない、鶴殿らしいやり方だ。

大正六年（一九一七）、彼は近郷の良家下村一平の長女たちと結婚した。新婦は二十七才、美髯の見事な新郎は四十一才。

新婦の実弟市郎は、後に信州大学工学部の前身、長野工業専門学校の初代校長に就いた。鶴殿夫婦は、結婚後も池内家で生活する。大正八年（一九一九）七月に劍岳、翌九年九月には四阿山に登った。百姓鶴殿の山登りは、子供を得る毎の記念行事の感がある。大正十二年（一九二三）、現在地に居を構えて、名実ともに鶴殿家を再興した。道義に徹した道順を踏んで、実父母、養母に報いたのである。鶴殿は四十七才になっていた。四女の志津が新居に移って生れた。

彼の生活は厳しく変化したが、挫折感を知らぬ気な強じんな意志で、家業の農事のかたわら、地域社会には農林業の実践指導などの広く地道な貢献をした。鶴殿は和歌に長じ、詠名を雅雄と正雄とにつかい別け、各方面に寄せて余暇を楽しむ。近在の信望が厚く、自分は「変人会会長」を名乗って、逸話にはこと欠かない。

一男五女の子宝に恵まれた彼は、一人息子正信を授けて躍喜するが、それは既に五十路の峠に立った大正十五年秋のことであつた。この年、慈母へは、孫正信の誕生を見ることなく、八十四才の天寿を全うした。

終 息

昭和五年（一九三〇）十月三十日、頑健な鶴殿が五十四才で脳出血で倒れた。天は非情にも、山を奪い、まめめめしい筆をもとりあげた。翌昭和六年（一九三一）病氣軽快した鶴殿は、五月二十日付で日本山岳会に退会届を送った。恐らくふるえる手に筆をとって、万感去来するなかで退会届を書いたに違いない。彼は登山家として理想を求め、妥協も打算もなく、その主義をつらぬいて、節を売り、信を放棄することをしなかった。

己にこそ厳しい正義感、孤高な人格と人生観、その鶴殿は、病める身を押して日本山岳会に身を置くことを許さなかった。また、山を失ったいま山岳会員である意味も認めなかったのである。過去の栄光に恋々としなない、いかにも鶴殿らしい出所進退のあざやかさ、厳しさ、さわやかさは、日本山岳会幹部のとうてい理解の及ぶものではなかった。日本山岳会員として、穂高開拓という偉業を残し、病のため退会してゆく価値ある功勞者に対して、当の日本山岳会は、何の反応も感情も表すことをしなかった。小島鳥水はこの年に、日本山岳会初代会長という大看板を担って観衆の喝采をあげ、得意の絶頂に立っていた。

鶴殿は、半身不随の身に屈することなく、半人前の農耕に従事しながら、昭和十一年（一九三六）、六十才で一枚の珠算講習修了証書を手にした。勿論、彼に珠算習得の必要はなかった

が——。そこに、登山家鶴殿正雄の真骨頂を見る。昭和十九年（一九四四）秋に、病氣が再発した。むなしい努力の日々が過ぎて、鶴殿に神のお召しの時がきた。枕辺に看護する子供のあたり、夫人の姿がなかった。夫正雄の介護につかれた体で、翌年夏に流行したチフスにかかったたけ女は、九月初めに入院していた。

鶴殿正雄は、日本の敗戦を見さだめて、子供達に見守られ、静かな眠りについていた。時に、昭和二十年（一九四五）九月二十日、六十九才の大往生であった。夫正雄の死は、たけ女には知らされなかったが、翌月の十六日、思いついたかのように子供達に別れを告げて、そそくさと正雄を追って彼女は逝った。五十五才であった。鶴殿は靈名を、鶴殿正雄大人命といい、夫と共に池内家の墓地と接して、長瀬で安らかに眠っている。

彼は、家族にさえ山の話が積極的に語った跡がない。篤農家鶴殿の名は残っていたが、登山家としての名を知る街人はなく、彼の穂高に刻した偉業を、子供達も知らなかった。長女の美津は、「山はいいなあ、下界と違って静かだあ」と言った父の言葉を、六十二才になった今でも忘れられないという。長男正信は、「……新しい父を発見できてうれしい。母の苦勞を……」と、在りし日の、父と母を偲んでか、さわやかだが彫りの深い横顔を見せた。正信夫妻はともに高校の教諭、この夏は一家で初の上高地を訪れたいという。

マナスル登頂二十周年記念の会

成瀬岩雄

昭和五十二年五月九日、マナスル初登頂二十周年記念の会が九段のグランドパレスホテルに於て行われた（実際は二十一年目）。五月九日が今西壽雄君と今は亡きガルツェン・ノルプ君によって初登頂された日である事は今更ここに述べる迄もなく、世界の登山史上に於ても燦然たる記録として残されているものである。

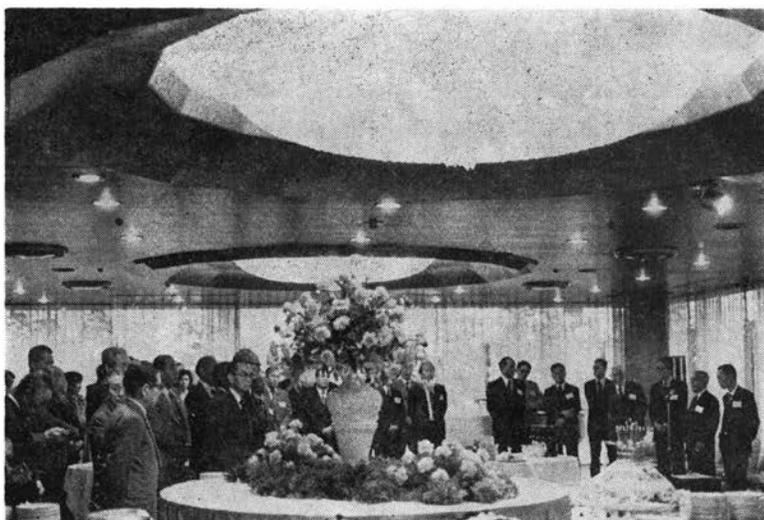
当日は、そもそも戦後のネパールに入りマナスル登山の端緒を作られた西堀現日本山岳会会長、三田ヒマラヤン・クラブ日本支部長の挨拶から、シュレスタ・ネパール大使館一等書記官、サリン印度山岳財団理事長、坂田元文部大臣の祝辞の後、出席者一同の自由歓談に入ったが、この挙の絶大なる資金的援助をされた毎日新聞社の当時の担当役員たりし渡瀬亮輔氏を初めとして総勢八十余名、集まったこの会合の雰囲気はさすがに伝統に輝く日本山岳会でなくては味わり事の出来ないものであ

った。

その大半が今となつてはヒマラヤ登山の経験者であつた事は勿論の事だが、マナスル登山に対して蔭の力となつた準備委員、資金集めの委員等、云わば総力を挙げての登山であつた事を回顧させるに誠にふさわしい会合であつた。

一九五二年、西堀会長のネパール入り以来、一九五六年の初登頂迄五年掛りの登山であり、当時、八千メートル級が如何に怪物であるかと云う事を山岳会としても度々協議を重ねての計画であつたし、物資不足の時代によくも斯く大掛りな登山に成功したと思つと、以来二十年の間に女性を含めてマナスル登山が日本人によつて五回も行われ、恰もマナスルは「日本人の山」の様になつてしまつた事は誠に喜ばしい事だ。

〔編者注〕この会はヒマラヤン・クラブ創立五十周年記念行事の一環として、本会との共催で開催された。



マナスル登頂二十周年記念の会々場の全景（撮影・依田孝喜）

〔出席者〕（五十音順）

- | | | | | |
|------------------|-----------------|-------|-------|-------|
| 相沢裕文 | 井上次雄 | 今西寿雄 | 石坂昭二郎 | 板倉勝正 |
| 飯野 亨 | 伊藤洋平 | 海野治良 | 遠藤 登 | 小原和晴 |
| 小原勝郎 | 小倉董子 | 小野七郎 | 大塚博美 | 織内信彦 |
| 折井健一 | 大井正一 | 川喜田二郎 | 神崎忠男 | 神原 達 |
| 川森左智子 | 梶 正彦 | 河上静三郎 | 影山 淳 | 黒石 恒 |
| 日下田 実 | 工業英司 | 齐田利治 | 佐藤久一朗 | 三枝礼子 |
| 坂田道太 | H.C. Sarin | 清水清二 | 島田 巽 | 鳴原啓佑 |
| N.D.
Shrestha | Shusma
Omata | 住吉仙也 | 住本利男 | 高山忠四朗 |
| 高橋善数 | 高橋 照 | 谷口現吉 | 丹部節雄 | 竹節作太 |
| 竹田寛次 | 田中壮悟 | 田口二郎 | 千葉重美 | 堂本暁子 |
| 成瀬岩雄 | 中世古直子 | 中根千枝 | 中川 寛 | 西堀栄三郎 |
| 早川種三 | 橋本 清 | 浜野正男 | 林 和夫 | 広羽 清 |
| 平沢亀一郎 | 藤井運平 | 藤岡 端 | 伏見紀子 | 堀田弥一 |
| 細野博吉 | 細川沙多子 | 榎 有恒 | 松田雄一 | 松田柳子 |
| 牧内恭人 | 三田幸夫 | 宮下秀樹 | 望月達夫 | 森川典子 |
| 山田二郎 | 安保久武 | 山崎安治 | 依田孝喜 | 吉田尚志 |
| 芳野起夫 | 渡辺兵力 | 渡辺公平 | 渡瀬亮輔 | |

以上八十四名



5人のマナスルサミッター

右より 今西寿雄、日下田実（JAC隊）、小原和晴（西壁隊）、中世古直子（女性隊）、影山淳（イラン合同隊）の各隊員
（撮影・依田孝喜）

記録面から見たマナスル

松田雄一

マナスル登頂二十周年を経過したところで、別表の通り「マナスル峰登山小史」をまとめてみた。これによると一九五〇年にテイルマンがマナスルを偵察して最初の写真撮影を行ってから、一九七九年のブレ・モンズン迄で二十四隊（延人員約二〇〇名）に達している。登頂者は別表の通り八隊二十名で、この中日本人は九名おり、更にこの中の五名が二十周年の会に出席した（写真参照）。登頂ルートは、東面エプロンルート（三隊）、西壁、南西壁、東面ノースコル経由ルートから各一隊が登頂しているが、東尾根からのルートからは未到達である。

登山形式からみると、シェルパレス、単独、無酸素、女性隊、合同隊、シーズンではブレ、ポストともに登られており、今後は、冬季登頂、全員登頂が課題となるであろう。

一方マナスルは雪崩の危険度の高い山で、四隊が遭難し、計十九名が死亡している。この中には、一九七二年四月十一日に発生した大雪崩による、ヒマラヤ遭難史上最大の十五名が遭難死した事故も含まれている。遭難者の国別内訳はオーストリー二名、韓国五名、日本二名、シェルパ十名が数えられる。

他に日本人の隊員では、マナスルから帰った後高木正孝氏、関田美智子氏が亡くなっている。

〔マナスル登頂者リスト〕

	年	登頂月日	人員	内 訳						最終キャンプ	
				日本	オーストリー	西独	スペイン	イラン	韓国		シエルバ
1	1956	5/9, 5/11	4	3						1	C 6 (7,800 m)
2	1971	5/17	2	2							C 5 (7,360 m)
3	1972	4/25	1		1						C 4 (7,400 m)
4	1973	4/22	3			2				1	C 5 (7,550 m)
5	1974	5/4	4	3						1	C 5 (7,650 m)
6	1975	4/26	3				2			1	
7	1976	10/12	3	1				1		1	C 5 (7,650 m)
	計		20	9	1	2	2	1	0	5	

マナスル峰登山小史 (旧標高: 8,125 m=26,657 ft)
新標高: 8,156 m=26,760 ft)

松田雄一 編

No.	年次	国名	隊名	隊長	備考
1	1950	英	ネパール・ヒマラヤ調査隊	H.W. Tilman	マナスル偵察、最初の写真撮影を行う
2	1952 Post	日	マナスル踏査隊	今西錦司 (6名)	マナスル氷河からのルート発見
3	1953 Pre	日	第1次マナスル登山隊	三田幸夫 (15名)	ノースコル經由プラトー上7,750mに達す
4	1954 Pre	日	第2次マナスル登山隊	堀田弥一 (14名)	サマ村民の反対に遭い転進
5	1955 Post	日	第3次マナスル先遣隊	小原勝郎 (3名)	
6	1956 Pre	日	第4次マナスル登山隊	榎有恒 (12名)	5/9 (今西寿雄、ガルツェン) 5/11 (加藤喜一郎、日下田実) 初登頂〔初登〕
7	1964 Post	蘭	オランダ山岳会隊	J. Boon	10/25 マナスル北峰 (7,154 m) に登頂
8	1970 Post	日	マナスル西壁偵察隊	高橋善数 (2名)	青木敏と2名で西壁を偵察
9	1971 Pre	日	都岳連マナスル西壁隊	高橋照 (11名)	5/17 小原和晴、田中基喜の2名西壁ルートより登頂〔第2登〕
10	1971 Pre	韓	第1次韓国隊	金禎燮	東面 JAC ルートで頂上直下300mに達するも隊長の実弟(3男)金禎燮氏の転落事故のため敗退
11	1972 Pre	奥	Tiroler Himalayan Exp.	W. Nairz (8名)	南氷河より南面壁經由 4/25 Reihold Messner 登頂(単独) 2名遭難〔第3登〕
12	1972 Pre	韓	第2次韓国隊	金禎燮 (12名)	マナスル東面 C3 にて 4/11 大雪崩に遭い安久一成氏、隊長の実弟(次男)で登攀隊長の金禎燮氏を含む隊

No.	年次	国名	隊名	隊長	備考
13	1973 Pre	西独	シュヴァーベン隊	Dr G. Schmatz (8名)	員5名、シェルパ10名、 遭難死 東面ノース・コル経由の新 ルートで4/22、7,550mの C5から隊長、S. Hupfauer、 サーダーの Urkin の3名 が無酸素で登頂〔第4登〕
14	1973 Post	スペイン	第1次スペイン隊	J.G. Orts (12名)	マナスル東面より登頂を期 すも10月中旬CIIで2度 にわたり雪崩に遭い九死に 一生
15	1973 Post	日	同人ユングフラウマ ナスル偵察隊	中世古直子 (3名)	マナスル東尾根を偵察
16	1974 Pre	日	同人ユングフラウ日 本女性マナスル登山 隊	黒石恒 (11名)	5/4 東面 JAC ルート経由 登頂(中世古直子、森三枝 子、内田昌子、シェルパ・ ザンブー)〔第5登〕
17	1975 Pre	スペイン	第2次スペイン隊	J.G. Orts (12名)	東面 JAC ルート 経由、 4/26、J. Robz Martinez、 G.B. Garcia, Sherpa So- nam の3名登頂〔第6登〕
18	1976 Pre	韓	第3次韓国隊	金 禎 燮 (19名)	5/5 東面 JAC ルート 経由 で final camp (7,800m) 設営後雪崩で敗退
19	1976 Post	日=イラン	日本=イラン合同マ ナスル隊	渡辺公平 (19名)	10/12 東面 JAC ルート 経 由で影山淳、M.G. Asadi、 シェルパ・Pasang 登頂 〔第7登〕
20	1977 Pre	西独		G. Lenser (9名)	East Ridge 経由、 C3 (6,400m) 建設後、 6,800m で、大量降雪のた め敗退
21	1977 Post	仏		J. Feéhel (5名)	East Ridge 経由、2組の パーティでアルパイン・ス タイル登攀を試みたが、2 隊員が凍傷にかかるなどし て、7,600m で敗退
22	1978 Pre	米	コロラド隊	G. Porzak (9名)	東北壁新ルート 経由、悪天 候のため7,300m で敗退
23	1978 Post	日	東京オリンパス隊	(2名)	清水清二、加藤保男の2登 攀隊員による、東面 JAC ルートからの登攀、プラト ー上8,000m で敗退
24	1979 Pre	伊	イタリア隊	M. ロレンツォ (6名)	East Ridge 経由、5/5 C4 (7,400m) が雪崩に襲われ 敗退

〈注〉 Louis Baume “SIVALAYA—The 8000 metre peaks of the Himalaya” では、
1956年を初登、第2登とし、以下ひとつずつずれて1976年日・イラン隊を第8登
としている。また、同書は No. 7 のオランダ隊を加えず、No. 2 にハーゲンの踏査
隊を入れている。

追悼

松本善二氏（二八八四—一九七九）

私が初めて松本善二さんとお会いしたのは、大正八年の秋、場所は東京の築地で現在東京劇場となっている所に、元東京府立工芸学校がありまして、ここで霧の旅会の第一回総会が開かれました。当時としてはかなり立派な設備の整った講堂がありまして、ツァイス製の幻燈器機、エピソードスコープなどが備えてありました。其の時、松本さんは、第一回目の講演者として講壇に立たれ、「マッターホルンとウインパー氏の初登頂」と題して、得意の名調子を奮って、居並ぶ聴衆を歓喜させたものでした。大正八年十月三日のことでした。続いて、これも故人になられた、霧の旅会の発起人の松井幹雄氏の講演があった後、懇談会に移り、席上、同好の友を交えて、大いに山を語り合ひまして、以来、世事によく言う、うまが合うとか申して、今では、電話をかけて、「善ちゃんですか」で通じる様な、親しい御交際を願うまでに至って、既に、六十有余年になりま

す。

若い時から、山の大先輩の木暮理太郎先生に、又、武田久吉先生とも親しくされ、木暮先生には、いつ幾日の何時迄に山の仕度をして出て来て貰いたいと云う様な呼出しがかかり、家庭の事などにはおかまいなくお供するのが常だったと申して居りました。

そう云えば、私が、岳友の故田沢昌介君と共に、三国山から法師温泉に泊って、四万温泉に抜けた時、宿の主人が、「昨夜は木暮さんと松本さんが泊られて、今朝早く出かけられた」と云われた事があり、一日おくれで惜しいことをした、と思ったことがあります。

武田先生とも、よく同行されまして、ある時、低山散策の帰途、中央線の上野原駅に至る途中の丁度よい所に茶店様の店があったので、大先輩を伴って、小休憩をしようとして見ると、是非座敷へ上って行ってくれと云ってきかないので、よく様子を見ると、此処に昔から残っていた、二軒の遊廓の内の一つに間違えて上った事に気が付いて、ほうほうの体で逃げだした話は、其の後もよく聞かされた事でした。

中央線の上野原駅と云えば、よく山行の際お世話になった駅ですが、これは松本さん、武田先生、外七、八名の霧の旅会の連中とで、夜行で上野原駅下車、長年、降りなれた此の駅から、近道を選んで行こうと桑畑を抜けて登って行ったのです

が、行っても行っても、同じ場所へ出るので小休止をして居ると、下の方に小屋があつて、人の声が聞えて来るので、急ぎ其の方へ行つて見たが何も無く、止むなく本道へ戻つて、登り直したことがあります。

其の後、又、松本さんが此の道を通つた時に、土地の人の話では、

「此の間の夜は、大変でしたよ。あの桑畑の中を、沢山の提灯が、幾度もぐるぐるまわつていて、それはほんとうに綺麗でした。あれが本当の狐の嫁入りと云うのでしょうか」

との話で、そう云えば、真夜中の人声が聞えたのを思い出し、合点の行く話でした。

松本さんは、大正年代の山行には、必ず、護身用のピストルを持参して出かけられた事は割合に有名な話ですが、実際に役に立つたことは無かつた様で、只、木暮先生と秩父の山を歩いていた時に、黒平のあたりで、大きな白犬につけて来られて、止むを得ず、威嚇射撃をして追い払つたと云う話は、度々聞かされました。

それから、よく武田先生と大菩薩連峰を散策されて居られた頃、或夜、嵯峨塩鉱泉に二人で宿をとつた時、松本さんが例の拳銃を持参していると見てすっかり驚き、其の夜は、宿の者は頗る神妙に接待してくれたのですが、其の後暫くして、又、此の鉱泉に立寄りました所、宿の者の云うことには、此の前、登

山姿の二人連れの拳銃を持った強盗に泊られて、いつ出て来られるかと、一晚中生きた気がしなかつたものでした、と自分が当の本人だつた事が気が付かずに話されて、呵々大笑したと云う話をされたことがあります。

又、ある時、友人と共に磐梯山の裏の方に旅をした時に、沼尻の小さな家に一夜を過ぎて貰つたのですが、勿論、ゆかたがある訳でもなく、其の友人は余り山旅に慣れないので、齒医者か商売だつたせいで白い作業衣を寝まきの代りに着てしまつて、如何にも抹香臭い一夜になってしまいました。そして、何となく気味の悪い思いに浸り乍ら寝に付いたのですが、夜中にそつと部屋の障子を聞けて中を覗つている者があるので、自分は、息を殺して、眠っている振りをして居ると、二人はもう寝静まつていると見て、蠟燭を灯してそつと部屋に入つて来たではありませんか。自分は身も心も凍る思いで、思わず、フトンの中で、持つて来た拳銃を握りしめたのは勿論のことでした。入つて来た彼（おやじらしい）は、今度は足をしのばせて、又、次の部屋（反対側の）へ入つて行きましたが、暫くすると、又、静かに戻つて来て、元の部屋に入つて行きました。余り気味が悪いので、隣りに寝ている白衣の友人を起して見ましたら、此の友人も、先から気がついていたので、恐しくて生きた気がしなかつたそうです。

そうこうしている内に、又、おやじが足をしのばせて入つて

来て、そうつと枕元を通つて、次の部屋へ入つて行き、そして、やがて足をしのばせて戻つて行きました。

そこで二人は意を決して、何でも隣りの部屋が怪しい、行つて見ようと、拳銃片手にしのび足で懐中電灯を照し乍ら入つて行つて見たのです。その室は、何でも物置き代りに使用して居たらしく、向うの隅に行つて見ると、驚くべし、其処には、生新しい白骨が置いてあるではないか！二人は、固唾を飲む思いで立ち留つたのでした。しかし、しばらくすると、不思議や香の匂いがして来たので、よく照して見ると、傍らに線香が灯つてゐるではないか。さては、おやじが再三枕元を通つて、此処へ来たのは、此の線香を灯しつづけていたのだな、と云うことがわかつて来た。気味の悪かつた一夜が明けたので、早速おやじに尋ねて見たら、何でも最近、身内のものが亡くなつて、未だ初七日も過ぎないので、日夜、線香を絶やさないで居たのだつたが、其処へ、あなた方がお泊りになつたので、事情を申し上げると返つて気味を悪がると思けないと思つて、実はお客様には黙つていたのだ、とのことで、とんだ心配を掛けられたもので、此の時こそは、重い思いをして持つて行つたピストルが心底の支えになつた様でした。

松本さんが、日本山岳会へ入会した時期は、今持っている会員番号四五九よりもっと古く、何でも、震災で焼けて終つたので、木暮先生に代りを請求したら、それでは是を持つて行き

給えと云つて、渡されたのが現在の番号で、元の番号は、もっと余程若い番号だつたと云つていました。

そして、大正七年、東京築地にあつた、府立工芸学校で、故松井幹雄氏を首班とした同好の士、故田沢昌介、田尻春男君と私が発起人となり、会社、官庁、銀行等の社会人の同好の人々を誘ひ合せまして、霧の旅会を結成致しました所、松本さんは、卒先入会されまして、当時の記録に依れば、会員番号第六号で、大正八年五月の入会になつて居り、爾来、何時も指導者として先頭に立ち、大いに活躍されたものでした。

松本さんは、また、山旅の傍ら、道祖神の撮影や、陰陽物の蒐集にも多大の趣味を持たれ、石や、木彫の陰陽物を、各地より集められ、其の秘藏品の数は、誠に多数にのぼつていました。勿論、多数の立派な写真も、アルバムに整理されていました。

写真と云えば、之も震災前は、可なり熱中されたもので、当時、木暮先生がエルネマンのエルノタールを使用されて、松本さんはタローテナックスのダゴールの遠近、両焦点付きのカメラを大いに駆使して、立派な写真を残しておりました。

松本さんは、一緒に旅行されても、中々私事に関しては話さなかつたのですが、温泉宿などでほんのりした時など、たまに漏す唄声は、中々年が入つてゐる様だと思つて聞いていたのですが、其の時は由来を追求せずじまつたので、先日奥様

にお尋ねしたら、清元を習っていて、昔、名前まで貰っていたらしいとの事でした。

そう云えば、かつて山岳会のルームが向井ビルにありました時、松本さんと、画伯の足立源一郎さんが同席されて、私も居りましたが、松本さんは、若い時代によく群馬県の四万温泉に湯治に行つて居て、其のときはいつも和服に漆塗りの駒下駄を穿いていて、宿は、田村か積善館に採り、日向見温泉辺りまで散策に出かけていたりして、滞在客とも懇意になり、其の中に外の客室からお座敷がかかつて来たりして、大いに当時は艶福に恵まれたそうで、足立画伯は一部始終を聞き終つた後で、松本さんが帰られてから、「漆塗りの下駄を穿いて歩いたとは、松本さんも、キザな姿をしたことがあるのだな、私の一番いやな形なのですよ」と述懐していましたが、御兩人の青春時代の生活環境の違いが伺われて、面白いと思います。

其のくせ、此の三人の出合いは、其の後、会員の松本熊次郎君を交えて霧の旅会の帰路、吾妻小屋から、裏磐梯に廻り、裏磐梯観光ホテルに泊つたのが最後になって終わりました。

四万温泉の話が出ました序に、之も山岳会土曜会での話でしたが、会員の今井雄二氏と会われた時、当時、今井夫人のお姉様とお知り合いになり、懇意になられた末に、プロポーズされたが、遂に御縁がなかつたのですが、「ついこの間まで健在だったのだから、お会い出来たら喜んででしょう」との話伺つ

たことがありました。

松本さんは、いつも自分は下町生れだと云っていましたが、本当は生粋の浅草ツ子でして、浅草区田町の土族、近藤家の次男として生れ、関東中学を卒えて銀行（当時の東海銀行で現第一勧銀の前身）に就職されて、前の奥様（昭和四十年逝去）と御結婚、松本家に入籍されたもので、御自身の云うには、始めにお妹さんの方から、プロポーズされたのだが、お姉様の方から強硬に申込があつたので、お姉様に決つたのだと云っていました。

因に此のお妹さんは、品川区大崎の月村医院に嫁がれて、御健在で、色々古いお話を伺わせていただきました。

松本さんの趣味の裏話を伺いました序に思い出した古い話で、私が最初に霧の旅会でお会いした時、即座に思い出した事は、ああ此の人は当時大流行の永田錦心流の薩摩琵琶を唄つた人ではないか？と思つたのですが、爾来、御交際を深めると六十余年、一度も其の事にふれることなく、今日になつて終つたのですが、私事を申上げて恐縮ですが、私が青山師範の付属小学校の高二を卒えた時、同窓会が開かれました。其時、余興に呼んだ一人で薩摩琵琶を持って唄われたのが松本さんに違ひなかつたので、先日、今の奥様にお会いした時お尋ねしたら、芸名は、わからないが写真があるとの事で、拝見したら正に薩摩琵琶を持たれた写真がありましたので、今度は、先程、

お尋ねした処、本当に錦心流の一方の家元、榎本紫水師匠に師事して、芸名を○水と名付けられたが、不幸にして下に水が付く事だけで上の字はお忘れになったとの事でした。どなたか、お知り置きのお方はないでしょうか？

又、其の若い頃、巷間、歌留多会（百人一首）のグループを作って、近所のグループと試合を仕合って楽しんだもので、吾も同様だった事を思い出します。

大分山の話から外れて終わりましたが、松本さんは、土曜、日曜は愚か、平常の日でさえも、よく山へ行かれましたので、勤務先の上司から、貴殿は、好きで山へ行かれるのは結構だが、勤めの方をないがしろにされては困る、山に行くのを止めるか、銀行を退めるか、どちらか一つにされたらどうか、と叱られましたので、自分は山が好きだから銀行を退めます、と即座に辞表を出した話は、かなり仲間の間には有名な物語りになっていました。

扱て、余り長くなりましたので、最後に、箱根外輪山にありませぬ金時山の話ですが、ある時、松本さんが、此の山に登って、久しぶりで金時娘に会うために、金時茶屋で休み、娘さんのサービスを受けて帰ったのはよいが、支払をするのを忘れていて、後で思い出して後日、又、わざわざ届けに行かれたとのこと、その事を、その又後で登られた山岳会の長老、日高信六郎さんが此処を訪れて、金時娘に会われました時に、娘か

ら、世の中にはこんな珍しい、正直で几帳面な人が居る、と感心していたと云うことを、葉書で早速松本さんに伝えたと云う、山の美談がありました。

こんな元気な松本さんも、昭和四十年に奥様（当時八十一歳）の御逝去に遭われ、続いて、昭和五十年には、御長男とも御病氣のため分れねばならない御不幸に遭われ、淋しい日々でしたが、流石に旅で鍛えた人だけに、其の後、旅先でのロマンスが実ったらしいと伺いました。

昭和四十六年六月六日のウェストン祭の翌日、上高地の五千尺ホテルに泊った、松本さんと松本熊次郎さん、渡辺弥生さんと私の四人で、皆さんと分れて白骨温泉へ行き、松本さん泊りつけの斎藤新宅旅館へ泊ったのですが、到着するや否や、明日八時半に松本までのタクシーを呼んで貰いたいと云って、翌日、早々に立たれ、松本から名古屋へ直行された所以は、其の後、同じ年に、今の鶯谷マンションに新居を構えられた事と一致して、誠にほほ笑ましい。

其の後はお会いする度に、「僕も漸く、宅で野菜が食べられる様になったよ」と喜んで居られましたのに、昨年来、腰の痛みを覚え、とうとう十一月八日に、逗子桜山の青木病院に入院され、元、松本さんが会長をして居られた史学会の会員であった院長さんの特別の御看病の効もなく、昭和五十四年四月十九日十二時三十分、全く老衰のため、眠る様に息を引取られました

た。

四月二十一日十時半、逗子火葬場にて火葬に付し、四月二十四日、台東区西浅草の徳本寺にて本葬告別式を行い、親戚、知己の花環の外、山岳会と霧の旅会の生花、並びに浅草新仲町の二基の特大花環は、往時町会長として活躍していた一面を物語っている様でした。

法雲院釈善明居士

の御冥福を祈って止みません。

略 歴

明治十七年（一八八四）十月四日、東京浅草区田町に近藤家の次男として生る、其後結婚して松本姓となる。

東京の関東中学を卒業して、東海銀行（今の第一勧銀の前身）に就職する。

大正五年四月、高野鷹蔵氏の紹介で日本山岳会に入会（会員番号四五九号）。

昭和六年―八年、理事就任。

昭和四十一年、永年会員。

昭和四十二年十一月、名誉会員に推挙さる。

大正八年五月、霧の旅会に入会。会員番号第六号で終始霧の旅会とは行動を共にされた。

外に東京史学会々長、大和文化会理事等も歴任された。

大正年間、既に槍ヶ岳、白馬、杓子、鎌、丹沢山塊初縦走、阿能川岳、

蓬峠―谷川岳―三国峠の初縦走。

昭和八年、朝鮮金剛山。

昭和九年、台湾新高山。

戦後は八溝山、石鏡山、利尻島などの山に登り、山岳会のみち会等にもよく参加していた。そして、山岳六十三年度号には「私の登山」と言う題で面白い登山の今昔物語りを寄稿している。

昭和五十三年十一月八日、逗子青木病院に入院。四月十九日十二時三十分、同院にて老衰のため永眠。享年九十四才。四月二十四日、台東区西浅草徳本寺で本葬告別式が行われた。
〔山崎金次郎〕

岩永信雄氏（一八九五―一九七九）

―登山史上における岩永信雄氏―

名誉会員、岩永信雄さんの死去をルームで知ったとき、JACの古き良き時代の一つの終焉のような気かられて、まことに寂しい思いであった。私など、もとより岩永さんのおつき合いは浅く、ルームでお近ずきにさせていただけにすぎない。いまの会員で岩永さんを知っておられる方はほとんどなくなってしまうのではないかと思う。打ち明け話になるが、この追悼記も誰にお願いしようか、編集委員会で頭を悩まして、結局そのおはちは小生のところにまわってきたようなわけで又、私は岩永さんと一緒に山へ行ったこともなく、一応御辞退申し上げたのだが、登山史上における岩永さんの位置づけ

を、といわれ、重い筆を運ぶことにしたのである。

岩永さんといつ知り合うようになったのかはつきり覚えていないが、お茶の水のルーム時代、会報の編集にたずさわることになってから以後のことでは確かである。そのころすでに何度か回を重ねていた六義園での有志閑談会に、会報の編集者も是非出席したら、と岩永さんからおさそいを受けたことがある。最初おさそいを受けたその会には、出席すると返事をしておきながら急な用事で行けなくなり、間際になって会場へ電話したことがある。六義園の門のわきの事務所と会場の茶室心泉亭とは電話がなく、岩永さんはわざわざ茶室から事務所までかけつけて電話を受けて下すった。後でこのことを知って大いに恐縮したのだが、そんなことからかなり親しくおつきあいをルームでさせていただき、『山岳』五十二年の編集を担当したとき、編集委員としてお手伝いをお願いしたことがあった。

沼井鉄太郎さんの推挙だと記憶しているが、原稿の締切り期間がせまると、本郷のお宅から連日弁当持参でお茶の水のルームにやって来られ、電話で編集責任者である小生の尻をたたかれる。大体新聞社などというところは出版社の遅いのが相場ののだが、それがなかなか御理解いただけなく、君はなぜいつもそんなになまけているんだと、ことあるごとにおこられて閉口したものである。まさに「叱咤激励」そのものであった。これもいまではなつかしい思い出である。

話は横にそれたが、本筋に戻さねばならない。日本の登山史上、黒部溪谷探検時代という一つの章を書き落すわけにはいかない。明治の中ごろから始まった、主として若い日本山岳会員の有志による日本アルプス探検登山は、大正の初めいちおう幕を下ろすのだが、その次に続く積雪期登山、あるいは岩登りを中心とするアルプスの登山へ移行するのとはまた別に、いわば探検登山時代の最後を飾ったのが黒部溪谷探検時代だったのである。そしてその主役を演じたのが、いうまでもなく冠松次郎氏だったのだが、その同行者として沼井鉄太郎、岩永信雄両氏の活躍があったのである。黒部川の探検は、冠さん一人の力によるものではなく、沼井、岩永という強い協力者によって始めて完成したということが出来るのである。登山史上における岩永信雄という一人の登山者像が、ここに大いにクローズアップされるのである。

岩永さんの第一線で活躍されたころの登山は大きく三つに分けられる。一つはいま述べた黒部川探検時代、一つは三ツ峠の岩場の初登、いま一ツは東北朝日岳の積雪期初登である。

岩永さんの黒部方面へ足を踏み入れられた最初の山行は、大正十年七月、沼井鉄太郎、小林文平の二氏と宇治長次郎、同岩次郎、佐伯竹次郎を同行した黒部別山登山と内蔵ノ助平行であった。称名から大目岳に登り、大目尾根を縦走し、劔岳から尾根通し三ノ窓に達し、三ノ窓雪溪から劔沢に下り、ハシゴ谷乗

越から黒部別山に往復、(これは登山者による最初の記録である)内蔵ノ助平に泊り、室堂に登り、平から信州大町に抜けたのである。この登山は岩永さんの初めての北アルプス行であった(『山岳』17—2、沼井鉄太郎「黒部別山と内蔵ノ助平」)。

大正十三年八月には、双六谷から黒部川上廊下に入った冠氏と御山沢落合付近で待ち合わせ、ともに下廊下を下ろうとしたが果せず、引返し、内蔵ノ助沢を溯り、ハシゴ谷乗越から劔沢をへて、立山川を下り伊折に出た(『山岳』21—2、岩永「黒部川より立山川への旅」)。

そして翌大正十四年八月末から九月初めにかけて、冠、沼井、岩永のトリオは鐘釣温泉から東谷をすぎ、棒小屋沢落口に達し、なお上流を溯り、ついに下廊下の未踏境を突破して、平の小屋までの溯行に成功したのである(冠松次郎「黒部溪谷」、『黒部川溯行記』)。

岩永さんはそれ以降、劔沢の大滝に焦点を向けられていたようである。大正十五年八月には、別宮貞俊、冠と三氏で小又川を溯り、大日尾根を縦走、劔三ノ窓から劔沢に下り、劔沢下降を試みたが、大滝上で下降をはばまれ、引き返し、仙人支脈を下ったが、また退却を余儀なくされた(『山岳』24—1、岩永「小又川より劔沢へ」)。

翌昭和二年八月にも、同じメンバーで十字峡から神潭に入り、本流に架橋して劔沢に入り、途中二泊して苦心の末、久遠

の大滝直下に到達し、引返し、劔沢平から黒部別山北尾根、ハシゴ谷乗越、別山乗越をへて弥陀ヶ原を下った(『山岳』24—1、別宮「劔沢入り」)。石井鶴三、田中薫氏も同行し、田中氏の黒部川十字峡激流の孤岩の上に立つ、冠、岩永、別宮、石井の四人の姿を撮影した名作が残された。昭和三年八月には、渡辺漸氏がメンバーに加わり、岩永、別宮、冠の四人で黒部新越から、平、上ノ廊下を通過、有峰に下山した(『山岳』24—2、渡辺「黒部川」)。

岩永さんの劔沢大滝への執念はさらに続く。昭和九年八月下旬、劔岳頂上から長次郎谷を下り真砂に一泊、翌日大滝上の岩壁に達し、大滝下の本滝を眺めて「積年の希望を達することを得て帰路についた」と書かれている(『会報』39、「立山より」)。同十一年八月には、別宮氏と、早月尾根をへて劔沢小屋に入り、劔沢下降を試みられたが、悪天候のため断念した(『会報』60、「早月尾根」)。

東北朝日岳の積雪期登山は、これまたパイオニア・ワークとしてきわめて高く評価されなければならない。昭和二年一月、鮎貝、朝日鉱泉、二ッ俣小屋、鳥谷原山、平岩山、小朝日岳、御影森山、という行程だが、同行は別宮氏でスキー、クランポンを十分に活用した登山であった(『山岳』23—1、別宮「冬の大朝日岳付近」)。さらに岩永さんはその年の三月、祝瓶山のスキー登山にも成功している(『山岳』23—1、岩永「祝

瓶山也。

大正十二年十一月の三ヶ峠岩登りも、もつと大きく日本の登山史上に書き留められるべき記録だと思ふ。いまから半世紀以上の昔、すでにこの岩場に着目した岩永、沼井、別宮氏らの慧眼に敬意を表したい。百メートルのロープ、ピトンを携行しての本格的なロック・クライミングであった。はきものは別宮氏がクリンカーの鉋靴、沼井氏がフライリップ・ミリタリー・ソールというゴム底靴、岩永氏はわらじを用いている(『山岳』18—3、沼井「三峠山の岩登りに就て」)。

はじめにJACの良き時代の終焉と書いたが、沼井、別宮、冠の当時の山岳会の中核的なメンバーはすでになく、この三人の追悼記を『山岳』に書いた岩永さんもまた自然に選られた。

一見古武士のような剛直な印象を受ける岩永さんだったが、深い思いやりのある方で、日本山岳会をこよなく愛しておられた。昭和四十六年十一月、名誉会員に推薦されたが、四十七年六月、その記念として和洋の蔵書約四百冊を会の図書室に寄贈された。目録は『山』327、328号に載っている。その御厚志にむくいる会を同年九月三十日、向井ビルのルームで開いたが、席上島根康郎氏から、岩永さんが五高時代、元首相池田勇人、佐藤栄作氏らと同期だったことが初めて明らかにされた(『山』329号)。

追悼

昭和四十五年八月、岩永さんはまた立山に登山され、小生あ

て次の便りを寄せられた。

「八月三日朝東京を出発、老妻と共に黒部溪谷を樺平から祖母谷温泉までまいりました。また富山から室堂、一ノ越をへて立山に登山。帰途小見の昔の山の仲間の宿に泊り、存命中のものと心ゆくまで昔話をし久し振りに楽しい旅を致してまいりました。」(『山』304号)。これが岩永さんの立山、黒部との最後の別れの旅となった。

略歴

明治二十八年(一八九五年)八月二十一日、横濱市に生れる。

大正七年(一九一八年)九月、日本山岳会入会(会員番号六二八号、紹介者北沢基幸)。

大正九年、熊本第五高等学校卒業。

大正十三年、東京帝大経済学部商学科卒業。

大正十三年、安田生命保険相互入社。

昭和三年、建設吹付業の特許権をもとにウオーガン工業所を設立。

昭和四十年、高令のため引退、以降文京区本郷六丁目より埼玉県所沢市に隠居。

昭和四十三年十一月、永年会員に推される。

昭和四十六年十一月、名誉会員に推される。

昭和五十四年四月二十七日午前一時十八分、脳血栓のため死去、八十四歳。

主な山歴

大正十年一月、東大スキー山岳部赤倉スキー合宿、妙高前山スキー登

山。

大正十年七月、劔岳、黒部別山、内蔵ノ助平。

大正十年十月、御坂山塊。

大正十一年、那須大佐飛山。

大正十二年五月、笛吹川西沢溯行。

大正十二年十一月、三峠岩登り。

大正十三年六月、三峠岩登り。

大正十三年八月、黒部川下廊下を大へつりまで下る。

大正十四年八月、黒部川下廊下完全溯行。

大正十五年八月、小又川溯行、劔岳。

昭和二年一月、東北朝日岳スキー登山。

昭和二年三月、祝瓶山スキー登山。

昭和二年八月、黒部十字峡より劔沢下滝直下に達す。

昭和四年十月、宇奈月、黒部白竜峡、立山温泉。

昭和六年八月、真川、薬師岳、黒部川。

昭和九年八月、劔岳、劔沢下降。

昭和十年十月、有峰から新雪の薬師岳登山。

昭和十一年八月、早月尾根、劔岳、劔沢下降を試みる。

昭和十六年一月、朝日鉱泉より御影森登山。

昭和二十八年三月、志賀高原。

昭和三十三年九月、立山登山（国休）。

昭和四十五年八月、立山登山。

〔山崎安治〕

渡辺公平氏（一九〇七〜一九七九）

渡辺公平君は亡くなられる前日、来年の山日記編集打ち合わせのため、午後一時に神田茗溪堂の坂本君と会う約束をしていた。いつも時間厳守の彼が姿を現わしたのは、三時近くだった。

「国電の事故にあつてネ、とても混んでいて押し込まれたせいか、腰が痛くて、痛くて……」

と、いいながらも用件を済ませ、その足で代々木の日本山岳協会の会合に出席、自宅に帰ったのは夜の九時過ぎだった。帰宅後早々に横になったが、腰の痛みに堪えられず、近くの天沼衛生病院へ救急車で運ばれ、診察をうけた。しかし、万全の手当てのいかにもなく、五月十一日午前三時四十五分、心不全のため急逝されたのである。

長年にわたり、身近かな存在であった日本山岳会と日本山岳協会のため、最後までつくし、亡くなったのである。

ただ一つ心残りは、二年近くの入院生活で、最近ではあまり容態のよくない最愛の奥さんを残して、急逝されたことである。痛惜の至りに絶えない。

愛称ハムちゃんという名で、多くの人に愛され親しまれた彼

と、私をはじめ出て出会ったのは、大正十四年五月、早大山岳部の新人歓迎会だった。今はもう、相模湖の湖底に沈んだ、与瀬相模川の河原で催されたテント懇親会だったと思う。その夜は思う存分飲みかつ食い、翌日は小仏峠から高尾山を越えて、浅川へおりにきた。

それからは、山の研究会とかルームで会い、夏山から秋の旅、そして冬は恒例の関温泉でのスキー合宿と、交友関係を深めていった。彼にとつて初めてのスキー合宿では、我々の乱暴なコーチに大分シボられたが、かえって親しみを増し、ますます冬山への意欲を燃やしたようだった。

第四回厳冬の沢小舎生活に参加した彼は、雪崩に会い、九死に一生を得て、生き残った。それを境にして、山への執念はいよいよ強く、それに彼は、学問の本よりも山の本に魅せられ、山の洋書を勉強するために早大図書館に通いつめ、ほとんどの山の本を読破したという秘話が残っている。

追悼
早大卒業後、都新聞社に入社、彼の文筆生活がはじまった。当時、登山の大衆化が叫ばれ出し「登山とスキー」などの雑誌が発刊された。彼はその仕事を手伝ったり、寄稿したりしていた。やがて戦争が勃発。彼も戦地にかり出された。満蒙から山西に転戦、負傷して内地に帰るまでの三年間、日本山岳会の会報に八回にわたり、彼一流のスケッチ風な素材で滋味あふれる文章が送られてきている。それは、内地の山を思う心と戦地の

山河、自然の移り変りをするしたものだった。

昭和十六年三月、華中鉄道に勤務するため渡支した。四月には『黄沙漫々』という本を出版。砲煙の中にあっても、ハムちゃんの生まれながらの自然児としての、面目躍如という一面がうかがわれる。

十七年陸輸新報創刊のため、いったん帰国。十九年再び応召。終戦後、二十一年より陸輸新報改め交通新聞社の名編集長として、昭和四十八年退職されるまで、全国の鉄道沿線はもろんのこと、手まめ足まめに各地を歩き、旅のトビックスを的確にとらえ、山や峠の紹介はお手のもの、絶えず紙上をにぎわしていたことは、衆知の通りである。

一方、登山界では、国民体育大会の復活と共に、日本山岳会が主催を引き受けることになり、全日本山岳連盟との関係で、国体登山委員会が発足した。昭和三十五年五月、日本山岳協会が設立されるまでの約五年間、折井、小原、村木氏らと共に、彼は委員として大奮闘され、今日の日本山岳協会の礎ともなった。

国民体育大会については、わが山形県も昭和二十七年、鳥海山において山岳国体を開催することになった。私は何から手をつけてよいものやら困り果てている時、ハムちゃんに内々相談したところ、とにかく日本山岳会山形支部設立が先決ということになった。

そのおかげで、二十五年四月二十九日、月山山麓志津部落に集まり、本部からは藤島敏男、藤井運平氏、ハムちゃん、福島、新潟の支部長らの派遣によって、盛大に月山山頂で支部が創立されたのである。

そして、昭和二十七年十月、第七回国民体育大会登山部門は、会長榎有恒先輩、本部役員入沢文明、神谷恭氏、ハムちゃんほか技術役員藤井運平、辰沼広吉氏など三十数名の外顧問団に、藤島敏男氏をはじめ、全国の支部長をふくめたベストメンバーが参加された。

選手団のほかに、オープン班を初めて設置、総数九百名の豪華な大会となり、盛会裏に終わった思い出がある。

また、ハムちゃんの仕事は、日本山岳会会報編集責任者として、昭和二十七年七月第一六二号から第一八一号まで担当している。その頃から、再び武田会長のもとに、日本山岳協会のお手伝いがはじまった。一段落つくと、常務理事として山日記担当。三十七年五月の総会で、松方会長のもとに副会長就任。再び編集、一般、協会、支部担当、自然保護と四十三年三月辞任されるまで、幅広く各方面に活躍された。

四十八年からは、日本山岳協会の副会長となり、松方会長のご逝去により会長代行、五十年から会長に推されたのだ。在任中は、国体や全国登山大会の大会長を十二回もつとめた。

また、国体山岳競技の問題、指導員制度の検討、海外登山など、山積した問題を着実に調整、実行に移されたその功績は大い。

ハムちゃんは、頼まれればいやといえない親切者で、男気もあり、悪い顔をしたことは一度もみたことがなかった。それをよいことにして、大分迷惑な仕事をお願いし、こき使ったことは慚愧に絶えない。ところが、彼自身のこととなると、なかなか腰重だった。

彼の編集の腕のさへは、日本山岳会の会報、山日記でご承知の通りだが、山仲間の出版の差配まで、何かれとなく亡くなるまで、みてくれていた。

親友の山下一夫君の『かんあおい』編集

「他人の編集ばかりやっていないで、君が死んだら、君の作品を整理するものがあるまいから、今のうちに君の思い通りの随筆集を出したら……」

と、ひやかし半分云ったのが、きっかけとなって出版されたのが『山は満員』の本だった。

ハムちゃんと山下君は、早大時代からの岳友で、二人は好んで南アルプスを歩いていた。『南アルプス・八ヶ岳連峯』の共著があるくらいである。

山下君はまた、素晴らしい植物標本の採集家でもあり、山にかけるときより、帰りのリュックのほうに、何倍も重かったと

いうほど有名だった。彼が退職する頃から、一杯飲むたびに、「俺の標本は命より大切だ」

と、いつて整理をはじめていたのだが、亡くなってみると、交通博物館の物置の中に、標本が山積されていた。ハムちゃんは、この処理をどうすべきか頭を痛め、私に相談したのだった。さいわい、私の友人、山形県立博物館館長結城嘉美先生は、その道の専門家だったので、上京の際見ていただいた。

「これは貴重なものです。もしただけのものなら、ぜひいただきたい」

と、決まり、四トントラックいっぱい標本は、ハムちゃんのおかげで、山形県立博物館に嫁入りしたのである。

三年がかりで、数万点の標本が整理されるにつれ、親子二代（お父さんは大平辰氏の弟さん）で集めた、明治三十七、八年からの全国の高山植物、それ以外にも野草、しだ類、海草、コケ類まであることがわかった。わけても戦争中の東京周辺、環状線の土手の野草など、今はない貴重な標本だという。

結城先生は、数万点の標本を一つ一つ採集年月日、地名、科目分類、原名、和名などの確認を熱心に調査されたが、その中に山名、地名など不明なところがあった。ハムちゃんは協力的で、山形へ何回も足を運んでくれた。

いよいよ今年八月二十四日から、山下コレクションの集大成の展示会が決まり、その機会に、稲門の仲間を集めて見学し、

月山弥陀ヶ原への旅行を計画していた。その案を決めて、五月三日付で私宛に送ってきた便りが、絶筆となってしまった。

そして七日夜、日本山岳会山形支部の総会に、折井副会長と出席すること、下旬には、大台ヶ原の自然保護について、三重県知事に面接に行く予定などの電話連絡があった。

それがハムちゃんの最後の声となってしまった。

今ごろハムちゃんは、いつも愛用の鳥打帽子をちよつとあみだにかぶり、ハイザックにステッキを持ち、南アルプス北岳のお花畑のような天国で、

「おいピンちゃん（山下君の愛称）、俺もあとを追って来たぞ、お前の標本は、さすがに立派なものだそうだ。よくやったナ」

と、二人で好物の堅パンをかじりながら、これまでの思い出を語り合っていることだろう。

合掌

略 歴

明治四十年九月十二日、三重県伊勢市に生る。

昭和五年三月、早稲田大学政経学部卒業後都新聞（現東京新聞）に入社。

昭和五年六月、日本山岳会に入会（会員番号一一九二）。

昭和六年、豊橋工兵連隊に入営。

昭和七年まで都新聞横浜支局勤務。

昭和十二年、日華事変に応召。工兵少尉として満蒙山西に転戦。十五年、戦傷して帰還。

昭和十六年三月、上海華中鉄道に勤務するため渡支。

昭和十七年、東京で陸輸新報発刊のため帰国。十八年四月創刊。編集長となる。

昭和十九年台湾再応召。二十年秋終戦で東京に帰る。

昭和二十一年一月交通新聞と改名、四十八年鉄道百年を記念して退職するまで名編集長として勤務した。

昭和二十七年四月、日本山岳会理事。

昭和三十一年五月、日本山岳会国体委員。

昭和三十三年五月、日本山岳会評議員。

昭和三十五年五月、日本山岳協会常務理事。

昭和三十六年五月、日本山岳会常務理事。

昭和三十七年五月、日本山岳会副会長。

昭和四十三年三月、同副会長辞任。

昭和四十八年五月、日本山岳協会副会長。

昭和五十年五月、日本山岳協会会長。
昭和五十四年五月十一日、心不全のため急逝。静岡県御殿場、富士霊園に葬られる。

山関係の著書

- 『南アルプス・八ヶ岳連峰』（共著）三省堂 昭和10年
『北アルプス』（共著）三省堂 昭和15年
『黄沙漫々』竹村書房 昭和16年
『冬山・夏山』鴨居堂書房 昭和23年
『旅・ロマンと郷愁』社会思想社 昭和32年
『山登り・準備と技術』社会思想社 昭和33年
『たのしい登山の話』不味堂書店 昭和34年
『高原旅行』社会思想社

『山 雲表の魅力』社会思想社

『山頂の青春』徳間書店

『日本の旅ベスト100コース』実業の日本社

『山と緑の歌』（共著）淡路書房

『山あればこそ』日本交通公社出版局

『山は満員』茗溪堂

外に、鉄道、信濃の旅、鉄道人生等々の著書あり。

〔後藤幹次〕

直木重一郎氏（一八九三～一九七九）

大正十四年に発行された藤木九三氏の『岩登り術』の五十四頁と五頁の間に挿入されている、BAKING-DIPと説明付の写真がある。芦屋の岩場のチムニーを登っている写真で、上の人が直木重一郎さんであり、下の人が矢張りRCCの創立者の一人である湯村和吉さんである。この写真は我々にとって馴染の深いもので、藤木さんは当時、この写真を好んで利用されていた。芦屋の岩場をホームグラウンドとして、ロックガーデンと名づけ、このサウンドロックの岩場を楽しんでいたRCCの初期の一人として、直木さんは忘れられない存在であった。芦屋の奥高座の滝の付近に、ベースキャンプと称した小さな広場が

あって、そこをベースにして付近に恰好な岩場を捜し廻り、一つ一つに名を付けて、まるで自分の家の庭のようにしていた。藤木さんが、垂直の散歩と云う言葉を作ったのも、この頃のことである。

直木さんの生家は神戸で最も古い、兵庫港近くの匠町で、代々雑穀の回船問屋を営んでいた旧家であったが、直木さんが十才のときにお父さんが亡くなり、その後は店をたたんで母の手で育てられたと聞いている。神戸二中から大阪高等工業の機械科を卒業し、大阪の貿易商高田商会に勤めたが、間もなくその会社が不況の為解散したので、その後は何処へも勤務することなく、もっぱら六甲を歩きまわることになった。

直木さんの山歩きは神戸二中から始まり、大阪高等工業の二回生のとき仲間を集めて登山部を結成し、大正七年に行った、燕一槍、穂高の縦走が北アルプスの初登山とのことだ。併し彼が特に山に親しんだのは矢張り神戸背山であり、六甲山であったと思う。神戸徒歩会に入会したのもその頃だろう。根が技術屋であるので、陸地測量部の地図上に丹念に赤線を入れ、後に神戸徒歩会が発行した神戸背山の地図は、殆んど直木さんの手によって作られたものだ。当時神戸徒歩会には神戸の有名人が集り、殊に一時は在神外国人も百数十名そのメンバーに加えて、神戸背山の開発に当り、神戸背山や六甲の山路を手入し、改修した、その功績は大きいものであった。併し、そういった

神戸徒歩会の動きだけにあき足らなかつた人達が、朝日新聞社神戸支局長をしていた藤木九三氏を中心に、ヨーロッパの登山風潮を取り入れて、ロック・クライミング・クラブを結成したのが大正十三年で、榎谷徹三・三木高岑・高川秀夫・湯村和吉・セオパワース・毛間新二郎・後藤正彦氏等、神戸徒歩会の会員を中心として神戸でのエリートが参加し、RCCの初期の活動となったのだが、直木さんは常にその中心となって活躍された。芦屋ロックガーデンのみでなく、六甲の堡壘岩、道場不動岩、播州の雪彦山等、岩場あさりに活動された。

JACへの入会は会員番号六〇五だから大正の初期だと思ふ。高等工業在学中か卒業間もない頃であろう。藤木九三さんより数年早かったかと思う。

神戸には明治の末年頃から、早朝毎日登山が行われていて、各登山会も毎日の登山者を採点して、年何百回登山と表彰しているが、神戸市の主催する市民山の会も戦後神戸背山の八ヶ所（後に九ヶ所になる）に署名簿を備え、表彰の制度を作った。直木さんは自宅の岡本の北方の小高い保久良山に毎日登山を行い、昨年には九千回登山の表彰を受けられた。御本人も非常に嬉しかったか、何かこの機会に山のためにはないだろうかかと相談を受けたので、偶々、JACのルーム建設のときであったので、そのことを話すと、早速基金として高額の送金をされたのであった。人に親切で物柔らかく温和な彼は誰にも好

かれ尊敬された。戦前には菊作りで有名であり、戦後にもっぱら木彫に力を入れて、木彫のお弟子が多く出来ていた。京都、奈良と足を運ぶのを楽しみしておられた。

神戸の登山人として初期の人であり、直木さんは神戸背山の歴史の一人であろう。洵に惜しまれて余りある人であった。謹んで冥福を祈る。

略 歴

明治二十六年十一月二十六日、神戸市兵庫区匠町に生る。入江小学校、

神戸二中を経て、

大正九年、大阪高等工業（現阪大工学部）船舶機械科卒、合資会社高田商会に入社。戦時中浪速工業学校の講師となる。

大正七年五月 日本山岳会入会（会員番号六〇五）。昭和五十二年復活。

大正十三年、藤木九三氏等とRCCを創立。

岡本に居を移し、戦後は保久良山の同人となり、九千回登山賞を受く。

昭和五十四年六月十二日、八十六才をもって逝去せらる。妻榮子さんと二人暮しであった。

五四・八・十四記

〔津田周二〕

四谷龍胤氏（一九〇一～一九七八）

四谷君の訃報に接したとき、一瞬火花を受けたようなショックを覚えた。近來身辺に他界する人が一層多くなり、そぞろに淋しさを感じているこの頃ではあるが、いつも心に懸っている人で、つい逢う機会もないままに過ぎていて、その内に又愉快な話し合いを期待していただけに、心の奥に深い痛みを感じたのだった。上高地でその昔会ったぐらいで、一緒に山歩きはしなかったと思うが、山を通じての彼とのつき合いは五十年を越えたであろう。大阪北区同心町で、古いガラス製造工場を営んでいた、四谷ガラスの後継者である筈だが、若いときからの反骨の気風がそうさせたのか、彼は家業を継ぐことはしないで、あっさりガラス製造工場を廃業してしまった。

早稲田在学中から既に結婚して、子供まで出来ていたことは山仲間の間で当時有名であって、特異な存在として注目を寄せられていた。大正十四年に穂高滝谷の初登攀を企て、小島六郎氏と共に登攀したその日に、奇しくも関西から藤木九三氏が松井憲三をともない、同じ滝谷の初登攀を企て、先陣争いのようなことになったのは、当時の山仲間では話題になり、後にまで初登攀争いの尾を引いたのだった。

のちに藤木九三氏のレリーフ（佐藤久一朗氏作）が芦屋高座の滝に掲げられたのち、同じレリーフが、第二次RCCの手によって滝谷初登攀を記念して滝谷入口に取り付けを計画されたときには、四谷君の強い異議によって一時中断されたが、その

後小島六郎氏が四谷君を説得して、やっと建設されたといったこともあった。新しい山仲間であっても、平素は人当りのよい彼ではあるが、自分の意志はなかなかまげない気骨の持主でもあった。

早稲田の昭和九年の年報『リニョックサック』の七号に「登山の現状とその将来について」という論文を発表している。彼らしいアルピニズムを論じたもので、その要旨についての記憶は薄れているので、も一度読んで見たいと思っている。

昭和十年を過ぎた頃であつたと思うが、大阪堺筋の三越の少し南で、今で云うバアかスナックの様な店を開店したことがあつた。彼は従業員達に自分に対してヘルと呼ばせたり、或は遷るばると信州から岩魚を取り寄せて客に喰べさせたり、なかなか山を想わせるものがあつたと憶えている。

戦争が漸く激しくなつた昭和十七年頃だつたか、全国各府県の体育協会が、大日本体育会と改称され、山岳団体は、行軍山岳班としてその傘下に入れられた。社会登山団体や中学校・高等学校・大学の総てを動員して、行軍山岳班の指揮下に入れられたのであつた。彼は大阪府のその行軍山岳班の班長として、その方針に従ひ活躍した。これは彼のみでなく、全国全府県に強いられた組織であつた。

戦後再び、各府県に体育協会が復活され、山岳連盟や登山協会が各府県に再組織され新発足したとき、彼は自ら戦犯者と称

して遠慮し、その連盟組織には入らなかつた。いかにも彼らしい行いであつた。

『山と雪』の発刊は、矢張り彼の山への情熱がそうさせたものと考えられる。発刊からもう二十数年を経たと思う。日本登山協会の設立と『山と雪』の発刊について、訪問を受けて意見を問われたことがあつた。そのとき彼自身も「三年も続けばいいと思つている」と口にしてはいたが、彼の頑張りは遂に二十年を越え、「山で死んではならない」のモットーをかかげ、晩年まで山への熱意と愛着をとうした。海にあつぱれと云わねばならない。大阪での重要な存在であり、又と得難い山岳人として、おいしい人材を失つたことは残念の極みである。まだまだ山の仕事が出来た人であつた。

略 歴

明治三十四年一月十日、大阪に生れる。

大正九年、大阪府立八尾中学校（現八尾高校）卒業。

大正十四年八月、早稲田大学山岳部員として北穂高滝谷初登攀。

大正十五年（一九二六）四月、日本山岳会入会（会員番号九七五）。一時会籍をはなれて復活。

昭和二年、早稲田大学政治経済学部卒業。その後厳冬期の大沢小屋生活、穂高のスキー登山に活躍。

戦後日本登山協会を大阪に創立。会報『山と雪』を通じて一般登山者の啓蒙に当る。

著書『登山者』がある。

日本山岳会々員、日本登山協会々々、日本勤労者山岳連盟顧問。

昭和五十三年八月三十日、逝去（七十八才）。

〔津田周二〕

（編者記） 四谷氏の名、龍胤のよみ方はリョウスケが正しいようだが、通称に従って振り仮名をつけた。

児島勘次氏（一九一〇—一九七九）

同志社大学山岳会の創立五十周年の記念総会が、昭和五十四年五月十九日に京都で開催された。児島さんは、その前日、十八日の午後三時に急性肺炎のため西院の自宅で逝去された。六十九才。

五十周年の総会に全国から集まった人達で児島さんを偲び語った。誠に、「児島勘次」さんにふさわしいお別れの日であった。

「この際、ヒマラヤに行けないなら山をやめ結婚します」

と、今西錦司先輩に宣言して、山をやめたのが昭和十一年、大興安嶺遠征から帰った直後の事というから、児島さんが再び登場するのは二十七年後の昭和三十八年、同志社大学第二次ヒマラヤ遠征隊の隊長として私とサイバルに行く事になった時である。

この空白期間ともいえる二十七年間を、児島さんがどの様に

過したか知る人は少ない。昭和の初めに山を始めた古き良き時代の山を語る人々の間でも、「児島勘次」は噂の人であったと聞く。

児島さんは、同志社中学の頃より山に親しみ、予科、大学と同志社に学び、戦前の同志社の「黄金時代」を築いた人である。昭和の初頭に活躍した足跡は、実に多彩で活力にみち、国内の山は言うまでもなく、北千島の山々から台湾、朝鮮、満蒙の山々までおよんでいる。

この活動ぶりは、当時明らかにヒマラヤ遠征を思考した数少ない日本の若手登山家の一人であったと言える。この面影は、児島さんが一番大切にしていた、うず高く積み重ねられた書籍の中に偲ばれるのである。

長い事、噂の中で知っていた児島さんに、私が初めて会ったのは昭和三十八年五月に神戸で開催した同志社大学山岳会の年次総会の折であった。この席上で私が発表したサイバルの遠征計画が、児島さんと山との再会であり、私を知る後半十七年間の児島さんの生き生きとした、美しい山への思いやりの姿であった。

ガルワル山麓のインナーラインの通過が認められず、ピトラガールからテライの密林、タナカプールに引き返し、そこから雨期のテライを越えて、三十一日間のキャラバンの末、たどり着いたサイバル谷。その間の苦勞は、私が経験したヒマラヤ登

名誉会員
松本善二氏
Zenji Matsumoto
(Hon. Member)
(1884~1979)



名誉会員
岩永信雄氏
Nobuo Iwanaga
(Hon. Member)
(1895~1979)





渡辺公平氏
Kohei Watanabe
(1907~1979)



直木重一郎氏
Juichiro Naoki
(1893~1979)



四谷龍胤氏 ☆
Ryuin Yotsuya
(1901~1978)



兄 島 勘 次 氏
Kanji Kojima
(1910~1979)



中 村 謙 氏
Ken Nakamura
(1897~1979)





町田立穂氏
Tatsuho Machida
(1892~1978)

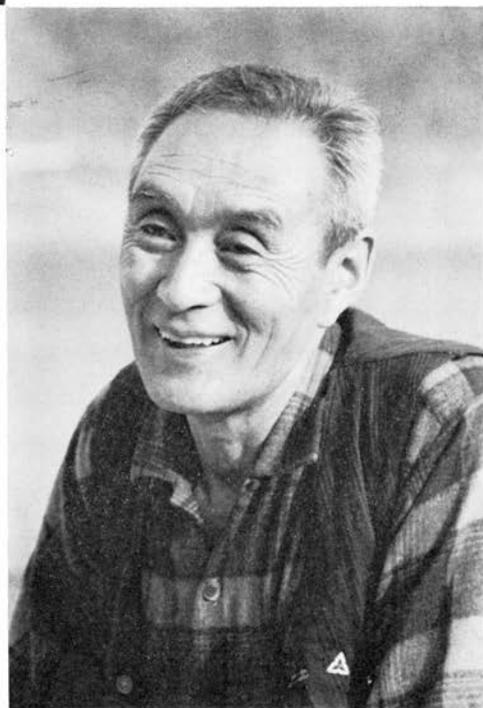


杉山孝氏
Takashi Sugiyama
(1924~1978)





小暮勝義氏
Katsuyoshi Kogure
(1943~1978)



高橋憲二氏
Kenji Takahashi
(1909~1979)



山の中で最も苦しく困難なものであった。この間の児島さんは実にすばらしい隊長であった。この苦しかった期間中に、児島さんから怒りの言葉や小言、苦情といったたぐいの事を聞いたことがなかった。ただ黙って微笑を浮かべながら、わずしい瞳でいつも遠い所を見つめていた姿が生々しい印象として残っている。サイバル登頂後も西ネパールの横断には特に力を入れられ、カンジロバ・ヒマールの北を回り、トルボ地方からダウラギリの北に達する計画には並々ならぬ関心をもたれ、自らもカルナリー河を渡つてジヌムラに達し、ネパール・ガンジーに下る全長六〇〇キロ、二カ月の調査の旅をされた。この時の児島さんのねばり強さは、若い隊員の間でも語り草となつていくほどである。

この遠大な計画が実現できたのは、児島さんの持つ独特の風貌と児島イズムとも言ふべきロマンティズムに支えられていたところが大きいように思われるのである。隊員は全員この様な児島さんが好きで心から信頼していた。

テライの密林からシワリック山脈を越える時に悩まされた、ヒルとの三日間は言語に絶するものであった。ヒルを取り除かないのが児島さんの主義で、見かねた隊員が取つてあげるまでいつもそのまま歩いてきた。お天気の日に寝袋を干してやると、中からヒルの燻製が出てくるほどであった。黄土のめり込んだ目尻の深いしわ、白く長く伸びたひげ、児島さんは長かっ

た空白の二十七年間を、埋めるかのようにさえ思える執念のようなものを、この遠征期間中持ち続けていた。

だから、何にも語らず、遠い所を見つめながら静かに大地を踏みしめ、山と対話をしながら歩いてきた姿が、ことの他印象に深い所以である。

私が共に山を歩き理解した児島さんは、二十七年の空白の期間、山を考えなかつたのではなく、児島さん特有の反骨精神で押し通した二十七年であり、この間、かたときも山を忘れたことのなかつた日々であつたらうと思ふのである。

学生時代の児島さんの想い出を、共に山を歩いた同志社の後輩である塩見正さんは、遺族宛に次の様な追悼をよせている。

「……このほか、児島さんへの想い出としましては、台湾山中での高砂族の射とめた大鹿の肉を岩穴で味わつたこと、ラングスタウラの登行を諦めるとき、私が来年千島列島行を約束させられたこと、上海から長崎の船中で私はマラリア発病、児島さんは急性結膜炎が重症を呈し、手をとりあつてやつとの思いで神戸上陸を果たした皆さんの日のこと、飛騨高山の旅館で、あんどん部屋に案内され苦笑したこと、ビパークの夜空の下で歌う得意ののどのこと、夏場になると、カンカン帽をかぶって部屋に現われることなど、まるで昨日のことのように鮮明によみがえります。

児島さんは、私の心のなかに人間味たつぷりの姿で生きつ

づけております。山を通してだけでなく、あらゆることで人生訓をいただきました。今でも、約五十年まえの児島さんの、日焼けした温和な顔と声がせまってきます。

私は、児島さんが亡くなられたとは思っていません」（五月三十日）

サイパル遠征後の児島さんは、JACの会合や年次晩餐会に必ず出席する等、盛んに友好を深めておられた。

時間に制約されることのない児島さんの足は、気の向くまま信州や北海道の友人達の所まで及び、色々な山の会に顔を出されておられたと聞く。自ら、「風流人」と称し、高笑いをする児島さんの姿と、山を歩いている時のあのさわやかで威厳に満ちた児島さんの風貌と、大きく異なるのはなぜであろうか。

児島さんは山の本に限らず書物についての造詣も深かった。先日奥様から見せて頂いた蔵書の中には、美術等に関するものが多かった。古いものを愛し、仏像や書画に見入る児島さんのまなざしは、山をみつめるあの姿と同じものであった。サイパル氷河のテーブルストーンの上で茶を楽しみ、楽焼きの茶わんを回しながら、朝鮮から帰化した陶工阿米夜の子、長次郎の話しを聞いたのも、私には忘れがたい児島さんの姿であり、想い出である。

顧みると、児島さんの一生は、したい放題やりたいたい放題の、気ままな、まことに仕合せな一生であった。空白ともいべき

二十七年間、何を想い考え、沈黙を守っておられたのか、それはまぎれもなく児島さんの意地ともいえる他の一面を示したものであったと思う。

酒の入った時のあの傍若無人とも言える振舞の中には、児島さん自身でもどうしようもない憤りがこめられており、二十七年間押し通した頑なな児島さんの性格を伺い知る事ができるのである。それだけに児島さんは純粹で曲つたことの嫌いな人であった。反骨精神が強く、容易にもものに妥協しない態度は、年月の経過と共にますます頑なにし、とうとう二十七年もの間、山に恋い焦がれながら、山から遠ざかっていたのである。まことにもって珍しい人と言わざるを得ないのである。

山をみつめるあの静かなまなざし、胸中の友人に対する暖かさと思ひやりは、児島さんを知る誰でもがひとしく認める真の姿であったと思う。

児島さんのような生き方のできる人に、我々は再びめぐり会う事はないでありましょう。

いろいろの想いをこめて、児島さんを知っている多くの友人と共に、お別れを申し上げます。

（昭和五十四年六月）

略歴・山歴

明治四十三年（一九一〇）二月十日、京都・西院の旧家に生まれる。

大正十四年、同志社中学入学の頃より近郊の山にしたしみ、北アルプスの槍、穂高等を登る。昭和二年に京都・三条大橋より東京に至る東海道を歩く。

昭和四年（一九二九）七月、早月尾根。

昭和五年（一九三〇）二月、小窓尾根より。

昭和六年（一九三一）三月、前穂高北尾根。

昭和七年（一九三二）七月、北千島、幌筵島、占守島の山々に登り、帰路択捉島、国後島等、南千島の山々を探る。

十一月、日本山岳会入会（会員番号一三九四）。

昭和八年（一九三三）三月、北岳パットレス。七月、九月、夏季台湾山岳遠征、南湖大山、新高主山、小霸尖山、次高山、関山、霧頭山、大武山等を登る。

昭和九年（一九三四）、同志社大学英文科卒業。同年、京都帝国大学理学部地質学科に入学。

昭和九年（一九三四）八月、九月、朝鮮、甲山長津高原の山々を歩く。

昭和九年（一九三四）十二月、翌年一月、朝鮮白頭山の冬期登山。

昭和十年（一九三五）十二月、翌年一月、大興安嶺遠征に参加。

昭和三十八年（一九六三）六月、十二月、同志社大学「サイバル登山並びに西ネパール横断調査隊」隊長。

昭和五十四年（一九七九）五月十八日、急性肺炎のため逝去、行年六九才。

著書 『台湾の山』 梓書房・一九三四年

『登山歷程』 一九七三年

〔平林克敏〕

中村 謙^{けん}氏（二八九七～一九七九）

中村謙さんが本会に入会されたのは、昭和十年（一九三五）十月だが、当時すでに同氏は山岳雑誌への寄稿も多く、また関東地方や上信越の山々などのガイドブックを、何冊も出している知名の人であった。

昭和十五年（一九四〇）四月に、本会会報の編集が一期期、複数の委員制に移行されたとき、中村さんはその委員の一人に選ばれたが、他の委員の顔ぶれは青木昇、交野武一、田辺主計、吉田竹志、吉阪隆正の諸氏と私との六名で、塚本繁松さんが担当理事であった。その間、虎の門の旧ルームで時々開かれた会合などで、中村さんとお会いしたことがあった。しかし、その制度も翌十六年の三月までで、四月号からは塚本さんと私とで編集をやるようになったし、七月には私も兵隊にとられてしまったので、中村さんにお目にかかる機会も自然に失われた。

中村さんは、晩年病にたおれるまで、永い一生のあいだ、六十年以上も山に親しみ、山行回数是一千回をこえるほどであった、筆を執られたことも数知れないのだが、本会のものでよく寄稿された時期を調べてみると、昭和十年代が多いようであ

る。

『山岳』への寄稿には「鳥甲山」（三三年二号）、「平ヶ岳を繞る沢について」（三五年二号）、「遠笠山」（三七年一号）があり、会報へは七三号から一二五号ぐらいまでの間に十数篇があつて、その中でも「春の野反池」（九五号）、「南会津の山々」（一一〇号）、「袈裟丸山」（一一八号）は私の記憶に残っている。

戦後は一時会籍を離れていたが、やがて復活されてからは、静岡支部の紅葉会などにも、何回か参加されたように覚えてゐる。私が同じ紅葉会で中村さんと梅ヶ島温泉に泊り、翌日安倍峠を越えたのは、たしか昭和三十八年十一月だったと思うが、その時の写真をとってみると、まだ元気だった中村さんの姿が、神谷恭、牧野衛、松本熊次郎、水野公男氏らと共にうつつていて、懐旧の情に堪えないものがある。

また昭和三十九年ごろから、中村さんの会報への寄稿が復活し、「八月の旅から」（二三四号）、「八十里峠越え」（二五六号）、「大高山から小倉へ」（二六七号）などが目につく。著書の数も多いが、古稀に際して出版された「ふるさとの山―上信越国境を歩む―」（昭和四十四年刊）が、最後の本だったと思う。

山とともにあつた中村さんの一生を振り返りつつ、心から冥福を祈つてやまない。

略 歴

明治三十年（一八九七）一月十二日、新潟県高田市で誕生。

大正八年三月 東京外国語学校（英語学）卒業。

大正八年―十年 伊藤忠に就職。

大正十年―十二年 県立桐生中学校教師。

大正十二年―昭和十九年 東京府立第一商業学校教師（最終は教頭）。

昭和十九年―二十一年 都立興亜商業校長兼都立日本橋女子商業校長。

昭和十年（一九三五）十月、日本山岳会入会（会員番号一六一〇、紹介

者は角田吉夫、岡田美雄）。

昭和五十四年（一九七九）五月二十八日午後九時三十分、脳血栓のため

永らく療養中、武蔵野市の自宅で逝去、享年八十二歳。

明治の末年、関東一周徒歩旅行を思いたち、自宅より一切乗物を使わず

に、十五日間で約四〇〇キロを歩いた。以後登山に興味をもち、教育

生活のかたわら日本全国を歩く。ことに大正末葉から盛んになった低

山趣味の普及につとめ、特に上信越の山々を愛し、山行は一―二三回

に達する。旧山小屋倶楽部代表。

著書に『山と高原の旅』『上越の山と溪』『上信越の山々』等三十数冊がある。〔望月達夫〕

町田立穂氏（一八九二―一九七八）

町田立穂さんといえば、十六ミリの山岳映画、塚本閑治プロの俳優であり、その映画会の活弁者として思い出されるでしょう。戦前からの塚本さんのフィルムは、トーキーではないので

無声なのでした。その塚本プロの専属俳優(?)なので、年中、日本全国の山へロケに行かれていたので、下谷(湯島天神下)の自宅はるすにばかりされていました。それでもよかったのでしょうか。ご家業は宿屋さんだったからです。

この立穂さんと親しくしていただき始めたのは昭和十年すぎ、つとめ先の東京市役所(今の都庁)でハイキングの相談所を、いつも夏の前にひらいていました、その講師になっていたからでした。コースをよく知っておられたことと、ウィークデーも毎日出ていただけただけで、その他に冠松次郎、矢島市郎、岩根常太郎、大木千枝子の方々がおられました。

立穂さんはとてもおとなしく、シンの強い人で、山の好きなことは勿論ですが、特に山の本に興味を持たれ、図書解説の先輩格でもありました。雑誌『山と旅』に石楠花生のペンネームで何号にもわたって執筆されたり、戦後にも山岳講座の本に山岳文献を担当されていました。

下谷のお宅にうかがいますと、書齋兼茶の間にはズラリときれいな山の本ばかりがならべられ、ピアノと油絵がある気持ちのよい部屋でした。「うさぎや」のみなかをよく出してくださいましたし、戦後手に入りにかかった菓子もすすめてくれた立穂さんも甘党だったのでしょうか。

戦後、家をたたまれて茅ヶ崎に移転されましたが、いつもお便りの交換と、たまに電話をかけあっていましたし、山のご本

も、雑誌類はかなりすてたが、単行本はほとんど持って行かれ
たらしく、お便りも本の内容のことが多かったのです。

昭和五十三年二月二十五日付お便り、

『山』三九二号「皆さん、元気でですか」の欄で、拝見致しましたが、大兄には木暮先生の資料をご整理始められた趣、大変な仕事です。しっかりとおりおやり下さいまし。

として、別送日本ハイキング・クラブの会報、東京から見える山々の山行報告をくださいました。折り返しお礼を出しましたら、

われらのクラブが、木暮先生の山に眼をつけ、訪れる山を選んだことは、よい処に目をつけられたとご評価下されましたこと、大変に嬉しいことで御座います。次に『奥多摩』と『台東区の観光』をご惠贈頂きまして嬉しく存じました。美しい奥多摩の写真帖は外出の出来ない私にとって、何にも勝る素晴らしい慰問品です。また『台東区の観光』は、色々昔のことを回想させてくれる(御承知の通りその昔私はその区で旅館を経営しておりました)ガイドブックで、なつかしい限りでございます。

これが三月三十日付で、その後はお便りをいただけませんでした。

〔小野 幸〕

町田さんが亡くなられた後ご遺族から、生前親交のあった渡

辺公平さんを通して、その山岳蔵書一切を本会に寄贈したいというお申出があり、それは故人のご遺志でもあるとうかがったので、会は有難くお受けすることとなった。頂戴した山岳図書の多くは、極めて保存状態がよく、山岳図書を愛した故人の心情をよく伝えるものであった。会は図書委員会で鋭意整理にあたり、会の蔵書と重複しているものは、ご遺族の諒解を得て、図書交換会で換金し、その資金をもって、偶々新設された図書閲覧室の机を購入することとし、それに町田さんのお名前を銘記して記念とすることとした。この机は特別に注文した飛驒の家具であるから、末永く使用に堪えると思われる。

故人の冥福を祈ると同時に、以上のことを特に記しておきたい。

略 歴

明治二十五年（一八九二）十月二十二日、誕生。

東京、京華学園卒業。

家業の旅館業のかたわら、塚本閣治氏のみきパートナーとして、永年山

岳映画の企画製作にたずさわり、国内の主な山々は殆んど踏破した。

昭和三十年代『ハイカー』誌上に連載された「立穂対談」の各界諸氏と

の対談には、かなり精魂を傾注した。

日本ハイキング・クラブ、野歩路会に所属し、日本ハイキング・クラブ

では名誉会員に推された。

著書に『山岳映画撮影同行記』（山岳新書）昭和十五年体育評論社刊及

び訳書にウインスロープ・ヤング『登山の指導』（山岳新書）昭和十七年体育評論社刊、がある。

昭和二十二年（一九四七）四月、日本山岳会入会、会員番号三〇〇三番。

昭和五十三年（一九七八）六月一日、逝去、享年八十五歳。

〔望月達夫〕

杉山 孝氏（一九二四～一九七八）

故杉山孝君は頭脳明晰の上、計数に明るく、後輩の面倒見もよかった。銀行マンとして申分ない資質を持っていた。ところが一方、正義感が強く、曲ったことが嫌いなたちだったから、そうでない人たちにとっては、煙たい存在でもあった。この辺が山男として適格な稟質と言えよう。

彼との出合いは、戦時下の昭和十七年（一九四二）七月、私が三井銀行に転職した時に始まる（旧勤務先東邦電力株式会社（松永安左エ門主宰）は同年四月配電統制令によって解散を命ぜられ同僚は中部、九州配電その他に四散した。幸い私は上司の斡旋により三井銀行に拾って貰った。別会社であるが会員小原勝郎兄も同じ運命を辿った）。後で知ったのであるが、同行には山岳会の先輩広瀬潔、湯本三郎、田辺主計の三氏が居られた。

杉山君も私も渋谷の府立一商出であるため、行内一商会で顔合を合わせる事が多く、ハイキングなどに同行することもあった。段々つき合っているうちに、彼が山が好きで、山の本を沢山読んでいること、また白斗と号して俳句をたしなむことなども判ってきた。

戦後の昭和二十八年（一九五三）十一月三日、若い行員の二人が谷川岳（推測）に出掛けたまま消息を絶つという事件が起った。銀行目黒支店が目黒駅と取引があり、鉄道電話を使わせて貰うことが特に許されたので、杉山君と私は目黒支店に詰め切りで土合駅との情報交換に当たった。遭難したと見られる二人の乗車駅（高田馬場）土合間の乗車券二枚が発見された。山と溪谷社の川崎吉蔵社長が偶然その日の倉へ向う二人の姿を目撃したという通報も入った。そして銀行本店のある日本橋室町のパン屋の紙袋が径に落ちていたことで、二人の一人の倉沢入りは決定的になった。

銀行の山岳部では、雪の谷川岳には歯が立たない。急遽ご懇意の杉本光作氏を煩わし、登歩渓流会の皆様に捜索をお願いし、銀行側はサポート隊に廻った。積雪と悪天候の連続で二重遭難を考慮、年内捜索を打切り翌年融雪期を待つことにした。

昭和二十九年（一九五四）春を期して各登山口に立札を建て、遺体発見者に通報を頼む文面を記した。何件か通報があり、顔見知りの友人が首実験に出掛けたが、皆別人であった。

やっど何度目かに本人を確認、再び登歩渓流会に遺体収容をお願いして、この遭難にピリオドを打つことができた。この間杉山君は連絡、サポートに活躍した。



最も私を杉山に近づけて下さった人に三井不動産（株）の交野武一氏がいた。彼は、この山の先輩に芯から私淑していた。交野氏が白樺湖の三井山荘の管理をしておられた頃、彼に誘われて山荘に遊んだ。伝説に聞いている銀行スキー学校開講中、ストープでスキー靴を焦がした豪傑がいたらしく、その靴が山荘の象徴のように、ロビーの棚に飾られてあった。

山荘の裏山の朽葉のかけに鈴蘭が一杯小さな鈴を掲げている。いい天気恵まれて、大きなというより長い鏡胴の望遠鏡と脚を、八子ヶ峰にえっさえっさとかつきあげた。カヤトでのんびりした三人は、代る代る北アルプスの嶺々の残雪を、レンズにありありと引き寄せた。

その後何年目かに、山の好きな彼の上司・府川裕君（物故会員）を誘い、三人で美ヶ原から茶臼を抜けて和田峠、霧ヶ峰に入るつもりで出掛けたが、第一日目に和田峠まで来たら早くも草疲れて下諏訪に下り一泊、翌日改めて東餅屋から入り直すようなのんびりした始末。

からまつこのまかき落葉乾く径沁み入る声は郭公のこゑ

暫くたつと、また杉山から山歩きを誘われた。その時私は彼に「おい野郎ばかりでは殺風景でいかん。君は行内に顔が広いのだから、誰かイキのいい女の子を誘ってこいよ」といってハッパをかけた。「分りました」というから駅に行ってみると、一人の女性を伴ってきていた。もちろん顔見知りの女子行員であった。

志賀高原に入つて、岩菅山に登り、発哺に泊つた。秋で、日がとつぷり暮れていた。翌日は笠を越えて、山田牧場の秋色に染まり、五色温泉に泊つた。主人は俳人故水野六山人（俳誌「ぬかこ」初代主宰）の息子さんであった。

道中、彼は彼女をまことに親切に、やさしく遇していた。私としては、当てられるばかりで、一向に面白くない旅であつたが、いずくんぞ知らん、彼女は後に杉山孝夫人になる人であつた。

■
彼女の厳父は藤森氏という慈恵医大出の産婦人科の名医、吉祥寺で開業していた。

彼は意中の彼女を妻に、所望したが、一人娘の可愛さから手放したくない父君は、頑として聞き入れないという。そこで私に、父君の懐柔役が廻ってきた。相当の頑固親父と聞いていたから、緊張して敵陣に乗り込んだ。最初はほぐれなかつた話も、アルコールの廻る頃には、浅間温泉出身と聞くからに、温

泉の話、山の話の堅いところからハア芸者市丸姐さんの軟かい話になると、漸く会話のベルトがかかり、ついに水谷八重子のアッペ執刀の秘話まで引き出すことができて親しみを深めた。これが功を奏したのかどうか、父君は軟化してOKが出た。結納も交わされ、やがて彼と彼女は昭和三十三年（一九五八）四月、目出度く三田・三井クラブで結婚式を挙げた。私共夫婦に媒酌人のお鉢が廻ってきたのはもちろんである。二人の嬉しそうな顔は、いまでも忘れない。

その後、彼が幹事で三井信託の望月達夫氏を招き職場合同の山の会を開くこともあつた。

■
私が銀行を定年退職したあとは、十二月の山岳会年次晩餐会に打合せて出席、顔を合わせると山の話のほか、二次会の酒の席で杯を挙げることを繰返していた。

彼は定年前に関連会社に転出、要職を得て社務に精励したと聞くが、公私相半ばで酒を少し過ぎ、また医者嫌いも祟って命を縮めた。思えば思うほど惜しい男を失なつた。葬儀に当たつては、山岳会からご丁重なご弔意を忝うした。遺族からの深甚の謝意をお伝えする。

悼

夏山を共に歩みし日々のこと

合 掌

玄

略歴

大正十三年（一九二四）一月十六日、東京市に生れる。
昭和十六年（一九四一）三月、東京府立一商卒。四月、三井銀行入行。
昭和十九年（一九四四）三月、中央大学卒。
昭和二十六年（一九五一）十月、日本山岳会入会（会員番号三九四〇）。
昭和三十三年（一九五八）四月、藤森喜美代と結婚。
昭和三十八年（一九六三）七月、長男昇誕生。
昭和四十八年（一九七三）から三井銀ソフトウエアサービスマン勤務。
昭和五十二年（一九七六）、三井銀行退職。
昭和五十三年（一九七八）、五月二十日急性肝炎にて慈恵第三病院入院。
五月三十一日死亡。享年五十四歳。多摩墓地に埋葬。

〔見学 玄〕

小暮勝義氏（一九四三—一九七八）

ダウラギリI峰南東稜登攀中、三名の仲間を失って深い痛手を心に残しながらも、私達は、一九七八年十月十九日、第一次登頂隊成功の報に接し喜びにわきたった。登攀隊長として上部で指揮をとっていた小暮勝義君の、「よかった、おめでとう。気をつけて下山して下さい。」という、登頂隊員達に送る声が、トランシーバーを通して聞え、ベースキャンプにいる私には、「田中さん、よかったですね、これで終りますね。」ということ

ばが届けられた。

それが、彼の最後のことばだった。翌二十日、小暮君は突然、あまりにも突然に、不帰の客となつてしまったのである。それも、C5まで不足物資を荷上げしなければと云う責任感のために、不調のシェルバを残して単身で出発、そしてダウラギリの魔の雪稜に逝ってしまったのである。

私達ごく親しい者の間では、グレちゃんの愛称で呼ばれていた彼は、日本の三大岩場の一つ、谷川岳を持つ群馬県に生まれ、若いころから境町山の会の会員として、先鋭的な山登りを実践してきた。

ちやうど彼が登山をはじめた時期は、岩登りに人工登攀技術が導入され、次第にその全盛期を迎えようとする頃であった。努力家の彼は、そんな時の流れの中で、持ち前の素質と才能を着々とのばしていった。谷川岳の各ルートを熟知すると、目を黒部周辺の未開拓の岩壁へも向け、いくつもの初登記録を刻みつけていった。

海外登山の経験者としても、彼は群馬に於ける第一人者だった。一九七〇年には、第二次RCC隊のメンバーとして、ソビエト連邦カフカズに遠征、一九七二年群馬馬岳連隊のダウラギリIV峰へ、その翌年には、エベレスト南西壁隊にも参加して、意欲的に、日本第一級のクライマーへの道を歩んでいった。

私がグレちゃんを知りあったのは、十二年ほど前のことであ

る。それ以来ずい分沢山の山行を共にしたが、彼はいつもこう
いつていた。「登山家はハングリーでなければならぬ。どん
な山に登ろうと、いかに困難な登攀を完了しようとも、それで
満足してはいけない」

あれは一九七六年四月末のことだった。私は、グレちゃん
と、第二次RCCの松田昭君の三人で、明神東稜から北穂まで
縦走して来て、そこにテントを張った。ここをベースにして、
滝谷のルートを何本か登る予定だったのである。運悪くその後
は吹雪が続き小さなテントに閉じこめられた私達は群馬岳連車
位での海外遠征が、今後再び可能かどうか毎日語りあった。第
一回のダウラギリIV峰の失敗、資金調達の問題等々、実現を考
えるにはあまりに困難な問題が山積していたのである。彼はす
でに、力量、経験、人格をかわれて、仲間から群馬岳連海外登
山研究会の委員長に選ばれていたのだが、彼の緻密な、ねばり
強い計画を聞くうちに、私自身もいつの間にか、ヒマラヤ登山
の話の中にまますのめりこんでいった。

吹雪は四日目になっても、いつこうにやまなかつた。私達は
この天候に見切りをつけて、深雪の南稜ぎわを、ラッセルしな
がら下山した。そしてこの時以来、グレちゃんと私の、第二次
群馬岳連ヒマラヤ遠征のコンビが、はじまったのである。グレ
ちゃんは経験を活かして、主として戦略面に、私は資金集め
や、その他渉外関係に携わった。

グレちゃんにひきいられ、海外登山研究会の全てが一体とな
って、ダウラギリ計画は実現された。そして苦しみぬいて、ダ
ウラギリI峰南東稜の初登は果された。成功を知って、それか
ら散ったグレちゃんだったけれど、はたしてそれがなぐさめに
なったのだろうか。

小暮勝義君、あなたが最後の情熱をかけたダウラギリI峰
の、頂上をよく見えるC4近くの墓で、ヒマラヤの山々にかこ
まれて安らかに眠って下さい。最後に、山の歌の好きだったあ
なたに、シャロームの歌の一節を引用させてもらって、私の追
悼のことばとします。

どこかでまた つかあえるさ

またあおう またあおう どこかで

享年 三十五才。

略 歴

- 一九四三年三月一日、出生。
- 一九六一年、境町山の会入会。
- 一九六九年七月、日本山岳会入会（会員番号六七六九）。
- 一九七四年、群馬県山岳連監常任理事。

山 歴

- 一九六二年八月 谷川岳一ノ倉衝立岩正面壁雲稜第一ルート
- 十月 谷川岳一ノ倉エボシ奥壁凹状岩壁（単独初登）
- 一九六三年三月 谷川岳一ノ倉沢エボシ奥壁中央カンテ

一九六三年七月 谷川岳南面幕岩Bフェース北壁(第二登)

八月 利根源流越後沢右俣大滝(初登)

九月 谷川岳一ノ倉衝立岩正面ダイレクトカンテ(第三登)

一九六四年三月 積雪期谷川岳一ノ倉南稜

五月 谷川岳南面幕岩Cフェース正面壁

一九六五年一月 積雪期北岳バットレス第二尾根(第二登)

一九六六年五月 黒部丸山南東壁小暮・塚田ルート(初登)

十月 黒部奥鐘山西壁(第二登)

一九六八年五月 谷川岳一ノ倉衝立岩正面壁A字ハンダルート(初登)

八月 黒部別山谷カベ尾根フェース(初登)

十月 黒部奥鐘山南西壁(初登)

一九七〇年四月 不帰II峰下部三角形岩壁(鹿島嶺)

七月 ソ連カフカズ遠征シケリダ氷河周辺(第二次RCC隊)

一九七一年一月 積雪期穂高北尾根四峰正面壁北条・新村ルート

一九七二年春 ダウラギリIV峰(群馬岳連隊)

一九七三年秋 エベレスト南西壁(第二次RCC隊)

冬 ネパール・ロールワリン

一九七八年十月二十日 ダウラギリI峰(八一六七メートル)南東稜六

四〇〇メートル付近で死亡 (田中成幸)

高橋憲二氏(一九〇九～一九七九)

宮城支部の高橋さんが、泉ヶ岳で不慮の死に遭遇されたのを

知ったのは、一ヶ月以上もたってからで、早速私は女婿にあたる会員柴崎徹さんへお悔み状を認めたのであった。

高橋さんの入会は一九七一年十二月だから、そんなに古い会員とは言えないが、山登りは二十代の後半から、鶴若一雄、高橋清氏らの友人とはじめ、東北の山々、特に蔵王山塊を好んでよく探り歩いたという。

本会入会後は宮城支部に属した関係から、同支部の熱心な会員となつたばかりでなく、会報『山』に載っているだけでも、一九七二年秋田支部主催の鳥海山、七三年北海道支部主催の十勝岳、七四年の中房温泉、七七年五月の木暮碑前懇親会、七八年北海道支部のペテガリ岳、同年秋の福島支部三十周年記念山行等に参加し、さらに一九七三年以降、年次晩餐会には殆んど欠かさず出席するなど、地方在住会員としては珍らしい存在であつた。

高橋さんはまた伝統ある仙台山想会の古い会員であり、梅花及クラブの会員でもあつて、故山内東一郎翁とも古くから親交があり、早くから同氏にピッケル、アイゼンなどを作って貰つたという。さらに仙台ファミリースネサークルの会員として、山の8ミリを撮り続け、異色の会員として知られていた。これらの8ミリは「老いらく山日記」と自ら題して、百巻近くをまとめていた。『山』三六五号にも「老いらく山日記」の寄稿があり、また三七八号には「祝瓶山」の寄稿がある。

特に記しておきたいのは、一九七七年五月の木暮碑前懇親会の折り、高橋さんは蔵王・清溪小屋の木暮さん揮毫の掲額のことを話され、それが「木暮理太郎翁の『清溪小屋』掲額」と題する小冊子に纏められるに至った経緯である。柴崎徹さんによる「あとがき」からそのまま引用させていただく。

「岳父、高橋憲二が、日本山岳会の諸先輩からのお誘いを受けて、十五回目を迎えた金山平における木暮祭に出席したのは、昭和五十二年五月のことであった。この折、この清溪小屋の掲額の話を開露したらしく、そこに出席されていた御遺族の方々や木暮さんにゆかりの霧の旅会の方々、そして日本山岳会の方々に興味深く聞かれたようであった。岳父には東北の片隅にひっそりと掲げられていた木暮さんゆかりの掲額のことを、はかrazも木暮さんの碑前で、しかも、ゆかりの深い方々の集う席で披露できたことが殊の外喜びであったらしく、金山平で撮ってきた8ミリフィルムを映して観せる度に、今度は掲額の写真を持参しお目に掛けたいといっていたのであった。

その後、会う度に掲額の話が出、それならばいっそのこと手製の小冊子に編じてお配りしようということになって、私も手伝うことになったのであった。……ようやく岳父に見てもらうまでになったのは本年三月十九日のことであった。その折、あとがきは木暮祭の常連であられる方々のことをも含めて岳父に書いてもらうことにして帰ったのであるが、翌二十日、岳父は

泉ヶ岳に8ミリの撮り残しを映すといつて、ひとりで出掛けたまま遭難し、ついに還らぬ人となってしまったのである。」

一九七七年の木暮碑前懇親会では、偶然私も一緒に、高橋さんの話をよく覚えていた。右の小冊子は十二ページに纏められ、木暮さんの掲額と清溪小屋全景のカラー写真等三枚が収められている。今春（一九七九年）の碑前懇親会に、柴崎さんが持参して参会者に配られ、高橋さんの遺志を完うされた。「清溪小屋」と揮毫された木暮さんの筆蹟は、まことに雄渾なもので、これがこのたび公にされた意義は少なくないと思う。

私が初めて高橋さんを知ったのは、多分一九七三年の年次晩餐会の時であろう。七十五年六月の宮城支部行事であった船形山は、思い出に残るよい山歩きだったし、七八年のペテガリ岳でも一緒だった。また私が大東岳へ登りたいというのをよく覚えていて、七七年十一月中旬、偶々成瀬岩雄さんが行くときに誘って下さった。これらの時に高橋さんから受けた数々のご厚意は、忘れたいことばかりである。

柴崎さんは「岳父は晩年、日本山岳会を通して多くの知友を得、方々の会合に招かれたり、随分と楽しい山行を重ねていた。おそらくそれは、岳父の生涯の中でも最も楽しい自由な時期であったと思う。たとえ命尽きて山に逝くことになったとはいえ、山を相手に悔いのない晩年であったらうと思う」と書いているが、遠く離れていた私などにも、正にそのように思える

のだった。

謹んで高橋さんの冥福をお祈りする。

略 歴

明治四十二年（一九〇九）六月二日、誕生。生地は蔵王の南麓、山中七ヶ宿の「湯の原」で本陣の二男であった。仙台の高橋家の養子となる。

宮城県工業高等学校機械科を卒業し、こんにやく製造業、家具商を営み、昭和四十九年引退。

昭和四十六年（一九七二）十二月、日本山岳会入会、会員番号七三〇三番、紹介者は板橋元一、加藤義明。

昭和五十四年（一九七九）三月二十日、逝去、享年六十九歳。戒名、憲正院泰岳玄道居士。

〔望月達夫〕

新選覆刻 日本の山岳名著 解題

企画編集 日本山岳会 A5判
四三〇ページ 一九七八年九月
大修館書店刊

さきに日本山岳会が創立七十周年記念として、覆刻日本の山岳名著十八巻を編集し大修館書店より発刊されたが、その大部分が入手困難な稀覯本であつただけでなく、原本に忠実にならつて覆刻しようとする製作努力の甲斐もあつて、大へん好評を得た。

今回はその第二期ともいふべき続編として、日本山岳会企画編集のもとに二十点・二十九冊が刊行され、前回と同様日本山岳会編の解題書が加えられている。本解題書は第一期のときより大部のものとなり、その内容はより豊富となつてゐるが、解題書名とその執筆者は次の通りである。

谷	文晁	名山圖譜	山崎安治
播隆上人	迦多賀嶽再興起	熊原政男	
松浦武四郎	信州鎗嶽畧縁起	吉田武三	
	石狩日誌		

松浦武四郎	山岳紀行六種	吉田武三
高島北海	欧州山水奇勝	宮下啓三
野中至	富士案内	大森久雄
河口慧海	西藏旅行記	薬師義美
小島烏水	山水無盡蔵	近藤信行
鹿子木員信	ヒマラヤ行	雁部貞夫
東大山の会編	劔沢に逝ける人々	渡辺公平
吉江喬松	山岳美観	近藤信行
尾崎喜八	山の絵本	串田孫一
大島亮吉	先蹤者	望月達夫
京大白頭山遠征隊編	白頭山	今村正二
小島烏水	アルピニストの手記	島田巽
竹節作太	ナンダ・コット登攀	山本良三
足立源一郎	山に描く	山里寿男
Walter Weston	Playground of The Far East	島田巽
中村清太郎	山岳礼拝	近藤信行

以上であるが、『山岳礼拝』は『山岳渴仰』の覆刻本ではなく、中村清太郎の初期の山岳紀行を中心に新しく編集刊行されたものであり、覆刻本は十九点ということになる。

各作品の解題が始まる前に、串田孫一「山の本の並ぶ棚」、山崎安治「明治以前の山の本と資料」、の二編が載せられている。山崎氏の一文は江戸期の山の本について広く解説を加えら

れ良くまとまっております、小林義正氏の『山と書物』の中の数篇とともに明治以前の山の書物を読むための好適な手引であろう。

今回の覆刻本の特徴は、江戸期の書物が四点ふくまれていることである。『名山図譜』についてはその成立と初刷り本、山の所在地などについて解説されている。昭和四十二年に国立公園協会の機関誌に児玉政介氏が、「随筆 日本名山図会」という表題で、数回にわたり図会にふくまれている山々について記述されているが、初版本の成立などに関しては余り筆を加えていない。本解題は、川村寿庵と文晁とのかかわりから本書の成立の過程、さらにいくつかの異本を研究の上それぞれの序文などを比較考証し、初版の刊行年を文化二年正月と断定する経緯を詳述している。山の所在地図表、山の名称・位置・標高の概要の記載もあり、これらの点からいっても現在では名山図譜の最も詳しい解説であるといえる。

巻末に付録として、『名山図譜』の序文・跋文とともに、『多賀嶽再興記』、『信州鎗嶽畧縁起』、『石狩日誌』、『山岳紀行六種』の解説・訓読が載せられていることも本書の特徴であり、読者に対する親切な配慮が嬉しく感じられる。和とじ本、特に江戸期の書物は読みづらいものであるが、こういう解説がついていればとりつき易く、明治以前の本に親しみをもつ人達もふえるのではなからうか。

松浦武四郎の著書には、その研究の第一人者である吉田武三氏が、また小島烏水の二冊の書も同様に、近藤信行・島田巽両氏が筆をとっておられ、まさに権威のある解題となっている。『先蹤者』の解題も、従来みられる憶い出を主とした解説でなく、望月達夫氏によって、当時の時代背景から編集・内容・装帧について詳述されている。

『剣沢に逝ける人々』の解題執筆者・渡辺公平氏は、最近惜しくも長逝されたが、早大山岳部現役時代に世間を騒がせたこの遭難事故を多くの感慨をこめながら思い起し、解題の筆をとられたことだろう。いくつかの疑惑を残したままであるこの事故を、その原本である『銀嶺に輝く』の一部分を引用して解説を加えられている。しかしその筆致は、五十年近い昔のミステリーにメスを入れるのではなく、登山のめざましい発展のみられる今日から顧みて、登山が社会一般にも認識されていなかった時代に真摯に山登りをつづけていた大学山岳部員のたくましい情熱を追憶し、同時代の山の仲間であった犠牲者に深い哀惜の念を捧げているのである。

昭和初年の大学山岳部の活躍は、度重なる遭難にもめげず内地以外の山々に指向されていった。千島、樺太、台湾などに遠征が行なわれたが、その代表格は昭和九年の『白頭山』と、十一年の『ナンダ・コット登攀』である。これら二つの報告書の解題は、今村正二・山本良三両氏によってつまびらかにされて

いるが、特に兩篇とも大正末期から昭和十一年頃までの日本登山界の状況に言及されている。昭和九年から十四、五年頃までは、第二次大戦前の日本登山界の黄金時代であったが、二篇の解題を併読することによって、わが国登山史における重要な時代の背景と流れとが理解出来、興味深いものがある。

さらに特記しなければならぬのは、宮下啓三氏による高島北海の『欧州山水奇勝』二巻の解題である。型通り北海の生涯と本書の成立の由来など記されているが、そのあとに作品の地理的解題をこころみている。四十点の全作品の作画地点分布図を作成し、各図毎に描かれた場所と対象物についての解説が行なわれている。北海の娘婿の河村幸次郎氏の協力があつたことであるが、ヨーロッパ滞任経験のゆたかな宮下氏なればこそその労作である。ほぼ解明しつくされているが、まだ二、三不明の点があり、一日も早くその空白部分の埋められることを期待したい。

最後に、本題の解題とは少しはなれるが、巻末に記された「覆刻制作について」という大修館書店編集部の小文にも注目したい。制作の概要について記されているが、真面目な制作方針のもとに誠実に原本通りの覆刻を実現しようとつとめており、特に和と同じ本の覆刻についてはその初版本の入手と比較考証に少なからぬ労苦をとめない、軽薄な覆刻本の多い今日、その良心的な努力に対して大きな敬意を表したい。

第一期とあわせて三十八点の山岳名著が覆刻されたことは、山岳書愛読者にとつてまことに喜ばしいが、こうした日本山岳会編集の解題書が二冊刊行されたことはそれ以上に意義が深い。山岳文学・登山史あるいは広く登山文化というテーマを研究するためには、欠くことの出来ぬ教科書であろう。

〔小谷 隆一〕

登山技術（上・下）

日本山岳会編 四六判 三八一ページ
（上巻） 三八六ページ （下巻） 別刷
写真上下各四ページ 本文中図版多数
一九七七年六月（上巻） 同七月（下
巻） 白水社刊 定価各二〇〇〇円

本書の前身である『登山技術』全三巻は、一九六一年五月〜七月にかけて、今回と同じ出版社である白水社より刊行されている。それから十六年を経て、同書の新版が刊行されたことは、その間の登山技術の進歩からみても、当然の要求でもあり、一九七〇年代後半の登山技術書として、本書刊行の意義は極めて大きいといえる。

本書の編集にあたっては、日本山岳会では編集委員会を設け

て編集をすすめたが、その代表である金坂氏は、この種の技術書の編集には経験も深く、自らも過去に『冬山技術セミナー』（一九六〇年刊）を刊行しており、最適者である。他の編集委員・執筆者も、文部省登山研究所専門調査委員であったり、同研究所の『登山指導者研修会テキスト』の編集にたずさわったりした者も多く、現役の登山者としての執筆としては、最適メンバーであるといえることができる。それだけに「あとがき」に

「本書は登山の中級者、または指導者のもとにある初心者を対象としているが、上級者の復習のための教科書としても役立つものと自負している。従来の技術書には、読んだだけでは技術内容が理解できないような部分がかかり多く見られるが、本書の執筆は豊富な指導経験を持つ現役の登山者によるものであるから、その点には遺漏なく、なおかつその表現については編集委員会として責任を持って検討し、推敲を加えたものである。その点は読者におかれてもじっくりと読みとっていただきたいと期待している。」とあるとおり、かなりの自信をもって刊行されたあとがきがわれる。

一般的にみて、分担執筆によるこの種の技術書の編集になると、編集者がいかに努力しても、重復個所がでる反面、重要な部分が抜けてしまうなどといった失敗をおかし易い。また場合によっては、執筆者間の見解の相違から内容に矛盾した個所すら起りがちである。そこで私は、今回本書の全巻を通読するに

あたり、それらの点をチェックするために、山の危険という見地からみたチェックリストを作って読んでみることにした。即ち、私のささやかな登山経験からみて、これだけはどうしてもとりあげて欲しいという項目をリストアップしてみたわけである（一例をあげてみると……冬季雪中露営に際し、入山当時の最適地も、その後の多量の降雪によって危険な場所になる場合がある。その時には直ちに天幕を移動する必要があるが、この点が「露営」の項でふれられているか、「雪崩」の項でとりあげられているか、というようなことで、主として私の過去の失敗の経験、とくにその時には気づかずして、後になって考えてみて冷や汗が出たようなことなど……）。

しかしこれらの点については、一部に言葉たらずのところがないではなかったが、先ずは満足すべき内容で、一安心した次第である。

裏を返せば、上下二巻の限られたスペースによくこれだけの内容を整然と整理したものと感心した次第である。

元来、登山技術には、狭義の意味での登山技術、例えば岩登り技術、露営技術というような固有の技術と、山の危険、安全限界、リーダーシップや危険回避の問題、登山の心構え等といった、どちらかといえば、メンタルな面での広義の技術がある。前者をハードウェアとすれば、後者はソフトウェアということもでき、グラフで書けば縦軸と横軸の関係にあるともいえる

る。この他に、気象であるとか、地質であるとか、医学であるとかいった面も、広い意味での技術と考えれば、三次元にも四次元にも複雑にからみあってくるわけで、これを平面的に分担して執筆していかうというわけであるから大変である。

しかしながら、本書では「あとがき」にも見られる通り、この点を十分に検討して編集方針を出している。即ち、「いついかなる場合にも無事に山から下りてこられるためには、登山者は体力・技術の他に、優れた判断力をもたなければならぬ」とし、そのためには、リーダーシップや危険回避の問題について、それぞれの分担項目において全執筆者が最優先することが決められたとあり、「登山の危険」という独立した項目は除いてあるのは、登山中に現われる危険、その判断や回避の仕方については、全項目にわたってできるだけ、具体的に詳しく執筆することにした」とある。

この編集方針は適切であり、且つ内容表現についても、編集委員会で推敲を加えたものであるだけにわかり易い。ただ欲を云えば、紙面の関係で止むを得なかったかも知れないが、最近の大きな集団登山などの場合、リーダーの安全限界の判断材料として、医学、気象、通信等は、重要な情報提供源でもあるので、正しい利用法を収録して欲しかったと思う。また、山登りの個人適性の問題にふれば、心理学や医学の項は必要でもあらず、体力をつけるための「トレーニング」の各論がとりあげ

られていながら、大きな項目の医学の点が省略されている点も片手落ちの気もする。

これら省略された項目については、出来れば序論ですこし詳しくふれて欲しかったし、参考文献名についても、技術書であるので、各論でもう少し詳しくついでに調べたい人のために、とりあげるべきではなかったかと思う。とくに本書の旧版に詳しく出ているところは、その点関連をもたせておく方が読者にとって親切であったと思う。

扱って、次に主要な項目についての感想を述べてみたい。

ボリニュームのにも、本書の中心をなす、「山歩き」、「積雪期登山」、「岩登り技術」、「山スキー」、「露営」等、狭義の意味での登山技術の章は、それぞれの執筆者が、自分の豊富な経験をもとに、全力投球されているだけに大いに参考になる。とくに基礎的技術については、昔も今も変わっていないことが多いが、このことは登山技術の基本がいかに大切であるかを物語っている。

しばらく第一線を離れている私自身にとって、もつとも興味深く読んだ箇所は、氷雪技術や、岩登りに関するの最新技術の紹介である。岩登りにおけるクライミング・チョックの技術など、日本でももう少し普及してもよく、用具の進歩（十二本爪の出っ歯のアイゼンと二重靴の使用）によるダブルアックス技術や、スクリー型アイス・ピトンによるランニングピレー技

術など、最近のアルプスやヒマラヤの氷壁をこなしている技術の解説は非常に参考になった。

「確保論」は、ランニング・ピレールの基礎理論として今更述べる迄もなく、著名な理論である。素人にはいささか難解な式ではあるものの、本書には欠かせない内容の一つといえる。「雪崩」については、理論・実践の両面でのエキスパートとして、日本雪氷学会の理事でもある筆者の右に出る者はあるまい。本書の中でもっとも読みごたえのある章である。積雪の性状からストレス、雪崩の発生機構について、雪崩判断の諸条件、積雪の安定条件と、初心者にもわかり易い解説は、一気に読者を引きこませる。とくに二八七〜三二二頁にかけての「遭難予防の問題点」の項は、登山者に対しての実用的記述であり、筆者の豊富な体験にもとずく、数々のアドバイスは、貴重な内容である。「あとがき」で、筆者が、数十年間の間隔において登山技術書を編集してみても、最も残念に思うことは、雪崩の初歩的遭難がさっぱり減らないことである。体を使って覚える技術は確かに向上したように見うける。しかし雪崩その他の高度の判断力を要するタクティクス面では、いまの登山者の平均レベルはあまり向上していないのではないかと憂慮される。この点については登山界の指導的立場にある諸賢の再考に期待したい」といみじくも述べられているが、雪崩の初歩的遭難が後を立たないことを憂慮され、心血を注いで執筆された筆

者の気持ちがよく理解できる。

最後になったが、巻頭の「序論」が、本書の中で最も大切な章であることは云うまでもない。筆者は先ず「登山技術とは」と題して登山技術の定義から入り、各論では天候、体力、経験、装備、情報、危険の項に分けて解説しているが、「体力」の項ではサヴァイヴアルの根性を養っておくことの必要性を述べ、体調の問題では、ボディタイムを紹介している。特に後者については、筆者自身が長期間にわたって実験したデータを公表しての解説であり、興味深い。よく山で体調が悪いことを経験するが、このデータをみて今迄余り関心のなかつた体内時計についても関心を持つようになった。

この章の最後にある「危険」の項も、本書の中で最も重要な部分であろう。筆者は遭難を偶然性の面から分類して、必然発生の遭難と偶然発生の遭難に分け、前者は、山をよく知り、登山者の山における体調や心理状態、その変化や能力限界、こういったものをよく知り、無理をおさえることにより予防できるが、後者はいくら山を知っていたとしても遭難に至る、アクシデントという言葉がびつたり事故である。」と説明している。

しかし偶然発生の遭難例としてあげた「偶然の機会に岩角にけつまずいて転落したような遭難」の例示は不適當ではなからうか。これが登山中に偶然地震にでも遭つたというのなら止

むを得ないが、岩角にけつまずいて転落したのであれば、偶然発生とはいい難いのではなからうか。私達の山登りにおいては、常に次の一步をどうおくかに全力を傾注すべきなのである。言葉尻をとらえるようで恐縮であるが、山登りとはそういうものではないだろうか。

最後に筆者は、遭難を避けるためには、登山者は常に、自己と危険との間にいつも間隔をあけておく必要がある、その間隔が「余裕」であるとして、「余裕」について説明を加えている。即ち「登山者の体力、技術、装備などの総合力によって、登山者が行動できる範囲はあらかじめ定めておく。そのギリギリの限界が危険限界線であり、これを突破すれば遭難がおこる。次に登山者がいつでも安全に行動できる範囲の限界を安全限界線とする。この両限界線の間に間隔がある限り余裕が確保されるので行動は安全といえる。」として、最後に「登山行動における余裕のとり方は登山者自身の責任において行う。その幅の決定は自由であるが、その結果に責任をもつのは決定した者自身である。これが登山におけるルールの一つであり、一見したところ、ずいぶんルーズなルールであるが、考えようによってはこれほど厳しいルールはあるまい」と結んでいる。

筆者の云わんとしていることは私にも解りすぎる程解るのであるが、これだけでは誤解を招くおそれがないでもない。心配のあまり安全の美名のもとに、余裕を大きくとりすぎれば、安

逸をむさぼることになり、静観に名を借りて怠惰な登山者になってしまつては、アドヴェンチャーとしての登山からは離れてしまつてしまふからである。スポーツ登山の側面からみれば、体力、技術、情報分析力等の総合力で安全限界を拡大していき、いかにして危険限界線すれすれにまで、アドヴェンチャーの領域を拡大していくかということこそ意味があるのであつて、余裕を無限量に近ずける努力が大切だと思えるのである。より困難な山やルートを克服していくにあつては、危険限界と紙一重に迄安全限界を拡大していかなければ難しい場合が多いのである。

しかし私達は山登りでの死はいかなる場合でも敗北であると思つており、敗北の要素を少しでも含むような登山はしてはならないとすら考えている。その上での余裕を無限量に近ずける努力であるから大変なのである。そしてそのためには、登山者は常に精進を怠ることなく、いかなる努力をも惜しまない筈である。しかし世の中には、真の危険を知らずにこのような危険限界にまで近ずいて成功しているケースがないではない。これなどはたとえ成功したとしても、僥倖としかいいようがない。とくに自分の僥倖を僥倖として知ることなく過してしまふことは、恐ろしいことである。余裕論の最後に、一言この点をつけ加えて欲しかった。

なお、用語統一の点では、注釈をつけるなどして、種々と苦

労しておられるが、それでも二三〇頁には「新雪表層雪崩」といった言葉がとびだしている。勿論これでも誤りではなく、意味もわかるのであるが、できれば「雪崩」の項での分類に従って統一して欲しかった。用語の索引をつくることは大変な作業を必要とすると思われるが、用語の統一をはかるためにも是非つくって欲しかった。

〔松田雄一〕

ヒマラヤ―第三の極地

ディーレンフルト著 福田宏年訳
 合判 三五六ページ 一九七八年
 八月 白水社刊 定価三三〇〇円

もうだいぶ以前のことだが、一九六一年二月のはじめ、ミンヘンの出版社から部厚い一冊の本が送られてきた。しかし、そこに注文した覚えもないのにも思いながら包みを開けてみると、出てきたのがディーレンフルトの『Der Dritte Pol』（一九六〇年）、はさまれたカードには「著者の命により献呈する」とあった。

それまでにはほんの数回の文通をしていたが、そんな自分に

まで新著作を、と感謝し、さっそくに礼状をしたためた。でも、通り一遍のものではと思い、いくつかの私見を加えた。その一つは、巻末の初登頂リストの最後に、第五十八番としてトリヴォール（一九六〇年八月十七日）が入っているなら、同じ日に初登頂されたノシャック（七四八五m、京都大学学士山岳会）を五十九番として追加すべきですとやってやった。同教授は、その登山についてはまったく知らなかったもので、登山記録の斡旋をたのむ、と折り返しいって来た。日本との距離はあるし、その初登頂のころは校正に入っていたと思うから、ノシャックの脱落は無理からぬこと。私は登頂者の酒井敏明氏から英文の報告をもらい、すぐに転送したが、これにはディ教授にたいへん喜んでもらったものである。

それ以来のことだったろうか、ディ教授は毎年、「ヒマラヤ・クロニーク」を送ってくれ、私はそれを楽しみにしていた。そして十数年、一九七五年四月末にスイスの友人から教授の訃報を受け取った。次いでしばらくして、ザルツブルクの子息のノーマン・ディーレンファース氏から死亡通知が届いた。自分にとっては、一度は会っておくべき人だったように思う。

ヨーロッパには周知のように、ほぼ同年代のヒマラヤ研究の大家が三人いた。このディ教授（一八八六―一九七五年）とマルセル・クルツ（一八八七―一九六七年）はスイス、ケニス・メイスン（一八八七―一九七六年）はイギリスで、称して御三

家。それにわが国の深田久弥（一九〇三—一九七一年）を加えれば、四天王といえようか。いずれもヒマラヤに登山隊を率いたり、長年にわたって測量や調査に従事した、実地の経験豊かな碩学たちであった。著わされた著作からうかがえる研究法は、クルツとメイスンは編年史的、ディーレンフルトは山群中心、そして深田は一山一項主義であった。

さて、ディ教授はすでに一九五二年に『Zum Dritten Pol』を公にし、その邦訳『第三の極地』（諏訪多・横川共訳、朋文堂）も一九五六年に刊行された。だが、原書には一九五三年のエヴェレスト初登頂の記事が入らず、あとで別冊補遺で補われた。だから本文では、登られた八〇〇〇メートル峰はわずかにアンナプルナのみで、それは早晩、改訂される運命にあったのである。

そしてエヴェレスト初登頂のあと、一九五〇年代のヒマラヤ登山は八〇〇〇メートル峰の初登頂を中心に、いわゆる「黄金時代」を迎えるのである。年表には次々と新しい記録が書き加えられていった。一九六〇年までには十四座の八〇〇〇メートル峰のうち、十三座までが登られ、あとは中国領内のシシャ・パンマ（ゴザインタン）を残すだけだった。ディ教授はそこを区切りに、旧著にこだわらない、新しい著作を書き下ろすことにする。旧著の改訂増補とか、第二版では、新しい内容・登山記録を十二分に盛り込めなかったのだ。そうして出来上がった

のが本書である。旧著は八〇〇〇メートル峰を高度順にエヴェレストから並べたのに対し、この新著はカンチェンジュンガ山群からはじまって、最後はカラコルムと、東から西へと山群ごとに進められた。

この新著が出た当時、国内でもヒマラヤ研究者に多大の刺激を与え、また、たいへんに重宝がられたものであった。私もその中に挿入された、アンナプルナ山群の新しい地図から重大なヒントを得て、七〇〇〇メートル級の無名峰を発見し、のちにそれを偵察・試登し、ティリツォ・ヒマールと命名した。それから十五年、ネパール政府がようやく登山を許可するようになって、今年、一九七九年の春に仲間たちが頂上に立った。

でも原書の本文では、アンナプルナIV峰のところに一九五三年の京大土山岳会の記録が一言半句もないとか、また、本文中にK・今西（今西錦司）とT・今西（今西寿雄）がマナスルの項にあるのに、索引にはT・今西しかないとか、わずかではあるが、日本の事情に疎いというような不満が若干残った。

しかし同書は、未完に終わったクルツのものを別にする、メイスンの『ヒマラヤ』と共に、ヒマラヤの基本テキストとして座右におくべき、すぐれたものであり、すぐにでも翻訳されるべきものであった。

それから十数年、ヒマラヤ登山も「鉄の時代」、より困難な「バリエーション・ルート」の時代を経て、いまや、少数精鋭

による短期決戦の「アルプス型」登山の時代に入ってきた。それらの登山記録を加えて、再び大増補・改訂をしなければならぬ状況の中で、今更という声もあるが、一時代を画する黄金時代までを簡潔にまとめ上げた労作は、やはり、邦訳されてよかったと思うし、日本の登山文化史の上でも、意義あるものといえよう。

本訳書では、原著の地質概要が省略されている。また、山の高度は原著のままだが、現在、ネパールなどでは新しい高度が用いられているから、地図だけでは原著とは別の、新しいものが作図されている。だから、本文の標高をそのまま信用してはならない。さらに、巻末の初登頂一覧表は一九六〇年のトリヴオールで終わっているため、本訳書では馬場勝嘉氏の手によって一九七七年までが追加され、親切な表となった。ただ、上述のように、五十九番にノシャックを加えることが必要であろう。

最後に、人名や地名をカタカナに直すのはたいへん厄介なものだが、本訳書の「カラコルム」はどんなものだろうか。原書では「Karakorum」と、uにアクセントの記号がおいてある。語源のトルコ語を知らないでいうのだが、そのアクセントのある母音は、どうしても長音にしなければならぬか。どうも、メイソンの「カラコラム」を意識して、ディ教授はあえてアクセント記号を使ったように思うのだが……。だから、これ

までの日本の慣用もあることだし、「カラコルム」でよいのではなからうか。また、プロッチェレル兄弟、A・ロッホなど、本訳書と同一の出版社の刊行物であるメイソンの邦訳『ヒマラヤ』と、多少の対照は必要でなかったらうか。

〔薬師義美〕

ヒマラヤ取材記

片山全平著 四六判 三二九ページ
一九七八年七月 スキージャーナル
社刊 定価一三〇〇円

全平さんが素晴らしい本を出された（片山氏、片山さん、ではどうもしっくりこない。失礼だが全平さんと呼ばせていただきたい）。東京の各新聞社の運動部の記者で、山担当の人は何人かいる。その中には学生時代大学山岳部で本格的な登山をしてきた人も多い。しかしそういつてはなんだが、ほとんどが新聞記者になりきってしまったていて、私など本当におつきあい出来ない場合が多い。それがむしろ当然なのだろうが、その点全平さんは、山の仲間としてつき合える人である。という全平さんは新聞記者でないようなことになってしまいが、そういう意

味ではない。この点は短く説明しにくいし、本題からそれてしまふので止めるが、それは全平さんのこの処女出版を熟読していただければ十分に理解出来ると思う。

昨年（昭和五十三年）の六月、北海道支部十周年記念のペテガリ岳登山で、珍しくこういつた集りに参加した全平さんは、頂上に立つと長いあいだ腰を下ろして静かに日高の山波を眺めていたと、後で同行者から聞いた。なぜ全平さんが、ペテガリ岳の頂上で皆が下っていった後も立ち去りがたいような気持だったか、その胸中をさっしていた人は同行者の中でもほとんどいなかったのではあるまいか。

本書の圧巻である「遭難記」を読めば、三十八年という長い歳月を経て、亡兄と対談をしていたに相違ない全平さんの感慨がひしひしと伝わってくる。昭和十五年一月、ペテガリ岳をねらった北大山岳部の札内川での雪崩遭難は、当時早稲田の現役だった私などもひどいショックを受けたことを覚えているが、八人の遭難者の一人が、全平さんのすぐ上の兄の片山純吉氏であつた。

そのころ片山家は不幸が相次いでいた。全平さんの長兄も、すぐ下の幼い弟も相次いで亡くなり、それに続いた一番親しくしていた次兄純吉氏のペテガリ岳の遭難は、多感な中学生だった全平さんをゆり動かしたに違いない。この一編はこれまでの山の書物には見られない異色あるドキュメントとなつており、

爪生卓造氏も序文でいっているように、すぐれた文芸作品の境に達して読むものの胸を打つ。

本書は、「ヒマラヤ取材記」、「ヒマラヤ研究」、「中国の登山史」、「あの頃の登山」、「遭難記」の五章に分かれている。「ヒマラヤ取材記」は、著者が一九七〇年、日本山岳会のエベレスト登山隊の取材に行ったときのレポートで、ヘミングウェイの「老人と海」に結びつけた松方三郎隊長との出会いが印象的である。「ヒマラヤ研究」では、ヒマラヤ登山の現況をくわしく述べ、他のスポーツ種目との比較から、その将来の見通しについて触れているが、これはスポーツ記者として、登山だけにしぼらず、広い角度からの論評で、説得力を持っている。「中国の登山史」は、近く予定されている日本山岳会の北側からのエベレスト登山とちょうどタイミング良く、中国の登山界についてのくわしい分析で、現在これほどまとまった論文はほかに見当たらない。

よく、新聞記者は足で書く、といわれるが、山の記事は足だけでは書けない。その前にまず自分で十分資料をととのえ、研究し、頭にたたきこんだ上でなければいけない。全平さんの記事は、いずれもそういった前提の上になり立っているもので、それだけに正確であり、本書は後世に残る山の書物といえる。

〔山崎安治〕

北大山岳部五十周年記念誌

北大山の会 朝比奈英三編 A5判
四五七ページ 写真二七葉(モノクロ)
昭和五十四年一月 北大山の
会刊 非売品

一読して「夢」を思い、再読して「史」を垣間見、三読して「異」を感じた誌であった。

思うに、北大山岳部とは何と地の利に恵れたクラブであつたらうか。未知性と原始に富んだ峯の連なる北の山並で、彼らは遺憾なくパイオニアワークを発揮し続けてきた。さらに、北海道という本州からある程度の距離を置いている地は、独自の山登りを行なう上で幸いしていたと思うのは、評者の一人よがりであらうか。

目指す対象が未知であればあるほど、登る者の内に自ら「夢」が育くまれていく。未知性、独自性、夢、それらは北大山岳部にあつては三位一体であつたように思える。

「夢」のない山登りなんて気の抜けたビルのようなものだ。この誌の行間からは、「夢」イコール「山に登るおもしろさ」が滲み出ている。

「史」、この誌の第一に意図する所は、言うまでもなくここにあらう。北大山岳部というコミュニティの五十年の歩みを垣間見、評者にはそれが「陶冶と創造の場」の形成にあつたように思えるのである。

この誌には北大山岳部に育つた者達の山登りが生き生きと蘇っている。五十年の歩みをまとめることにより、編者は単に史料を提示するに留めるのではなく、もっと広く山登りという行為そのものに対し、現代の、未知のそれらを問うているのだと思う。

「異」を感じたというのは、評者の所属する早大山岳部とのコントラストを感じたという意である。北大のホームグラウンドとも言うべき日高山脈の中に、奇しくも北大と早大が同じく目指した山がある。ペラガリ岳がそれである。この山への登り方により両者の差異が鮮やかに浮き彫りにされる。

北大は、昭和十五年一月、ベテガリの頂きを目指した部員十名中八名がコイカクシュサツナイの渓谷に於いて雪崩に遭遇し、若き命を失なつた一大事故を乗り越え、昭和十八年一月、渡辺良一、今村昌耕、佐藤弘、荘田幹夫、上杉寿彦の五氏の少人数精鋭が、イグルーによるラッシュユタクティックをもってペテガリ岳の厳冬期初登頂に成功する。

そして早大は、昭和二十三年一月、小島六郎監督のもと村木潤次郎をリーダーとし、大がかりなそしてオーソドックスな極

地法によって、ペテガリの東側に派生する長大な東尾根を辿り、厳冬期の第二登を果したのである。

北大はこの早大の第二登をどのようにとらえていたのか。それを本誌に掲載されている神谷正明氏の「直登沢へ」から見る

と、
「この戦後の日高山脈の幕あけにふさわしい記録に対して、『スキーを駆使して自由に沢を歩き、小人数のスピーディーな登山を得意とした北大山岳部の行き方』とはただ『異質なものの』(北大山の会編『日高山脈』一九七〇年、茗溪堂)としてとらえているだけで、そこから何物も汲み取ってはいない」として

とされるされている。
ラッシュユタクティックと極地法、山登りに於ける集団と個人、そして合宿山行と個人山行の関係を考える上で、この両者のペテガリ岳は非常に興味深い素材になろう。その様なことを、この誌を読んで感じた。

評者は現在、早大山岳部六十周年記念『リュックサクク』第十二号の編集に携わっているが、この誌は非常に意義ある示唆を与えてくれた。特に「北大山岳部年表」にはただただ、編者の労作に頭の下がる思いだった。

そしてまた、「キンヤン・キッシュユ北峯に全員初登頂」という北大山岳部の快挙を報じる新聞に接し、さらに輝かしい将来の発展を信じてやまないものである。

最後に、限定版非売品のため書店に巡回する機会も少ないことを考え、以下にその目次を記しておきたいと思う。

- * 巻頭の辞
- * 北海道におけるスキー登山の発達……伊藤秀五郎
- * 恵迪寮旅行部の思い出……田口鎮雄
- * 山岳部創立のころの回想……山口健児
- * 山岳部創立前後の札幌近郊の登山……坂本直行
- * 冬の石狩岳……伊藤秀五郎・和辻広樹
- * 幌尻岳スキー登山……須藤寛之助
- * 幌尻岳・イドンナップ岳・カムイエクウチカウシ山……中野征紀・相川修
- * 一月の石狩連峯……徳永正雄
- * 忠別川溯行……石橋恭一郎
- * さすらいの日高……山口淳一
- * 大雪山十日の物語り……矢野実
- * 座談会 北大山岳部五十年の歩み
- * 冬のペテガリ岳……林和夫
- * 冬期十勝岳・大雪山縦走……木崎甲子郎
- * 直登沢へ……神谷正明
- * 北大山岳部とヒマラヤ……渡辺興亜
- * マッキンレー……越前谷幸平
- * 現役たちの山……伏島信治
- * コロンビア・アイズフィールドの山——五十周年記念登山……木村俊郎
- * 北大山岳部における登山合宿

図 書 紹 介

- * 戦前の合宿……朝比奈英三
- * 戦時中の合宿……山田真弓
- * 戦後数年間の合宿……鮫島惇一郎
- * 昭和三十年前後の合宿……西信博
- * 昭和三十四～四十年頃の合宿……鶴巻大陸
- * 昭和四十年以後の合宿……高橋一穂
- * 遭難小史——北大山岳部における……橋本誠二・橋本正人・小林年・神谷晴夫
- * 山の歌……渡辺良一
- * ヘルヴェチア・ヒュッテの二十五年……山崎春雄
- * ヘルヴェチア・ヒュッテ建設おぼえ書き……アーノルド・グララー
- * 芦別岳北尾根の池……鈴木限三
- * 山好きの弁……奥村敬次郎
- * 男沢先生と南札内分教場……有馬純
- * 知床の木下さん……三角亨
- * 豊似川の大庭さん……松村雄
- * 冬山合宿中の思い出……大飼哲夫
- * 冬期登山のはじめ……加納一郎
- * 北大山岳部と私……原田準平
- * 創立夜明け前の思い出……渡辺千尚
- * 小屋のピッケル……原忠平
- * 熊……山県浩
- * 部と私と……佐々保雄
- * グブラーさんと私……金光正次
- * 北大山岳部の雰囲気……豊田春満
- * 五十年の追憶……安田一次

- * 峠・山・氷河……東晃
- * 日高で……鮫島惇一郎
- * わがベース・キャンブの魅力……佐伯富男
- * ボケボケ人生……西村豪
- * ヒマラヤの犬たち……伏見硯二
- * 写真・スケッチ説明
- * 北大山岳部年表 一九二六—一九七六

〔竹中 昇〕

世界山岳地図集成

カラコルム・ヒンズークシュ編

吉沢一郎他編 三七センチ×二六センチ
 本文三四二頁 索引等八頁 うち
 地図は全体四四 古地図二(一頁)部
 分四二三 一九七八年十二月 学習研
 究社刊 定価二一、〇〇〇円

学研が、日本山岳地図集成二冊に続いて出版を始めた、世界山岳地図集成のヒマラヤ編に続く第二編が、このカラコルム・ヒンズークシュ編である。

監修に吉沢一郎氏、編集委員にはその吉沢氏のほか、諏訪多栄蔵、高木泰夫、宮森常雄、田村俊介の四氏があたり、執筆陣には、この委員に加えて、さらに望月達夫氏、雁部貞夫氏、沖

允人氏など総勢四十六名の有力メンバーを日本全国からよすがった豪華なものだ。これらの各氏は日本の山岳界の優れたリーダー達であり、筆の立つ人たちがりであるうえ、対象山城に対してはその登山活動を推進し、研究をとりまとめる日本の中心機関であり母胎であった「カラコルム・ヒンズークシユ会議」の主メンバーでもあった。その会議が先般解散したことを考えると、この書は、その会議が岳界に残した記念碑的書籍であるともいえよう。

本の内容は、地図と写真そして文章の組み合わせであり、この山城まで行くと遠征に出かける登山隊に目的地的のくわしい情報を提供すること、その遠征をより有意義で収穫の多いものにするよう、この地方の自然と文化についてもくわしい解説がある。本の題名にもなっている、地図の集成は、本には縮尺が示してないが約十八万分之一の部分図とその索引ともなる全体図としてまとめている。くわしいことは判らないが、それぞれに、関連諸国の公式、非公式の基本図や、外国探検隊、登山隊の作った地図、日本隊の作った資料や調査したデータをもとにして集成したものである。

この地域を概観するためにも、あるいはこの地に登山を行うためにも、今後、この書は、まずひととき検討すべき重要な書としての地位を獲得するにちがいない。

登山史、探検史は、地域ごとの概観のほか、それぞれの山ご

とのくわしいものもあり、外国隊の古典的探査の記録図のピアフォー氷河やバルトロ氷河の図も、原色で縮小図として掲載してある。それにもまして、美しい山々の自然景観や、民族の文化景観の写真がとりそろえられていて、眼で見る地誌、美しい写真集としても価値がある。いずれにせよ、この山城に関して、世界でも最もくわしいといえる人達の作った本であるから、その解説や地図の内容には相当の信頼を寄せていいはずであり、評者などが言をはさむ余地などどこにも残っていない。ただ評者も、地図作りについてはすこしばかり経験があるもので、その立場から地図の内容というよりはむしろ体裁について気のついたことを、すこしばかり記しておくことにする。

●縮尺

全体図は、全城が二百万分之一、地方図が百五十万分之一と縮尺の表示があるが、集成図の主体をなす部分図は、二十三面とも縮尺の表示がない。そこで各図に示してあるバー・スケールの十六キロを物指で測ってみた。最大のものが八八・四ミリ、最小が八七・九ミリで、八八・〇が十面あったところを見ると、製版カメラで原図を縮小するときに、この十六キロを八八ミリにセットしたものと思われる。もっと大きい縮尺だった原図を、版面の大きさに合わせていちばん大きいものを採用したためであろうが、縮尺を計算すると十八万八千八百八十分一となる。この部分図の二十三面こそこの本のメインだとすると、そ

の縮尺はきちんと二十万分一あたりにして、表題にそれを表示すべきであった。すくなくとも十八万分一にすることができたはずである。

また、経度・緯度を示す線の長さ、地球の緯度ごとの平行圏および子午線の弧長からも計算してみたが、最大十八万分一、最小十九万分一となった。また、全体図（二百万分一）で同様なことをやってみると、東側で縮尺が大きく西側が小さい（二度につきマイナス一・三、プラス〇・三ミリ）ようすが測定され、正しく製図されていたとしたら、製版カメラのフィルム面と図面が正しく平行になつていなかったと推定される。

●位置

地図の記録性の主対象は、地点の水平位置にある。そこで、いくつかの山岳について、その図上位置を周囲の経緯線から読みとってみた。結果は第一表に示したとおりである。図上ブラスマイナス〇・二ミリは許容誤差、まあ、〇・五ミリまでは紙の伸縮と印刷技術からやむを得ないかもしれない。その関係も合わせて示した。ただこの場合に、後にのべる文位が不適切で、計測をまちがえたらしいものも出たのは注意すべきである。

●文位

地名や説明の文字を総称して注記と言うが、その注記の対象物との関係位置を文位と言う。これが正しくなされないと、そ

の文字が地図上のどの地点、どの地域、どの線状物体を指し示しているか判らなかつたり、誤解されたりして、正しい情報伝達が行われないことになる。

日本の五万分一や二万五千分一の標高数値は、三角点や標高点記号の真横、左や右側に接近して水平字列で示され、山名はその上方に字列の中央部が山の中央部の上にくるようにおかれるのが原則である。米軍図式（AMS マップ）では、数字列の角のところを地点に沿えるやりかた、言いかえると、地点に水平線を引いて、その線に字列の上縁が下縁を沿わせるやり方をとっている。こうした表現の約束は、それぞれの図式できちんと定めておき、そのことを表示しておけばよいのである。

地点の位置でものべたように、ラカポシの場合は、ラカポシ、ハラモシユ山群の図では、ラカポシの字がPK二七の字の真上にあり、七七八八の字も、その三角印の左側に近接して示してあり、フンザの図では、七七八八の標高だけがPK二七の三角の西隣の三角印の下方に示してあり、経度で一分の差をもたらしている。他の資料で知っている人はともかく、初めて接する人はどちらが正しいか迷うはずである。わずかな数の抽出チェックでこういったものが出たことは、注意すべき点である。

●地形表現など

全体図はシェーディングだけ、部分図は、尾根を太い線で示

第一表 山頂位置の読みとり表

山名	K 2		ガッシャブルム I		ディステイグル・サール	
標高	8,611 m (28,250 ft)		8,068 m (26,470 ft)		7,885 m (25,868 ft)	
位置	緯度 35°52'55"	経度 76°30'51"	緯度 35°43'30"	経度 76°41'48"	緯度 36°19'35"	経度 75°11'20"
200 万分 1 全体図	35°53'18" (+23")	76°30'08" (-43")	35°43'43" (+13")	76°41'24" (-24")	36°19'29" (-6")	75°11'20" (±0)
150 万分 1 地方図	本の折目で計測不能		本の折目で計測不能		36°19'21" (-14")	75°11'16" (-4")
約 18 万分 1 部分図	35°51'55" (-1')	76°30'54" (+3")	35°42'19" (-1'11")	76°41'11" (-37")	36°19'42" (+7")	75°11'12" (-8")

山名	ラカボシ		コヨ・ゾム		ナンガ・バルバット	
標高	7,788 m (25,550 ft)		6,872 m		8,125 m (26,660 ft)	
位置	緯度 36°08'39"	経度 74°31'26"	緯度 不	経度 明	緯度 35°14'21"	経度 74°35'21"
200 万分 1 全体図	36°08'43" (+4")	74°29'28" (-1'58")	36°43'37"	73°13'55"	35°13'51" (-30")	74°35'04" (-17")
150 万分 1 地方図	36°08'36" (-3")	74°29'20" (-8")	36°44'27"	73°14'08"	35°13'49" (-31")	74°34'51" (-30")
約 18 万分 1 部分図	ラカボシ, ハラモシュ 山群 36°08'40" (-3") 74°29'19" (-9") フンザ 36°01'11" (-6'54") 74°28'29" (-1'01")		36°43'38"	73°14'43"	35°15'06" (+45")	74°34'22" (-59")

弧長 1' と 30" の縮尺化した長さ

平行圈	1/200万	1/150万	1/18万	
1'	1,521.7 m	0.76 mm	1.01 mm	8.45 mm
30"	760.8 m	0.38 mm	0.51 mm	4.23 mm

子午線	1/200万	1/150万	1/18万	
1'	1,848.8 m	0.92 mm	1.23 mm	10.3 mm
30"	924.4 m	0.46 mm	0.62 mm	5.1 mm

す、いわゆるカムカルテ方式とシェーディング方式の併用であり、そのシェーディングにも、氷雪部の青と地面の茶の二色使いわけで、現地の状況を示している。意欲的ではあるが、尾根線がシェーディングの立体感を殺してしまっている。おそらくシェーディングだけでは、図にしまりが無くなるようで不安だったのだろうが、図のしまりには岩壁地の表現に意を尽すことのほうが、内容もよりくわしく豊富になることであり、良かったと思う。

せつかくの十八万分一という縮尺であるから、古地図や外国隊の地図、日本隊の資料や写真を用いて、該当する山地をできるだけくわしく表現して欲しかった。岩壁形、氷河のクレパスの分布、アイス・フォールの位置、堆石堤の形状、表面堆石の状況など、この書中に示された写真からも、詳しい地図を作ることができそうである。その結果として、部分的にすぐくわしいところと、そうでないところがまだらになって、体裁の悪

い地図になるかもしれないが、評者は、そういう地図こそ意味があると考ええる。これから行くこうとする隊が、そうしたこれまでの探検隊、登山隊の業績を踏まえて、その記録の空白部を埋めて行くことに、自分達の遠征の意義や使命感を見出すことにもなるからであり、そうした行動を通して、そうした地図がより完全なものへと前進することになれば、登山界全体にとっても嬉しいことであるからだ。

カラコルムは、カラコラムともスペルされることがあり、本書内の古地図内にもその注記が見られるのだが、いろいろ地名についての解説はあっても、この大きい名前のことはあまりにありふれた問題であるためか、その説明がどこにもみあたらないようである。この本を開いて、あるいは外国書とくらべた場合（インド測量局はカラコラムを用いている）、気にする人が多いのではないだろうか。

〔五百沢智也〕

会務報告

昭和五十三年（一九七八）七月と昭和五十四年（一九七九）六月

◇七月理事会 七月十日（月）ルーム

出席者 西堀、望月、折井、宮下、高遠、小倉、中川、橋本、大森（久）、皆川、鈴木、大森（薫）、倉知、黒石、越田、牧野内、片岡、金坂、松丸、近藤、小原

▽議事・報告

- 一、稲門カラム登山隊推薦状交付の件
- 二、支部長交代の件
- 三、ルーム休室の件
- 四、青年懇談会報告の件
- 五、山研運営・医療・学生部・自然保護・集会・山岳編集委員会報告の件

（詳細は「山」四〇〇号参照）

◇九月理事会 九月十一日（月）ルーム

出席者 西堀、望月、折井、高遠、小倉、中川、橋本、大森（久）、鈴木、黒石、田村、牧野内、嵯峨野、片岡、浜野、山崎、小原

▽議事・報告

- 一、一九五三年度UIAA総会出席代表の件
- 二、科学研究委員会設置の件
- 三、自然保護・海外連絡・図書・山研運営・高所登山・集会委員会報告の件
- 四、青年懇談会報告の件

◇十月理事会 十月十六日（月）ルーム

出席者 西堀、望月、折井、宮下、高遠、中川、大森（久）、黒石、越田、田村、牧野内、嵯峨野、浜野、片岡、金坂、松丸、小原

▽議事・報告

- 一、秩父宮記念学術賞推薦の件
- 二、科学研究委員会発足の件
- 三、学生部ガルフルヒマラヤ登山隊一九七九の計画の件
- 四、会計状況中間報告の件
- 五、山研運営・集会・高所登山・指導・図書・会報編集・支部委員会報告の件

（詳細は「山」四〇二号参照）

◇十一月評議員会 十一月六日（月）ルーム

出席者 西堀、望月、折井、浜野、山崎、金坂、松丸、近藤、小原、大野、織内、太田、渡辺、山本、水野、中村

▽議事

- 一、名誉会員推薦の件
- 二、評議員会報告の件
- 三、山研運営・図書・山岳編集・海外連絡・高所登山・集会委員会報告の件

四、婦人・青年懇談会報告の件

(詳細は「山」四〇三号参照)

◇支部長会議 十二月二日(土) ルーム

出席者 望月、折井、大塚(北海道)、佐藤(岩手)、柴田(秋田)、後藤(山形)、伊達(宮城)、河上(福島代理)、藤島(越後)、蒲生(信濃代理)、大沢(山梨)、山本(静岡)、中世古(東海代理)、中田(富山)、松井(岐阜)、今西(関西)、野口(東九州)

▽議事

一、会務報告の件

二、支部活動報告の件

◇十二月理事会 十二月四日(月) ルーム

出席者 西堀、望月、折井、高遠、小倉、中川、橋本、大森(久)、鈴木、黒石、越田、牧野内、嵯峨野、浜野、山崎、金坂、小原

▽議事・報告

一、ヒラリー卿を囲む会開催の件

二、昭和五十四年度年次晩餐会会場の件

三、支部長会議報告の件

四、山研運営・指導・学生・図書・海外連絡・自然保護・集会・高所登山委員会報告の件

五、婦人懇談会報告の件

(詳細は「山」四〇四号参照)

◇一月理事会 一月十一日(木) ルーム

出席者 西堀、望月、折井、宮下、高遠、小倉、中川、橋本、鈴木、黒石、越田、田村、嵯峨野、片岡、浜野、金坂、松丸、小原

▽議事・報告

一、昭和五十四年度予算案作成の件

二、海外連絡・遭難対策・山研・集会委員会報告の件

三、青年・婦人懇談会報告の件

(詳細は「山」四〇五号参照)

◇二月理事会 二月五日(月) ルーム

出席者 西堀、望月、折井、宮下、高遠、小倉、中川、橋本、大森(久)、皆川、鈴木、大森(薫)、黒石、越田、田村、片岡、浜野、山崎、近藤、小原、中村

▽議事・報告

一、昭和五十四年度総会日程の件

二、新選覆刻日本の山岳名著の件

三、各委員会事業計画(案)と予算(案)の件

四、青年懇談会報告の件

五、高所登山・医療・科学研究・図書・集会・海外連絡委員会報告の件

(詳細は「山」四〇六号参照)

◇三月理事会 三月五日(月) ルーム

出席者 西堀、望月、折井、宮下、高遠、小倉、中川、橋本、大森(久)、皆川、鈴木、大森(薫)、倉知、黒石、越田、片岡、浜野、金坂、松丸、近藤、小原、中村、山崎

▽議事・報告

一、法政大学ラムジュン・ヒマール登山隊推薦状交付の件

二、昭和五十四年度事業計画(案)承認の件

三、昭和五十四年度収支予算(案)承認の件

四、青年・婦人懇談会報告の件

五、山日記編集・海外連絡・自然保護・海外連絡・科学研究・山岳編集・集会・図書委員会報告の件

報告業務

(詳細は「山一四〇七号参照」)

◇三月評議員会 三月二十三日(金) ルーム

出席者 西堀、望月、折井、浜野、山崎、金坂、近藤、小原、織内、太田、山本、松田、水野、中村

▽議事

一、昭和五十四年度役員(理事・監事)候補者推薦の件
二、総会提出議案承認の件

◇四月理事会 四月十六日(月) ルーム

出席者 西堀、望月、折井、宮下、高遠、小倉、中川、橋本、大森(欠)、皆川、大森(薫)、黒石、越田、嵯峨野、片岡、浜野、山崎、金坂、松丸、近藤

▽議事・報告

一、昭和五十三年度事業報告および収支決算、財産目録承認の件
二、監査結果報告の件
三、昭和五十四年度役員および評議員候補者の件
四、昭和五十四年度除籍の件
五、駒沢大学山岳部カラコム登山隊推薦状交付の件
六、各支部総会報告の件
七、山研運営・集會委員会報告の件
(詳細は「山一四〇八号参照」)

◇支部長会議 五月十一日(金) ルーム

出席者 西堀、望月、折井、宮下、佐藤(岩手)、松井(岐阜)、中島(福島)、藤島(越後)、大沢(山梨)、山本(静岡)、今西(関西)、中世古(東海代理)、奥原(信濃)、伊達(宮城)

▽議事

一、会務報告の件

二、支部の現状報告の件

◇昭和五十四年度通常総会 五月十一日(金) 東京都千代田区九段北

四一―二一二十五・私学会館
出席者 西堀会長以下一四六名(他委任出席一四五三名)

▽総会次第

一、会長挨拶 西堀 栄三郎
二、会務報告 宮下 秀樹
三、物故会員に対する黙祷
四、昭和五十三年度事業報告 高遠 宏
五、昭和五十三年度収支決算、財産目録報告 高遠 宏
六、監査報告 村山 雅美
(右、承認)

七、昭和五十四年度事業計画および収支予算案の件 高遠 宏

(右、原案どおり承認)

八、昭和五十四年度役員および評議員選任の件

昭和五十四年度の役員および評議員として次の各氏を選任した。
(理事および評議員の任期は二年間)

△理事▽会長西堀栄三郎、副会長折井健一、鈴木郭之、大森薫雄、
宮下秀樹、倉知 敬、中川 武、越田和男、嵯峨野宏(以上再任)、
副会長渡辺兵力、川上 隆、飯野 亨、山口節子、中村純二、小倉
厚、高橋 聡、菅沢豊藏、岡沢祐吉、高本信子、中島信一(以上新
任)

△監事▽片岡 博(再任)、小原勝郎(新任)

△評議員▽大野俊夫、山崎安治、織内信彦、太田 敬、金坂一郎、
山本朋三郎、水野政博、近藤信行、野口秋人、伊達篤郎、小原晴子

会 務 報 告

(以上再任)、田口二郎、佐藤テル、望月達夫、朝比奈英三、木下是雄、村木潤次郎、大塚博美、河野幾雄、高遠 宏(以上新任)

九、昭和五十四年度除籍の件
十、議事録署名人選任の件

(詳細は「山」四〇八号参照)

◇五月理事会 五月十四日(月) ルーム

出席者 西堀、折井、渡辺、宮下、中島、飯野、中川、高木、菅沢、岡沢、小倉、鈴木、山口、越田、川上、嵯峨野、高橋、中村、片岡、山崎、金坂、小原

▽議事・報告
一、理事の任務分担の件

総務(宮下、中島)、財務(飯野)、集会・支部(中川)、山研(高木)、学生部(菅沢)、会報(岡沢)、山日記(小倉)、海外・自然保護(鈴木)、医療(大森)、山岳編集(倉知)、婦人懇談会(山口)、図書・書評(越田)、高所登山・遭難対策(川上)、指導(嵯峨野)、青年懇談会(高橋)、科学研究(中村)

二、常務理事選任の件

宮下秀樹、中島信一、飯野 亨、中川 武の四氏に決定。

三、常任評議員の件

山崎安治、金坂一郎、小原晴子、村木潤次郎、大塚博美の五氏に総会後の評議員会で決定。

四、日中交流登山の件

五、自然保護・科学研究委員会報告の件

(詳細は「山」四〇九号参照)

◇六月理事会 六月十一日(月) ルーム

出席者 折井、渡辺、宮下、中島、飯野、高木、菅沢、岡沢、大森

山口、越田、川上、高橋、嵯峨野、中村、金坂、小原、村木

▽議事・報告

一、信州大学ガネッシュ・ヒマールIII峰登山隊推薦状交付の件
二、学生部キシネトワール・ヒマラヤ登山隊の派遣に関する件
三、映画「穂高讃歌」購入の件
四、故嘉門次氏写真寄贈の件

五、自然保護・山研・医療・高所登山・科学研究・図書委員会報告の件
六、婦人・青年懇談会報告の件

(詳細は「山」四一〇号参照)

◇小集会

▽第三七三回 昭和五十三年九月十九日(火) ルーム

山の歌教室

(詳細は「山」四〇二号参照)

▽第三七四回 昭和五十四年十月二十八日(土) ルーム

第二回ノミの市

(詳細は「山」四〇二号参照)

▽第三七五回 昭和五十三年十一月十九日(日) 甲州高尾山

親睦山行

(詳細は「山」四〇四号参照)

▽第三七六回 昭和五十三年十二月十七日(日) 東京・教学院

もちつき大会

▽第三七七回 昭和五十四年一月十三日(土) 岩岳スキー場

スキー親睦会

(詳細は「山」四〇六号参照)

▽三七八回 昭和五十四年三月二十四日(土) ルーム
新入会員オリエンテーション

▽三七九回 昭和五十四年五月十九日～二十日(土～日) 御在所岳
藤内壁

現地小集会(東海支部と共催)

(詳細は「山」四〇九号参照)

▽三八〇回 昭和五十四年五月二十三日(水) ルーム

講演会(ランド・ジョラス北壁他) 講師 長谷川恒雄氏

▽三八一回 昭和五十四年六月五日(火) ルーム

山菜勉強会 講師 片岡 博氏、高波隆男氏

▽三八二回 昭和五十四年六月九日～十日(土～日) 土樽国鉄山の
家、平標山

第三回山菜山行

◇主なる行事および集会

▽一九七八年日米民間環境会議

昭和五十四年七月二十四日～二十八日(月～金) 横浜市

「山」四〇〇号参照

▽自然保護上高地集会

昭和五十三年九月九日～十日(土～日) 上高地

「山」四〇一号参照

▽福島支部創立三十周年記念現地小集会

昭和五十三年十月八日～十日(日～火) 新野地温泉、東吾妻山、ぬ
る湯

「山」四〇二号参照

▽第十一回山岳図書交換会

昭和五十三年十月二十一日(土) ルーム

「山」四〇三号参照

▽高所登山研究会(海外登山の現状と将来)

昭和五十三年十一月十一日(土) 日本海運クラブ

▽第二十一回もみじ会(静岡支部主催)

昭和五十三年十一月十一日～十二日(土～日) 秋葉山秋葉寺

▽昭和五十三年・年次晩餐会

昭和五十三年十二月二日(土) 京王プラザホテル 出席者二七六名

「山」四〇三号参照

▽この一本展

昭和五十三年十二月二日(土) 京王プラザホテル

▽第二十三回登山技術講演会(山スキー技術)

昭和五十四年二月九日～十二日(金～火) 吾妻運峯

▽丹沢集会(青年懇談会主催)

昭和五十四年二月十七日～十八日(土～日) 西丹沢・寄木山荘

「山」四〇八号参照

▽山岳史懇談会(図書委員会主催)

昭和五十四年二月十五日(木) ルーム

女性の登山について 講師・佐藤テル氏、山下滋子氏

▽山岳図書を語る夕(図書委員会主催)

昭和五十四年三月八日(木) ルーム

フランスの山の本について 講師・近藤 等氏

▽科学研究委員会第一回講演会

昭和五十四年三月十九日(月) ルーム

北極圏極旅行における水晶の採集・観測

登山と科学活動 講師 植村直己氏
講師 樋口敬二氏

「山」四〇七号参照

▽第二十四回登山技術講習会(指導委員会主催)

昭和五十四年五月十八日～二十一日(金～月) 谷川岳成蹊大学虹芝寮、芝倉沢

▽第十七回木暮理太郎碑前懇親会

昭和五十四年五月十九日～二十日(土～日) 金山平

▽第三十三回ウエストン祭

昭和五十四年六月二日～三日 上高地

▽科学研究委員会第二回講演会(集委会委員と共催)

昭和五十四年六月十二日(火) 私学会館

講師 今西錦司氏

▽科学研究委員会第三回講演会

昭和五十四年六月二十九日(金)

高山植物―その特徴と背景

講師 小野幹雄氏

◇海外登山界との交流

▽本年度は三十カ国六十団体と情報および機関誌の交換をおこなった。

▽UIAA(国際アルピニスト連合)一九七八年度に丹部節雄評議員

が出席(昭和五十三年十月十九日、アテネ市)

▽オーストリア山岳クラブ一〇〇年記念祭に福田宏年会員が出席(昭和五十三年十二月六日～七日、ウィーン市)

▽ドイツ山岳連盟より交流登山のため、若手メンバーが来日、日光・

北アルプス・富士山等で交歓が行なわれ、昭和五十三年八月十四日

にはルームで交歓会を開催(青年懇談会・海外連絡委員会共催)

▽ヒラリー卿を囲む会を昭和五十三年十二月十九日ルームで開催

「山」四〇四号参照

▽日中合同登山推進のため、中国関係者と緊密な連絡と情報交換を行

なった。

一九七九年度役員

会 長 西堀栄三郎

副会 長 折井健一、渡辺兵力

常務理事 宮下秀樹、中島信一、飯野 享、中川 武

理 事 川上 隆、山口節子、中村純二、鈴木郭之、大森薫雄、倉

知敬、小倉 厚、越田和男、高橋 聡、嵯峨野 宏、菅沢

豊蔵、岡沢祐吉、高本信子

監 事 片岡 博、小原勝郎

常任評議員 山崎安治、金坂一郎、村木潤次郎、大塚博美、小原晴子

評 議 員 大野俊夫、田口二郎、佐藤テル、望月達夫、織内信彦、

太田 敬、朝日奈英三、木下是雄、山本朋三郎、水野政

博、近藤信行、野口秋人、河野幾雄、伊達篤郎、高遠 宏

支 部 長 大塚 武（北海道）、佐藤敏彦（岩手）、柴田均二（秋田）、

村上勝太郎（山形）、伊達篤郎（宮城）、中島正夫（福島）、
齋藤平七（越後）、奥原教永（信濃）、大沢伊三郎（山梨）、
山本朋三郎（静岡）、尾上 昇（東海）、松井辰弥（岐阜）、
中田清兵衛（富山）、増江俊三（石川）、今西寿雄（関西）、
織田 収（山陰）、末松大助（福岡）、野口秋人（東九州）、
西沢健一（熊本）

SANGAKU

The Journal of the Japanese Alpine Club

Vol. LXXIV 1979

Issued in December 1979

Contents

In English (also in Japanese, pages in parenthesis)

- The Ascent of Dhaulagiri I—from the South East Ridge (Autumn, 1978)
.....Kuniaki Yagihara... 1(33)
First Ascent of Langtang Lirung, 1978Akira Ban... 8(42)
South Face of Baintha Brakk, 1978Kimio Itokawa... 9(85)
Nun, East Ridge, 1978
.....Meiji Gakuin University Mountaineering Club...11(105)
20 days on Mt. Nun, West Ridge, 1978.....Masato Oki...12(98)
The Way to the Rimo Range, 1978.....Nobuhiko Osawa...13(129)
Annapurna South, Southwest Ridge, 1978.....Teruyuki Kouno...15(112)
Tilitso Himal, 1979.....Yoshimi Yakushi...16

In Japanese

- Scientific Research in the Solo Dog-sledge-trip to North Pol and
Crossing Greenland
..... K. Fushimi, N. Uemura, K. Higuchi, K. Ikegami.....(1)
Dhaulagiri I—First Ascent of South Pillar.....Takashi Amamiya.....(22)
Winter Climb of Kurobe Okugane-yama, West WallHikaru Torii.....(51)
History of Club's Local Sections
Tokai Section.....Ryuji Nakaseko.....(60)
Shizuoka SectionTomosaburo Yamamoto.....(70)
Higashi-Kyushu SectionHidetoku Umeki.....(77)
Toyama Section.....Seibeï Nakata.....(82)
Haramosh, North WallShowa Alpine Club.....(92)
Manaslu, climbing by the 2-men party.....Seiji Shimizu.....(117)
Ascent of Ghent IIHarutoshi Kobayashi.....(122)
Winter Traverse of Hidaka Mountains
.....Nihon University Mountaineering Club.....(138)
The Second Ascent of Mt. Tsurugi—on Magoshiro Yoshida
.....Masao Fujihira.....(145)
Pioneer of Mt. Hodaka—Masao UdonoTakeshi Kamijo.....(154)
Commemorative Gathering of 20th year after First Ascent of
Manaslu.....Iwao Naruse.....(164)
Climbing Records on ManasluYuichi Matsuda.....(166)
In Memoriam(169)
Book Reviews(200)
Club Notes: July 1978—June 1979(218)

Editorial Staff

Yasuji Yamazaki, Ichiro Kanosaka, Nobuyuki Kondo,
Jusetsu Setsuda, Chizuko Ikeda, Noboru Takenaka,
Kei Kurachi, Toshiyuki Fujimoto

The Japanese Alpine Club

(Founded 1905)

Address : Sun-View Heights, 5-4 Yonban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo

Office Bearers and Committee

1979 (May 1979-April 1980)

President : Eizaburo Nishibori

Vice-Presidents : Ken'ichi Orii, Hyoriki Watanabe

Honorary Secretaries : Hideki Miyashita, Shin'ichi
Nakajima, Takeshi Nakagawa

Honorary Treasurer : Tohru Iino

Auditors : Hiroshi Kataoka, Katsuro Obara

Committee

Hideki Miyashita	Shin'ichi Nakajima	Tohru Iino
Takeshi Nakagawa	Nobuko Takamoto	Toyozo Sugawara
Yukichi Okazawa	Atsushi Ogura	Hiroyuki Suzuki
Nobuo Omori	Kei Kurachi	Setsuko Yamaguchi
Kazuo Koshida	Takashi Kawakami	Hiroshi Sagano
Satoshi Takahashi	Junji Nakamura	

Council

Yasuji Yamazaki	Ichiro Kanesaka	Haruko Obara
Junjiro Muraki	Hiromi Ohtsuka	Nobuhiko Oriuchi
Takashi Ohta	Tomosaburo Yamamoto	Masahiro Mizuno
Nobuyuki Kondo	Akito Noguchi	Tokuro Date
Jiro Taguchi	Teru Sato	Tatsuo Mochizuki
Eizo Asahina	Koreo Kinoshita	Ikuo Kohno
Hiroshi Takato		

Chairmen of Local Sections

<i>Hokkaido</i> : Takeshi Ohtsuka	<i>Iwate</i> : Toshihiko Sato
<i>Yamagata</i> : Katsutarō Murakami	<i>Akita</i> : Kinji Shibata
<i>Fukushima</i> : Masao Nakajima	<i>Miyagi</i> : Tokuro Date
<i>Shinano</i> : Norinaga Okuhara	<i>Echigo</i> : Heishichi Saito
<i>Shizuoka</i> : Tomosaburo Yamamoto	<i>Yamanashi</i> : Isaburo Ohsawa
<i>Toyama</i> : Seibei Nakata	<i>Tokai</i> : Noboru Onoe
<i>Gifu</i> : Tatsuya Matsui	<i>Ishikawa</i> : Toshizo Masue
<i>Kwansai</i> : Toshio Imanishi	<i>Fukuoka</i> : Daisuke Suematsu
<i>San'in</i> : Osamu Oda	<i>Higashi Kyushu</i> : Akito Noguchi
<i>Kumamoto</i> : Ken'ichi Nishizawa	

The Ascent of Dhaulagiri I—from the South East Ridge (Autumn, 1978)

Kuniaki Yagihara—Translated by Alan E. Jackson & Hiroko Uchida—

Rébuffat gave us an awestruck account of what he had seen from the White Peak.

“A monstrous slope, several miles high, and without a break, something like the north face of the Matterhorn, which as you know isn’t exactly an attractive place, only this is three times as big. The best thing is just to write off the south face.”

“At least now we know where we are. What about the southeast ridge? The other day when we saw it from the East glacier, you were the most hopeful, you said...”

“I was absolutely wrong. To begin with, it’s incredibly long, it’s all very high up, and above all it’s technically very difficult: great walls and towers of ice, some rock, broken ground, gendarmes—there’s no end to it.”

(Maurice Herzog “ANNAPURNA, Premier 8000”)

Caravan

On August 10, Kogure, the deputy-leader of the expedition, together with Miyazaki and Fukasawa, left Pokhara to find a suitable site for base camp and to select a route. The following day, the rest of the expedition set out with 204 porters including three Naikes.

Our trek to the foot of Dhaulagiri proved more time-consuming than expected. Firstly a detour was necessitated because the road which followed the river flowing down from Birthanti had been washed away, and secondly, about 50 of our porters, who could no longer put up with the hard rain, ran away and two of the expedition members had to stay behind at Ghorepani and Shikha for four days and half to wait the arrival of equipment and provisions.

This second incident, in particular, affected our transport schedule to such an extent that its effect was felt for many days so that it was very nearly at the end of August that the final load arrived at Base Camp.

In all, it took 7 days for the advance party to reach Base Camp and 8 days

for the rest of the expedition.

The place chosen for Base Camp was at Banya Karka, a wide grassland. To get there, a steep route has to be followed from Chatan, a village with several houses on Kali Gandaki (Incidentally a monument stands in Chatan commemorating the American Expedition to Dhaulagiri in 1969 which 6 climbers lost their lives).

The area around Base Camp seemed a favorite grazing ground for yak and sheep and many of the shepherd boys who had much time to kill found our camp a convenient play ground. They spent many hours playing cards for small stakes with our cooks.

Route Construction

For the purpose of opening a route to the summit of Dhaulagiri the expedition party was divided into five teams, each consisting of three members. Each of the five teams would take turns in constructing the route and on August 17 the first of these teams consisting of Kogure, Miyazaki and Fukasawa arrived at base camp. The following day, the 18th, this advance party began its task.

Their first objective was to reach the subsidiary ridge which led up to the main South East Ridge. It seemed that this could be accomplished in either of two ways. The first possible route led to the East Dhaulagiri glacier whilst the second led to the ravine on this side of the subsidiary ridge.

They tested each possibility in turn and after discussing the conditions and problems of each route at a meeting held on the 25th, they decided on the one leading across the East Dhaulagiri glacier.

On August 26 Camp 1 was established on the glacier near the base of the subsidiary ridge at a height of 4,850 meters. It hadn't been too difficult to select a camp site since they had traversed the glacier the day before whilst plotting the route and hence the area had already been extensively surveyed. A second team consisting of Ishikawa, Ube and Kaneko now took over the lead and began to climb the massive, rocky subsidiary ridge. Other than Ube who had experienced altitudes of up to 8,000 meters the previous year on K 2, this second team was not familiar with such great heights. Both Ishikawa and Kaneko were, in fact, making their first visit to the Himalayas. Nevertheless, they managed to set 10½ ropes that day, each 50 meters in length and reached a height of 5,450 meters close to a needle-like stack of rock.

The next day, they climbed around the needle, on its right hand side, and

searched for a possible site for Camp 2. The leading group reported that no space could be found for a camp. This news did not, however, worry us as we were sure that it would always be possible to break the rock and flatten a small area of the ridge no matter how hard the rock might be.

For two days five or six members worked hard clearing a site for the camp, rolling huge boulders, which often looked immovable, into the valley on both sides of the ridge and breaking rocks protected by a hard layer of transparent ice. Several climbers suffered severe headaches from working so hard at such an altitude but were encouraged to persevere as such activity would speed up their adaptation to the altitude. Working with pick axes and ice hammers, little time was lost in clearing a site for the tents and on August 30 Camp 2 was finally established at a height of 5,450 meters.

Down at Camp 1 one of the members found adaptation to the height impossible and was forced to go down to Kalapani accompanied by the expedition leader.

Each day rain fell providing a limitless supply of water collected on the fly sheets. With increasing height, however, the rain changed to sleet and eventually, at 5,300 meters, to snow.

Fukasawa, Mashimo and Tani took over the route from Camp 2 and found it very difficult to follow along the ridge. Though it was hard going they eventually made it to the subsidiary ridge after traversing the top of a snow wall. From there the route to the main South East Ridge was comparatively easy though the ridge itself presented many difficulties. This part of the South East Ridge leading up to what would become Camp 4 came to be called "The Back of Gojira", a name which well deserved for the huge rocky ridge carried many rock towers (gendarmes) along its back (Gojira is a fictitious monster with a jagged back).

A site for Camp 3 was selected and work began to build a series of terraces. As at Camp 2, much arduous construction work was required particularly as the rock was again protected by hard clear ice. Camp 3 was eventually established on September 9 at a height of 5,850 meters, providing us with a base from which the difficult rocky belt on the ridge could be attacked.

It proved impossible to traverse the base of "The Back of Gojira" and we were forced to go down same way before climbing directly to the top of the rocky belt. With the aid of wire ladders, fixed at four places on the side of the ridge, we reached the top and then made out way to the site for Camp 4 by

crawling beneath an overhang and climbing along the top of a snow wall.

From this point the summit came into view for the first time and the upper half of the ridge could be seen at close quarters. It took sixteen days so far since we started to set up Camp 1.

On September 21 Camp 4 was set up at 6,450 meters.

As altitude increased more and more members began to have trouble with adaptation and it became necessary to reorganize the teams to strengthen each team and to share more evenly the workload of plotting the route. A three man team consisting of Akuzawa, Fukasawa and Kobayashi then took over the lead, climbed up to Camp 4. On September 23 communication was lost with this team, indeed they had not reported in since 7:00 a.m. that morning. Moreover no report had yet come in from a second team led by Ishikawa who had been climbing up to Camp 4 in order to relieve Akuzawa's team. Though we hoped that a radio failure accounted for the lack of communication we could not help worrying.

The following morning our worst fears were confirmed. A black speck was seen moving down from Camp 4 towards Base Camp and soon Ishikawa's voice came over the radio. Apparently Akuzawa's team had not returned to Camp 4 the evening before and in searching that morning Ishikawa had come across a cut rope that had fallen into the valley and was partially obscured by deep snow. Even at the end of the rope no sign of the three missing members could be seen and it was later assumed that an avalanche had swept them from the mountain.

In spite of this tragic development we thought that further efforts to find the bodies would be futile and determined that the attack on the summit should be continued.

Later, the expedition leader Tanaka, who had returned from Kathmandu by helicopter, made an aerial search of the south face but could find no trace of his missing companions.

Climbing was continued and despite anxious moments when they climbed through the area where the accident had occurred a temporary Camp 5 was set up at 6,950 meters on October 7. Camp 5 was situated, for once, in a wide open space from where the South East Ridge rose in a long thin line to the summit. Its approach from Camp 4 was, however, particularly difficult and necessitated a climb over a wicked knife-edged ridge.

On October 14 Camp 6 was set up at 7,450 meters and Yagihara, Yamada

and Suzuki arrived to form a new advance party. From that day on members of the advance team began to use oxygen whilst sleeping but fortunately the section of the route between Camp 6 and 7 proved to be the easiest on the entire climb and only the altitude remained as a problem.

On the 17th a site was chosen for Camp 7 and the following day the camp was established at 7,800 meters. This was to be the last camp before the summit and after the advance team of Miyazaki, Ube and Tani had arrived and fixed a further few ropes everything was ready for the final attack.

The Attack on the Summit and accident

Having endured many hardships and sad experiences the day finally came to attack the summit. Miyazaki, Ube and Tani got up early, around 3 a.m., and began to prepare breakfast. They tried to get the gas cooker going but were unable to do so. It seemed that the gas cylinder was far too cold. In fact the temperature was -30°C . The need to warm up the cylinder made breakfast a time consuming business and it was only at 7:00 a.m. that our meal was finished and we were able to leave camp.

The rope up from Camp 7, that we'd set the previous day, was buried far under the snow which lay knee-deep and even waist-deep in places. We ploughed on and eventually reached the North East Ridge which led upwards to the summit, a route previously unclimbed.

Ube wrote in his diary :

"Windy but fine weather. Needed to plough through the snow only now and then. Our pace quickened. Finished the first cylinder of oxygen and felt lighter by as much as the weight of the cylinder. Avoided the steep south face of the ridge and traversed its north side. Every time a peak appeared we thought it was the summit. How many peaks had we passed I wonder? Suddenly we could see nothing before us. It was the summit. We were there, on the summit".

The summit had been reached at 12:35 p.m. on October 19.

We performed a short ceremony and then came down carrying some stones in our rucksacks that we had picked from amongst the many bare rocks that littered the mountain top.

Next day, on the 20th, Yagihara, Yamada and Suzuki who were in the second group and two Sherpas, Nawan Yonden arrived at Camp 7 and prepared themselves for the next ascent. Meanwhile, news arrived that Kogure, who had left Camp 4 early that morning carrying provisions, had not yet arrived at Camp

5 and it was already afternoon.

At 2 : 30 p.m. Ishikawa in Camp 5 sent down Abe and Kaneko to camp to search for Kogure.

Back at Camp 7, with the time at 4 p.m. Yagihara came to the conclusion that Kogure must have had a serious accident as no reports of his arrival at either Camp 4 or Camp 5 had yet been received. The decision was taken to stop the second attack on the summit planned for the next day and Yagihara made his way down to Camp 6 alone, leaving his companions at Camp 7.

In Camp 6 he found the two tents abandoned, the two Sherpas who were supposed to be stationed there having already left.

At 4 : 30 p.m. Abe and Kaneko found Kogure near Camp 4. He was hanging from a rope fixed to the south face of the ridge. They called to him but no answer came. He was dead. They continued down to Camp 4 and reported the news to the other camps.

Apparently, with 9 expedition members and 4 Sherpas in camps above Camp 5, Kogure had been left alone at Camp 4 with two other Sherpas and had decided to carry up provisions to Camp 5 by himself as both Sherpas felt unwell. He had set off alone, had presumable fall and died.

On October 21 with the sadness of Kogure's death weighing heavily upon them, Yamada, Suzuki and Nawan Yonden continued in their turn, ploughing upwards through the snow.

At the top they buried the pictures of Akuzawa, Fukasawa and Kobayashi who only a month before had been swept away from the south face of the ridge down into the valley far below. Soon afterwards with mixed feelings of happiness, sadness and emptiness they left the summit and began to descend.

While Yamada and Suzuki were attacking the summit the other 7 expedition members were retrieving Kogure's body and had brought it to rest at Camp 4. The next day, the 22nd, Kogure was buried close to the Camp.

As a result of this second fatal accident, the third attack on the summit was abandoned and the withdrawal from the upper camps was begun.

Conclusion

It was regrettable that 4 people lost their lives during this expedition. We were confident of the thoroughness with which we had planned and prepared particularly as deep consideration was taken of the mistakes made on the previous expedition, and most members of our party had previous Himalayan experience.

Looking back we are pleased to acknowledge that our success owed much to the brave efforts of those who died and it is to their memory that we will devote ourselves in future.

We would like to extend our thanks to the Nagai Mountaineering Association and their leader Mr. Kensaku Takeda who were attempting a climb on Tukuhe Peak at the time. They gave us as many as 100 snow bars which proved invaluable particularly as many of our own were lost in the fall which killed three of our members. Without their help we would have encountered many more problems and we would like to express our appreciation of their kindness and generosity.

Summary and Outline

name of the team : Gunma Himalaya Expedition Team

sponsor : Gunma Mountaineering Federation

period of the expedition : From August to November, 1978

objective : The ascent of Dhaulagiri I (8,167 m) from the South East Ridge

expedition members :

General Director : Kazuo Hamana (75, did not actually join the expedition team in Nepal), Leader : Seiko Tanaka (43), Deputy leader : Katsuyoshi Kogure (35), Group leaders : Hiroshi Akuzawa (35), Shinobu Ishikawa (32), Kuniaki Yagihara (31), Tsutomu Miyazaki (30), Yujiro Fukasawa (28), Members : Tomio Mashimo (30), Akira Ube (30), Kiyoshi Kobayashi (28), Noboru Yamada (28), Ichiro Chigira (27), Hiroyuki Tani (26), Hajime Abe (25), Kazumi Kaneko (25), Shigeru Suzuki (23), Junichi Fukuda (22), Doctor : Shoji Seki (43), Liaison Officer : Shree Bahadur Thapa (35, Assistant Inspector), Sirdar Lakpa Tenjing (39), Pasang (39), 16 Sherpas for both low lands and Heights

Outline of activities :

July 29	The Expedition Team left Japan.
August 8	Arrived at Pokhara.
August 11	Left Pokhara.
August 22	All the members arrived at Base Camp at 4,200 m.
August 26	Camp 1 was set up on the East Dhaulagiri glacier (4,850 m).
August 30	Camp 2 was set up at 5,400 m.
September 9	Camp 3 was set up on the South East Ridge at 5,850 m.
September 21	Camp 4 was set up at 6,450 m, where the difficult snow ridge started.

- September 23 Akuzawa, Fukasawa and Kobayashi were swept away down the South Face by an avalanche.
- September 26 Resumed normal activities.
- October 2 Expedition leader Tanaka returned from Kathmandu by helicopter. An aerial search for the three missing members was made by helicopter but no trace was found.
Temporary Camp 5 was set up at 6,850 m.
- October 7 Camp 5 was set up at 6,950 m.
- October 14 Camp 6 was set up at 7,450 m.
- October 18 Camp 7 was set up at 7,800 m.
- October 19 Miyazaki, Ube and Tani reached the summit.
- October 20 Kogure fell to death when he was carrying up provisions from Camp 4 to 5.
- October 21 Yamada, Suzuki and Nawan Yonden reached the summit.
- October 25 Evacuation of Base Camp.
- November 3 Arrived at Kathmandu.

First Ascent of Langtang Lirung, 1978

Akira Ban

It has been our mountain since 1961. Our first attempt to the mountain was undertaken in that year, and the first scene closed with a tragic end of the death of 3 members—Kaichi Morimoto, the expedition leader, Kenji Ohshima, and Gyaltzen Norbu, the sirdar with the most distinguished deed to Japanese expeditions to the Himalayas, who himself the first summiter of Manaslu.

In pre-monsoon season 1961, Osaka City University Mountaineering Club aimed at Langtang Lirung via Lirung glacier and established C3 (5,600 m) on the plateau at the upper part of the glacier. The tragedy happened when a big avalanche swept away our camp on May 11 midnight.

In the pre-monsoon 1964, again, we sent the second expedition to the mountain. The condition of Lirung glacier that year was unexpectedly bad, and it was out of problem to take the way through the glacier. The party then selected the South East ridge as the climbing route and reached "Triangle Rock" (5,750

m), at the middle of the ridge. But they had to give up to climb up further due to long knife-edged ridge stretched upward.

From 1965 to 1977 Nepalese government prohibited to enter into Nepalese Himalayas. Although official expeditions were not accepted at all these years, our club sent reconnoitering party three times to find possible route in Lirung glacier and to the South East ridge, in 1967, 1968, and 1974.

January 1978, Nepalese government permitted us to climb Langtang Lirung under the condition that the expedition should be organized jointly with Nepalese climbers. Already in 1970, our club made a joint expedition to Kanjiroba's main peak together with Tribuvan University, so this time it was easy for us organizing a joint party with Tribuvan University. The party was composed of 9 Japanese and 4 Nepalese members.

On Sept. 3, 1978, with 129 porters and 3.7 ton luggage, our caravan started from Kathmandu and tripped around Trisuli, Betorawati, Ramche, Dhunche, Syapru Bensi, Syarupugaon and Langtang.

On Sept. 9, B.C. (4,200 m) was built on Lirung glacier. We carefully checked danger of avalanche in Lirung glacier.

From Sept. 15 to 20, we made excursion to Ganjalachuli, (5,500 m) for acclimatization.

On Sept. 22, we started to climb Langtang Lirung in the following way :

- Sept. 29 built C1 (4,800 m)
- Oct. 5 withdrew from C1 because of avalanche
- Oct. 9 re-built C1 (4,820 m)
- Oct. 12 At Inzel ridge, a member broke his arm by an ice-block fall.
- Oct. 15 built C2 (5,710 m)
- Oct. 19 built C3 (6,280 m)
- Oct. 23 built C4 (6,650 m) just under the East ridge.
- Oct. 24 Wada and Pemba Tsering succeeded the first ascent at 9 : 25.

South Face of Baintha Brakk, 1978

Kimio Itokawa

It was 4 years ago that we made our first attempt on the South Face of

Baintha Brakk. At that time we had to give up climbing because of an accident that our camp was swept away by avalanche. Since then, Baintha Brakk was attacked by several parties and then first climbed by the British party in 1977 through the west ridge. Although the peak was once ascended we wished to accomplish our climb through the South Face.

Our team was made by 7 members of Shizuoka Climbing Club, and headed by Yukio Katsumi (38). We built Base Camp on the Uzun Brakk Glacier on June 11, and set C1 (4,850 m) on the glacier flowing down from the south-east ridge on June 24.

It was hard to lift loads to C2 (5,650 m) on the col between south face and 6,960 m Peak. The route was developed on the lower rocks from 29th and we gained 300 m by June 30. Then we had to stop our activities until 11th, because of a spell of bad weather and all descended to C1 till July 4. We again started and after four sitting bivouacs on the steep rock, we reached C3 (6,150 m) above the lower rocks on 17th. From there we took the route on the big snow-band up to leftward and all the seven members together got up to 7,000 m on July 20. Again, however, the bad weather forced us to descend to BC from the height of 7,000 m.

Two members suffered from frostbite and remained at BC. The remaining 5 members came back to C3 on 29th, but next day, two more members became unable to continue to climb more, because of deteriorated conditions. T. Kitamura, Y. Katsumi and I remained at C3 to continue climbing. Above C3, we found the steep central rock at South Face out of problem and changed the route to follow snow arete. We expected to reach the summit from C3 within 2 more days and started to the summit rocks on August 1. We were disturbed by bad weather and continued climbing in very slow pace. Shortage of food and repeated forced bivouacs gradually took away our energy. On August 3 we found gears of the British party at the foot of the summit rock. From there we almost followed the British party's route, then tried to climb over the overhang at 7,270 m, just below the summit.

On August 5 at 11 : 00 a.m. Kitamura broke through the overhang and three of us reached just 10 m under the summit. However, we thought another bivouac inevitable if we would try to climb up the 10 m steep wall, and it would drain of our energy. Anyway, we already completed the climb of untrodden South Face. In order to secure safe return, we made ourselves satisfied with our result of these 5 days' attack and decided to return immediately.

Nun, East Ridge, 1978

Meiji Gakuin University Mountaineering Club

Our eight-man party led by Katsumasa Kobori made the first ascent of East Ridge of Mt. Nun on October 25, 1978. The area around the mountain was already explored early in this century and the mountain climbed in 1953 by West Ridge by the French party.

Two decades later after it as a result of the border problem between Pakistan and India completely excluded foreigners from approaching the mountain. Since the opening in 1974, several parties succeeded to climb it by West and North Ridge. However, the route by East Ridge was left unclimbed since a failure in 1946.

On September 20 we made BC at the end of Shafut Glacier (3,919 m). Then ABC (4,525 m) on 26th on the glacier, C1 (4,975 m) on 29th and C2 (5,670 m) on October 3.

The route was developed on the snow slope which runs below a branch ridge of White Needle (6,600 m). We pitched C3 (6,235 m) at the base of the snow slope on 8th, then we all returned once to ABC to rest. On 11th we crossed over White Needle and extended the route to the col under the gendarme, Difficult Bit. But this gendarme guarded by the steep ridge made our further progress slow. We moved C3 up to 6,505 m and made attempts to Difficult Bit 2 times but failed. Then, we changed our route to the way to traverse the peak to Shafut Glacier side.

On October 22 we sent 3 pairs of teams to the summit from C3. They intended to make summit attack preparing for bivouacs. But after a bivouac at 6,705 m, one pair abandoned their aim. After another bivouac at 6,805 m, Kobori's party made a slip and had to give up. The third pair, Kenji Takahashi and Shigeoya Saito made third bivouac at 7,080 m on the summit ridge and stood on the summit at 8:42 on October 25. They could enjoy full 360 degrees' panorama at the 7,135 m peak.

20 days on Mt. Nun, West Ridge, 1978

Masato Oki

We succeeded in making the short period mountaineering of Mt. Nun in the Indian Kashmir Himalayas in August 1978. The expedition was organized by the Himalayan Association of Japan (HAJ). Many members of the HAJ who had not enough vacation but impassioned desire to climb the Himalayas, were interested in attempting the Himalayan expedition in a short time. Considering the problem of portage, the difficulty of the approach and the climbing route, etc., Mt. Nun was finally selected as a suitable mountain for this purpose.

The expedition team was composed of 9 Japanese men; Masato Oki (43, Leader), Tsutomu Ogawa (33, Climbing leader), Masaki Susuki (47), Tadao Ando (34), Tomohiko Iimura (33), Taichiro Takahashi (30), Hideki Azuma (28), Hiroshi Yashima (27), Masayuki Teramoto (27).

After months of intensive preparation, the main party left Osaka and arrived in New Delhi on August 4, 1978. En route for Srinagar, the main party was joined by the liaison officer, Mr. Farid Hussain Kashmir (30) who was an assistant director of Jammu & Kashmir Tourism Department of Govt. of India, and 2 Sherpas from Darjeeling, Nima Norbu (27, Instructor of HMI Darjeeling) and Nawang Thundup (26).

On August 8, the main party arrived at Tangol via Kargil, which is the last village to Mt. Nun and is situated on the right bank of Suru river.

On the plain of left bank of Sentik river, Base Camp was established at an altitude of 4,100 m. From there we climbed up along Sentik river and Sentik glacier about four hours and at the right bank of Sentik glacier, Camp 1 was established at an altitude of 4,900 m.

All mountaineering equipments and foods etc. were brought up from Tangol to C1 by fifty porters of Tangol village in two days. Arrangements of vehicle and accommodation from Srinagar to Tangol were done by our travel agent in Srinagar and our excellent liaison officer at the reasonable rate.

On August 11, the route was opened through about 400 meters ice fall to the snow plateau. From there we had to pass over about 6 km long snow field and Camp 2 was established at an altitude of 5,340 m via tentative Camp (5,300 m) at the south edge of the snow plateau.

On the snow plateau, even in the daytime, it was very hard work to pass it due to the melted deep snow, at the same time, it was quite difficult to find the route in the snow falling weather.

On the rock ridge, Camp 3 (5,800m) was established on August 16. The rope with the length of 1,000 meters was fixed on the ridge. It was a very steep and dangerous slope. On August 21, after four hours climbing from C3, H. Azuma, T. Takahashi, Nima Norbu reached at an altitude of 6,200m and Camp 4 was established there. It was on a narrow place with snow, on the west ridge.

On August 22, the first attempt party reached the top of Mt. Nun at just noon, after about six hours climbing from C4. On the same day, the second attempt party, which was led by T. Iimura and is consisted of M. Teramoto and Nawang Thundup, started C3 and reached the top at 13:30. They found Indian national flag on the top. Weather was fine but the summit was surrounded by fog. They could see only Mt. Kun, the next peak. The top of Mt. Nun was quite narrow snow field of 2 square meters only.

Two summit parties climbed down to C2 on that day. The last member reached C2 about 20:00 in the night. They were warmly received by climbing leader, T. Ogawa and one of the member, H. Yashima. The leader, M. Oki and the other members, M. Susuki and T. Ando waited them at C1, catching already this good news by walkie talkie.

On the way back to C2, on August 23, Mt. D41 (Barmal Peak, 5,813 meters) was ascended by T. Ogawa, M. Susuki, H. Yashima and T. Takahashi. On the next day, all members climbed down to C1. On August 25, we reached Tangol and immediately transferred to Kargil and on the next day reached Srinagar by vehicle.

The Way to the Rimo Range, 1978

Nobuhiko Osawa

The Rimo range is one of the few areas still left unclimbed and unexplored up to now. The Kakujo Alpine Club sent an expedition party to explore this area and also to climb a virgin peak with the height of 6,476m in the Rimo

range. After waiting so long for flight we arrived at Skardu on July 12. The route which we chose to approach Rimo was the shortest way but the one never been traced before, i.e., Goma—Gayong Glacier (=Gyon Glacier)—Mirza Kafar Glacier—Gayong La (=Gyon La)—Unnamed Glacier—Siachen Glacier—Terong Glacier—Peak 6,476 m.

On July 23 we established Base Camp at Gayong Glacier and on 28th Camp 1 (5,100 m) at Mirza Kafar Glacier. Our most important task then to attain was to find the way to cross Gayong La which was tried by Longstaff and Young but unsuccessful. Even after long reconnaissance, the pass considered as Gayong La was still remained misty to us. However, on August 6 we found the way down to the unnamed glacier flowing down to Siachen. A hanging glacier down from a tiny col was the only possible route. Camp 2 was established on the col (5,500 m) which we named Hope Col. It is the southernmost of three cols situated at the head of Mirza Kafar Glacier. We set 300 m fixed rope to climb down the hanging glacier. Down the unnamed glacier (we named it Hasrhat Glacier) which is a tributary of Siachen Glacier, we at last reached the main stream of Siachen. We stood at the mouth of Terong valley where the three glaciers, North and South Terong Glaciers and Shelkar Chorten Glacier, join together. It was five-days march from Hope Col. Weather turned bad but we had still long way to go along the river to the snout of Terong Glacier. Finally, rapid, cold and wide stream from glacier prevented us from going further. Although unable to reach at the Rimo range we could enter into Terong valley. The way we took is a short-cut to Siachen Glacier but it is not such a route that transport by porters is possible. We could not find the pass considered as Gayong La. If a passable pass existing in this area should be called Gayong La, it should be the col which we crossed—the Hope Col.

Members of the KAC Expedition :

N. Osawa (Leader), M. Yamamura, S. Matsuno (Medical Doctor), T. Nakajima, H. Nagata, A. Uehara, Cap. M. Ajmal (Liaison officer).

Annapurna South, Southwest Ridge, 1978

Teruki Kouno

Climb of the Southwest ridge was once tried by a Japanese party from Gamagohri but they gave up at 6,000 meters high. It was guarded by steep ridges of rock.

On September 7 our caravan was started hiring 111 porters. During the march-in, it rained almost every day.

On September 14, we made Base Camp at 4,050 meters high temporarily and made an excursion for five days to surrounding area for acclimatization and for finding a good place for Base Camp. On September 20, we built up the Base Camp on 4,800 meters high at the edge of the Southwest ridge. We took the route at first to a rock peak of the right side of the ridge and arrived at the snow field. We set the rope ladder on the way to the rock peak. This snow field was only place for us to relax.

On September 27, we set up C1 at 5,700 meters high flattening the sharp ridge. Annapurna showed a formidable view from the place.

On October 3, we built C2 at a col of 5,770 meters high. From the col, the knife-edged ridge extended to far out. We had a tough time there under strong wind.

On October 13, we made the final attack camp at the foot of the ice wall, about 6,400 meters high in the strong wind. A group of crane was seen flying to the south beyond Annapurna South peak. The monsoon season seemed to end at last.

On October 14 and 15, we made the route on the south wall from where final summit attack should be made.

On October 16, we had windless fine weather. Mitani and Nakanishi left the attack camp at 4:00 a.m. and they reached the summit at 9:15 a.m. scaling the last 800 m wall. It was after 27 days since we built BC.

On next day, Kouno and Miyakawa succeeded the second ascent.

Members of the Expedition :

Teruyuki Kouno (27, Leader), Yoshio Miyagawa (28), Toichiro Mitani (22), Norio Nakanishi (20), Masayuki Tsunakawa (20), Yoshio Kato (27, Medcal Doctor).

Tilitso Himal, 1979

Yoshimi Yakushi

The ban on any climb by Nepalese Authorities compelled us three members to explore an unnamed peak in the Annapurna Himal, in autumn 1965, which was to be christened Tilitso Himal (7,134 m=23,405 ft. newly surveyed; Tili : remote, and tso : lake in Thakali language), after the Tilitso Lake at the northern foot, with agreement of the Thakalis living nearby.⁽¹⁾

On the release of the ban in 1969, we immediately applied the permission to the mountain, only to be refused under what they called domestic affairs. Then, that year we were obliged to try our first ascent to Gurja Himal in the Dhaulagiri range, with success.⁽²⁾

The priority, however, having been taken, a repeated application was made to the Authorities every year, and when Tilitso Himal was released in 1978, another application was submitted. But, for some reason unreasonable to our party, the French expedition got the first attempt to it in autumn 1978, with ours in the following spring. It was fifteen years for us since the plan had been made in 1964. And besides, our proposed approach route by way of the Kali Gandaki was changed to the one of the Marsyandi river, for the reason that Jomosom-Thini-Mesokantu Pass area is prohibited, where Kesang Camp of Nepalese Army is stationed in replacement of Tibetan Khamba Camp.

Our Japan-Toyama Himalaya Expedition 1979 consisted of the following members. It was led by the leader as far as Kathmandu, with the farther climb by the climbing-leader.

Leader : Yoshimi Yakushi (age 43)

Climbing-leader : Ikuo Saeki (44)

Members : Akira Ohta (42), Hitoshi Tsuji (38), Takashi Araki (31), Haruo Yamamoto (27), Yutaka Oe (21), and Fumitaka Koyama (35) as doctor.

Sherpas : Lhakpa Tenzing (40) as Sirdar, Nawang Yonde (28) and Mingma Tenzing (21) as High-altitude Sherpas, and Dawa (24) as Cook.

Liaison Officer : Atal Lama (30), policeman.

On March 22 the expedition started from Pokhara with 65 porters, and arrived at Khangsar on April 1, via the Marsyandi river, where we switched the porters. Base Camp was established on April 3, at the height of 4,200 m, which

was lower than expected for the snow was too deep for the porters to go up higher. At first Base Camp was expected to pitch at 4,900 m high on the western shore of Tilitso Lake.

On April 7 the Advance Base Camp was put at 5,050 m on the ridge, south side of the East Tilitso Pass, and Temporary Camp 1 (4,900 m) was set on the western shore of the Lake on April 11. The transport between ABC and T-C1 was being done by sledges assembled by skies over the frozen lake. On April 14 Camp 1 was established at 5,150 m at the end of the north rocky ridge of Tilitso Himal. On the following morning the great avalanche fell down from the Grande Barrière at 4 : 45 a.m. onto the Lake, and the ice of the surface was broken to pieces. Consequently it caused a tidal wave on the west shore, so that the members retired for a while to a safe place from T-C1. The ice was of two strata inserted 10 cm of water : the upper was 10 cm thick, and the lower 80 cm. This avalanche crushed the route between ABC and T-C1 on the Lake and forced us to take a long way around the northern shore. Our transport, however, almost finished, there was little effect it had on us. This day we all withdrew T-C1 and moved to Camp 1.

On April 16 we set to work making the route on the north ridge of rock easily broken, fixing ropes of some 1,800 m between C1 and C2. Passing over the rocky ridge, Camp 2 was settled at 6,000 m on April 24.

On April 25 it was fine weather. The first attacking team (Araki, Yamamoto, and Mingma Tenzing) left C2 at 5 : 30 a.m. They climbed the ice slope of 100 m straight up, traced on the snow ridge of 300 m, and came upon the cornice, from where they traversed to the left facing the Tilitso Lake. Further on, they were going up on the left side of the iced slope, when just below the summit Yamamoto's conditions turned out to be worse. Then, they were forced to bivouac in a snow-hole they made at 5 : 00 p.m.

At 6 : 00 a.m. on April 26, out of the snow-hole the three started and stood on the summit at 7 : 45 under the clear sky. After an hour's stay, they descended to C1 at 6 : 30 p.m. On the same day the second team (Oe and Nawang Yonde) started from C2 at 4 : 00 a.m., reached the top at 1 : 57 p.m. and came back to C2 again at 6 : 00 p.m.

On April 28 all the members went down to BC, and returned at Khangsar on April 29. The party left Khangsar on May 1, with 25 porters. Crossing the Thorung Pass, down to Muktinath and walking along the Kali Gandaki river, the party finished the expedition at Pokhara on May 9.

- Notes : 1) Sangaku, Journal of JAC, Vol. 62, 1967, p. 83~100 & Engl. p. 8~10. La Montagne et Alpinisme, 1968-October, p. 335~336.
- 2) "Gurja Himal" (Ed. by Y. Yakushi, Toyama, Japan, 1970) Sangaku, Vol. 65, 1970, p. 57~67 & Engl. p. 1~6. Alpine Journal, Vol. 75, 1970, p. 17~24. Himalayan Journal, Vol. 30, 1970, p. 95~100.

小島烏水全集

編集委員 小島田巽・串田孫一・山崎安治・近藤信行
編集協力 小島隼太郎

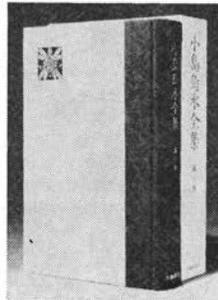
全13巻別巻I

第一回配本 / 発売中!

第六卷

菊判・五六二頁
定価六、八〇〇円

紀行文学の傑作「雲表」、山岳文献白眉の書『日本アルプス』第一巻その他



〈体裁〉 菊判・上製 / 布織ぎ表紙表 / 貼函入り / 平均550頁 / 本文10P活字組 / 月報付

全巻予約受付中!!

▼お早めにお近くの書店にお申込み下さい。

全巻を予約申込みの方にのみお頒ち致します。各巻ごとの分売はいたしません。予約申込期限 昭和54年12月末日、(次回配本)第七巻11月下旬以後隔月配布

(推薦者)

● 日本アルプスの先駆者 小島烏水
日本山岳会名誉会員 横 有恒

● 栄光をになう山の文学の創始者
作家 井上 靖

● 小島烏水全集の刊行をよろこぶ
日本山岳会会長 西堀栄三郎

● 近代文学史上の大きいなる業績
早稲田大学名誉教授 稲垣達郎

● 岳人を代表する地理学の至宝
日本地理学会名誉会員 田中 薫

● 詩趣ゆたかな浮世絵研究の先達
日本浮世絵協会理事長 橋崎宗重

全巻の内容

- 第一巻 初期文集
明治二十年代の美文・評論のほか「扇頭小景」
「木蘭香」などを収録する。
- 第二巻 「文庫時代」
「文庫」記者として活躍した明治三十年代の文
藝評論家・批評家としての小島烏水の軌跡を
明らかにする。
- 第三巻 「文庫時代」(二)(-)
- 第四巻 山水無盡蔵 不二山他
日本登山史における画期的名品「鐘ヶ嶽探険
記」のほか紀行・随想を収録。
- 第五巻 日本山水論 山水美論他
興隆期の青年たちに大きな影響を与えた、か
すかすの山岳エッセイを収録。
- 第七巻 日本アルプス(第二巻・第三巻)
探険時代の日本アルプスを足跡のこした鳥
水の壮年期の全体像をまとめた。
- 第八巻 日本アルプス(第四巻)他
飛騨及六谷紀行のほか日本山岳会成立後の鳥
水の山に関する全論文を収録。
- 第九巻 氷河と万年雪の山他
十二年余におよんだ探険時代の登山記・研究
美術蒐集および随想を収録。
- 第十巻 書齋の岳人 アルピニストの手記他
登山事績、山岳文献、先輩知友の回想、山と
文学と書物に関する文章を集成。
- 第十一巻 偃松の匂ひ 山の風流使者他
山と芸術に全生涯をかけた鳥水晩年の二書と、
昭和十年以降の随想を収録。
- 第十二巻 浮世繪と風景畫他
広重を中心とする風景画史および明治・大正
期の美術研究・随想等を収録。
- 第十三巻 江戸末期の浮世繪他
悠々たる雅境に遊んだ二世の文化人・鳥
水の昭和前期の浮世絵研究を集成大成。
- 別巻 小島烏水研究
鳥水に関する研究・評論・追憶のほか年譜・
書誌目録・研究文庫一覽・主要文庫。

大修館書店

〒100 東京都千代田区神田錦町3-124
振替 / 東京9140504 電話 294・2222 1

TOP BRAND OF WORLD

世界のトップ・ブランドをご愛用ください



スカルパ登山靴／イタリア
スカルパ登山靴はイタリアの名門、世界の最高水準をゆく高級登山靴です。遠征隊用から一般用まで揃っています。



ノルト軽登山靴／イタリア
ノルト軽登山靴はイタリアの軽登山靴製造で最も技術が高いノバスポーツで生産されています。



アルバータ羽毛製品／中国
アルバータ羽毛製品を中国と取組んで6年、すでにヨーロッパと同品質のレベルにまで達しています。遠征隊用から一般用まで数多くの品種を扱っています。



スワンドライ・ウールジャケット／ニュージーランド
羊毛の国、ニュージーランドのバージンウール100%のアウトドアスポーツ用の保温力抜群のジャケットです。



ハンガロテックス毛織手袋／ハンガリー
ハンガリー原産毛を脱脂しないで編みあげた伝統ある毛織手袋は世界の登山家に愛用されています。



ヤーヌス靴下／ノルウェー
80年余の伝統から生まれたヤーヌスの毛織製品は北欧独特のジャガード柄。高品質を誇る名品です。



マウンテンハウスFD食品／米国
米国のアポロ計画で開発された超軽量、ハイカロリー、保存期間80年の夢の食品です。

総輸入元、発売元

(株)キヤラバン

〒170 東京 本社	東京都豊島区巢鴨 1-25-7	☎ 03 (944) 2331
〒564 大阪 支店	大阪府吹田市豊津町 54-4	☎ 06 (386) 0451
〒062 札幌 営業所	札幌市豊平区美園一条 6-47	☎ 011 (822) 8664
〒812 福岡 営業所	博多区堅粕 4-23-16	☎ 092 (472) 0981

信頼されて50年

山とスキー用品専門店



山友社 **たかはし**

四谷本店 〒160新宿区三栄町3番地 TEL (351)7432・1912
八重洲口店 〒103中央区八重洲1-5-11 TEL (271)1560・8575
新宿店 〒160新宿マイシティ5番街 TEL (352)6 5 6 4



山とスキーの専門店

キスリング
クレッターザック
門田ピッケル
// アイゼン
夏冬用テント

片桐

東京都文京区湯島3-38-9

片桐盛之助

電話 東京 (831) { 1794番
6680番

学研の山岳地図集成シリーズ

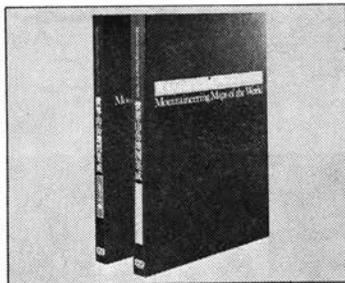
日本と世界の山々が一望に!

永遠の標的ヒマラヤ・カラコルム連峰を世界で初めて集大成

世界山岳地図集成 全2集

監修 吉沢一郎

世界の登山家の夢であるヒマラヤ・カラコルム連峰が全地域大縮尺で集大成されたのは世界でも初めてである。美しいレリーフ4色地図とカラー写真、ルート解説など最新の情報が山岳愛好家だけでなく広く興味をそそる。



カラコルム・ヒンズークシユ編

《縮尺》約1:200,000

編者 高木泰夫・宮森常雄
カラコルム／カシミアル・ヒマラヤ／ヒンズークシユ／パミール天山の主要山岳を四
図収録

●B4判364×257(ミリ)／上製本／
箱入り ●総頁350頁／展開き地図24
点／カラー32頁／折込6頁

定価 21,000円

ヒマラヤ編

《縮尺》約1:200,000

編者 諏訪多栄蔵 薬師義美はか
ブータン・ヒマラヤ／エヴェ
レスト／マナスル・ヒマール
など一五図収録

●B4判364×257(ミリ)／上製本／
箱入り ●総頁328頁／展開き地図25
点／カラー32頁／解説196頁

定価 19,000円

全国の主要山岳を網羅。山岳関係者の基本図書

日本山岳地図集成 全2集

編者 吉沢一郎ほか

主要山岳を中心に図取りした、
いままでにない本格山岳地図集。
全国の二五〇〇メートル以上の
山岳を網羅し、山名、沢名、ル
ート名をはじめ、山小屋やキャ
ンプ地、水場などの登山情報を
豊富に収録した。

《縮尺》1:30,000

第1集

北海道 中部山岳(北部)編
羅臼岳／八甲田山／槍・穂
高岳ほか五四図収録

第2集

中部山岳(南部) 九州編
富士山／木曾駒ヶ岳／阿蘇
ほか四〇図収録

●B4判364×257(ミリ)／上製本／
箱入り

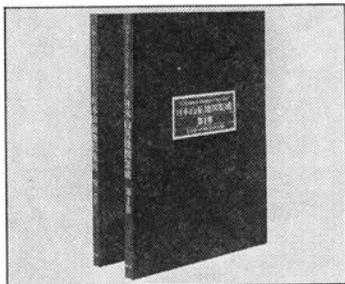
●第1集 総頁202頁／収録地図54図
／解説99頁

●第2集 総頁190頁／収録地図40図
／解説78頁

全2集セット 現金価格 24,000円

全2集セット 分割払価格 25,200円

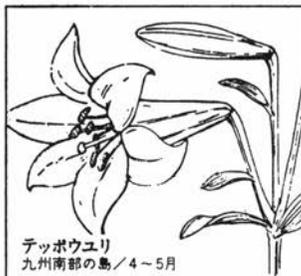
(支払回数6回・支払期間6か月)



発行 = 学研 学習研究社

●内容見本を掲載しております。ご希望の方は下記にお申し込みください。
(株)学研美術販売
〒146 東京都大田区仲池上1-17-15 ☎東京(03)754-5523・5524

日本全国で 一年じゅう咲いている花



テッポウユリ
九州南部の島／4～5月



ササユリ
本州中部以西の山地／6～7月



オトメユリ
東北地方の山地／6～7月



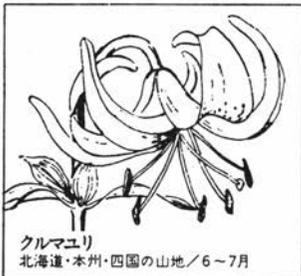
ヤマユリ
近畿以北の山地／7～8月



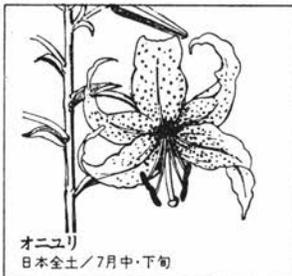
イワトユリ
紀伊半島以北の太平洋岸／7月上旬～下旬



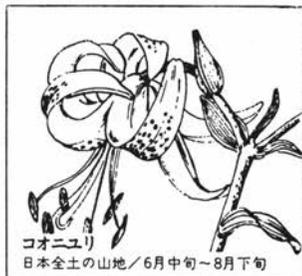
ヒメユリ
本州・四国・九州／6～7月



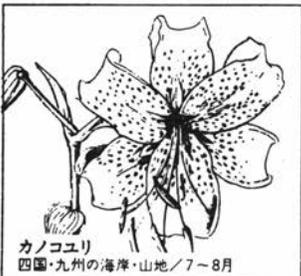
ククルマユリ
北海道・本州・四国の山地／6～7月



オニユリ
日本全土／7月中・下旬



コオニユリ
日本全土の山地／6月中旬～8月下旬



カノユリ
四国・九州の海岸・山地／7～8月

協和の支店は全国で220余の店。
それぞれの地域で、みなさまのくらし、
みなさまの事業の
よきアシスタントとして、
いっしょうけんめい努力しています。
シンボリはユリの花。
協和は、清潔で明るい銀行を
めざしています。



いっしょにいっしょ
協和銀行

待望の銘品が今、 二村からあなたの手へ。

グランドジョラスの8日間、長谷川恒男氏も使用。



氷壁を突き刺す、
男の魂。

ダブルアックス用
★二村スペシャルピッケル
(受注生産)
¥50,000

きびしい響きの中に 打ちおろした手に残る
本物を見た。 銘器の感触。

ダブルアックス用
★二村スペシャルバイル
(受注生産)
¥50,000

ダブルアックス用
★二村スペシャルハンマー
(受注生産)
¥45,000

●営業時間

平 日=AM10:30~PM8:00
日曜・祭日=AM11:00~PM6:00

■地方の方は通信販売をしております。

秀山荘

スペシャルタイプは全て、オーダーできます。但し、製作上困難な部分を除きます。

写真のスペシャルタイプは、長谷川恒男氏がグランドジョラス(ウオーカー稜)冬期単独登攀の時に使われたものです。

八重洲口店/東京都中央区八重洲2-1-11
TEL (281) 8456・(274) 5800
お茶の水店/東京都千代田区神田駿河台2-10
TEL (291) 7406-7
五反田店/東京都品川区西五反田7-22-17
卸売センター1階(ミツコスポーツプラザ)
TEL (494) 2670・3247
名古屋店/名古屋市千種区内山町3-85
(今池共同ビル内)
TEL 052 (741) 2010

山と自然と旅を愛する人へ…

きたぐにの動物たち 本多勝一 A5変型判/1200円

新版 山を考える 本多勝一 四六判/980円

冒険と日本人〈改訂新版〉 本多勝一 四六判/1200円

山のパンセ 串田孫一 A5変型判/1500円

若き日の山 串田孫一 A5変型判/1500円

心の歌う山 串田孫一 A5変型判/1800円

山菜記〈正・続〉片岡博 B6判 正・980円/続・620円

旅の山菜 片岡博 A5変型判/1500円

谷川岳ヒゲの大將 高波吾策 B6判 980円

剣岳の大將 文蔵 佐伯文蔵 B6判/980円

上高地の大將 木村 殖 B6判/980円

はらかな尾瀬 朝日新聞前橋支局編 B5変型判/1500円

炉辺山話 岡 茂雄 四六判/1300円

シルクロードの十字路で モタメディ遙子 B6判/860円

私たちのシルクロード 平山美知子 四六判/1400円

K2登頂幸運と友情の山 広島三朗 A5変型判/1300円

文学山歩 秋谷 豊 四六判/1200円

北アルプス 日本山岳写真集団/カラー写真集 A4判/8000円

東京付近の山〈改訂新版〉 ブルーガイド編 A5変型判/1600円

ネパール ヒマラヤトレッキング ブルーガイド 海外版/1380円

ヨーロッパ・アルプス ブルーガイド 海外版 680円

脱ゲレンデ、能率的雪山登山に必携 初めての本格的なスキー入門書ノ 佐伯邦夫著 羊二六〇〇

実戦 現代山スキー

(中日新聞東京本社)
東京新聞出版局
東京都港区港南2-3-13 ☎03(471)2211代



- 1 アルペンスキーの歩み
- 2 山スキーへのいざない
- 3 計画と準備
- 4 山スキーの用具
- 5 歩行・登行・スキーデポ
- 6 下降・滑降
- 7 露営をめぐって
- 8 危険とその対策
- 9 山スキー界の課題

日本山岳文学史

アルプスに光みなぎる時

うちなる山々

山の声

新岩登り技術

風巻良雄著 ￥二六〇〇
山岳文学の母胎・文人遊客
と旅・山岳探検時代・山の
モダニズム・探検家の系譜

近藤 啓著 ￥一、八〇〇
美しく美しい山々に惹かれて
ひたむきに登りつづけるア
ルピニストの心情

中野実著 ￥二、〇〇〇
不動の自然の中に身を置き、
人の生を問いつける著者の
清澄な世界、さし控挿入、
注まざる ￥一、八〇〇

行儀みづる彩色画と自然
メロスマン陸軍で美しい自然
を画いあげた画文集
阿部知行著 ￥七五〇

登山を結核をもとに患下し
た若登りの実証的技術書

日本の岩場

ヨーロッパの岩場

「実戦」山岳写真

山の天気を知る法

日本アルプス

小森廣行著 ￥二、〇〇〇
小森廣行著 ￥二、〇〇〇
おが国の代表的な十六岩場
の完全ガイドブック

小森廣行著 ￥三、八〇〇
鮮やかな写真と詳細なルート
図でわかりやすい山頂

川口邦雄著 ￥二、四〇〇
だれでも機会を逃さず山岳
写真を撮れるように

飯田隆治郎著 ￥一、三〇〇
長い経験をもとに、雲や霧
の影から山の天気を知る法

吾人編纂部編 ￥二、二〇〇
山岳写真家七人が「日本ア
ルプス」の名称を決定した
経緯をつづき、

世界の名峰

ヒマラヤ

ヒマラヤを飛ぶ

K2より愛をこめて

アンチプルナ

吾人編纂部編 ￥九、五〇〇
ヒマラヤ、ヨーロッパ、アル
プス、アメリカ、カナダ、
アフリカ等の山々八〇余峰

山屋勇著 ￥二、〇〇〇
ヒマラヤで描かれたパ
ール山村民俗は親しみ深く
楽しい

山田一著 ￥六、〇〇〇
航空機でヒマラヤの全容を
とらえ、世界で初めてのの
写真集

原本雄一著 ￥九、八〇〇
物や現職人など、山の生
活をリアルに描く

女子登山部編 ￥九、〇〇〇
世界初の女子登山隊による
アンチプルナ山頂への登
り

豊かな

生活環境を築きあげる……………

(建 材)

- カーテンウォール
- アルミ自然発色NKカラー
- サッシ ドア
- 用途別サッシ ドア
- 各種間仕切

(機 器)

- NKフィルター
- 各種浄水・廃水処理装置
- 熱交換器 装置
- 熱交換器用フィンチューブ
アライトロン
- ウエルフィン

(電 機)

- 電気洗濯機
- 冷凍ショーケース
- 冷蔵ショーケース
- オープンショーケース
- ウォータークーラ

日本建鐵株式会社

取締役相談役 早川 種三

東京都千代田区大手町2-6-2 〒100

TEL 東京 (03) 270-6511(大代表)

飼料・肥料配合プラントのコンサルタント

飼料・肥料製造用諸機械及び部
品の販売・関連機器の斡旋取扱

株式会社橘エンジニアリング

名古屋市中区橘一丁目27番8号
〒460 ☎名古屋052(321)1501(代)



雨宮 節 登山とスキーの店

代々木 山幸

〒151 東京都渋谷区代々木1-21-9

☎ 03(370)1100

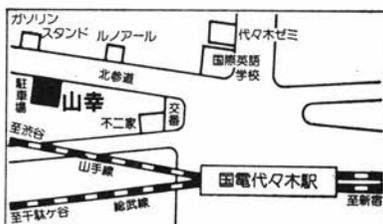
●年中無休 AM11:00~PM9:00(日・祭日PM8:00) (下車徒歩3分、駐車場もあります。)

●初心者への山案内

常設登山相談室

<山幸登山学校>

年間を通じての登山教室を開講いたします。新緑の頃の親子参加のキャンプ教室、清流の沢登り、植物観察山行、アルプスの夏山教室、岩登り、新雪の雪山教室等を企画しています。又、ガイド付きのコース案内もいたしますのご相談下さい。



ニッチの

登山・ハイキングシリーズ

※登山・ハイキングシリーズにはこれだけの仲間が揃っています。

- | | | |
|--------------|----------------|---------------|
| ① 奥武蔵 武甲・雲取 | ⑭ 蔵王連峰 | ⑳ 金剛山 葛城・岩湧山 |
| ② 奥多摩 大菩薩 | ⑮ 八幡平 岩手山・駒ヶ岳 | ㉑ 六甲・摩耶 |
| ③ 奥秩父 | ⑯ 霧ヶ峰 白禪湖・蓼科山 | ㉒ 比良連山 |
| ④ 陣馬・高尾 秋川溪谷 | ⑰ 雲ノ平 | ㉓ 大峰・吉野 |
| ⑤ 丹沢山塊 | ⑱ 妙高・戸隠 野尻湖・黒姫 | ㉔ 大台ヶ原 大杉谷 |
| ⑥ 富士・五湖 三ツ峠 | ⑲ 南アルプス北部 | ㉕ 赤目・青山 室生寺 |
| ⑦ 箱根 熱海・湯河原 | ⑳ 中央アルプス | ㉖ 鈴鹿連峰 御在所・伊吹 |
| ⑧ 奥日光 奥鬼怒 | ㉑ 南アルプス南部 | ㉗ 大山・霧山 |
| ⑨ 尾瀬 銀山湖 | ㉒ 北アルプス | ㉘ 三瓶山 帝釈峽 |
| ⑩ 軽井沢 妙義山 | ㉓ 加賀白山 白川郷 | ㉙ 秋吉台 三段峽 |
| ⑪ 伊豆半島 大島 | ㉔ 飯室・朝日 | ㉚ 九重山 久住高原 |
| ⑫ 三浦半島 鎌倉 | ㉕ 大雪山 層雲峽・然別湖 | ㉛ 英彦山 耶馬溪 |
| ⑬ 美ヶ原 霧ヶ峰 | ㉖ 檜・穂高 アルプス銀座 | ㉜ 阿蘇山 |
| ⑭ 谷川岳 | ㉗ 立山・剣 黒部溪谷 | |
| ⑮ 八ヶ岳 蓼科山 | ㉘ 東海自然歩道 I | |
| ⑯ 那須・塩原 鬼怒川 | ㉙ 東海自然歩道 II | |
| ⑰ 磐梯・吾妻 安達太良 | ㉚ 東海自然歩道 III | |
| ⑱ 志賀高原 草津白根 | ㉛ 入笠山 守屋山・高遠 | |
| ⑲ 上高地 乗鞍岳 | ㉜ 苗場・鳥井 清津峽 | |
| ㉑ 黒部・白馬 鹿島槍 | ㉝ 越後三山 奥只見・巻機山 | |
| ㉒ 房総半島 | ㉞ 御岳 木曾路 | |
| ㉓ 浅間・菅平 | | |

※保存用には

日本登山地図集

I 中部山岳・信州篇

II 関東・上越篇

をどうぞ——定価各4,800円

定評ある著者陣容!

全56巻

定価各450円



雷鳥マークのカラー表紙
に衣替えて新発売!!

地図の 日地出版

本社 東京都千代田区西神田2-2-15

東京 03 (261)5126

支店 大阪市南区安堂寺橋通り3-60

大阪 06 (252)7421

白水社の山岳図書

ロンゲストアップ／望月達夫訳
わが山の生涯 写真二三四頁
 本文四〇〇頁
 二五〇〇円

半世紀以上の長きにわたり、アルプス、ヒマラヤ、ロッキー、北極地帯と、生涯を山行と探検にすごした著者が、自叙伝風に綴った名著。ウインバーのアルプス登攀記と共に山岳文学の古典。

J・D・フリーカー／薬師義美訳

ヒマラヤ紀行 写真一四四頁
 本文五五頁
 五八〇〇円

一八四八年、植物学研究のためインド入りした著者は、カンチェンジュンガ周辺、チベット国境の地形、植物相を踏査した。植物学上も価値は高く、またヒマラヤ学の原点とされる名著。

吉永定雄訳

わが山エヴェレスト—テンジン自伝 写真二〇〇頁
 本文三六頁
 二二〇〇円

これは一九五三年エヴェレスト初登頂成功後の一人のシエルパの真実の物語である。世間の中傷に囲まれながらも、謙虚に、実に、温い友情と共に生きた強靱な男の姿が浮き彫りにされる。

ヒマラヤの高峰 全3巻 望月久彌著・雁部編 各五五頁
 深田久彌著・雁部編 各五八〇〇円

ヒマラヤー第三の極地 ティレルナルト／福田延年訳 合判 五三二〇〇円

日本登山史 山崎安治著 合判 五三二〇〇円

処女峰アンナプルナ 最初の〇〇〇 エルソト／近藤 等訳 合判 四一四〇〇円

わが山々へ ボナツティ／近藤 等訳 合判 四一四〇〇円

大いなる山の日々 ボナツティ／横川文雄訳 合判 四一四〇〇円

星と嵐—六つの北壁登行 レビュファ／近藤 等訳 合判 四一四〇〇円

レッドピーク—連最高峰登頂記 スレッサー／坂下心 訳 合判 四一四〇〇円

星空の北壁 近藤 等著 合判 四一四〇〇円

ジャヌー北壁 小西政継著 合判 四一四〇〇円

ザイルのトツプ フリンソン／ロツシュ／近藤 等訳 合判 四一四〇〇円

登山の技術 全2巻 日本山岳会編 各二〇〇〇円

小西政継 ロック・クライミングの本 各二〇〇〇円

白水社 101 東京都千代田区神田小川町3-24／振替東京9-33228／電291-7811

「世界名山登頂シリーズ」

キリマンジャロ チンボラソ モンブラン
 マウントクック ウィルヘルム マッターホーン
 キナバル 玉 山 メンヒ

—ネパールヒマラヤトレッキング、
 ハードトレッキング—
 エベレスト、アンナプルナとダウラギリ、
 ランタン、ゴーキョコース等。

—遠征隊向、格安航空券—
 ネパール、インド、パキスタン、ニュージーランドetc

お問い合わせは



株式会社 西遊旅行
 運輸大臣登録旅行業代理店業1976号
 〒112 東京都文京区後楽1-1-17
 TEL 03★815★5391~3



幾多伝え聞くアルピニストの栄光と苦悩の記録

山岳名著選集

●各巻A5判

“遠い頂”ヌプツエ

■登山溪流会編著■2500円

ブレ・モンズン期にヒマラヤの未踏峰ヌプツエ北西峰へアタック!

冬のアイガー北壁初登攀

■トニー・ヒーベラー著■横川文雄訳■1200円

幾多の生命を奪ったアイガー北壁!

ダウラギリ登頂

■M・アイゼリン著■横川文雄訳■1500円

小型飛行機による雪上着陸の記録としても名高いスイス隊によるダウラギリ初登頂成功の記録

エヴェレスト登頂記

■J・アルマン著■丹部節雄訳■2500円

“白き神々の座”エヴェレストに2度登頂したアメリカ隊の記録

パミールシルクロードの城塞

田村俊介編著■2500円

東西トルケスタンを結ぶシルクロードの要所、神秘的な魅力をもった山城パミール。レニン山への日本隊遠征の記録

遙かなる天山セミヨーノフ伝

A・セミヨーノフ著■田村俊介訳■2500円

壮大な中央アジアの探検とロマン

中央アジアの高峯パミール速攻

■田村俊介編■2500円

日本山岳会隊の記録

登山ハンド・ブック・シリーズ

全6巻
山岳研究会編

▲1 登山教本

▲4 山の心

▲2 登山技術

▲5 山の自然科学

▲3 世界の山岳

▲6 山の資料

●A5判
●各巻・定価980円

汗が逃げる 曲線ザック

〈ベルグ®〉アタックザックは背中に溝つきパッドを採用した新しいタイプを加え、さらにグレードアップしました。

〈ベルグ®〉アタックザックは、肩、背、腰などの当る所に、フィットしやすい曲線を探りいれて設計されています。このため、身体にムダな負担をかけることなく、疲れを大幅に減少させることができます。美津濃は、この「曲線ザック」をさらに改良。発泡ウレタン製の溝つきパッドを背面に採用しました。発汗帯に沿わせたこの溝により、歩行中の汗が逃げやすく、背中のベタつきを軽減しました。

BERG®
〈ベルグ®〉アタックザック

← 溝つきパッド

MIZUNO

美津濃

山崎安治

登山史 の発掘

日本の登山史と著者のつき合いは深く長い。その探索行の中で著者は、全く埋もれてしまっていて表面に出てこない記録を数多く発掘している。登山の歴史の空白地帯や未知の分野を、新しい事実を読みなら辿るのは興味深い。

A 5判 300頁 上製箱入 2500円

三田幸夫

わが登山 高行上巻

『わが登山』上下2巻は、僕の山における足跡を集成したもので、いわば山の自伝と云えるかもしれない。上巻にはインド時代にいたるまでのいくつかの山旅の記録やそれにまつわる回想をおさめた(序にかえてより)。

A 5判 500頁 上製箱入 3800円

日本山岳会編

山日記

昭和55年版 定価 950円

山の好きな人に変便な手帳です。親しい方へのプレゼント用に最適。12月1日発売予定。

山の本売場ご案内

お茶の水店の3階は『山の本』の売場です。ご来店下さいませ。

営業時間

平日 10時半～8時

日祝日 12時半～6時半

東京神田駿河台2-1

茗溪堂

川崎精雄 望月達夫 山田哲郎
中西章 横山厚夫 共著

静かな る山

あまり知られていない山々九七座の四季折々の紀行。沢歩き、藪こぎあり、積雪の上に道をさがす、あるいは見なれぬ角度から山を眺めるなど、図上で未知の山に思いを馳せるときの楽しさや、日頃は忘れがちな山登りの面白さが味わえる。

B変形 200頁 1700円

山岳写真の原点がこの2冊 の **モノクローム** 写真集にある。

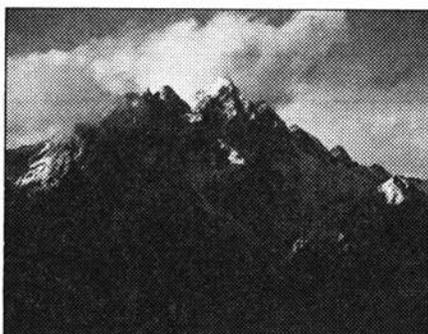
カラー全盛の現在、「山岳写真とは何か」の原点に立ち戻り、それへのひとつの手がかりとして、あえて山岳写真界の両雄といわれる白籐史朗・山本和雄氏の白黒写真集を発刊するものであります。

白籐史朗作品集

山本和雄作品集

わたしの山

素顔の山



●南ア、尾瀬、富士山等の国内の山々をはじめ、ヨーロッパアルプス、ヒマラヤに幾多の精力的な撮影行を重ねている白籐史朗氏の白黒作品は、まさに重厚の一語につきる感がある。

●かつて処女作品集『穂高』を出してその真価を世に問うた山本和雄氏の、豪壮なうちにもたくまぬ抒情を秘めた繊細な画面構成は、このモノクローム写真集によって極点に達した。

*判型=A3変型*総頁=130頁<作品60点、データ・解説ほか>*体裁=厚表紙、シルバークロス装、金属ボルト綴、ケースつき、豪華上製本<作品は大判シートに1点ずつ印刷され、好みの作品を取り出して額に入れれば、すばらしいインテリアとなります>

好評発売中！ 定価各8500円

〒105 東京都
港区芝大門1-1-33

山と溪谷社

電話03(436)4021
振替東京8-60249

“より良きテントの最高峰を めざす吉田のテント”

1952	日本山岳会	マナスル踏査隊
1957	文部省	南極観測隊
1956	日本山岳会	マナスル登山隊
1970	日本山岳会	エベレスト登山隊
1970	日本山岳会東海	マカルー登山隊
1976	植村直己	グリーンランド横断
1978	日本大学	北極点遠征隊
1978	植村直己	北極点単独旅行
1978	植村直己	グリーンランド縦断旅行

(敬称略)

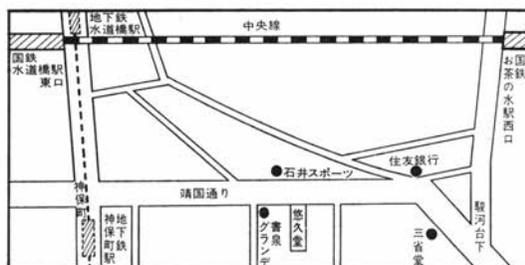
吉田テント

東京都杉並区桃井1-3-3
☎(399)2548・夜間(398)8469

山岳書・動植物書

古本の買入と販売

関係書の御相談もどうぞ—地方出張も致します



(有)悠久堂書店

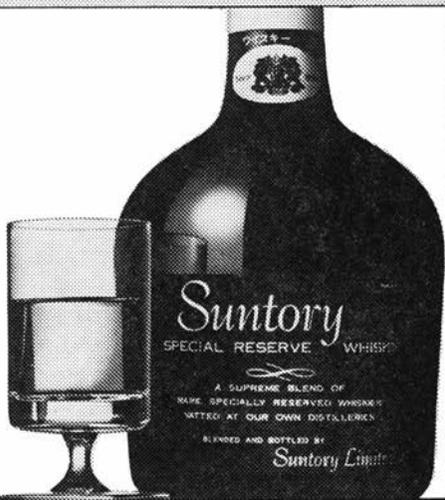
〒101 東京都千代田区神田神保町1-3

☎03 (291) 0773・0920

洗練された嗜好遍歴は、
リザーブへ向かわせる。

ひと口、含んだだけで、揺ぎのない味に
触れることができる。豊潤にして毅然たる
味。リザーブを飲んだ方は。大人の洗練、
都会のエレガンスを感じることだろう。

サントリーリザーブ 3,000円
価格は標準的な小売価格/製造・販売 サントリー株式会社



株式会社 **ラマーノ**
Lamano
手造りのトロフィーオブジェ

〒102 東京都千代田区3番町24 TEL 262・0525

山岳 第七十四年(通卷一三二号)

一九七九年十二月一日発行

価三〇〇〇円

発行所 社団法人 日本山岳会

東京都千代田区四番町五―四

サンビュウハイツ四番町

(〒一〇二)

電話 東京二六一局四四三三番

振替口座 東京三一四八二九番

発行人 西堀栄三郎

〈編集委員〉

山崎 安治・金坂 一郎

近藤 信行・節田 重節

池田智津子・竹中 昇

倉知 敬・藤本 敏行

印刷所 株式会社 技報堂

発売所 株式会社 茗溪堂

東京都千代田区神田駿河台二―一

電話 東京二九一局九四四二番

振替口座 東京八一二四七二三番

本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載を禁じます。

The Himalayan Journal

(Records of the Himalayan Club)

Edited by K.Mason, C.W.F.Noyce & H.W.Tobin.

Vols. 1-15 (1929-1949)

Oxford at the Clarendon Press. / Reprint edition. (発売元：丸善)

Paper bound. Set ¥85,000

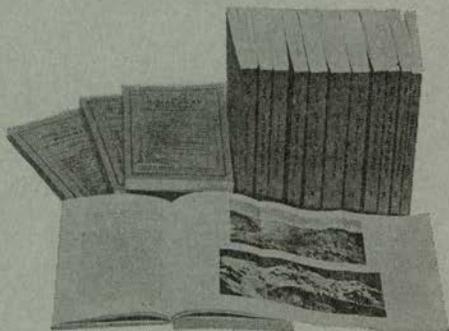
●300部限定版

●体裁：原本と同じです。

●分売はいたしません。

●本複製版をお買い上げくださったお客様には、国立国会図書館所蔵の「深田久彌旧蔵書目録」(九山山房蔵書)を無料進呈いたします。

●ヒマラヤン・クラブ会員は10%引きにてご購入できます。



〈ヒマラヤン・ジャーナル〉は、1929年の4月にヒマラヤン・クラブの機関誌として創刊され以来50年にわたりヒマラヤ研究の基本的文献として高い評価を得てきています。そのなかでも、初期に出された〈ヒマラヤン・ジャーナル〉は、ヒマラヤ登山をつくりあげた過去の業績を集大成し、ヒマラヤ高峰登頂の名譽を担うべき先駆者たちの偉業をしるすものとして、永く古典としての地位を保っています。ヒマラヤの綿密な探査研究・登攀技術をはじめ、ヒマラヤ登山の先達となる貴重な研究・記録が殆んど本誌に圧縮され、結果として1950-60年に築かれたヒマラヤ高峰登頂の黄金時代の足懸をつくったことは衆知の事実です。

探検家で地理学者として知られるケニス・メイスンによって編集された本機関誌には、クラブの趣意に沿って、シュヨーク氷河に関する地理学的研究・地質学に関する論文をはじめ、カシミールの鳥類の観察記事、アッサムのミシュミ山地における動・植物に関する論文、ヒマラヤの名の語源に関する記述などアカデミックなものから、ヒマラヤでの狩猟・登山・山旅の楽しさなどについても触れられ、「ジオフィジカル・ジャーナル」や「アルパイン・ジャーナル」とも性質を異にした新しいタイプの機関誌となっています。本誌があついている地域は、西はヒンドゥークシュからパミール、カラコルム、パンジャブ、ネパール、シッキム、ブータン、アッサムという東西にのびるヒマラヤ山脈ばかりではなく、崑崙、天山、タリム盆地、チベット、ヒルマ北部、雲南など戦後になって開国され、また入国の不可能になった内陸アジア地域をも含み、現在では貴重な情報を伝える数少ない資料のひとつになっています。このほか、本誌にはスタインによるパミールの古道に関する論文など古い時代に行なわれた探検および本文に掲載できなかった中央アジア・チベットなど未踏の地域の探検に関する「遠征ノート」のほか、充実した適確な書評が掲載され、多くのページをさいています。このたび弊社が刊行致しました複製版は、世界の秘境といわれ、数々の未知の分野を残すヒマラヤ・内陸アジアに関する重要な内容を含み、また入手のむづかしくなっている第1-15巻を、ヒマラヤン・クラブのご許可を得て刊行致したものです。期界の皆様のご研究の資料のひとつとして、是非御購入くださいますようおすすめ致します。

M丸善

※お問合せは弊社仕入第三課(内281,452)までどうぞ

〒103 東京都中央区日本橋 2-3-10 ☎(03)272-7211 振替東京7-5番

The Journal of
The Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. LXXIV

1979

